

幻想殺しと電腦少女のボンゴレ生活

軍曹(K-6)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

上条当麻・榎本貴音の転生物語 第一章。

少女を助けるために、『外』にあるモノを探しに出る事になった上条達は転移ではなく転生という“不幸”な目に遭う。捜し物をする始めの世界は“家庭教師ヒットマンREBORN”の世界。

マフィアになるのはごめんな上条は、持ち前の戦闘能力を生かして何とかできるのか。そして目指すは主人公転生による原作崩壊。

幻想郷で積んだ修行の数々で恐ろしいほどのパワーを持った上条当麻がダメツナに転生する時、物語は始まる――！

中身上条当麻な沢田綱吉は、人外の強さを誇っています。とにかく最強なツナ。もしかしたらリボンよりも強いかも知れません。前世の能力・知識・肉体の経験全て受け継いだ状態なので、この物語の綱吉さんは“綱吉様”状態です。

カップリングは“榎本貴音”と、“オリキャラ”。京子・ハル・風・ユニ。BLはないのでご注意ください。

(“内は確定です)

主人公無双。舐めプ。ect…。が大丈夫。バッチこいや。つて方はさあいざ読書タイム！

※この物語は、『幻想殺しと電腦少女の幻想郷生活』の続編です。

『幻想殺しと電腦少女の学園都市生活』は、この作品よりさらに後の話
ですので、ご注意ください。

※上条さん達に転生してほしい物語があったら教えてください。
時間はかかりますが。原作購入↓読破↓内容理解↓プロット↓書く。
という感じで書くので。（未来に反映されるかは分からない。必ず書
くとも言っていない）

目次

幼少期編

第一話	カミツナ、目覚める！	1
第二話	いぎ、イタリアへ！	4
第三話	古美術商の男。古里真	9
第四話	救出！ シモンファミリー	12
第五話	潰せ！ いかれたマファイア“エストラーネオ”	15
第六話	溶けない氷、これは何？	19

リボン編

第七話	イタリアからやってきたアイツ	22
第八話	獄寺隼人	30
第九話	退学クライシス	36
第十話	山本 武	41
第十一話	泣き虫ランボ	46
第十二話	入ファミリー試験	51
第十三話	ビアンキ	56
第十四話	三浦ハル	60
第十五話	入江正一	63
第十六話	笹川了平	67
第十七話	雲雀恭弥	72
いろいろ編		
第十八話	棒倒し	76
第十九話	隣町ボーイズ	82
第二十話	新アイテム	87
第二十一話	Xグローブと大宇宙のリング	93

第二十二話 終わりとそれから | 98

リング争奪編

第二十三話 嵐の予感 | 103

第二十四話 ハーフボンゴレリング | 108

第二十五話 沢田家光 | 113

第二十六話 それぞれの家庭教師 | 117

第二十七話 レッスン開始！ | 122

第二十八話 邂逅 | 127

第二十九話 守護者対決 晴と雷 | 131

第三十話 守護者対決 嵐・雨 | 135

第三十一話 守護者対決 霧 | 140

第三十二話 守護者戦 霧 二 | 145

第三十三話 ツナの決意 | 149

第三十四話 大空のリング戦 | 155

第三十五話 沢田綱吉VS・XANXUS | 161

第三十六話 パーティ | 168

未来編

第三十七話 消えたりポーン | 173

第三十八話 十年後の平行世界 | 178

第三十九話 アジト | 184

第四十話 再会 | 189

第四十一話 覚悟とリングの力 | 194

第四十二話 ツナの独白 | 199

第四十三話 待ち受けるもの | 205

第四十四話 合流、試練そして継承 | 210

第四十五話	Ver. V. R.	215
第四十六話	ゲスな男と悪魔	219
第四十七話	委ねられた決断	223
第四十八話	武器	227
第四十九話	突入	232
第五十話	仮想と現実の同時侵攻	237
第五十一話	囚われたツナ	242
第五十二話	侵攻、メローネ基地	247
第五十三話	完璧なX BURNER	252
第五十四話	最終防衛区画	257
第五十五話	真相	262
第五十六話	真六弔花	267
第五十七話	帰還	272
第五十八話	休息	277
第五十九話	修行開始	282
第六十話	ボイコット	287
第六十一話	チョイス開始!!	293
第六十二話	ツナの暴走と最終兵器	298
第六十三話	ファレノプシス・パラドックス	303
第六十四話	修羅開匣	308
第六十五話	激突	312
第六十六話	体化物戦闘用拳銃、対“死炎”専用弾	317
第六十七話	遊戯の終わり、アルコバレーノの復活	321
第六十八話	さようなら未来	324

第六十九話	至門中学の転校生	328
第七十話	シモンファミリー	333
第七十一話	継承式までの道のり	339
第七十二話	継承式	344
第七十三話	圧倒	349
第七十四話	Ver. アップ	354
第七十五話	開戦	358
第七十六話	新生D (笑)	364
第七十七話	殻を脱いだ神上の統魔	371
代理戦争編		
第七十八話	代理戦争の始まり	376
第七十九話	ツナチームの挑む代理戦争	381

幼少期編

第一話 カミツナ、目覚める！

(どこだ？ ャーン)

“上条当麻”は目を覚ました。どうやら自分の家のようだが、その体は幼児。五歳ぐらいだった。焦りながら上条は鏡を確認する。

黄色がかった茶色に、琥珀色の瞳。鏡に映った姿はそんなものだった。

「だ、誰だ・・・これ」

「(どうやら、転生した見たいですね。ご主人)」

「(エネー！ お前無事なのか!?)」

「(ええ、何とか。それと調べた情報によると、その体はご主人のニューボデー新身体。その子の名を綱吉、姓を沢田と言うそうです)」

「(家庭教師ヒットマンREBON・・・)」

「(その通りですよ)」

「(ならねーぞ!? マファイアになんかなるもんか!)」

「(ま、頑張ってくださいねー)」

そう言っただけで一方的に脳内会話は終わった。思わず上条は両手をついてうなだれる。その時、駆け寄ってくる足音が聞こえた。

「ツツ君。どうしたの？ 大丈夫」

「大丈夫だよ？」上条は心の中で顔を引きつらせて(辛い！ 子供ってどうやったたら子供なんだっけ!? 尊敬するぞ工藤新一!!)

「そう。良かったわ」

(良かねーよ。なんで俺がまた子供に逆戻りなんだよ!)

ふと頭に持っただけで右手が、額に触れた途端。何か上条の中で燃え上がった。

(?! こ、これは・・・この俺に秘められしチカラ・・・!!
!・・・はいはい。中二病に目覚めるには早いですよーっだ)

上条改めツナはまだ始めの一步を踏み出したばかりだ。

「・・・ほっ。とおー！」

「じよーずねえ」

ツナはよくある幼児向けのヒーロー番組を見ながら、その真似をしているという大義名分で、自分の体になじもうとしていた。

(・・・正拳突き。百万分のー!!)

それでも、フオ！ と、風を切る音がする。ツナは思わず「上条当麻」の力に恐れを抱いた。

(ものすごい抑えたのに・・・通常のパンチで鍛えた人間並み!?)

しかも幼児の体だぞ!? 早いトコロの体に精神体をなじませないとやばいかも・・・)

眠ったふりをして考え事をするツナ。思わず、本当に寝てしまったのは幼児の性か。

——その夜。

(↓←?+Pー)「とあっ！」

「おふっ!？」

「あう・・・」(すまん親父!)

心の中で土下座するツナ。かくいう彼は、父親の股間に拳を叩きこんでいた。最初は足をボコボコ殴っていたのだが、調子に乗って頭の中でコマンド入力したのが間違いだった。昇龍拳を股間に叩き入れたのだ。

「え? え?」

「き、気にするな。ツナ、ぱ、パパは大丈夫だから・・・」

「だいじよぶなの? よかったー」(たくましい、たくましいぞ親父)

ツナは心底自分の父親に敬意をもった。子供の前とはいえ、ブツを潰され転げ回ってもおかしくないのにそんな様子を見せない(強がっていると分かる)。のが、ツナの的にポイントは高かった。

「よかったよかったー」

「うっ! ふぐうっ!!」

ツナはほぼ無自覚で、父親の股間を撫でようとしてベシベシと叩いていた。そのたびにビクビクと親父が震えていたのによく気付

き。それとなく別に興味が移ったように手を離す。

(あつぶねく。俺がトドメ指してたよなあれ。あーヤバいやバい。俺は今回も妹が欲しいのに、できなかつたらどうしようかね)

ツナは、その日はそのまま寝る事にした。

第二話 いざ、イタリアへ！

「……………。」

ツナは気がついたらお屋敷の前にいた。周りには黒服を着た怪しい男達ばかり、きれいなドレスを着た女性もいるが、どこか上品さには欠ける。

(……………こういう時って場違い感が半端ないんだよなあー)

ツナはあくまで子供らしく振舞いながらその会場を歩いていた。

「……………わーすごー…い」(ゆか……………た……………?)

その時、ツナはつまらなさそうにしている可愛らしい少女を見かけた。その子が着ていたのは驚く事に日本の衣装、浴衣だった。

「ねえ、何してるの?」

「つまんないの。みんなのしそうなのに、わたしだけ」

「僕もおんなじだよ。じゃあ何かして遊ぼうよ」

「あそぶ? いいの?」

「みんな楽しんでるのにつまらないなんてダメだよ! もっと、楽しまなくちゃ!」

「うん。そうだね!」

ツナは少女を連れてお屋敷の中に入って行った。

「ここは君の家?」

「ううん、ちがう。わたしもしらない」

「ふーん」(つてえあの紋章。ボンゴレの系列か?)

「ねえ、あなたのなまえは?」

「綱吉だよ。ツナって呼んで」

「ツナ……………ヨシ……………?もしかしてにほんじん?」

「うん。そうだけど、ここは日本じゃないの?」

「ここはイタリアだよ。わたしにほんがだいすきなんだ! あなたは、なんでここにいるの?」

「お父さんが連れて来てくれたから、よく分からないんだけどね。そう言えば君の名前は?」

「わたし? わたしはねかのん!」

「かのん？ それともカノン？」

「にほんごのひらがなだよ。かのん。かのん⇓N⇓アポローニっていうの」

「アポローニ・・・？」

改めてかのんを観察してみると、美少女の類に入る方だった。桃色の髪に赤みがかかった目、ちよつとクセ毛が目立つが、とても可愛らしい少女だった。

「ところでNって何？」

「なかがわ、わたしのにほんのみようじだよ」

「日本の名字？ なんで？」

「わたしね、おとうさんがイタリアじんで、おかあさんがにほんじんなの！」

「それで、名前の間に日本の名字が入ってるんだね」

二人が、廊下を歩いていると。

突然。パシユツ、と空気の抜けるような音が聞こえた。その音に続けて何かが倒れるような音がする。

(今の音は何だ!?)

「? どうしたの?」

ツナが前方を注意してよく見ていると、二つ向こうの部屋の扉が開いて、余裕そうな表情で男が出てきた。

「・・・な、ガキ」

「・・・おじさんどうしたの?」

「・・・何してたの? みんなあそこに集まっているのに」

かのんは素、ツナはあえてとぼけて庭のパーティ会場を指して見る。

「あ、ああ。おじさんも今から向かう所なんだ。トイレを済ませてね」

「へえーそうなんだ〜」

「ツナヨシくん?」

ツナは歩いて去ろうとする男の背中に向かっていった。

「僕てつきり、おじさんがスパイであるの部屋でデータを盗んだと思っただけ、違ったのか〜。でも、サプレッサーの音がしたよね。誰か、

撃ったんでしょ」

「・・・・・・・・何の事だろうね。おじさんはただトイレに」

「ごまかすんじゃないやねエよ。トイレなら一階にもある。わざわざ二階まで来る必要はないはずだぜ？　ねえ？　お・じ・さ・ん」

「それ以上話すんじゃないやねーよガキ」

ツナの目の前にサプレッサー付きの銃が突き付けられる。

「わお」

「それ以上喋ったらぶつ殺す。というか、二人ともぶつ殺す。目撃者は殺しておかねーとな」

「できんのかよ。ってかやらせると思ってるのかよ」

そういったツナは、その頭部とその両手に綺麗なオレンジ色の炎を灯していた。

「え、ツナ、ヨシくん？」

「おま、まさか。ボンゴレの・・・・・・・・！」

「くらえ、普通のパンチ！」

炎での加速+いつもの撃ち方で、ツナの拳の威力は銃弾よりも速く、鉄球よりも強い威力で放たれた。それは子供の身長という事で、男の急所を正確に打ち抜いていた。

「おグウツ?!」

「あ」

「え・・・・・・・・」

白目をむいて気絶した男を、ツナは憐れそうな目で見ていた。

(すまん。名もなきスパイよ。今の威力は使い物にならなくなったかも知れないな。ごめん)

「す、すごいよ。ツナヨシくんすごい！」

「え？　そう？」

「うん。なんかタダモノじゃないってかんじ」

「ああ。そう？　ってか見つかったらマズイから逃げようぜ」

「うんっ」

二人で屋敷内を逃げ回っていると、スーツを着た小さな赤ん坊や、優しそうなお爺さんとすれ違ったが、ツナはそんなこと気にしてはい

なかった。

「ねえツナヨシ・・・ううん。ツナくん」

「は？ え？ 何？」

「わたしね、おおきくなったらツナくんのおよめさんになっていい？」
「ん？ ん？ いいけど」

ツナには『いい？』の部分しか聞こえてなかったので、素直に返事をしたのだが、よく考えてみるとこの状況でいい？ は一体何を表しているのか。ふと彼女の顔を見てみるとふによふによと頬が緩んでいた。彼は首を傾げるが、その時は大して気にも留めなかった。

しばらく進んでいると、突きあたりの部屋に着いた。何がいてもツナ的に怖くなかったので、豪快にして慎重に、ドアを開けてみる。

「・・・あれ？ 誰？」

「・・・こつちのセリフだ。ドカスが」

高校生ぐらいの強面のお兄さんがいました。

「あ、あわわ・・・」

「ねえ、お兄さん。あなた強い？」

「あ？ 当り前だろうが、俺はXANXAS。ボンゴレの十代目を継ぐ男だ」

「へえ、強いんだ？ じゃ遊ぼうよ。ザンザス」

ツナは鋭く目を細めると、その眼から殺気という殺気を一点集中でXANXASに向ける。

(!? コイツ・・・並の殺し屋でもできねエ事を・・・後ろのガキはビビってねエって事は、殺気を視線に乗せて送ってきてやがるのか。恐ろしいガキだ・・・一体どんな奴の息子なんだ！)

「おーここにいたのかXANXAS。探したぞ」

「ジジイ」

「おつ。ツナ、お前もここにいたのか」

「あ、おとーさん」

「なっ」(門外顧問の息子!?)

「カノン。帰るぞ」

「はーい。じゃーね。ツナくん」

「うん。じゃーね」

ツナは極めて普通に、そう普通に別れの挨拶をした。

——帰り道。

「楽しかったかー?」

「うん。どうだろー。でもかのんちゃんとは仲良くなったよ?」

「コーデリアさんとこの一人娘か……。あの子は美しいというよりは可愛いの方に育ちそうだよな」

(それな)「おとーさん。結局みんな何してたの?」

「パーティーといってな、楽しいものだぞ」

「へえー」(マフィア同士のパーティー? どうせ腹狸共の腹の探り合いだろ)

なんともかわいくない子供である。

第三話 古美術商の男。 古里真

パーティからの帰り道、運悪くも迷子になってしまったツナは、道路沿いにあつた一つの店へと入っていった。

「……すみませーん」

遠慮がちにそう言いながら店内に足を踏み入れるツナ。外のショーウィンドウを見る限り開店時間なのだが、中には誰もいなかった。

それでも外は雨が降りだして、少しでも濡れたくなかつたツナは、とつさに近くにあつたこの店に入ったのだった。

（……誰もないのか？ いや、でも開店時間だったし……）
ツナはそんな事を考えながら店内を見渡す。骨董品、アンティークが立ち並ぶその棚から視線を横にずらした時、椅子に置かれた一体のビスクドールにツナは小さく悲鳴を上げる。

（……あーっ！ びつくりしたーっ!! 西洋人形かよ。いや、日本人形も怖いけど。あ、日本人形なら大丈夫だぜ）
ファイギュア

一体誰に言っているのか。心の中でそう言うツナの後ろ姿に近く影があつた。

「……あれ、もしかしてお客さんだったかい？」

「うわっ!？」

飛び退くように振り向いたツナは後ろにあるビスクドールに肩が当たつて、台から落としそうになる。

「わっ、わたたっ。わっわっ!」

「あはは。大丈夫かい？」

両手の上でびよんぴよんと跳ねるビスクドールを何とかしようとするが、笑いながら店主さんに奪われた。

「あ、う……」

「さて気にしなくていいよ。滅多に客が入らないからつい作業に没頭していた私が悪いんだしね、こういう場合」

「あ、ありがと……」

「キミは迷子かな？ 名前は？」

「ツナ。おじさんは？」

「私はこの骨董店を営んでいる、古里真と言います」

「こつとーてん？」

「こういう・・・アンティークを扱うお店の事だよ」

「あんでいーく・・・」

ツナは興味が少し引かれたように時計を見るが、その思考は全く別の場所へ飛んでいた。

(古里真。まあ間違いなく、俺の親友・^{ツナ}古里炎真の父親だ。古里炎真。

シモンファミリー

それはボンゴレ初代・・・ジヨットがその先駆けとなる自警団を作るきっかけを起こした人物のファミリーだ。そのファミリーを起こし、ジヨットの友人で在ったシモン・コザアート。彼はD・スペードの策略のせいもあり、自らマフィア界の影となることを選んだ。その道はとても辛く、子孫である炎真たちも沢山苦しんでいた。それでも、デーチモの時代であるツナ達の時代で、漸くその存在を公にすることが出来るようになった・・・だったか)

そんな未来での親友とも呼べる存在になる人間の父親と、何の因果か知り合ったツナは、骨董品についていろいろ聞いていた。

「いやー。私にも君と同じくらいの息子がいてね。仲良くなれると良いけど」

「うん。会ってみたいな」

ボンゴレのせいで、シモンファミリーは家族を喪った。ボンゴレのせいで、炎真は目の前で家族を殺された。それを行ったのは主にD・スペードだったが、ツナがボンゴレを継いだ以上、その罪の意識は絶対を持ち続けなければいけない。

「こんな間違いを引き継がせるくらいなら、俺がボンゴレをぶっ壊してやる!!!」

未来で、ボンゴレの業を見せられた時にツナが宣言した気持ち。

おそらくだが何よりも、炎真たちの存在を知って、苦しみを知って、より強く思うようになったであろう。マフィア界の浄化とボンゴレの解体を。強者によって、弱者が虐げられることにならないように。

一部の者だけが笑って、その陰で誰かが泣かないように。そんな信念を。

(つまる所、シモンファミリ炎真達の全員を助けてやろう。原作改変をしよう。という事である)

「ツナヨシ君!」

「あ・・・かのんちゃんのお父さん」

「ツナ君!」

「かのんちゃん!」

「お迎えかい?」

「うん」

ツナは立ち上がるとかのんと話を始める。かのんの父親は少し険しい顔をする。と真さんに近づいていく。

「・・・もしかして。古里さん」

「ああ。コーデリアさんか」

「ツナヨシ君の事ありがとうございます御座います」

「彼は?」

「ボンゴレの・・・門外顧問の子供です」

「へえ。それは凄いね」

「ええ、なかなかな境遇に生まれた子供で・・・」

「おとーさん! ツナ君空港に送るんでしょー?」

「あ、ああすまんすまん!」

「謝ってるの!?!」

「謝ってます」

「ありがとうございます」

「またおいで」

優しく手を振る真に手を振り返し、ツナはイタリヤを去った。

第四話 救出！ シモンファミリー

小学一年生の頃。

ツナはイタリアへ真に会いに飛んでいた。

(あー久しぶりだなー。今回はいいよ！ 新居に招かれて炎真に会えるんだよな。うん、楽しみだ)

そんな事を考えながら空港を出たツナは、地図を貰っていたので新居へと赴く。

途中途中で全力疾走したのは良い思い出らしい。

「……だな」

ノックをしようと扉に手を伸ばすと、鍵が開いている事に気付いて。

中から音がすることに気付いて。ツナは、慌ててドアを蹴り飛ばして中に入る。

まずは一人目と二人目。真の奥さん。たしか……美恵さんだったか。まだ息があるのを確認して、肉体的な怪我を妖術を使ってゼロにする。博麗の結界で保護された安全な部屋に彼女が抱いていた子も一緒に寝転がらせて、更に走る。

「おじさん!! ……おとう……さん?」

「お? ツナ! 大丈夫か? いや、父さんもびっくりしてな」

「逃げろ……ツナ君逃げろ!!」

「おじさん? おとうさん?」

「大丈夫だツナ。もうすぐ医者来る」

「おじさん助かるの?」

「もちろんだ」

ツナは笑顔で顔を上げると、子供とは思えない殺気に包まれた声でこう言った。

「助ける気もないに良くそんな事が言えるなD」

そして、素手の状態でX BURNERを放った。

「ぐっ!!」

「ゾンビみたいに長生きしやがって。いい加減成仏しろよクソ霧が」

「おやおや、これは驚きましたねえ。私の幻術を見破るとは……その姿と言い、初代霧の守護者の名を知っているといい、貴方は何者なんでしょうねえ？」

「沢田綱吉。アンタが成り代わってたクソ野郎の（不本意だが）息子だよ」

ツナはそのまま額と両拳に炎を灯すと、満身の力を込めて。Dの肉体の一部に強撃を加えた。

「ツツ!!？」

そこはもちろん、男としては狙われたらお終いな部位で、まあ、つまり、股間であった。

「ツ！ ヌフフフフ……！ これは……ん……これは手酷く……やられました……っ……貴方と今戦うのは分が悪い……お暇させて……もらいましょう……！」

「……待てよD!!」

なんてことを言ってみたが、今のツナに彼を追う気は全くない。すぐさま踵を返し、真へ駆け寄る。

「おじさん、大丈夫!？」

「あ、ああ。大丈夫だ」

「……馬鹿言ってるじゃねー。エネ!!」

「了解ですご主人!!」

虚空から現われた青いジャージ姿の少女。エネは真に近づくとその体に触れる。

「ちよつと体中が痒くなりますよー」

「は？ え？」

（あ、奥さん気絶してたから何も言わなかったけど、細胞を無理矢理活性化させて自己治癒力を上げてるから痒くなるのか）

ツナはそう思い当たると、一応救急車を呼んでおく。

それから一夜経って。

「命に別状は見られませんが、一応一晩泊まって行きなさい」

という医者ありがたい御言葉によって、古里家は一部屋に固まっ

て入院していた。

「いやいや。助かったよツナヨシ君」

「あ、お礼ならエネに」

「ご主人が助けてって言うから私は助けたんです。ご主人がお礼言われてください」

「……じゃあ、おじさん。あの時見ず知らずの俺を雨宿りさせてくれたお礼と、今後の付き合いの貸しという事で」

「……アハハ！ いいよ。その代わり、ほら、炎真」

「初めまして」

「初めまして。俺、綱吉！」

「ぼ、僕炎真」

「わたし真美！」

「よろしく！」

「よろしく……」

「よろしく！」

何だかんだで、予定通り古里炎真と仲良くなり、父親も母親も救う事が出来たツナだった。

「ツナ兄！」

「いや、真美ちゃんのお兄ちゃんは炎真でしょ」

「ツナ君……」

「ね。炎真も何か言っておいてあげて」

「真美をよろしく……？」

「……真!! 炎真に何を教えたああああ!!」

「いやーツナヨシ君怖いなー」

はっはーと笑いながら聞き流す真と、炎真の教育について強く語るツナの姿がそこにはあった。

「……エネ姉！」

「お、私はお姉ちゃんですか？」

「あー……はいはい」

第五話 潰せ！ いかれたマファイア “エストラーネオ”

ツナの毎日は過酷だった。

現在小学三年生のツナは、ほとんど毎週のようにイタリアへ行っていた。その理由は一つ。強くなれそうだから、である。少しボロボロの服を着て、髪の毛をボサボサにしておけば、ストリートチルドレンと思われるのだから、相当治安が悪い街に行っているのだろう。

なぜ、そんな毎週のようにいけるのかというと、とある時、三分の時間制限付きで会えた貴音が渡してきたリングのおかげだった。

その名は『夜のリング』

なんでも夜の炎という特殊な炎を灯す事ができ、遠くへの移動も楽となる。これが毎週旅行の方法である。

治安が悪い国では、大してパスポートの有無など気にも止められなかったりする。特に子ども一人だと。

それとなく、小学校に上がるまで身体能力の向上を目指し、スポーツテストではつちやけ、紆余曲折を経て。現在にいたっている。

(流石に、反復横とびで影分身はマズツたかなあ。先生の疲れ、で何とかなったけど。ちよつと調子のり過ぎたよな。あの時は)

ツナはイタリアの路地裏を歩いていた。かなりのストリートチルドレンがいるが、ツナ自身もお金は持っていないので、別に気にする事はない。

そう、本来なら。

少し向こうの集団に、何か選別をするような男達がいた。

奴隷にでもするつもりだろうか、とツナは思ったが関係ないと思いい。通り過ぎようとしたところで、

「いきが良いのがあるじゃねーか」

「オヤスミ」

流暢なイタリア語でそう言われた。このヤロ、と思ったが時すでに遅し、スタンガンとクロホルムのダブルコンボで、身体は完全に動

かなくなつた。

目が覚めると、そこは何かの実験施設のようだった。ツナの前にも眼鏡をかけた少年や、やんちゃそうな少年もいた。が、皆何かに脅え、必死に耐えているように見える。

(なるほど。マフィアか何かの実験室か。見るところによると、人体に対する特殊な兵器の開発。といったところだな)

すると、ツナの前で一人の少年が右目に眼帯をして戻ってきた。何か手術でもしたのだろうか。だが、どこか悲しそうな目をしていた。(当たり前。か……)「……さて、どうする……」

「オラ、そのガキ。ボサボサ頭のオマエだよ。コイツ」
「……」(俺か)

ツナは渋々研究者についていった。どうやらファミリーの子供では少なくなつたから、実験に使えそうな子供をストリートチルドレンから選別してきていたようだ。彼は呆れたような溜息が出る。

「さて、お前はこれだ」

そう言つて取り出されたのは大型の拳銃。見えているのだろう。カーテンの向こうから息をのむ声が聞こえる。ちよつと意地悪をしてやろう。と思つたツナはとりあえず身構えた。

「さて、どうだ」

ズガン！ と、ツナの額に銃が撃ち込まれる。彼はそのまま宙を舞うと、地面に激突した。

「……ふむ。駄目か」

「さて次は……」

「終わつたと決めつけるな」

たっぷり三〇秒待つてからツナは体を起こした、その頭部に炎を灯して。

「おお!? ……待て、その炎は……!」

「行くぞ」

ツナは遠慮はしなかった。最初から研究者達を異形の怪物としてみた彼は、何の抵抗もなく拳を放っていた。暫くして彼が目を開けると、彼は死体後の海の中にいた。

「掃除終了つと。あ？ 何だテメーら」

ツナは死体の海の中からこういった。

「見てんじゃねーよ。何なら俺の僕シモベになるか？」

ツナはそう言うと、その場を後にしようとしたが、ゾロゾロと少年少女達がついてくる。

「んだよおめーら」

「ついていきますマスター」

「……マジ？」

ツナに生まれて初めてのファミリー候補ができた。

彼は、とりあえず彼等を住まわせる所が必要だと思い。研究所の屋敷ごと壊滅させ、新しい組織を作る事にした。

「お前ら、なんか提案あるか？」

「ツナ組」

「ツナヨシファミリー」

「ツナヨシ会」

「……あのき。何で俺の名前入れる訳？」

「……だって、ボスだから」

「マフィア基準で考えんな！ もっとこう、マシな名前はないのかよ!? 例えばこう秘密結社『影組』とかさ」

「それで行きましょう」

「賛成だびよん」

「さすが綱吉様」

「……おまん。わいはちよつとおんしらの将来が心配ぜよ」

暫くして、ツナは屋敷の中を歩き回ってある物を探す。

「何してるんですか、綱吉様」

「ああ。千種か。リボルバーとオートマティックを探してる。まだ俺は影を使えないからね」

「何を言っているのですマスター。あなたはもう。影組のボスなんですよ。」

「そーゆー意味じゃねエよ骸。影を操れてないって言ってるの」

「綱吉様。あそこの部屋が確か武器保管庫だったはずですよ」

「マジで？ よっしや」

早速部屋に飛び込むツナ。どうやらトラップが仕掛けられていたらしく。爆風で廊下に戻ってきた。

「マスター！」

「綱吉様！ 大丈夫ですか」

「うんうん。大丈夫大丈夫。さて、探索探索」

武器庫をあさるツナ。その屋敷には危険が迫っていた。

第六話 溶けない氷、これは何？

ツナが意気揚々と武器庫をあさり、目的のものを見つけてはほくほくしていたころ、マフィアの間でのウワサはあつという間に広まった。

・ エストラネオファミリーが壊滅したこと。

・ その子供たちが今は屋敷を我がものになっているということ。

それでどうやら刺客が来たようだ。こっそりとしているんだろうが、ツナの神の眼はごまかせない。

「正門四人。他は誰もいない……………」

「マスター、どうします」

「綱吉様一人ではやはり」

周りの子たちもうんうんと頷いているが、こんなチャンスはめつたにない。

「安心しろ。必ず帰ってくつからよ」

ツナはそういうと、両手の炎の推進力で一気に庭を飛び越えた。

「おじさん達つてもしかして僕らの平穩を壊しに来た人？」

「……………ガキ一人か」

「他にまだいるかも知れねえ！」

「答えるよ。クソ野郎が！」

ツナは迷いなくリボルバーの引き金を、六回引いた。それも、高速で。だから銃声は一発だった。だけど撃たれた弾は六発だった。撃たれた場所も六か所だった。

死んではいけないが行動不能になったのが一人、他のが銃を撃つてくるが、ツナはひよいひよいとかわす。

(なんか……………、良い技ないかな)

その時、両手から出していた炎が一瞬にして、冷気変わる。

「ん？」(冷気……………凍らせられる?)

何を思ったのか残りの三人の真ん中に立ってチカラを込めると、そこから中の空気と共に、男達が固まった。

文字通り氷付けになった男達を見下ろして、ツナは思う。

「この技、強い（確信）」

「マスター。素晴らしいです！ まさか、炎だけでなくそのような技まで使えようとは」

「たった今使えるようになったんだけどね」

ツナは凍らせた男達の包む氷に触れてみる。それはもちろん冷たく、それ自身も冷気を放っているのだが、どうも溶けている様子が無い。

「ちよつと砕いてみてくれる？」

「分かりました！」

影組のみんながそれぞれの技で壊そうとするが、どうも壊れる様子もない。

「………これ、か？」

片手に灯した炎を近づけると、表面が溶けていく。

「おとと。この氷、この炎じゃないと溶けないのか」

「なるほど。封印などに役立ちますね！」

骸の素直な感想になるほど、と思いつつもツナはそろそろ帰らないとなーなんて考えていた。

数時間後、ツナは一通りのものを持ってみんなを集めていた。

「えーまあ騙してたわけじゃないんだけど。俺故郷が外国にあるんだよね」

「!？」

ガタツ。と大広間の床が変な音を立てる。なんか骸が影組のリーダーポジションに収まっているが、それでみんないいんだろうか、とか思ったりもする。

「俺さ、日本人なんだよ。今日はたまたま遊びに来てた所を連れ去られた感じかな」

「で、では綱吉様は帰ってしまうのですか？」

「どうだろうな。こここのところ週一でイタリアに来てるからな。また来た時によるかもしれないねエナ」

「マスター!？」

「お前らも、日本語勉強してみろよ。中学までに頑張ってみろ。また、連絡だけはしてやるよ」

ツナはそう言って、夜の炎のゲートを通って日本へと帰って行った。

リボーン編

第七話 イタリアからやってきたアイツ

「リボーンか・・・、またオヤジに呼び出されたようだな」

「人気者はつれーなー。今度はローマか？ ベネチアか？」

ジャンボリーネ
「日本だ」

「!! なに!!」

「オヤジのヤツ。とうとうハラ決めやがったのか」

「長い旅になりそうだ」

——日本・並盛

「ツナ、パスいったぞ」

「へぶっ」

バスケのパス、顔面キャッチをした少年。そう沢田綱吉である。

「あいたー」

「またかよー」

「たのむぜツナ！」

「お前のせいで負けたんだからなーっ」

「・・・ごっごめん」

「とゆーことでおそうじたのめる？ オレ達貴重な放課後は遊びたいから」

「えっ」

「んじや頼んだぜーっ」

「ファイトだダメツナ!!」

「ちよっ待ってよっ」

「テストは？」

「入学以来全部赤点」

「スポーツは？」

「ダメツナのいるチームはいつも負け」

ギャハハハ、と笑いながら去っていくクラスメイト達にツナは。

「自分達もさして勉強できてないだろ……。放課後に遊ぶって……勉強もしろよ……」

引き受けた仕事なのでキツチリやろうとするツナ。

「どーせオレは馬鹿で運動音痴ですよ。……あーなんというダメツナライフ。サイコーじゃねーか。この地位を獲得するのにどれだけ努力したのか」

ある程度キツチリ掃除を済ませて、授業も何となく受けて家に帰るツナ。

「綱吉——。あんた将来どうするつもり？」

「急に何だよ母さん」

「母さん別に、いい高校や大学に行けって言ってるんじゃないのよ？」

「知ってるよ」

「あんたみたいで退屈そーに暮らしても一生。楽しく暮らしても一生なのよ！ ああ生きてるって素晴らしい！ と感じながら生きてほしいのよ」

「大丈夫大丈夫。俺は今の生き方がちよー素晴らしいから。生きてるって実感してるから」

「ツーっ君。……今日家庭教師の先生くるの」

「……家庭教師!？」

ツナはたっぷり考えてから叫んだ。

「ポストに面白いチラシが入っててね。お子様を次世代のニューリーダーに育てます。学年・教科は問わず。リボーン。ステキでしょ？」

こんなうたい文句見たことないわ」

「胡散臭いよ！ なんだよそのあいまいな目標は!! 大体次世代のニューリーダーって何だよ！ 社長か!? 会長か!? はたまたどっかの組の組長とかいうんじゃないだろうね!？」

「大丈夫よ。きつと凄腕の青年実業家庭教師よ！ 母さんこういう先生に見てほしかったの」

「何を、俺の駄目っぷりをか？ そうだろうな、並大抵の家庭教師や塾なら尻尾巻いて逃げ出すぜ？ 何やっても赤点しかとらないんだからな！ オレ家庭教師なんて絶対ヤだからな！ どーせ何やったつ

て無駄なんだって!」

「ちやおっス」

「あ?」

声は足元から聞こえてきた。ツナが足元を見ると黒いスーツでビシッと決めた赤ん坊がそこにいた。

「三時間早くきちまったが特別にみてやるぞ」

「ボク……どこの子?」

「ん? 俺は家庭教師のリボーン」

「……はあ?」

「まあ!」

「胡散臭い広告の主がどんな奴かと思ったら赤ん坊か!」

「お前がツナか」

「だったら悪いか。お前に教わる事なんてねーよ」

ヒュオツ! と、リボーンの回し蹴りが空を切る。

「短足。届いてないぞ」

「……まあいいか。この部屋だな、そんじやー始めつか」

——暫くして

「おい、いつまで居座る気だこの野郎」

「スピーツ」

「……おい。起きろ! 赤ん坊だからって許さないぞ!」

リボーンと名乗った赤ん坊の襟を掴むツナだが、逆にネクタイを持って投げられてしまう。

「いつてーっ! 何だこのガキー!!!」(スキがない。どつかのマフィアの手先か?)

「オレにスキはないぞ。本職は殺し屋だからな」

「は?」(やつぱり)

「オレの本当の仕事は、お前をマフィアのボスにする事だ」

「はあ!? マフィアだって?」(って事はボンゴレの手先か)

「オレはある男からお前を立派なマフィアのボスに教育するよう依頼されてんだ」

「・・・断われよ。ってか頭大丈夫か」

「やり方はオレに任されてる。一発撃つとくか？」

「いいぜ。俺も別に死ぬ事に未練ないし。来いよ」

「でも今じゃない」

そう言うとりボーンは腹の虫を鳴らしてどこかへ消えていった。

一安心したツナだったが、どうやら自分の成績が上がるまで住み込むらしい。

「それで、リボーンさん？ お前はなんだってついてくるんだよ。家庭教師だろうが」

「殺し屋だからな」

「だから俺の命でも狙ってんの？」

と、ツナは何かに気付いたように身を隠す。前からやってきたのは学校のアイドル的存在、笹川京子だった。

京子はリボーンを見つけるとしやがみこむ。

「きや——っ、かわいい——っ」

「ちやおっス」

「ぼく、どーしてスーツきてるの？」

「マフィアだからな」

「わあ——、かつこいい——っ」

(スゲエな赤ん坊パワー。ガキは女子に好かれるとは聞いたがマジな話だったのか)

「がんばってねバイバイ」

「ちやおちやお。・・・マフィアモテモテ」

「だから？」

「ツナ、あの女に惚れてんだろ」

「お前にカンケーないだろ？」

「オレは読心術を習得している」

「へえ？」(マジでよめてるの!?) (殺し屋ってのはそこまでできるのか? コイツが特別?)

「ああ、マジで読めるぞ」

「読めてんだな」(だがどうやら深層心理俺の会議室だけは読めないみたいだな)

「告白したのか?」

「する訳ないだろ! 笹川京子はわが校のアイドルだよ? どーせ俺なんか眼中にないよ。告白するだけ無駄だつて」

「すげーな、その負け犬体質」

「ほっとけ」

「やつと俺の出番だな」

リボーンはそういうと、一丁の大型拳銃を取り出した。

「死ぬ」

「は? オモチャだろ?」

「いつぺん死んでこい」

「おい・・・っ。いつまでも年上をからかうなよ? 大体殺される意味が分かんないぞ!」

「死ぬば分かる」

ズガン! と、撃たれた銃弾がツナの額に直撃した。

死にながらツナは考えた。

(オレ・・・死ぬんだな・・・。これでこの世とお別れか・・・アデオス。アリーヴェデルチ! グッバイ現世)

気楽な事を考えていたら、そのまま倒れた。周りの人が騒ぐが、リボーンはすでに拳銃を隠していた。リボーンは暫く様子を見ていたが、いつまでたつても変化のないツナを見て、つまらなさそうな溜息をついた。

「まさか。死ぬ間際に後悔もしない奴だったとはな。すまねーな」

トコトコとその場を離れるリボーン。ツナの事はほったらかしで。

それから五分ほどして、ツナは体を起こした。

「・・・勝手に殺すなつての。まあ、これで俺がマフィアになる事はないだろ」

ツナは額から銃弾を取り出すと、それをまじまじと眺める。

「死ぬ気弾・・・ボンゴレファミリーの特殊弾か・・・。後悔した内容で生き返るっていう。まあ、アイツも想定外だろ。行くところ

まで行ったダメ野郎は何も後悔することなんてないんだぜ?」

ツナは暫く考えていたが、なんとなくで京子の後を追いかけていた。

「さ、笹川京子ちゃん!」

「……………? ツナ君?」

「俺と、つきあってください!」

「え?」

敢えて普通の告白だったのだが、後ろから猛スピードで近付いてきた剣道部主将、持田先輩に、思いつきり殴り飛ばされた。

「てんめえ! 京子は俺のだ! テメエには渡さねエ!」

「グハッ!」(つてえ。な? 別に死ぬ気じゃなくても告白できる。でも成功する訳がないんだよ。だつてオレ、ダメツナだもの……………ダメツナじゃないな。だつてオレ、死んだもんな)

ツナは頭部に大きな炎を灯すと、こう言った。

「ダメツナは一度死んでカミツナになった。ダメライフは終わりだ」

ツナはその日は外泊をした。そして、次の日。

「……………さて、一体どんなウワサになっているのか」

「パンツ男のおでましだー!」

「ヘンターイ」

「電撃告白!」

「持田センパイに聞いたぞーっ」

「めいっばい拒絶されたんだつてな——」

(したのは持田先輩であつて、京子ちゃんがどう思ったのか俺は知らないけど、あの野郎盛ったな? なんだよパンツ男つて)

呆れて一八〇度逆を向いたら、剣道の道着を着た人が数人いて、持田先輩が道場で待つてるとか言つて、ツナを担いでいった。

周りのギャラリもそれについて道場へと向かう。

「きやがったな変態ストーカーめ!! お前のようなこの世のクズは、神が見逃そうがこの持田が許さん!! 成敗してやる!!!」

「お前どんだけ偉いんだよ」

「心配するな。キサマのようなどアホでもわかる簡単な勝負だ。キサマは剣道初心者。そこで一〇分間一本でも俺から取れば貴様の勝ち！ できなければ俺の勝ちとする！ 賞品はもちろん、笹川京子だ!!!」

その言葉に京子がむつとするが、どうやら持田先輩は黒い男だったようだ。ツナは防具はいらなそうです。と、重たい竹刀だけ受け取っていた。

「……………むつ。沢田、防具はいらんのか？」

「いらないでしょ。にしても竹刀って持った事ないですけど結構重いですね」

クルクルと竹刀を回すツナに持田先輩は眉をひそめるが、試合開始の号札の指令を出す。

「それでは、始め！」

「そんじゃま、やりますか」

ツナはそういうと、素早く一步踏み込み真横に竹刀を振るう。それは持田先輩の胴の防具を砕く勢이었다。ドゴツ。という鈍い音と同時に持田先輩は丸まって動かなくなった。

「……………」

「……………」

「……………ねえ、動かないんだけど。一本は入らない？」

「……………剣道の、る、ルールを知らないのか？」

「……………えー。めんどくさいな。今の体勢じゃ面も打てないだろうし……………」

そう言いながらツナは、持田先輩の髪を掴むと一気に引っこ抜いた。

「へ？」

「え？」

「……………一〇〇本ぐらいはあるぞ？ ダメ？」

「……………あ、赤!!」

「旗が……………あがった……………」

「スゲエ!! 勝ちやがった！」

「……………よつと」

動かない持田先輩の上にもものすごく重たい竹刀を落とすツナ。そして彼はそのまま特に何も言わないままみんなに囲まれた。

近づいてきた京子はツナを呼ぶと、

「ごめんね。返事は待ってもらえるかな。でもすごいねツナ君って、ただ者じゃないってかんじ！」

「あ、そう?」(あれ、このセリフ以前言われた希ガス……)

こうして、ツナのダメライフは幕を閉じた。

(今頃あいつどうしてんだろ。俺をマフィアにするのは諦めて、別の候補でも探してんのかな〜)

第八話 獄寺隼人

持田先輩を倒してから、ツナに対するみんなの態度は変わっていた。不気味がる奴もいるが、ダメツナと誰も呼ばなくなり、一目置かれるようになっていた。

(リボンもないし、いいねえ)

「沢田〜」

「お、おはよう」

「あのさっお前に頼みがあるんだ！」

「え？ 俺に頼み？」

「実は今日の球技大会のバレー—なんだけどレギュラーが欠けちゃつて、お前に出てほしいんだ！」

「俺が？」

「持田先輩を倒した時のおまえ、まじかっこよかったよ！ その力を貸してくれ！」

「いやいや。オレ以外にも適応者はいるって」

「なあ頼むよ頼む！ どーしても勝ちたいんだ」

「オレ球技苦手だから。あの時見たいにうまくはいかないからやめとく」

「頼むって」

「言っておくけど、球技は下手くそだからな!? それでいいならやってやるよ」

「マジ!? 先輩を倒したヒーローが加入してくれれば怖いものなしだぜー！」

「ヒーローねえ」

「ツナ、始まるぞ」

「はいはい」

そして、結果的にツナのチームは勝った。ツナは確かに最初の二、三球はとれずに落としていたり、あらぬ方に飛ばしていたが。

「ツナく大丈夫かよ」

「ああ。今のでコツは掴んだ」

そのセリフの後は、動きが決定的に違った。サーブ・レシーブ・スマッシュ。全てがプロ並みに上手くなっていたのだった。

そう、つまり結果的に勝ったのだった。

「ツナすげえよ！ 何で最初から本気出さなかったんだよ」

「出してたよ。相手の動きをみて、撃ち方とかルールとか考えてた。だから下手だった」

ツナはそう言うと、体育館を静かに去っていく。

次の日。ツナのクラスに転入生がやってきた。

「イタリヤに留学していた、転入生の獄寺隼人君だ」

（イタリヤっていうと、ボンゴレや骸達がいる所か）

「ちよ・・・かつこよくない？」

「帰国子女よ」

（どう見ても不良ですけどね！）

その後、眼があつたその少年は、ツナの席を蹴ってから自分の席に座った。

（あんだア？ コイツ・・・。一番弱そうな奴からシメとこうつて算段か。ああそうですか！）

休み時間。

「んだよあの転入生は」（こうなったら骸達もここに入れてやろうか。千種はともかく、犬と骸は飛んで喜びそうだな。あ、でもヒバリさんがいるのか）

考え事をしていたツナは、誰かにぶつかった。

「おー、いて。骨折しちゃったかも」

（三年の不良か・・・）「骨弱いんだな。カルシウムとった方がいいんじゃないの？」

「あ？ 何だテメー。お前がぶつかったせいで骨が折れたんだよ！ 治療代はらえ！」

「だから言っただよ。人とぶつかっただぐらいで折れるような骨の持ち主なら病院での治療をお勧めするぜ？ その前にホントに折つてやるよ」

ツナはそのまま相手の左腕と左肩を持つと、ゴキッ！ とそのまま肩の骨を外す。

「ぎゃあああ！ 本当に折りやがった!!」

(外したただけだったの。調子のった奴は適度に懲らしめないとな)

ツナはその場をそそくさと離れると、校舎裏に隠れる。

「あつはつは！ 脱臼だつつうのに骨折とか！ 保険の勉強やりなおせよwww」

「おい」

「あ、転入生」

「お前みたいなカスを一〇代目にしちまったらボンゴレファミリーも終わりだな」

「だよね〜」

「俺はお前を認めねえ。一〇代目にふさわしいのはこのオレだ!!」

「うんうん。君がどうしてボンゴレの事を知っているかなんて、この際どうでもいいから一っだけ訂正させて。俺、ボンゴレ継ぐつもりないからね!?!」

「球技大会から観察していたが、貴様のような軟弱な奴をこれ以上見ている時間も時間の無駄だ」

「ん。だから?」

「目障りだ。ここですてろ」

「わお。爆弾」

ツナに絡んできた少年(確か獄寺)は、ダイナマイトを二本取り出すと、啞えた煙草で導火線に火をつける。

「あばよ」

「よつと」

捨てるように投げられたそれを、ツナは両手で受け止め凍らせた。

「危ないなあ」

「!」

ツナは夜の炎を使って、凍らせたダイナマイトをどこかへワープさせるのと立ち上がる。

「くっ。果てろー!」

さらに二本放られたそれは、導火線が銃弾によって切られた事で事なきを得る。

「……」

「ち」

「ちやおっス」

「! リボーン。オマエ、帰って来たのか」

「ツナ、どうやったかしらねーが。オマエが生きてるんでな。再教育しに来てやったぞ」

「知らないよ! ってかコイツ誰。なんでマフィアの事知ってるの」

「ああ。俺が連れてきたファミリーの一員だ」

「は? 誰の?」

「お前のだぞ、ツナ」

「……ならないつつてんだろ。リボーンそれに家庭教師はもういない。俺はダメツナじゃないからな」

「何を言ってるんだダメツナ」

「ダメツナは一度死んで生き返った。神になったのさ」

「ふざけた事言ってるで戦え」

「……アイツ後でシメよう……」

「沢田を殺れば俺が一〇代目内定だというのは本当だろうか」

「ああ、本当だぞ。んじゃ、殺し再開な」

「……よし殺そう……」

ツナは仕方ないと言った具合でゆるく構える。

「果てろ」

獄寺はそう言うと、大量に煙草を啜えてさらに大量のダイナマイトに火をつける。ツナは不思議そうに呆れたように。

「どこから出したんだよ」

「獄寺隼人は体のいたる所にダイナマイトを隠し持った人間爆撃機だっけ話だぞ。またの名をスモークン・ボム隼人」

「へえ、体に火を着けたら面白くなりそうじゃん」

ツナはそう言うのと、右手に大きな炎を灯して、それを振りまいた。

「なっ。果てる!!」

「果ててたまるか。よっと」

ツナの炎をかわした獄寺は、手に持ったダイナマイトを投げた。それをツナは左手の冷気で全てこおらせる。

「無駄だ」

「なっ！ 2倍ボム！」

「無駄だだと言ってるだろ？」

「3倍ボム」

そう言うって取り出されたのは両手いっぱいダイナマイト。やはり量が多かったのか、ポロポロと落ちていった。

(ジ・エンド・オブ・俺・・・)

「よっと」

地面が一瞬でこおり、そして溶けた。その氷は全てのダイナマイトの火を消していた。

「なあ、リボーン。もう終わりで良い？」

(今のは死ぬ気の炎・・・。無意識のうちに使えているのか?)

「リボーンっ!!」

「!? つ、ツナ。悪い。なんだ？」

「もう終わって良い？ アイツももう戦意喪失してるみたいだし」

「・・・ああ。良いんじゃないか？」(コイツ・・・初めて会ったときとはまるで違うな・・・まさか、本当に一度死んで生き返ったのか?)

「・・・」○代目!! あなたについていきます!! なんなりと申しつけて

てください!!」

「はあ!？」

「・・・負けた奴が勝った奴の下につくのがファミリーの掟だ」

「ええ?」

「オレは最初から」○代目ボスになろうなんて大それた事考えていません。ただ」○代目が俺と同じ年の日本人として、どーしても実力

を試してみたかったんです……」

「はあ」

「でもあなたは俺の想像を超えていた！ 敵である俺も助けてくれたあなたに、オレの命預けます！」

「い、いや、そう言うのはできればやめてほしいなんて」

「そーはいきません！」

「死ぬよ？ 確実に死ぬよ？ 地獄道からの修羅道で殺されるよ？」

「何言ってるんですか？ オレは大丈夫ですよ」

「……じゃあ俺は、知らないからね」

ツナ、初めて？ のファミリゲット。

第九話 退学クライシス

ツナの授業で今日は理科のテストが帰って来ていた。

「川田」

「はい」

「栗原」

「はい」

「近藤」

「はい」

「沢田」

「はい?」

「ち」

ツナがテストを受け取ろうとしたとき、そのテストは取れなかった。

「? あなの?」

「あくまで仮定の話だが……、クラスで唯一、二十点台をとっていた生徒がいたでしょう」

「はあ」

「その生徒が突然点を上げてきた。これはカンニングの線も疑われる」

(・・・実力ですけど?)

「エリートコースを歩んできた私が推測するに、そういう奴は学歴社会において足を引っ張るお荷物にしかない」

(・・・いや、してないし)

「次からするなよ」

ペラリ、とクラスみんなに見えるように見せられた点数結果は案の定、百点。

「見えた!」

「わ。百点!?!」

「ダメツナお前何した!?!」

「次、鈴木——」

席に戻ったツナはそのままテストをカバンにしまうと、そのまま窓の外を眺めていた。

(つていうか根津の野郎……。あくまで仮定、仮定と念を押すのはそいつのことは言っていないと言いつつ訳するためだろ……。腹立つなあ……。)。何か締め上げる方法はないかしらん?)

そんな事をツナが考えていると、教室のドアが開き獄寺隼人が入ってくる。

「コラ！ 遅刻だぞ!! 今ごろ登校してくるとはどいうつもりだ!!」

「ああ!？」

「う……。っ」

「やっぱこえーよ。あいつ……。」

「先輩達をしめ返したって話だぜ」

(ビビってるけど、あれじゃ足りないんだよなー)

ツナはそのまま窓の外を眺めるつもりだったが、獄寺はズイズイツナのほうに近づいてきて、

「おはよーございます十代目!!」

と、お辞儀をした。

「なっ」

「どーなってるんだ!？」

「いつの間に友達に?」

「いや……。きつとツナが獄寺の舎弟になったんだよ」

「……。っ」

来るところまで来たなーと思ったツナはとりあえず思った事を言うことにする。

「……。おはようございます? この時間に登校してか?」

「じ、十代目?」

「せめて時間通り登校しろよ。会議などに遅刻するようなファミリーはいらねーぞ」

「……。っ!」

獄寺はツナのその雰囲気何か感じたのか、少し黙る。

「あくまで仮定の話だが、平気で遅刻してくる生徒がいるとしよう。そいつは間違いなく落ちこぼれのクズとつるんでいる。なぜなら類は友を呼ぶからな」

「おっさん。よく覚えとけ」

根津のその言葉に獄寺はズイズイと教卓に近づいて、根津の襟をつかみ上げた。

「十代目沢田さんへの侮辱は許さねえ!!!」

「!」

「!」

「.....」

「あくまで、仮定の話だと言ったはず.....だ.....つ。ガハア」

「仮定。です...か」

ツナはそう言った。その言葉にクラスの視線が全部ツナに向く。

「目の前にその仮定を体現する人物がいる場合、それは仮定ではないと思いますか？ 根津先生。あなたは『仮定の話』という事によって、言い逃れの、言い訳の口実を作っているだけです。それがあなたが『エリートコース』で学んだことですか？ だったら俺は平凡でいい何だったら底辺でもいいですよ。目の前のことから逃げながら生きることを教える道より、壁に当たったら乗り越える方法を教えてくれる平凡な道がいい」

*

「貴様等退学だ——っ」

「落ち着きたまえ。根津君」

「これが落ち着いていられるか！ 私に暴力をふるったのですぞ!!」

ツナ達は先ほどのことで校長室にいた。

「連帯責任で沢田ともども即刻退学にすべきだ!!」

（.....なんで俺まで.....）

「しかしですな。いきなり退学に決定するのは早計すぎるかと.....」

「!! では猶予をあたえればいいのですな
「は?」

「たしか校長。十五年前グラウンドに埋めたまま見つからないタイムカプセルの発掘を業者に委託する予定だとか」

「あ．．．ああ。それが何かね．．．?」

「それをこいつらにやらせましょう。今日中に十五年前のタイムカプセルを掘り出せば今回の件は水に流してやる．．．。だができなければ、即 退学だ!!!」

「そんな無茶苦茶な．．．」

ツナは廊下を歩きながら考えていた。

（まあ別に退学でも構わないけどさ。あ、でも京子ちゃんに会えなくなるのか．．．。そもそもリボンが許すはずないしな）

「探すか」

ツナはため息をつくとき、神々の義眼を開き辺りを見回す。

（あれは違う。あれも違う。あ、それは。あれなら、あいつを追い詰められる!）

何かを発見したツナは、廊下を全速力で走り出した。

グラウンドまで飛びだしたツナはソコを掘り返す。

「．．．．．よしっ。これなら．．．。あとは騒ぎを起こして．．．」

ツナはそう言うと、地脈に死ぬ気の炎を撃ち込んだ。

「．．．ん? これでいけるよな?」

ツナはそう疑問に思ったが、何の問題もなかった。

その後すぐに、地脈によつてグラウンドが割れ、地下を流れていた地下水が噴き出した。

「うひゃく．．．．．そういえば。これは十五年前のなのかな?」

地下水の雨が降るグラウンドで、ツナはタイムカプセルと思われる入れ物を開ける。

「．．．．．んん? 根津銅八郎? 四十年前のだな．．．．．」

ツナはニヤリと笑う。

「良いね」

その時丁度、先生達が駆けつけてくる。

「グラウンドで何をしてるかーっ。即刻退学決定・・・」

「数学二点。国語零点。英語六点。十五年前のカプセルは出てこなかったが、かわりに四十年前のカプセルが出てきたぜ。なーんでエリートコース（笑）のお前のテストが平凡なうちの中学のタイムカプセルに入ってるんだ？　なあ。根津銅八郎」

「そ、それは・・・！！」

この後、根津は学歴詐称によって解任となった。

「一件落着だな」

「流石っす十代目！」

「ダメツナはわざとか？」

「ああ。そっちの方が過ごしやすいんだよ？　絡んできた不良から逆

カツアゲとかできるし」

「・・・そうか」

第十話 山本 武

「チーム分けは終わったか？」

「あと一人です」

「だから、ダメツナはお前達のチームにくれてやるって」

「やだね！ 負けたくねーもん」

「バレーは凄かったけど野球が超下手なのは分かってるからな」

（はっはー！ ならその幻想をぶち殺してやろうじゃないか。さあ、どちらかのチームに入れてくんろ）

「いーんじゃねーの？ こっち入れば」

「！」

「？」

「マジで言ってるの山本くっつ。何もわざわざあんな負け男」

「ケチケチすんなよ。俺が打たせなきゃいーんだろ？」

「山本がそう言うんなら、まいつか」

（山本・・・一年なのに野球部レギュラー。クラス全員から信頼も厚い・・・。リボーンが目をつけそーだなあ）

ツナは華麗に現実逃避していた。

その後。

（見よ！ 俺もバカスカ打ってバシバシ守って。だがトンボ掛けを買って出る！ このパシリ精神!! あれ？ ダメツナってこんなんだっけ？）

ツナが自分の存在意義について頭をひねっていると。後ろに人の気配がした。

「助っ人とーじよーっ」

「山本・・・。野球部期待の星が何の用だい？ こんな負け体質の俺によ」

「気にすんなって。頼むぜ俺の注目株！」

「？」

「最近お前スゲーだろ？ 剣道の試合でも球技大会でも、今回の野球でもさ。俺、お前に赤丸チェックしてっから」

「え？ いやいや・・・そんな」

「それに引き換え俺なんて、馬鹿の一つ覚えみたいに野球しかやってねーや」

「何言ってるんだ。お前はあの野球がすごいんだろ？」

「それがどうもうまくなくてさ」

「？」

「ここんどこいくら練習しても打率落ちっぱなしの守備乱れっぱなし。このままじゃ野球始めて以来、初のスタメン落ちだ」

(スランプ?)

「ツナ・・・俺どうすりゃいい？」

「おおう？」(俺に聞くの?)

「なんつってな。最近のツナ、頼もしーからついな・・・」

「そうだな。山本。まずはしっかり休んでみたらどう？」

「なっ！ そんな事言うのか？」

「野球の選手。イチローが言ってたことだよ。『まず、身体をゆっくり休めて、野球がやりたくなるまで待ちます』ってね。ひとまず自分の気持ちを整理するために、積極的休息は大切なことなんだと心に決めて、休息をとってみたらどう？ そして野球がやりたくなるまで待つ。「野球が好き」「野球がしたい」「こういうプレーができる野球選手になりたい」という気持ちが湧いてきたら、自分は何がしたいのか言葉にしてみるのさ。で、その言葉を書き出して見るとところに貼りだしたりする。よく目にする日誌の表紙の裏などに記してもいいと思うけどね。気持ちの切り替えができたら、新たな気持ちで練習に復帰する。スランプってのは悪い状態のスクリーン状態だからね。一度別の練習メニューを試してみるのも吉だけど、でもやっぱり休息は悪い事じゃないんだから。誰だって疲れたら休まないと体が壊れちゃうんだから」

「・・・なるほどな！ しっかり休んで気持ち新たに、か！ よし。でも今日は練習していいか？」

「俺に聞くなよ。やりたいならやればいい。俺がしたのはあくまでアドバイスだからね」

「おう、ありがとな！」

——その夜

「お前、本当にダメツナか？」

「言っただろりボーン。俺はお前に殺されて生まれ変わった。神ツナだつて」

「厨そっち系二病でも止めはしねーが、聞いていた情報と全く違うからな。それと、お前のクラスの山本だがな」

「何？ 部下にしろとかいうつもり？」

「・・・俺のセリフをとんじやねえ」

「知るか!! ぞ？ お前は俺のクラスメイトまでマフィアにする気か？ 山本は野球をやってるんだ。邪魔するのも悪いだろ」

「そんなの俺には関係ない」

「相手の都合を考えろド阿保!!」

——次の日。

「大変だー!! 山本が屋上から飛び降りようとしてる!!」

「二エエツ?!」

「山本つてうちのクラスの？」

「あいつに限つてありえねーだろ！」

「言つていい冗談と悪い冗談があるわ」

「あいつ昨日一人で残つて野球の練習してて、無茶して腕を骨折しちまったらしいんだ」

「・・・阿呆かアイツは・・・」

「とにかく屋上に行こうぜ」

「おう！」

（えー。元気だなあ中学生）

「ツナ君いこつ！」

「おう・・・」

やる気のない声で返答し、ツナも現場に向かう。

「オイオイ。冗談きついで山本ー！」

「そりややりすぎだつて」

「へへっ。わりーけどそーでもねーんだ。野球の神さんに見捨てられたら俺にはなーんにも残ってないんでね」

「まさか・・・」

「本気!!」

「つたく。休まないと体壊すつて言つたら。山本、オマエ人に助言頼んどいて全部無視したね?」

人の波をかき分け、ツナがため息をつきながら登場する。

「ツナ・・・。止めに来たなら無駄だぜ。お前なら俺の気持ちかわかるはずだ」

「お?」

「ダメツナつて呼ばれてるお前なら。何やつてもうまくいかなくて死んじまったほーがマシだつて気持ちわかるだろ?」

「・・・例え分かつて、分かりたくない気持ちだな。それは」

ツナのその言葉に山本はムツとしたよう。

「さすが最近活躍目覚ましいツナ様だぜ。俺とは違って優等生つてわけだ」

「否定はしないけどさ。治つたらまた野球ができるつて言うのに。この場で死んじまつて未来を無にするつていうその気持ちは俺には理解できないな」

「!?!」

「昨日言つたら? 休息が大切だつて。その骨折、こうは捉えられないか? 野球の神様が頑張り過ぎのお前に、少し休めつて言つてるつてよ」

「・・・!」

「どうしても死ぬつて言うなら俺は止めないさ。山本武つていう一人の人間の一生。どう生きようが君の勝手だからね、山本。んじや、やめるならフェンスを乗り越えてからみんなに謝るんだよ」

「待てよツナ」

背を向けて立ち去ろうとしたツナを山本が袖を掴んで引き止める。そこで運悪くツナの足が滑った。

勢いよくフェンスにぶつかった彼の体は、もろくなったフェンスを突き破り、山本と一緒に空中に投げ出された。

「おっつと!!」

空中での高速機動「雷迅」。一瞬の発動しかできない技だが、山本を掴んで屋上の床を掴むのには十分だった。

「ちよっ! 誰か・・・引き上げて・・・ツ!!」

「おわっ!? つ、ツナ大丈夫か!!」

「大丈夫じゃないから! はやく助けて!!」

「お、おう!!」

こうしてツナと山本は屋上へ引き上げられた。

「はあく。死ぬかと思った」

「ツナ! お前すげーな」

「そう?」

「お前の言う通りだ。少しは休まなくちゃな。オレ、どーかしちまってたな。せつかくアドバイスもらったのに。馬鹿が塞ぎ込むとロクな事にならねーってな」

「ま、思い直してくれて良かったよ」

こうしてツナに親友が出来た。

だがもちろんリボーンはそうは思ってた。なかつた。

(ファミリーゲット)

ちなみにその後。

一瞬の雷迅でほぼ外れた全身の骨をはめ直す作業をツナは細々とやっていた。

「いってー」

第十一話 泣き虫ランボ

「答えは・・・、さ・・・三？」

「はずれ」

「んぎゃあああ」

ツナの部屋で爆発が起こる。煙の中で起き上がったツナはリボーンを睨みつける。

「おいリボーン。そもそもこれマフィアの勉強だろ！ 何で俺がこんな事学ばなくちゃいけないんだよ!!」

「お前がマフィアの十代目になるからだぞ」

「なるかあああああ!!」

ヒステリックに叫ぶツナだったがリボーンは聞き流す。

「もう良いよ。どうせリボーンには何言っても無駄なんだ」

「死ね、リボーン！」

「は？」

ツナは窓の外を見て、すぐさま意識の外に追いやった。

「久しぶりだなリボーン！ おれっちだよ！ ランボだよ!!」

ランボと名乗ったのは、先刻木の枝の上で拳銃を放とうとしていた子供だった。真っ黒な髪がもじゃもじゃと固まり、アフロの形となっている。ちなみに一度その木の枝が折れ地面に激突している。

「これは覚えておけよ」

しかし名指しされているリボーンは、その子供に見向きもしない。ツナもそれに習う。

「こらー！ 無視すんじゃねー!!」

子供・・・ランボからしてみれば、ショックだったのだろう。叫び声と、共に取り出した何かを手に、ツナ達に向かっていく。キラリと光が当たったことで、辛うじて刃物だということをツナは知った。だが、

リボーンは無造作に手を振り上げランボを壁に叩きつけた。

「おーいて・・・ 何かに躓いちまったみたいだ」

(無事なのか)

「イタリアから来たボヴィーノファミリーのヒットマン。ランボさん五歳は躓いちゃった!! 大好物は葡萄と飴玉で、リボーンとバーで出会ったランボさんは躓いちゃった!!」

一生懸命自己紹介し始めたランボはガハハと笑う。悪い奴ではなさそうだが、いかんせん性格が悪い。

「・・・つてことで、あらためて。いよお！ リボーン!! おれっちだよ！ ランボだよ!!」

「ちゃんと覚えとけよ」

「あ、んん」

改めて自己紹介をし出すランボ。ウザいが基本的に良い奴なので、鍛えればそれなりに強くなる。そんな人材なので、なるべくいや、勝手に引き込まれるだろう。と、折り合いをつけてツナはしたくもないマフィアの勉強を教えられるのだった。

と、

「あららのら。これ何かしら?」

そう言っつてランボが取り出したのは手榴弾だった。

(家の中で出すなよ・・・。反応しといてやるか・・・) 「げ!! 手榴弾!!」

「大当たり!! 死にさらせつりボーン!!」

手榴弾は窓の外で爆発した。

リボーンに投げる。リボーン弾く。ランボに当たる。ランボそのまま窓の外へ。空中で爆発。

が一連の流れである。

「死んだんじゃねーの?」

「良いんだよ。どっちみちボヴィーノファミリーつて言ったら中小マフィアだ。俺は格下は相手にしねーんだ」

(かっちょええ!!)

「ツナー」

奈々に呼ばれ、一階に降りるツナ。

「ん？ 何？」

「ちよつとちよつと。リボーン君のお友達でしょ？」

「……………」

「ケンカしちゃった？」

（そんなレベルじゃねーよ）

「ツナは二人よりお兄ちゃんなんだから。ちゃんと仲裁に入ってあげて。母さんご飯作るからお願いな」

「あー。はいはい。で？ リボーン呼んでこようか？」

「ああああああああ!!」

（恐怖刻まれてんなー）

現実逃避を少しするツナ。場所を変え、家からちよつと離れた土手に二人で座る。

「ほら。飴玉好物なんだろう？」

「……………ラ……………ランボの夢はボヴィーノファミリーのボスになって……………グス。全人類を跪かせること……………」

しゃくり上げながら、物騒なことを宣言するランボに、ツナは言葉に詰まる。

（この夢は……………本気なんだろうか？）

バカにするつもりはないが、あまりにも現実味がなさ過ぎる。

ボヴィーノファミリーのボスになること、迄ならばまだ分かる。そのファミリーの一員ならば、ボスに後継者に指名されるということも、ないわけではないだろう。

（だが、それで全人類が跪くって、どんな状況だ？）「……………まあ、頑張れ」

迷った挙げ句に、かなりありふれた言葉をこぼしたツナを気にすることなく、ランボは続けた。

「けどそのためには、超一流のヒットマン、リボーンを倒せて、ボスに言われた」

「一流？ あいつが？」

思い浮かべたのは、これまでのリボーンの奇行の数々。確かに奇行ではあるが、どれも利に適っていた。そういう意味では確かに一流で

はある。性格が決して良くはない事は置いておいてだ。

「……強くなりたいのか？」

「……！ ランボは強くなりたい！」

「んじや、気が向いて暇だったら鍛えてやるよ」

「本当か!？」

「ああ。気が向いたらな」

この約束が後々大変な事になるとは、この時のツナは知るよしもなかった。

「いいじゃない。大勢の方が賑やかで」

(良くねーよ！ 何が嬉しくてガキに囲まれて飯を食わなきゃならぬんだ)

暫くして、ランボが自分の顔にバズーカを向け始めた。

「え？ 自殺!？」

爆発と同時に、煙の向こうには青年が立っていた。

「ふく、やれやれ。どうやら十年バズーカで十年前に呼び出されちゃったみてーだな」

煙から出てきたのは、長身の伊達男。カールした黒髪に、垂れ目の瞳には、確かにあの幼いランボの面影はあるが。

「え？」

「お久しぶり。若きボンゴレ十代目。十年前の自分が世話になってます。泣き虫だったランボです」

「ら、ランボ!？」

「十年バズーカで撃たれた者は十年後の自分と五分間入れ替わる事が出来るんです」

(マジかー。これがあのランボかー)

「よお、リボーン。見違えちゃっただろ？ 俺がお前にシカトされ続けたランボだよ」

「モグモグモグモグ」

(あ、シカトしてる)

「……やれやれ。こうなりや実力行使しかねーな。十年間で俺がどれ

だけ変わったか見せてやる」

そう言うのと大人ランボは二本の角を着ける。

「サンダー、セット。俺のツノは百万ボルトだ」

「おお!？」

「死ねリボーン!!」エレットウリコ・コルナータ 電 撃 角!!」

リボーンに向かって突進するランボ。だが、リボーンがフォークをランボの進行方向に突き出す。

(あ、これ刺さる奴だわ)

と、ツナでさえ思ったのだが、その手前。ランボの姿が消え、逆方向からリボーンに攻撃が加えられた。

「!? 何しやがんだっ!!」

「当たったな」

「・・・マジかよ」(・・・ていうか、今の愛気? ランボが使えるようになったの?)

ボン。という音と共にランボの姿が元に戻る。

「・・・チツ」

リボーンは舌打ちするとどこかへ行った。

(愛気だな。ランボ・・・そうか。強くしたのか・・・。ヘエ・・・)
ツナはツナで愉しそうに笑っていた。

第十二話 入ファミリー試験

「・・・ふあゝ。眠い」

「よおツナ」

「山本。おはよ」

「なんだ、寝不足か？ クマできてんぞ」

「ちよつと勉強をね・・・」

中学生らしい言い訳をしたつもりでいたツナだったが、山本は何故かとても驚いていた。

「ツナが・・・勉強!? そ、そう言えばこの前テストで百点取ってたよな！」

「あ、うん。そうだけど」

「俺にも教えてくんね？」

「あはは。山本は本当に野球だけなんだなあ」

「おまえ」

「あははははは」

二人で笑い合っていたツナと山本だったが、それを遠くから見ていた人物がいたらしく。

「つつーわけで、獄寺を納得させる為にも、山本の『入ファミリー試験』をすることにしたんだ」

「俺が納得出来ーん!! そもそも俺マフィアになる気なんてないし! 勝手に決めんなし!!」

「もう獄寺に山本を呼びに行かせたぞ」
「はいっ」

(・・・回れー右。位置について・・・。行く先に八九寺がいると考える・・・。よい。ドンツ!!)

ツナは地面を蹴って高速で走り出した。

(はあああちくじいいいいいいいいいい!!!!!!!!)

心の中で愛しの少女を呼びながら。

ちなみに、そんな速度で走って、急ブレーキをかけた物だから原作

通りスケボーで付いてきていたりリボーンが吹っ飛ばされたのはまた別のお話。

「はいはい二人とも何も起きてないね!？」

「十代目!」

「よお」

「何そいつ。ツナの弟?」

「は?」

「ちやおっス」

「あ、リボーン」

トコトコと戻ってきたリボーンを指して山本が問う。ツナがどう答えるかと悩んでいたら。

「弟じゃねーぞ。俺はマファイアボンゴレファミリーの殺し屋リボーンだ」

「…それで、俺の家庭教師で腕利きの殺し屋^{ヒットマン}。俺をそのボンゴレファミリーの十代目にする為にわざわざイタリアから来たんだって…。俺なる気ないのに…」

「ハハハ。そつか。そりや失礼した。こんなちっせーうちから殺し屋たあ大変だな」

「そーでもねーぞ」

「よーしわかった。んじゃ俺も入れてくれよ。そのボンゴレファミリーつてのに」

「あ、え? 入るの? 止めようよ。まだ中学生じゃん。バイト禁止だよ?」

「で、なにすりやいいんだ?」

「まず入ファミリー試験だぞ」

「俺の言葉はガン無視ですかそうですか・・・」

「っへー。試験があんのか。本格的じゃねーか」

「試験に合格しなくちゃファミリーには入れないからな」

(あ、これ多分。ボスと威厳を見せるとかなんとか理由をつけて俺も参加させられる奴だ。今の内に小手着けとこう)

ツナは隠れてコソコソと金属製の小手を着ける。

「ちなみに不合格は死を意味するからな」

「ハハハ。マジでお前面白いな。気に入ったぜ」

「試験は簡単だ。とにかく攻撃をかわせ」

言いつつリボーンは二丁のサブマシンガンを取り出した。

（おいおい。いきなりハードル高いな）

「んじやはじめっぞ。まずはナイフ」

「うおっ」

（投げナイフも可能・・・マジでリボーンすげーな）

「ボスとしてツナも見本を見せてやれ」

「んん？」

「そいつぁーいい。どっちが試験に受かるか競争だな」

「んんん？」

ツナはため息をつくとき、投げられたナイフを地面にははたき落とす。

「・・・別に、避けなくても良いだろ？」

「ま、そうやり続ける事が出来たらな」

（簡単だっつの）

「おっと。いい肩してらー」

「流石野球で鍛えてるだけあるな。反射神経バツグンだ」

「そーっすかね〜」

「しかし最近のオモチャってリアルだな——。本物のナイフにしか見えなかったぜ」

「本物なんだよ！ アイツはマジで殺す気で投げて来てんの！ アイツ絶対赤ん坊じゃない!!」

「次の武器はボウガンだ」

「ゲツ。先回り」

「やるねー」

「ガハハハハ、リボーンみーっけ!!」

「今度は何だ？」

「ランボか」

「おれっちはボヴィーノファミリーのランボだよ!! 五歳なのに中学

校に来ちやったランボだよ!!」

「ボヴィーノ？ 聞かねー名だな。リボーンさんどうします？」

「続行」

「はあ」

リボーンが撃ってきたボウガンの矢の軌道を、ため息交じりに小手を使つてさばいていくツナ。

だんだんとリボーンが腹を立てているのが分かる。

(あー。大人しく逃げ回つとけ。って感じなんだろうな)

ランボのミサイルも、リボーンのスブマシンガンも全てさばききるツナ。

締めと称し、リボーンはロケット弾を持ち出してきた。

獄寺のダイナマイト。リボーンのリケット弾。ランボのミサイルがツナに襲いかかる。

が、

「あーあー。爆発するぞ？ これ」

ツナはそう言うと、全部リボーンに向かって弾いた。

(あ、やべ。肩外れかけてやがる)

そう思つて止めた瞬間。弾き零れがあつたらしく、ツナの方に数発向かつてきていた。

(あーやべ)

「あぶねっ！」

「わっ?!」

「・・・すげーのな！ ツナって」

「あ、まーね」

「馬鹿ツナが！」

何とかかわしたのだろう。勢い良くツナに跳び蹴りをしてきたリボーンだったが、直前で勢いをゼロに殺された。

「そう、何度も蹴られるかってんだ」

「・・・まあいい。試験合格だ。お前も正式にファミリーだぞ」

「サンキュー」

何とか獄寺も山本の事を認め、一件落着といた所だろう。

第十三話 ビアンキ

「……」(暑いな)

とある夏の日。降り注ぐ陽射しを色んな意味で恨めしく見つめながらツナは歩いていった。

と、そんなツナの後ろから自転車がやってきた。

(ママチャリ? メット? ゴーグル? ハイヒール? いや、何もかもがおかしい!)

自転車に乗っていた女性はメットとゴーグルを外すとツナにジューズを投げてきた。

「よかつたらどーぞ」

「あ、ども」

受け取ったツナはそれを飲みながら家に帰る事にした。

「ういつすりポーン。ただいま」

「んっ?」

「お前……カブトムシついてんぞ」

「これは俺の夏の子分達だぞ。情報を収集してくるんだ」

「便利だな」

「おかげで情報が掴めたぞ。ビアンキがこの街に来てる」

「ビアンキ……? 誰だよそれ」

「昔の殺し屋仲間だ」

「へー」

ツナは飲み終わった缶を捨てに行くついでにピザの受け取りに赴く。

「あれ? 貴女はさっきの?」

「お待たせしました。アサリピザのお届けです」

彼女はガスマスクを着けるとピザの蓋を開ける。

「召し上がれ」

「……いや、召し上がれって言われても……。代金も払ってないし……食べて良いの? ……でも特徴的な匂いだなあ?」

全く苦しむ事なくピザに手を伸ばすツナだったが、銃声によってピ

ザの箱は吹き飛んでいった。

「リボーン？」

「ちやおつスビアンキ」

「リボーン」

（あー。この人がビアンキなのかー）

ツナは遠くを見ながら現実逃避を實行していた。

「迎えに来たんだよ。また一緒に大きい仕事しよ。リボーン。やっぱりあなたに平和な場所は似合わない。貴方のいるべきはもつと危険でスリリングな世界なのよ」

「言つたはずだぞビアンキ。俺にはツナを育てる仕事があるからムリだ」

「……………かわいそーなりボーン。この十代目が不慮の事故か何かで死なない限り。リボーンは自由の身になれないつて事だよね」

（あー。そう取っちゃいますかー。いやはや面倒だな）

「とりあえず帰るね。十代目を殺……十代目が死んじやつたらまた迎えに来る……」

「リボーン。俺、十代目になりたくないんだ。だから、ビアンキの所に行つてあげなよ」

「嫌だぞ」

「……………で？ 何なんだよ。あの女は」

「アイツは毒サソリ・ビアンキっていうフリーの殺し屋だ。アイツの得意技は毒入りの食い物を食わすポイズンクッキングだ」

「へえー。あ、じゃああの缶ジュースもピザも総じてポイズンクッキングだったって事？」

「缶ジュースつてお前が飲んでた奴か？」

「うん。既製品のはずなのに変な味がして結構首を傾げてたんだよね」

「そうか」

次の日。ツナは朝から京子ちゃんに会っていた。

「おはよツナ君」

「おはよー。京子ちゃん」

「今日家庭科おにぎり実習なんだー。楽しみー」

「へー」(おにぎりってただ握るだけだよな?)

「今日は家庭科実習でつくったおにぎりを、男子にくれてやるーっ」

「!!!」

「変な行事っすね」

(っつか要らねー!)

「ツナ。誰にもらうか決めたか」

(いや、だから要らねーっ)

と、その時ツナは京子の影に隠れるビアンキを見つける。

ビアンキはそのまま京子のおにぎりとポイズンクッキングを入れ替える。

(あ、これ喰ったら死ぬ奴だ。誰が喰うんだろ)

なんて思っていたツナはいつの間にか数歩前に出ていた。

「ツナ君。食べる?」

「へ? 俺?」(まあ俺は死なないと思うけど・・・)

「積極的だな。おい!」

「いやさー」

「あ。シヤケ嫌いだった?」

「そんな事もないんだけど・・・」(まず見た目がなー。毒にするにしてももつと見た目を何とかして欲しいよ。全く・・・)

文句を言いつつもおにぎりを食べるツナ。

(うーん。これでオイシイって言っても別に京子ちゃんを褒める訳じゃないしな・・・。かといって味が悪い事を指摘したら京子ちゃんへこむだろうし)

「十代目。俺も良いすか？」

「そーだな獄寺」

「あ、おい」

「いただくぜ」

ツナはおにぎりを食べようとする山本と獄寺を交互に見て。

(別にポイズンクッキングで誰が死のうがどうでもいいが、目の前で友人が死ぬのは嫌なんでね!) 「食べたら死ぬぞ!」

おにぎりを奪い取り全部食べるツナ。

(ま、これでいいだろ)

——ちなみに。

「そんなことないよ・・・」

「いいや。間違いないわ。アレは沢田の告白ととるべきよ」

「えー!？」

「男らしかったっス。十代目」

「？」

「やるなーツナ」

「？」

みんなツナの「食べたら死ぬぞ」という言葉を、

『俺が京子からもらったおにぎりを食った奴はぶっ殺すぞコラア!!』

ぐらいにとっていた。

「流石十代目っス」

「？」

第十四話 三浦ハル

とある日のこと。ツナ達がいつも通り登校していた時のこと。

ツナ達の前から・・・というか、リボーンが歩く塀の上を同じように向かいから歩いてきた。

「な、なんだ・・・？」

「こんにちは——っ」

「ちやおっす！」

「私・・・三浦ハルと申します」

「知ってるぞ。ここんちの奴だろ？」

「お友達になってくれませんか？」

「いいぞ」

（関わり合いになりたくないな・・・。今の内にリボーンから離れるチャンスだぜ）

ツナはコソコソと足音を消し、なおかつ高速で離れていく。後ろの方で奇声が聞こえた気もするが彼は気にせずの前に突き進む。

（よし。リボーンから逃走完了。家知られてるからまあ完全に逃げることは不可能だろうけど・・・。まあいざとなったらイタリアの基地にでも）

その後、ツナがりボーンから聞いた話によれば、どうやらあの少女はツナに対してかなりの怒りを抱いているらしい。

（殺し屋だのマフィアだの全部この赤ん坊が言い出したことなんだけどなー・・・。というか、まず赤ん坊がスーツ着て喋ってることを疑問に思おうぜ）

三浦ハルと名乗った少女に心の中で突っ込みを入れるツナだった。

——次の日。

「暑いな・・・。。。太陽一度でいいから消えてくれないかな——」
太陽を恨めしげに睨むツナの耳にガシャガシャと金属音が響いてくる。

「あれ・・・。あまりの暑さに耳鳴りが・・・。。。」（いや、耳鳴り

じゃ・・・ない)

「おはよ——」ごぞいます」

「何だアンター!!?」

ツナが振りかえると、そこにはアイスホッケーのステイックを持ち、バイクのヘルメットを抱え、甲冑のような物をまとった昨日の少女が居た。

「昨晚頭がぐるぐるしちやって眠れなかったハルですよ」

「寝不足だとそういう格好しちやうのかよっ!?!」

「違いますーっ。それじゃ私お馬鹿ですよ」

「・・・ん?」

「リボンちゃんが本物の殺し屋なら、本物のマフィアになるツナさんはとーってもストロングだと思っわけです」

「・・・はあ」

「ツナさんが強かったらリボンちゃんの言ったことも信じますし、リボンちゃんの生き方に文句は言いません。お手合わせ願います(・・・しようがねえ。風歩とか使うまでも無く簡単にあしらえるだろう)」

ツナは特に深いことも考えずに暇つぶしにプチプチを潰す感覚で少女の攻撃をさばいていく。

「あ、言っておくけど俺はマフィアのボスにはならないからね」

「じゃありボンちゃんをもてあそんでるんですね!!」

「いやいや。マフィアのメツカ、イタリアの組織が俺をマフィアのボスにしようと送り込んできたのがリボンなんだよ。俺悪くない。悪いのイタリアンマフィア」

「十代目。さがってください!」

「え。あ、獄寺君・・・!」

「果てろ」

「あれ? どかーんってやつですねー」

その通り。獄寺の投げたダイナマイトが爆発し、爆風でハルの体が欄干を越えて川に落ちる。

「あーあー。落ちちやったよ・・・」

「これでもう大丈夫です」

「一応カタギの人間なんだけどなあ・・・」

「ブハッ。なんであんなもん持つてるんですかーっ。！……………」

「たすけ・・・ゴボツ。助けてえーっ」

「あちやーっ」

「ん？」

「助けてやる」

「・・・リボーン」

「駄目です！ この川は、リボーンちゃんが泳げるよーな」

「ツナ」

「あー・・・。面倒臭い」

ツナは気怠げにそう呟くと、少々格好つけ気味に欄干を飛び越え川に飛び降りる。

「溺死とかくだらない死に方すんじゃないよ」

そう言いながらツナはハルを河川岸に引き上げる。

*

「ありがとーございました・・・」

「ったく、十代目に何かあったらオメーこの世に存在しねーんだからな。反省してんのか？」

獄寺が少し怒ったようにそう言ったが、ハルはまったく気にせずツナに惚れていた。

リボーンの代わりに飛び込んだから。気怠げなところがカツコイイ。などと細部は違うものの、結末は変わらなかったようだ。

「ハハ・・・不幸だ」

第十五話 入江正一

「・・・また素麺？ 最近お中元の残り物ばかりだね・・・」
「も・・・文句言わないの！ いいじゃない、経済的で」

「アレだね、お中元Ⅱ素麺っていう方程式をそろそろ崩すべきだよな。
じゃないと毎年夏は素麺ばかりになっちゃう」

「オレはママンの作ったソーメン好きだよ」

「私も好きよ」

「まあ、ありがとう。流石リボンちゃん。ビアンキちゃん！」

「素麺ってただ茹でるだけじゃん。つゆも市販のものを水で割っただけだしさ。例えオレが作っても味は変わらないよ」

そんなことを言ったツナのおでこにフォークが飛んできた。だが、ツナは箸でそれを掴み机に置いた。

「リボン。いくら手が滑っても、フォークは危ないからしっかり持っておいてね」

「チツ」

「それに・・・もう一人ソーメン好きが居るのよ。ほら来た」

「ガハハハハハ！」

「おい・・・まさか」

「オレっちだよ！ ランボだよ!!」

「角ぐらいちゃんと着けてから来い！ みつともない」

「くびや！ わざとだもんね。一応なおすけど・・・。本当にわざとだ

もんね!! リボン^ち死ね——!!」

(照れ隠しにミサイルランチャー撃つなっ!!)

撃ち出されたミサイルはリボンが箸で挟んで止め、ランボに向かって投げ返す。それはランボの頬にめり込むと、窓の外。遠くまで飛んでいった。

「アレは先端にセンサーが積んであるミサイルでは無いのか？ と言うか何故起爆しない・・・」

ツナは思わず頭を抱えた。というか、これでもし胃が弱かったら穴が開いていたかもしれない。

(もう少し凶太く生きた方が良かったのかなあ……。つて言うかこれ
正一君来るやつじゃん。ちよつと迎えに行つてこよ)

そう思つた矢先。ツナの脳内に着信があつた知らせが届く。

「……。こんな時に。はい、沢田ですが」

『あ、ツナ君。ちよつといいかな』

(炎真君?) 「ん? どうかしたの?」

『僕のシモンファミリーのことなんだけど』

「聞くよ。何かあつたの?」

『ツナ君の影組と同盟を組んでもいいかな。骸君に頼んでみたんだけど、「マスターに聞いてください。我々のボスはその人ですから」つて言われちゃつて……。』

「ハハ……。いいよ。仲良くする分には問題ないし、助けあつていこうよ」

『あ、じゃあ今度ファイアっぽく同盟の証みたいなの作ろうよ』

「アハハ……。じゃあそうしようか」

『あ、ゴメンね急に電話して。それじゃ』

「うん。またね」

電話を切つてツナは玄関から外に出る。するとそこには木箱を持つてランボを背負い、キヨロキヨロとツナ達の家をのぞき込む赤毛の少年の姿があつた。ツナはその姿に遠い未来の彼の姿を重ねて思わず笑う。だが、すぐさま柔らかい笑みに顔を変えて出迎えることにする。

「あの。家に何か用ですか?」

「わあ!」

「あ、あはは……。驚かせちゃいました? えつと、こここの家の綱吉と言いますが。何かご用でしょうか?」

(誰だ!?! あんな丁寧なやつオレ知らねーぞ!?)

とはリボーンの談である。

「あ……。あの。リボーンさんを……。」

「リボーンに何か用?」

「……。あ、家にこの子が突つ込んできて」

「はあ」

「ここの住所が書かれた紙を持ってて」

「ふんふん」(沢田りぼくん? ……アンニヤロオ)

「それで……この箱を返しに……」

「…………お詫びの品って書いてあるじゃないですか。素直に受け取っておいてください。ご家族の方にもそう伝えておいていただけるとありがたいです」

「で、でも」

「うんそれでもうこの家庭には関わらない方が良いでしょう。最悪な結果しか見えないですから」

「……………あ」

「ロメオオオオオオオオオ!!!」

「ほら、もう逃げた方が良いでしょう」

冷静にいいながら手につけた小手でビアンキが撃つノーコン銃弾を弾いていくツナ。それから立て続けに怒るトラブルを解決したと思っただけの間にか正一はいなくなっていた。

「今回も何とかなったな」

「それよりリボーン?」

「ん? なんだ?」

「リボーンはいつの間に俺の家族になったの?」

「……………」

「沢田りぼくんなんて、お前はただの家庭教師のはずだよな? 何で俺の姓勝手に名乗ってるの。いつの間に家族になった気でのさばるのさ。良くして居候だろ? な、リボーン?」

「あ、いや。その、だな」

ツナの天使のような悪魔の笑みにタジタジになるリボーン。そして、自身が豪語するネッチョリよりも恐ろしい罰を受けることになった。

リボーンは語る。

「ツナは本気で怒らせちゃいけない!」

と。

そして、ツナに対してのおふざけは軽めにしておこうと心に誓った
リボーンだった。

第十六話 笹川了平

「は——あ。始業式から寝坊だよ」

「急げよ」

「あーはいはい。……………うおおおお！ 死ぬ気で登校するー!!!」

「自分で死ぬ気になれんのか。どんどんボンゴレボスに近づいてやがるな」

全速力で学校に走って向かうツナ。途中で誰かに腕を掴まれたが、気にせず全力で学校まで走った。まあ、要するに間に合ったのだった。

「ふう」

「——紛れもない本物……」

「!? だ、誰?」

「聞きしに勝る、パワー・スタミナ！ そして熱さ!! やはりお前は百年に一人の逸材だ!!」

「は?」

勢い良く起き上がってツナの方を向いたのは、髪を短く切り揃えた年上っぽい少年だった。

「我が部に入れ。沢田ツナ!!」

「綱吉です……。ってか何で俺の名前……」

「お前のハッスルぶりは妹から聞いているからな」

「い……。妹?」

「お兄ちゃん」

「どうしたキョーコ!?」

「キョーコ……? とつてもなじみ深いような……」(えつと、この人ボクシング部に所属してる笹川了平先輩……。笹川……。キョーコ)

ツナは頭をひねって考え、答えにたどり着けそうになったが、答えは向こうの方からやってきた。

「も——。カバン、道におっことしてたよ!」

「! 京子ちゃん!?!」

「あ・・・ツナ君。おはよ!」

「スマン」

「おはよ?」

「? 何で二人でいたの? あ。まさかお兄ちゃん、ツナ君捕まえて
メーワクかけてないでしょうね!」

「ない!」

(や、迷惑結構かかっています。なんかいやな予感がびんびんします)

「ツナ君。お兄ちゃんのボクシング談義なんか聞き流していいから
ね」

「あ、うん」

「そう言えば自己紹介がまだだったな。オレはボクシング部主将。笹
川了平だ!! 座右の銘は『極限』!!」

(熱いな・・・)

「お前を部に歓迎するぞ。沢田ツナ!」

「綱吉です」

「駄目だよお兄ちゃん。ツナ君を無理矢理誘っちゃ——」

「無理矢理では無い! だろ・・・? 沢田」

「いえ。結構強引です了平さん」

「・・・では! 放課後にジムで待つ!!」

「強引だなあ・・・」

「ガサツでしょ? あー見えて意外と優しい所もあるんだよ」

「まあ誰だってそういう面はあるだろうけど・・・」

「でもツナ君凄いな。私も嬉しくなっちゃった」

「へ?」

「あんな嬉しそうなお兄ちゃん久しぶりに見たもん」

「へーそれはよかったですね(棒)」

断りにくくなってきたなあ。と、ツナは他人事のように思ってしまっていた。

——放課後、ボクシング部室。

「さて、いかにして断ろう・・・」

「おお、沢田。待ってたぞ！」

「あ、はい」

「お前の評判を聞きつけて、タイからムエタイの長老まで駆けつけているぞ」

「は？ タイの長老・・・？ タイから日本まで半日はかかるんだけど・・・」

「パオパオ老師だ」

「パオ——ン！」

（てんめー!!!）

像の被り物をしただけという簡易コスプレで声を変える努力もしていないリボンに若干のいらつきが見え始めたツナであった。

「オレは新入部員と主将のガチンコ勝負が見たいぞ」

「えー。何を言ってるんですかパオパオ老師さん。私めにボクシングをやらせる気でしようか？」

「当たり前だ。ちった——強くなりやがれ」

「つていうか、ボクシングとムエタイは関係なくないですかねー」

「うむ。オレとのスパarringは沢田の実力を計るいい方法かもしれない」

「えー。了先輩までそんな事を言ってしまうれるんですか。俺にボクシングをやれと」

「ツナ君頑張つてー！」

「負けんなよ」

「十代目〜！」

「み、皆さん来ていらっしやるので・・・」（つていうか、あの簡易コスプレで何故みんなリボンだと気付かない!? 馬鹿か!? 馬鹿なのか!?!）

「パオ〜ン」

*

「ゆくぞ、沢田ツナ!! 加減などせんからな!!」

「綱吉です。。。あと、ボクシング部入部は断らせてもらいますっ！」

「ほーう……。オレは細かい詮索などせんで。何故なら男同士拳で全て語り合えると信じているからな。入部しろ沢田!!」

「断る!!」

「『極限ストレート』をかわすとは！　ますます気に入ったぞ!!　なおのこと入れ、沢田!!」

「絶対！　嫌だ!!」

「すげー。笹川先輩の『極限ラッシュ』をかわしてる……。！！」

「あいつ、何者だ!?!」

「かわすツナもすげーが、あのラッシュも常人のものじゃねーな……」
「ありやあ殺し屋のそれだ……」

「入れ入れ入れ入れ!!」

「やだやだやだやだ!」

「入れ!」

最後の一撃。了平が放った『極限ストレート』がツナの顔の真ん中にめり込んだ。

「!」

ツナの体は少しよろけ、ロープに寄りかかる形になる。

「……沢田?」

「……了平先輩。熱くなっていたんでしようけど、流石にジャイアンパンチはないんじゃないんですか?」

地の底から響いてくるような低い声でツナは言った。

「さて、じゃあ反撃の狼煙を上げるとしようか……」

ツナはそう言うのと軽く踏み出した了平との距離を詰める。

「むっ!」

「連続「普通のパンチ」♪」

一瞬のことだった。見えた人間が少ないかもしれないほどの一瞬で、ツナの拳が質量を持った残像でそこに出現し、了平の上半身を余すところなく叩いた。

「ぐはああ!!」

「……………ツ!」(つつつてええええええ?!　肩があ!　肩

があー！ ちょっと手加減しようとな変な動きしたからか!? 外れや
がったこのバ関節！」

バレないように関節をはめ直すツナ。そう言えば……。と了平の
方に目を向けてみると、割れたガラスの破片の中に沈んでいる彼の体
があつた。

(わお)

「素晴らしい！ 極限に入ったぞ、沢田！ お前のボクシングセ
ンスはプラチナムだ!! 必ず迎えに行くからな！」

「もー。お兄ちゃん嬉しそうな顔してー！」

「いえ、結構です」

「オレも気に入ったぞ、笹川了平」

「？」

「お前、ファミリーに入らねーか」

「?」

(また・・・コイツは・・・)

貪欲なりボーンだった。

第十七話 雲雀恭弥

「秋だねえく……。夏が終わって秋が来て。一年が終わるのももうすぐなんだろうなあ」

「なんか、ツナ難しい事言ってるねーか？」

「アホ牛がブドウブドウって最近ウザくねースか？」

「栗もうまいぞ」

飛んできた毬栗がツナの背中に刺さる。

「て！ てて！ リボンってえ——っ!!」

「ちやおっス」

「刺さってる！ 何じゃそれは！」

「これは秋の隠密用カモフラージュスーツだ」

「百人が百人振りかえるぞド阿呆！ お前は本当に一流の殺し屋ヒットマンなんだろうなあ!」

「ファミリーのアジトを作るぞ」

「また突拍子も無いね!!? ……お前がそうやって突然言い出したことには絶対裏があるんだよな……」

「へー。面白そうだな、秘密基地か」

「子どもかおめーは！ アジト、いいじゃないスか！ ファミリーにアジトは絶対必要っスよ！」

「あー……うん」（影組のアジトがもう転々とあるからなー。正直イライナイ）

「決まりだな」

「どこに作るんだ？ 裏山か？」

「なわけねーだろ!!」

「学校の応接室だ」

「!!?!」

「応接室はほとんど使われてねーんだ。家具も見晴らしもいいし、立地条件は最高だぞ」

（コイツ、雲雀恭弥と俺たちを絡ませる気だな!?!）

「まずは机の配置変えからだな」

「オレ、十代目から見て右の席な」

(ハア・・・マジか)

未来が何となく見えてきたツナだった。

———応接室。

「へく、こんないい部屋があるとはね——！」

「君、誰？」

(コイツは・・・、風紀委員長でありながら不良の頂点に君臨するヒバリこと雲雀恭弥・・・・・・・・!!)

「なんだあいつ？」

「獄寺、待て・・・」

「風紀委員長の前ではタバコ消してくれる？　ま、どちらにせよただでは帰さないけど」

「!!　んだとてめ——」

「消せ」

前に出た獄寺のタバコの先だけが綺麗に吹き飛ばされる。

「何だコイツ!!」

(聞いたことがある・・・。ヒバリは気に入らねーやつがいると、相手が誰であろうと、仕込みトンファーでめった打ちにするって——
！・・・)

「僕は弱くて群れる草食動物が嫌いだ。視界に入ると、咬み殺したくなる」

(こいつ・・・)

(やつかいなのにつかまっちゃったぞ・・・)

「・・・へー。はじめて入るよ。応接室なんて」

「待てツナ!!」

「え？」

「一匹」

トンファーで叩かれ、ツナは応接室の奥に転がっていく。

「のやろお!!　ぶっ殺す!!」

「二匹」

「てめえ……!!!」

獄寺とは違い、何とか雲雀の攻撃をかわす山本。

「ケガでもしたのかい？ 右手を庇ってるな」

「！」

「当たり前——三匹」

山本も気絶したところで、ツナの目が覚める。

「えーっと、獄寺くん？ 山本？ ……これって、どういう事？」

「起きないよ。二人にはそういう攻撃をしたからね」

「そういう攻撃しかできなかったの間違いじゃ……」

「む。君、ムカツク」

「短気は損気ですよ……」

「咬み殺す」

雲雀のトンファーを両手の小手で受け止めるツナ。

「ワオ、素晴らしいね。君」

「対してお前はそうでも無いな」

「？」

「殺すって言う単語を口に出しておきながら、殺気がまったく見られないって言うのは、案外珍しいものだよ。本当に殺す気が無いのか、それとも殺すって言う単語をカツコイイと思ってる中二病患者かのどつちかかな？」

「……ねえ、殺していい？」

「だあかあらあ。『殺す』って言う時は相手に殺気を向けないと……」

ツナは雲雀に対して何の感情も持っていないように見える。なのに、

「殺すぞ」

「ツ?!」

その一言で雲雀が恐怖で後ろに数歩下がるぐらいの殺気は出せるようだ。

「うまい人はさ、相手に何の感情も持って無くても、殺すって言う単語を使わなくても殺気を出せるらしいよ」

自分のことを棚に上げて言うツナ。それとも彼は幼少期の暴挙を忘れていたのだろうか。

「君、何者？」

「沢田綱吉。それ以上でもそれ以下でもないよ。雲雀さん」

語尾に音符が着きそうな軽い言葉遣いなのに、ツナから向けられる殺気のせいで蛇に睨まれた蛙のように動けない雲雀だった。

「じゃあ、獄寺くんと山本連れて帰ることにするよ。勝手に入ってごめんね」

「……………」

*

「さて、リボンヌ。訳を聞こうか」

「ツナ。オレの名は」

「リボンヌ。お前、応接室は雲雀さん達風紀委員の拠点だって知ってたよな？」

「ツナ」

「なあ。雲雀さんにワザと会わせたよな？ リボンヌ」

「……キケンな賭けだったけどな。打撲とスリ傷ですんだのはラツキーだったぞ」

「ふーん。そんなキケンな賭けに俺たちをかり出したんだ……」

「お前達が平和ボケしないための実戦トレーニングだぞ。鍛えるには実戦が一番だからな」

「リボンヌ。お前、今うまくごまかせたとか思っていない？」

「ちくしょー、あんなやつに……！」

「目をつけられるのが狙いだよね？ まあいいか」

「ヒバリは将来必ず役に立つ男だぞ」

「……あの小動物。また会いたいな」

いろいろ編

第十八話 棒倒し

体育祭の季節ですね。ここ並盛中でも体育祭は超ビッグイベントです。準備期間中から学校の雰囲気ガラリと変わって私もわくわくしてます。我が校では縦割りでA・B・C組に分かれてチームを作るのですが、組同士の対抗戦はとても白熱するんです！特にクライマックスに男子が行う「棒倒し」は総大将が棒のてっぺんに登り、相手の総大将を地面に落とすという変則ルールなのですが、「これこそ体育祭の華であり、男子にとって一年で一番の見せ場なんだ!!」と、毎日お兄ちゃんに聞かされます。そのお兄ちゃんはどうと……。

「『極限必勝!!』」

相変わらず燃えています。(ここまでのモノローグ担当京子

「これが明日の体育祭での我々A組のスローガンだ!! 勝たなければ意味はない!!」

(ああ……縦割りのせいで了平さんと同じチームに……。あの人絶対棒倒しで俺を総大将にとか言ってくるよ……。それにしても了平さんは今日も熱いな……。ほら、妹さんの京子ちゃんが心配そうに見てますよ)

「ウゼーっスよねあのボクシング野郎」

「……獄寺くん」

「十代目？」

「了平さん、先輩・年上。もっと敬意を持って接しようよ。ね？」

「は、はい」

「ん」

年上である了平に敬意を払えない極寺を微量の殺気混じりで注意するツナ。微量の殺気はカリスマに変わると学習済みだ。

「今年も組の勝敗を握るのはやはり棒倒しだ」

「ボータオシ？ ってなんですか十代目」

「地面に立てた棒をみんなまで支えて、相手の棒を倒した方が勝ちって言うのが一般的なルールだけど。並中では棒倒しの上に大将を据えて大将が地面に着いたら負けって言うルールなんだ」

「例年、組の代表を棒倒しの『総大将』にする習わしだ。つまりオレがやるべきだ。だがオレは辞退する!!!」

「!!! え、!!!?」

「オレは大将であるより、兵士として闘いたいんだー!!!」

「((単なるわがままで——!!!)?))」

「(もく、お兄ちゃん・・・!)」

「だが心配は要らん。オレより総大将に相応しい男を用意してある」

「え。笹川以上に総大将に相応しい男だつて?」

「一のA、沢田ツナだ!!!」

「いや、だから綱吉です・・・」

「な!?!」

「おおおっ」

「十代目のすごさを分かってんじやねーかボク・・・」

「獄寺くん」

「了平先輩はっ!」

「・・・何で俺・・・」

「賛成の者は手を上げてくれ! 過半数の挙手で決定とする」

「一年にや無理だろ」

「オレ反対」

「負けたくないもんねえ」

「つーか、冗談だろ?」

「笹川がやった方が良いだろ」

「ツナ? 何言ってるんだ?」

「わっ山本」

「手を上げんか!!!」

「((命令だー!!!)))」

「うちのクラスに反対の奴なんていねーよな」

「おい、おまえっ」

(((こえくつ)))

「獄寺君の意見に賛成—!!」

「サンセー——!!」

「この勢いならいずれ過半数だろう。決定!!! 棒倒し大将は沢田ツナだ!!」

(((この人メチャクチャだ——!!)))

(・・・ついでだ。全員潰すか。風歩くらいならできるだろうから・・・居合い払いもできるか?)

「すげーな、ツナ!」

「さすがっス」

「ビビったっス」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・ちやおっス」

「・・・・・・・・・・」

「こっち見ろツナ」

「・・・・・・・・・・」

「総大将ついたらボスだな。勝たねーと殺すぞ」

赤ちゃんの体で並中の制服をきたりボーンを徹底的に無視するツナに、リボーンは少しさみしさを感しながら構ってもらおうと頑張ったのだった。

「先輩達から白い目で見られるし・・・。総大将か・・・・・・・・、不幸だなあー」

「やれんのか?」

「ん? 何で?」

「無理だとか、駄目だなんてオメーが言わなかったからだろうが」

「・・・まあ、棒の上にただ乗ってるだけならいいんだよ。引きずり下ろすために殴る蹴るの暴行が行われるんだぜ? 重火器持ち出したいな・・・・・・・・」

「恐ろしいこと言い出すんじゃないねー」

ツナは何かを撃つ構えをしながら家に帰る。

——次の日。

ツナは家族みんなに見送られ、体育祭へとかり出された。百メートル走で三位くらいをとってツナは棒倒しに備えることにした。

だが、何の因果か獄寺と了平によってC組大将高田が倒された。そして。

『各代表の話し合いにより、今年の棒倒しはA組対B・C合同チームとします』

原作通りの流れとなった。

「B・C連合の総大将、誰にする?」

「サッカー部の坂田だろ?」

「レスリング部の川崎も強いぞ」

「僕がやるよ」

「」「ヒバリさん!!」

「あ、制服のままです」

「」「うわああっ」

「向こうの総大将とは、もう一度闘ってみたかったんだよね」

「それでは棒倒しを開始します。位置についてください!」

「あはは——。すっげー数の違い」

「ツナさんファイター!!」

「がんばって——っ」

『用意。開始!!』

開始と同時。B・C連合の人間が早々にツナのいる棒まで上ってくる。

「おう。もう来たの?」

「っしやあ!」

引つ張られ、揺らされ、ツナは落ちそうになるが何とか耐える。(とうるか、これってヒバリさんを直接叩きに行った方がいいんじゃない。。。じゃあそうしようか)

ツナはそう決めると、自分自身の跳躍力に死ぬ気の炎の推進力を加えて棒から大きく飛び立つ。

「!? 十代目!」

「ワオ。君の方から来てくれるなんてね」

「それがお望みでしょう? 雲雀さんは」

棒の上の狭い土台の上で踏ん張れる雲雀と、空中で彼のトンファーを捌くしか無いツナ。

だが、十数度弾きながらもそこに留まっている時点で実力の差は歴然だろう。

「余裕そうだね。君」

「まさか、落ちないように気を遣ってるんです。ギリギリですよ」

「ウソ。君笑ってるじゃん」

「あ、やっぱり分かっちゃいます?」

「良い性格してるよね、君って」

「あはは。雲雀さんにそう言われると褒められてる気はしないなあ」

「小動物・・・? 肉食動物・・・?」

「さあ? どっちでしょうね」

「自分ではどっちだと思ってるよ」

「オレは草食ですよ。でも、シマウマやヌーなんかとは違う。古代の、肉食動物にだって楯突いた草食恐竜ですね」

「へえ」

「自分からは手は出しませんが、降りかかる火の粉は払うつもりなので」

「それで、草食恐竜ね・・・」

「そろそろ終わりにしましょうよ。雲雀さん」

「嫌だよ」

「お断りします」

ツナの放った居合い払いで雲雀の体が空中に投げ出される。

「くっ!」

「あはっ。俺の勝ちだ」

雲雀が地面に落ち、A組の勝利が決まった。

だが。

「おいでよ草食恐竜。もしかしてもう闘えない?」

その挑発に乗ったツナは棒から降りてくる。

「もう棒とか関係ないですね。ただの余興です」

「いくよ」

トンファアの連撃を弾いてかわすツナ。雲雀は弾かれていることにムカついたので、弾かれないような位置へとトンファアを撃ち込むが、同様に弾かれる。

「トンファアって腕ごと動かさなきゃいけないから意外とかわしやすいよね。刀とかだと手首のスナップで斬る向き変えたりできるんだけど」

「咬み殺す」

「じゃあぶち殺す」

ちなみに、二人の鬨気に当てられたのか、周りでは乱闘が起こっていた。

「すごい出し物ですね」

「思い出に残る体育祭だな」

第十九話 隣町ボーイズ

並盛中学校の生徒が順番に襲われ、カウントダウンが進むころ。ツナは一人でほくそ笑んでいた。

(ケケケ。まさか本当にここまで計画通りにいくとはねえ)

ツナは先ほど学校でリボーンから聞いた内容を思い出していた。

「良いかツナ。今回の事はおそらく、イタリアで起きた集団脱獄が原因だ」

「集団脱獄?」

「ああ。二週間前に大罪を犯したマフィアばかりを収容している監獄で、脱獄事件が起きたんだ

脱獄犯は看守と他の囚人を皆殺しにしゃがった。その後、マフィアの情報網で脱獄の主犯はムクロという少年で、部下二人と日本に向かったという足取りがつかめたんだ。そして黒曜中に三人の帰国子女が転入し、あつという間に不良をしめたのが十日前の事だ。リーダーの名を六道骸」

「・・・脱獄犯を捕まえろって事?」

「そうだ。九代目からも直々に命令書が届いてるぞ」

「脱獄囚を捕獲って?」

「そうだ」

(骸達ちやーんとつかまって、ちゃんと脱獄してきたんだ。俺が指示した通りボンゴレに関係ある人間を並の中から探してくれてるし、千種に凄い驚かれたけど。とりあえず、骸からの連絡待ちかな)

と、そこでツナの携帯電話が鳴った。

「ん。どしたの?」

『どしたの? じゃありませんよマスター。マスターがボンゴレ十代目ってどういうことですか!』

「言ってなかったっけ? 俺門外顧問の息子で、ジョットの子孫なんだよ」

『・・・血統。ですか』

「そーそー。それで、俺の敵になってほしいんだよね」

『なっ！ 正気ですか!?!』

「これからの流れを説明させてくれる?」

『はい』

「まず――」

――次の日。

「リボンヌ。本当に行くの?」

「だから俺の名前はリボンだ」

「ごめんリボン。噛んじゃった」

「ワザとだろオメーの場合」

「かみまみた!」

「・・・ワザとじゃない?」

「さあ行こうリボン」

「まずはみんなと合流だな」

そして、ツナ達は集合場所にそろろう。

メンバーはツナ・獄寺・山本・ビアンキ・リボンだ。

「十代目! 似合ってます!」

「え? そう? マファイアっぽくしてみた」

黒のスーツに橙のシャツ。黒いネクタイを結び、気持ち顔を引き締めたその姿は裏の世界の人間だった。

「なんかそうしていると本物のマファイアみたいなのな」

「そう?」

そんなこんなで一行は黒曜センターに向かうことになった。

「・・・ねえ。本当に倒すの?」

「何言ってやがる駄目ツナ。今更ビビってんじや無いだろうな」

「いやーだって。マファイアの監獄から脱獄した人間だよ? それに他につかまってた人達を殺して・・・。勝てるのかなーって」

「弱気になってんじやねーぞ! まあ、ヤバいかもな」

「だろ? レオンがマユになる時って生徒にピンチが訪れるんだろ?

大丈夫かな・・・」

「やるだけやってみる」

「・・・分かったよ」

その後、山本が動植物園に落ちて犬と戦うと言うイベントがあったが、原作と同じ流れだったのでカット。

「あそこで飯にしましょう十代目！」

「あ、うん。俺もお腹すいたから・・・」(犬は大丈夫かなー・・・。ビアンキ容赦なかったから・・・)

ツナは一応仲間である犬の容態を気にしながらお昼ご飯の山本の寿司を頬張る。

(今の内に全部食べとこ)

「ツナ。緑黄色野虫のコールドスープ」

「虫ですか・・・できれば植物が良かったかな・・・。後、見た目・・・。例えば毒じゃなくても見た目が悪かったら誰も口に入れてくれないよ・・・」

「なるほど。勉強になるわ」

と、その時。ビアンキの持っていたスープが沸騰したように泡立ち爆発した。

「何このポイズンクッキング。タイマー爆薬？」

「私じゃ無いわ」

「ビアンキじゃないんだ・・・」

と、そこでこの現象の原因に気付いた獄寺がダイナマイトを投げる。派手な爆発音に砂煙。それが収まるとクラリネットを持った少女がその場に現れた。

「ダッサイ武器。こんな連中に柿ピーや犬は何を手こずったのかしら」

「アレは黒曜の制服・・・」

「ってことは」

「しかし敵は三人組だったはず」

「~~~~~ッ！」プルプル

「私だって、骸ちゃん(ツナくん)の命令じゃなきや、こんな格好しな

いわよ。だから・・・そこ、笑わない！」

リボーンがお昼寝しているのを良いことに、元々のM・Mを骸伝に知っているツナはお腹を抱えて笑っていた。ちなみに、その格好の指示を出したのは骸だが。骸はツナの命令に従っただけなので、M・Mとしては、アンタの指示だろーがと怒鳴ってやりたいのだ。

「あーうん。笑ってごめんさい。とても似合ってると思うよ」

「え、あ・・・。そう？」

「敵を口説いている場合？」

「ぐえっ」

ビアンキに後ろ頭をはたかれたツナは無様に地面に顔面着地する。

「っ。そうだったわね。私はあんた達をあの世に送って、バッグと洋服買い漁るだけ！」

ツナだけは、副音声で私のツナくんになにしてんのはよ阿婆擦れ。と聞こえた気がしたが、無視していたことを記述しておこう。

「・・・あーあ。マファイアの癖にさえない格好ね。そこの男はそれなりに自覚はあるみたいだけど。やっぱり男は金よね」

「聞き捨てならないわね・・・。男はね・・・金よりも、愛よ！」

と、M・Mの言葉に反対意見を述べたビアンキは、ポイズンクッキングを持って突っ込んでいく。

「そこまでよ！ ラストシヨートケーキ!!」

「キヤアアア!! ——なんて、言うと思っって？ 残念ながら、接近戦も得意なの!!」

中間当たりで分解されたクラリネットで殴り飛ばされる直前。ビアンキの仕掛けた攻撃に唯一気付いた獄寺が目を見開く。

「おいっー！」

その戦いに割り込もうとした山本を獄寺が止める。

「まで、山本・・・。もう・・・触れたんだ」

「!？」

獄寺の言葉に首を傾げる山本。そしてツナは、*「触れた」*という単語で思い出した。

「・・・脳味噌沸騰させてあげる」

ニヤ、と笑ったM・Mがクラリネットを口に含んだその時、クラリネットがポイズンクッキングへと変わる。

「あ……。触れたものをポイズンクッキングにする究極料理」

「そうっす。アネキが結婚式の時に習得した……。千紫毒万紅!!」センシドクバンゴウ

敵を倒して安堵したのも束の間、すぐさま次の敵が現れる。

現れた敵、バースは何も知らない京子達を人質に取るという、卑怯な手段でツナ達を追い詰めるも、リボンが手配していたシヤマルやランボ、イーピンのおかげで何とか危機を脱した。

「ははっ、命じてる本人は弱っちーのな!」

「ふん、卑怯ばかりで大したことねー野郎だぜ!」

山本と獄寺が始末を終え、と言ってもその辺にほかしたただけだが。ツナの元にやってくる。

「大丈夫ですか? 10代目」

「……。うん。まあね、もう誰もいないかな」

「いるわよ。隠れてないで出てきたら? そこにいるのはわかっているのよ」

ビアンキが何かに気付いたのか林の方へ声をかける。すると、木の影からフウ太が姿を現した。

「ま……。まっつて。僕だよ」

「フウ太!」

安堵の為に表情を緩めたツナ達だった。が、ツナが帰ろうと呼び掛けた時、フウ太はそれを断り骸についていくと言い出した。

「さよなら……」

決別の言葉を口にして走り去ってしまったフウ太。それに不審を抱いたツナはフウ太を追いかけて行く。

「10代目!!」

「ツナ!」

獄寺と山本が追おうとしたその時、巨大な鉄球が2人を襲う。

「!!?」

振り返った獄寺達の前にいたのは、写真で確認した三人のうちの人……。今回の事件の首謀者と思われる……。六道骸、その人だった。

第二十話 新アイテム

一方、フウ太を追っていたツナは森の中でフウ太を見失ってしまった。

「・・・フウ太！・・・まったく、どこ行っちゃったんだよ！」

明らかに様子がおかしかったフウ太。それに嫌な予感を覚えたツナはどうしても探し出し、フウ太と話をしなければいけないと思っていた。

なかなか見つからないことに焦りを覚え始めた頃、草むらから人影が出て来る。

「フウ太!?・・・何だ骸か・・・」

「マスター！」

ツナは楽しそうな笑みで骸に近づいていく。

「計画は順調そう?」

「え、ええ・・・。しかし、本当に良いのですか?」

「大丈夫大丈夫。全部上手く行ってるはずだから」

ちなみに。あの場にフウ太がいたのも、フウ太を探しにツナが一人で森に入るのも、森の中で骸と会うのも、全部ツナの書いた筋書き通りである。

「先に謝っておくね。復讐者の牢獄に入っちゃうことになるから・・・」

「ええ。構いません。それがマスターの計画を進めるためであるならば、影組一同でサポートさせてもらいます」

「大丈夫? その後のことも分かっている?」

「任せてください」

「なら、よし！」

ツナは微笑むとその場を後にした。

その後、演技で骸を悪い奴と全員に認識させたツナは、みんなで黒曜ヘルシーランドへ向かう。

(しかし、骸に確実に復讐者に捕まってもらうためとはいえ、ランチアさんのファミリィには悪いことをしたなあ・・・。ま、いいか)

楽観的に人の生死を捉えたツナは獄寺に千種を任せ、六道骸と対峙

していた。

「クフフ。六道輪廻という言葉をご存知ですか？ 僕の身体にはその全ての冥界を回った記憶が刻まれていましてね？ 六つの世界から、六つの戦闘スキルを授かったんです」

ギン！ と見開かれた右の紅い瞳の中に一の数字がうかびあがる。と同時に建物が音を立てて崩れ始める。

「ん？ んん？ 頭が痛…、幻覚かつ！ 確か第一の道は地獄道…」
「ほう。面白い見破り方をしますね。確かに幻術は脳に作用する。そこから見破るとは…」

「…」

リボンには恐らく言葉通り聞こえている。しかしツナには、いつも通り骸が自分をべた褒めしているようにしか聞こえない。

「…では、これはどうです？」

骸はそう言って瞳に三の数字をうかばせる。するとツナの上から毒蛇が降ってきた。

「幻覚？ …いや、本物！ 第三の道は…畜生道」

ツナはこの蛇たちをどうするか悩む。零地点突破を使っても良いが、それだとつまらない。

「さあ、生徒が危機を迎えましたよ？ …先生は攻撃しないんですか？」

「…掟だからな」

「クフフ、マフィアらしいお答えですね」

クツクツと笑う骸に突如何かが投げつけられ、骸はそれを咄嗟に振り払う。

「っ…トンファー？」

「10代目！ 伏せて下さい!!」

その声と共にツナの頭上でダイナマイトが爆発する。その爆風で蛇が吹き飛び、煙の向こうから声がかかる。

「遅く…になりましたー」

「…獄寺君。…雲雀さんも!」

そこにいたのは雲雀と雲雀に支えられて立っている獄寺だった。

「ふ、こういうことだ。．．俺の生徒はツナだけじゃねえ」

「ほう．．これはこれは外野がぞろぞろと。犬と千種はどうしました？」

「へっ、あいつらは外でノびてるぜ？　．．ま、俺がやったわけじゃないけどな」

獄寺の視線は雲雀の方を向いている。それだけで状況を把握したツナはホッと息をつく。

「よかった．．．」

「．．．借りは返したよ？」

雲雀が眩き、獄寺の身体を放り出す。

「のわっ!？」

(うわあ．．．。投げ捨てたよ、この人。慈悲ないなー)

こんな状況であるのに思わず呆れてしまったツナは、呆けたまま骸に殴りかかる雲雀を見つめる。

酷い怪我のせいでいつものキレはないが、骸を圧しているのは確かだ。その時骸の右目に一の数字がうかぶ。

現れたのは天井一面の桜。それを見上げて目を見開く雲雀に骸は得意げに言う。

「クフフ．．．さあ、もう一度跪いて戴きましようか？」

「．．．雲雀はシャマルのトライデント・モスキートでサクラクラ病にかかってやがったからな」

「あ、そっか。．．それで一度は負けて捕まってたんだ」

圧倒的に雲雀が不利な状況で二人が余裕なのは、雲雀のサクラクラ病への処方薬を獄寺が持っていたことを知っていたからだ。

だから、二人一緒に現れた時点で既に回復しているだろうことが知れて安堵したのだ。

そんな会話をしている間に雲雀のトンファーが骸を殴り飛ばす。沈黙する骸を一瞥した雲雀はそのままふらりと倒れ込んだ。

「．．．こんな重症でよくやるよ。雲雀さんマジすげー」

倒れた雲雀の傷の確認をしたツナが呆れた声で眩く。

「最後の方はほとんど無意識で戦ってやがった。．．一度負けたこと

が余程悔しかったんだろうな」

「雲雀さんって負けず嫌いそうだもんね。・・・で、リボーン。医療班は？」

「もうすぐ到着する予定だぞ」

「クッフッフッフ・・・その必要はありませんよ？　なぜなら生存者は誰もいなくなるからです!!」

「しぶてえやつだ。まだ動けるのか？」

復活した骸を睨み、リボーンは呟く。

ツナも身構えていつでも応戦できるようにしていたが、そんな彼らに笑みを見せ、骸は己のこめかみにその銃をあてた。

「・・・では、また後ほど・・・Arrivederci」

銃声が響き、骸はその場に倒れた。

「・・・できれば・・・生かして捕らえたかったんだがな」

リボーンのその言葉にツナは首をひねる。

「先生。特殊弾って死ぬ気弾だけなの？」

「？　どういう事だ？」

「いや、もしアレが死ぬ気弾だったら復活して面倒だなーって」

「・・・なるほどな。ツナ、何か感じねーか？」

「骸が増えた？」

「やつぱり。憑依弾は禁弾のはずだぞ。どこで手に入れやがった」

憑依弾。それはエストラネオファミリーが製造していた悪魔の武器。今は危険視されて廃棄されたハズのもの。

そしてほぼ同時に、ビアンキや獄寺、更には獄寺と雲雀に倒された犬や千種までもが骸に“乗っ取られて”ツナに襲い掛かる。

「ツナ！　レオンはもうマユなんだ。後はお前の言葉で羽化させろ！」

お前の気持ちを言え、それがボンゴレの答えだぞー」

「・・・だったたら、昔から決まってる俺はやるべき事がある。こんな所で負けてられない！」

ツナのその言葉で、レオンの変化が始まった。

「ついに羽化したな。あの時と一緒にだ。ディーノが“跳ね馬”になった時とな」

ツナ専用のニューアイテムを吐き出す準備段階のレオンは蛹のよ
うな状態になっている。

「・・・非常に邪魔ですね」

余裕を見せるリボンによからぬ気配を感じたのか、犬を乗っ取っ
た【骸】がつつこんで来てレオンを真つ二つにする。

「レオン！」

「大丈夫だ。レオンは形状記憶カメレオンだからな。・・・それよりも
上を見る、何か弾かれたみたいだぞ」

ひらりと落ちてくるものを見てリボンが笑みをうかべ、それを手
にしたツナはキョトンとする。

「これ・・・毛糸の手袋!? これで・・・どーやって・・・たた・・・
か・・・。あー、なるほどね」

「何か分かったのか？」

「まーね」

「最後まで面白かったですよ、君達は」

とりあえずで着けた手袋ごと、ツナはその攻撃を防ぐように手をか
ざした。

金属同士がぶつかるような、毛糸の手袋ではありえない音がする。

「攻撃を、弾かれたのか・・・？」

「いつてー・・・。あれ？ 痛くない？・・・何か入ってる。・・・
指輪？」

ツナが右手の手袋から取り出したのは綺麗な宝石がついた指輪
だった。

「何に使うのさ」

「さーな。とりあえず手袋と一緒に着けとけ」

「う、うん。あと・・・これ弾だよね？」

(特殊弾!?)

「そいつだな・・・。よこせツナ」

「撃たせるわけにはいきませんよ」

【骸】が三叉の剣を振りおろす。リボンはそれを避け、ツナから弾を
奪って銃に変化したレオンに装填する。

「仕方ない——ボンゴレの身体を無傷で手に入れるのは諦めました」
「ツナ!!」

獄寺を乗っ取った【骸】は己がダイナマイトを放り投げた後にリボンが銃を構えるのを見て、せせら笑う。

「間に合うものか!!」

派手な爆音と爆煙にリボンは目を眇める。

煙が晴れると同時に、そこには額に炎を灯したツナが膝をついてだが起き上がっていた。

「骸……。お前を倒さなきゃ……。死んでも死にきれねえ!」

第二十一話 Xグローブと大宇宙のリング

「…その頭部の鬪気^{オーラ}。なるほど特殊弾が命中していたのですね。…ですがランチアと戦っていた時とは違うようですが…」

「小言弾はツナの静かなる鬪志を引き出すんだ。死ぬ気弾とはまるで違う全く新しい力を秘めた弾だからな」

「ふ、僕には戦意を喪失しているようにしか見えませんがね」

そう言つて殴りかかつてくる犬を退け、千種の幻術を見切り、本当の居場所を探り当てるツナに、獄寺を乗っ取った【骸】は驚愕する。「どういうことだ。…先程よりも精度が上がっている？」

「死ぬ気弾は外側から強制的にツナのリミッターを外すのに対し、小言弾は内側から全身のリミッターを外す。ツナは今まで無意識の内に抑え込んでいたブラッド・オブ・ボンゴレがフルパワーで使えるんだぞ」

「なるほど。…だが、お忘れですか？ これはお仲間の身体だ。君は手をあげられるんですか？」

そう言つて【骸】は獄寺とビアンキの身体を操り、ツナをサンドバッグのように殴り始めた。

無抵抗のまま殴られているように見えるツナだったが、獄寺とビアンキを傷つけないように急所を避けて攻撃を受け流していたのであり、攻撃を躊躇っていたのではなかった。

ツナは一瞬の間を置いて2人を沈黙させ、そつと2人を横たえたとリボーンに視線を向ける。

「リボーン、処置を」

「急にいばんな」

口ではそう言いつつ素直に二人の容態を確かめるリボーンに、ツナは安心する。

(さて、どう化けた?)

超直感に死ぬ気の炎。リボーンは正体を知らないが死ぬ気の零地点突破まで。全て使えていたツナだったが、生憎人間単体で出せる出力には限界がある。肉体の損傷を気にしなければそこそこいけそう

だが。しかし、そんなことを気にせずとも使えるよう、武器は手に入れた。リボーンは己の生徒がどう成長したかを見極めようと、目を向ける。

「……」

一方ツナは、己の右手に填まる指輪に目を落とす。羽がついていたリドクロが着いていたりなど、パンク風のものではない。だが、大きなベージュ色の宝石の左右に六色の宝石が配置されたもの。オリジナルのボンゴレリングと似たような形をしているが、全て色が違う。ベージュ色の宝石の奥にはゼブルスperlらしきものが飾ってあった。

（……ベージュ？ 大空が青。ベージュ色……宇宙か！）

これは余談だが、宇宙の平均色はベージュだといわれ、「ゴズミツク・ラテ」と名付けられている。

「……いつまでそこで寝転んでるつもりだ骸」

「……」クフフ。格闘センスが格段に向上していることは認めましょう。だが、この程度で図に乗ってもらっては困りますね」

「……」

「僕が持つ六つある戦闘能力の内、まだ一つだけ発動していないことにお気づきですか？」

「第五の道。人間道だな」

「その通り、我々の生きるこの世界が人間道です。そして実は六つの冥界の内、もつとも醜く危険な世界だ。皮肉ではありません。故に僕はこの世界を嫌い、この能力を嫌う。できれば発動させたくなかった——……この人間道は最も醜く」

彼はそう言うとき己の右目に指を突っ込み血を流す。そして次にその目が見えた時にその数字は五となっていた。

「最も危険な能力ですからね」

「!!」

「どす黒い闘気だな」

「見えますか。闘気を放出しながら戦うタイプの戦士にとって、吹き出す闘気の強さがすなわち強さ！」

強大な力を手にした骸が襲いかかり、ツナは壁に叩きつけられる。

「クフフ、脆いですねえ。・・・ウォーミングアップのつもりだったのですが」

「で、なくっちゃな・・・・・・・・・・・・・・・・」
「なっ!」

「お前の力がこんなものなら、拍子抜けだぜ」(訳)もつと来いよ骸。お前の力はそんな物か?

「クフフフフ。まったく君は、楽しませてくれる」(訳)マスター。ここからが僕の本当の力ですよ。

「Xグローブは死ぬ気弾と同じ素材でできていて、死ぬ気の炎を灯すことができるんだぞ」

「まるで毛を逆立て体を大きく見せようとする猫ですね。だが、いくら闘気の見てくれを変えた所で無意味ですよ」

「死ぬ気の炎は闘気じゃない」
「ほう・・・・。面白いことを言う。ならば見せて・・・・、もらいましょうか!」

襲いかかる骸の三叉槍の柄を熱で折り曲げ、その顔に炎を浴びせるツナ。

「つつ!!!」

「死ぬ気の炎と闘気ではエネルギーの密度が違うからな。限られた人間の目に見えるだけの闘気と違って、死ぬ気の炎はそれ自体が破壊力をもった超圧縮エネルギーだ」

「そのグローブは焼きゴテというわけか・・・・」

「それだけじゃない」

そう言ったツナは骸に殴りかかる。が、骸が三叉槍を振り下ろした瞬間その姿が消えた。

「!? 消えた!?!」

目を見開いた骸の背後に現れたツナは、骸の顔めがけて拳を繰り出す。咄嗟にそれを三叉槍でガードした骸だったが、壁際まで吹き飛ばされる結果になった。

「何だ、今のは・・・・? 奴は一体、何をしたんだ・・・・?」

「ウォーミングアップはまだ終わらないのか?」

ツナのその質問に、骸は悔しそうに表情を歪める。が、次の瞬間、哄笑した。

「クフフ・・・クハハハ！ これ程までとは嬉しい誤算だ。これならば知略をめぐらせずともマフィア間の抗争を起すことができる！」

「それがお前の目的か」

「——おっと。これ以上話すつもりはないですよ。君は、僕の最強形態によって僕のものになる。見るがいい!!」

骸が影を放つ。

それを幻覚と見破ったツナは、そのすぐ後その幻覚に混じった石つぶてを死ぬ気の炎で振り払い、その噴射の力で高速スピードで移動し骸の背後に再び現れた。

ガードが遅れツナの拳をまともに顔で受けた骸は床に叩きつけられる。

「クフフフ。これがボンゴレ十代目。僕を倒した男か・・・殺せ。マフィアに捕まるくらいなら、死を選ぶ」

「・・・お前、俺のファミリーにならないか？」

「!?」

「!?・・・ツナ?」

「リボーン。確か負けた奴が勝った奴の下に着く、それがマフィアのルールだったよな」

「だがそいつはマフィアを追放されている。その掟は通じないぞ」
「・・・でも、殺したくないんだよなあ」

クルリと背を向けた瞬間、ガツと骸に腕を後ろ手に取られ身動きが取れなくなる。

「クフフ・・・その甘さが命取りです」

骸に腹部を蹴られ、その衝撃で壁へと吹き飛ばされる。

「飛ばされる先を見るがいい!!」

その言葉に後ろを向けば、先程千種の手から弾き飛ばした三叉槍の先端部が壁に刺さり、突き出ていた。

「空中では受け身が取れまい。・・・君は、そのくだらぬ優しさで己を失くすのです！」

「いけ、ツナ。今こそXグローブの真の力を見せてやれ」

リボーンのもその言葉に、ツナは手を壁の方向に向けると掌から炎を逆噴射した。

「なっ……、炎を逆噴射だど!?!」

「死ぬ気の炎の推進力を使った高速移動だ」

リボーンのもその言葉に、骸はようやくツナが突如背後に現れたカラクリを知った。

ツナは逆噴射を利用してそのまま骸に突っ込み、骸の顔面を鷲掴みにしてそのままステージまで突っ込んでいく。

その間に炎が骸の邪気を浄化し、そのままステージの下に叩きつけられ昏倒した。

第二十二話 終わりとそれから

「終わったな」

「……ああ」

「ご苦労様だぞ。ツナ」

「みんなのケガは？」

「心配ねー。ボンゴレの医療班が到着したらしいしな。ランチアの毒も持つて来た解毒剤で間に合ったそーだ」

「良かった……。それに、骸もなんとか死なせずに済んだしな」

「つたく甘い奴だな。お前は」

「近づくんじゃねえびよん!! マファイアが骸さんに触んな!!」

「あ、良かった。まだ動けるんだ」

犬と千種が床を這いツナ達に向かってくる。骸に身体を乗っ取られ利用されていたにも関わらず、その忠誠は変わっていないようだ。

その後、三人の生い立ちについて語られた。まあ、この場で彼らの生い立ちを知らないのはリボンだけなのだが。

「じゃあ口が利けるみたいだから聞いておく。君達、俺のファミリィになる気ない？」

「ツナ……」

「……」

「……」

「……骸さんに聞くびよん」

「そつか。じゃあ最後に一つ、ごめん。そしてありがとう」

「?」

「?……ツナ?」

呆然とツナを見ていた犬と千種だったが、突如現れた謎の人物達の放った鎖に捕らわれてしまう。

「うわっ。趣味悪っ。全身グルグル包帯だらけで黒ずくめとか……誰得だよ」

「ヴァインディチエ復讐者” マファイア界の掟の番人で、法で裁けない奴らを裁くだ」

「牢獄に突っ込んだりして？」

「ああ。その通りだぞ」

「殺されたりはしないの？」

「さあな」

「しないよな・・・？」

「しねえ方が良いけどな」

「だよね」

「俺達マフィアの世界は甘いもんじゃねえ。・・・あいつらは厳しい罰を受けることになる」

リボーンの言葉に頷き、ツナは三人が消えた扉を見つめていた。

「それでもさ。俺は——」

「ツナ・・・？」

「お待たせしました！ ケガ人は!？」

復讐者と入れ替わるようにしてやってきたボンゴレの医療班に、ツナほっと息をついた。仲間達が無事だと分かって安堵しているようだ。

「・・・ねえ。もしかしてランチアさんも？ 他の脱獄グループも？」

「ランチアは解毒後に復讐者に連れて行かれたらしい。後は知らね」

「そ、そんなあ・・・」

ツナは疲労が溜まってているのかその顔には疲れが見え始める。そして、眠るように倒れた。

「・・・相当疲れていたのか？ 寝ちまいやがった。でも、九代目の司令はクリアだぞ。良くやったな、ツナ。俺も家庭教師として・・・、ねむい・・・ぞ」

二人仲良く担架に乗せられ運ばれていったのだった。

・・・一ヶ月後。

球場にて、野球部秋の大会が開かれていた。

「「わ——っ!!」」

「ホームランです!!」

「流石山本。野球の事となるとピカイチだな・・・」

「それ以外は駄目っすけどね」

「勉強とか特にね。後、獄寺君」

「なんスカ！ 十代目？」

「何でダイナマイト握りしめてるのかな？」

「あ、いや！ これは……クセっス！ 何か握ってないと落ち着かないというか！」

「ならいいや。もしかしたら獄寺君が山本の試合に水を差そうとしてるんじゃないか、って勘ぐっちゃったよ」

(は、はは……)

そんな事を野球の試合から目を離してわいわいやっていた時だった。

「——ッ。ん……？ ……」(どいつだ?)

悪寒を感じたツナが心当たりを探してキョロキョロするが、当たりは見つからなかった。

「！ ……一人は寂しそーだな。またいつでも相手になつてやるぞ」

「また……いずれ……」

——十数日前。

珍しくリボーンの監視がない状態でツナは学校から帰っていた。もちろん近くに獄寺、山本の姿もない。

「何かがあるな」

超直感でも何でもなく、ツナはそう思った。

と、ツナの目の前で反対車線の歩道から道路に猫が飛び出した。その様子に彼は納得する。

猫が轢かれる。そう思った時、歩道から少女が猫を助けるために飛び出した。

(ゲッ)

ツナも釣られて飛び出し、自らの意思で死ぬ気になり少女と猫を抱え歩道まで飛んだ。

「……ふう」

「あ、あの」

「何やってんだ馬鹿！ 道路に飛び出すとか自殺志願者か!？」

「ね……猫が」

「猫がどーした!?! そんな事で死んだら元も子もねーだろっ?! 自分の命が大切じゃないのか!?!」

「でも」

「デモもストライキもねーんだよっ！ 馬鹿か!? 馬鹿なのかお前は!」

「ごめんなさい……」

「謝るなら最初からするなって話だろ!?! お前が謝るべきなのは誰だ。親か? 俺か? 違うだろ! 大切にできなかった自分自身に謝りやがれ!」

「うう……」

ツナの怒鳴り声にどんどん小さくなっていく少女。と、その時。

「……? 誰?」

「……? 何言ってるの、キミ」

疑問を感じたツナは、気配感知と精神感應を最大限に使って当りを探す。と、

「クフフフ。散歩はしてみるものですね」

「骸!？」

「おや、マスターも私が見えるのですか」

「いや、辛うじて声が聞こえる程度だけだ」

「……貴方は、この変な髪型の人と知り合い?」

「だ、誰が変な髪型ですかッ! マスターも何とか……笑ってる!？」

「い、嫌。だって……ククク。ごめっ……そ、そうだよ。骸と俺は主従関係。で? 骸、何か考えがあったんだろ?」

「ええ。彼女は適性がある」

「……ねえ、キミ名前は?」

「……風」

「よっし風! 俺はお前を誘拐だっ!」

ガシッ。と少女、風を小脇に抱えてツナはその場を立ち去った。

——場所は変わって、影組日本基地。

「よっ。お前等」

「「!」「!」」

「ツナ様!」

「お帰りなさいませ」

「この子の部屋を作ってやってくれ」

「? 誰ですか? この子」

「六道骸の端末になれる子だよ」

「有幻覚・・・」

「クフフ。全く、気絶した少女に僕を取り憑かせるなんて、相変わらずマスターのやる事は読めませんねえ」

「読まなくていいんだよ。読まれると面倒だからね」

上条はその後何故か風になつかれた。

「というか犬と千種は普通にそこにいるんだね」

「骸さんが逃がしてくれたんだびよん」

「犠牲になった・・・」

「でも、綱吉さんのおかげでまた会えたびよん」

「流石綱吉様」

相変わらず持ち上げてくるなあ・・・と、ツナは思ったそうだ。

リング争奪編

第二十三話 嵐の予感

ツナが晚ご飯の遅さにしびれを切らし、ダイニングに降りてくる。と、そこにはおびただしい数の料理があった。

「え？ 何これ、すげーごちそう……。しかもまだ作ってるし……」

「ツナ。これはどういう事？」

「ツナ兄が100点取ってきたとか？」

「そんな事じゃ母さんはここまでしないよ……。恐らく、これは……」

「ランランラー♪」

「母さん！」

「あら、つつ君♪」

「包丁危ないから！ どうしたんだよ。何か、態度変だよ？」

「あら、そうかしら……？ そーいえばツナにまだ言ってなかったわね。二年ぶりにお父さん帰ってくるって」

「え？ 父さんが帰ってくる？」(ヴァリアーがもう少しでくるのか……。こりや、凧の修行を早めなくちゃ……。あとランボの修行も。もう十分強いけど)

——翌日。

「へー。良かったじゃねーか。親父さん帰ってくるなんて」

「うん……。まあね……」

「十代目のお父様のご健在だとは……。帰ってこられた暁にはご挨拶に伺いますー」

「いやいや、いーよ！ オレが一番関わりたくない面倒事の原因だし……」

「ハハハ。何だよ面倒事って」

「おぼろげな記憶なんだけど、父さん。多分ボンゴレ関係の仕事をし
てると思う」

「!」

「ボンゴレって・・・」

「マフィアごっこじゃねーの?」

「・・・山本はそうだったね。もうそれでいいよ」

「マジですか?」

「恐らく、俺の記憶が正しければ。だよ、獄寺君」

その後、何故か中学生メンバーとちびっ子メンバーで街中に繰り出し遊ぶことになった。

「・・・まだかな」

「・・・? 何が? ツナ君」

「あ、いや。何でも」

「・・・でも良かった。私、ツナ君が黒曜から帰ってきた時ホツとしたんだ」

「はえ?」(フラグって回収しないと先進めないの?)

「もっと恐い感じになっちゃうかと思ったけど、ツナ君はいつものツナ君でなんかホツとしちゃった」

「あ、そ、そう?」(恐い感じって何だろなー?)

「・・・ねえ、ツナ君」

「ん?」

「何の音だろ?」

「爆発音?」(来た)

近くのビルが爆発し、ツナの元に一人の少年が飛来してきた。それを、ツナは冷静に対処し勢いを殺して地面に着地させた。

「ふう」

「す・・・すみませ・・・!!

「・・・二十一世紀におぬしって・・・」

「十代目ー!!」

「大丈夫か、ツナ!!」

「大丈夫、そんなに頼りなく見える? 俺」

「いえ、そんな事は・・・」

「うゝお、おい!! なんだあ? 外野がゾロゾロとお、邪魔するカス

はたたつ斬るぞお!!」

「ああ!？」

「……………」

「……………なんなのさ。一体」

「嵐の予感だな」

そう言った後、リボーンは京子やランボ達を冷静に避難させる。

「すみません沢田殿」

「ん？ その謝罪は何？ これからしこたま迷惑掛けること？ それとも、あのオモチャを俺から取り上げようとしてる？」

「…………へ？」

「うゝおゝおい。もう鬼ごっこは終わりにしようや」

「そうだな。おい、ロン毛。俺と遊べ」

金属製の小手を両手に着けたツナは笑う。

「貴様あ…………、このガキとはどーゆー関係だあ？ ゲロツちまわねーとお前を斬るぜ」

「出来るものならやってみな」

と、その時。上からダイナマイトが降ってきた。

「!! ——なんだあ？」

「その方に手を上げてみる。たたじやおかねえぞ」

「ま、そんなとこだ。相手になるぜ」

（あつれー？ 邪魔しないであつてば…………）

「てめーらもカンケーあんのか。うゝおゝおい、よくわかんねーがーつだけ確かなことを教えてやんぜ。オレにたてつくと、死ぬぞお」

「その言葉、そのまま返すぜ」

「ありや剣だろ？ オレから行くぜ」

「やめてください！ おぬし等の敵う相手ではありません!!」

「ん？」

「!」

「マジで？」

（なんでツナ嬉しそうなんだ…………）

「後悔してもおせえぞお」

「行くぜっ」

二人の剣が交わる。何度も何度も打ち合ううち、ロン毛が何かに気付いた。

「貴様の太刀筋。剣技を習得していないな」

「だったら何だよ」

「軽いぞお!!!」

その瞬間。剣から何かが飛び出し爆発を起こした。

「! 火薬!!!」

「山本!!」

直撃ではないにしろ、全身の所々に焦げ後を作って地面に倒れた。

「ヤロツ!!」

「おせえぞ」

「!？」

煙幕の中から現われたロン毛が獄寺のダイナマイトを纏めて切断する。そして、蹴り一発で沈んだ。

「ぐあっ」

「獄寺君!」

「うゝおゝ。おい。話にならねーぞお。こいつら。死んどけ」

ロン毛が振るう剣を、ツナは余裕の表情で防いでみせる。さらに続けて連撃が放たれるが、その全てを捌いてみせる。

「え? 何これ。つまんね。力業だし・・・よっわ」

「うゝおゝ。おい・・・。なんだとてめエ・・・」

「じゃあ今度はこっちの番♪」

ツナはそう言うと、即。攻撃に移る。瞬間的にロン毛に近づくと、数百にも近い「払い」を繰り出した。

「なっ」

「ここからお台場当たりまで飛ばしてあげようか?」

ツナはさらに

払いを強め体勢を崩していく。

「な・・・に・・・」

「リボンヌ。山本のバット、二本ない?」

余裕そうな笑みを崩さないツナは、どこにいるかも分からない相手にそう聞いた。すると、どこからともなくバットが飛んできた。

ツナはそれを拾い上げ、山本が持っている刀も拾う。

「山本、借りるよ……。ありがとりポーン」

ツナは勢いづけてバットを振り、刀の形にして構える。

「うゝお、おい!! 俺相手に剣術かあ? 悪いが二刀流の剣士なんて山ほど見てきたぜえ!」

「あ、そう?」

そしてツナは高速で回転しながらロン毛に突っ込んでいく。

「うゝお、おい。それじゃあ子どもに考えさせた必殺技のレベルだあ!」

「ふーん」

ロン毛が横薙ぎに払った剣をかわすように空中で回転を続けたまま、飛び越してかわす。

(?!)

(今のは……?! まるでUFO……!)

が、

「あ」

勢い余って近くのガラスに突っ込んだ。

「つて、窓に飛び込みやがった!?!」

「あ、あれも何かの技のうち……!!」

「いや、違えだろ」

「!?!」

(あの。良く分かんねえ空中機動に、「刀」という重さの遠心力を加えたのか。ぶつつけで大失敗したが)

ガラスの奥からツナが出てくる。

「おー、いってー。なかなかやるなチミイ」

「ただの自爆だろ」

(相変わらずこの技は難しいなあ。新しい体で出来るようになるまで一体どれほどかかるのやら……)

第二十四話 ハーフボンゴレリング

ツナは二本の刀をチンチンと鳴らしながら前に出る。

「さあ、カモーン」

「なんなんだあ貴様はあ？ なぜこいつのカタを持つ」

「誰のカタも持たねーよ？ 俺は面白い方に流れるだけだ」

子どものチャンバラのような斬る気が全くない剣術を繰り出すツナ。

「うおー！ー！ー！ー」

「うゝおゝ おい！ 幼稚すぎるぞお!!」

「その幼稚な剣術に対抗出来てないのはどこの誰かな？」

ツナはそう言うのと剣をその辺の地面に捨てる。

「手が疲れてきた。やっぱこっちの方がやりやすい」

そう言っつてツナが出した手には27と書かれた手袋がはめられている。そして自力で死ぬ気に変わった。

(・・・Xグローブ。V r. U R)

ツナのグローブは骸の時と違ってエンブレムがXから宝石に変わっていた。

「うゝおゝ おい。なんてこった……。死ぬ気の炎……。まさかお前。噂に聞いた日本の……。そうか……。お前と接触するため……。ますます貴様等、何を企んでんだあ!! 死んでも吐いてもらうぞお。オラア!!!」

「死んだら吐けねえだろ、馬鹿か!!」

ツナのストレートの拳でロン毛は遠くに飛んでいく。

「馬鹿だな。アイツは馬鹿だ」

「沢田殿。すみません、拙者はバジルと言います。親方様に頼まれて沢田殿にある物を届けに来たんです」

「は？ 俺に……。何を？」

「これです」

「指……。輪……。？」(大宇宙の指輪があるから要らないんだけどなあ)

「何かはリボンさんが知っています」

「リボンヌが？」

「これを持って逃げてください！」

「えー？ 逃げる必要ないじゃん」

「うゝおゝ おい。テメエ、このまま、逃がすと思ってるのかあ!!？」

「復活、早！」

スベルビ

「S・スクアーロ。相変わらずみたいだな……。子ども相手にムキになって恥ずかしくねーのか？」

その声が出た方をツナ達を見ると、ロマーリオさん達を連れてたディーノが立っていた。

「!？」

「ディーノさん！」

「！ 跳ね馬だと!？」

「その趣味の悪い遊びをやめねーって言うんなら。俺が相手になるぜ」

（日本のこのガキ、跳ね馬とのコネを持ってやがるのか……。こいつを相手するとなれば一筋縄じゃ行かねーな）「うゝおゝ おい、跳ね馬あ。ここでお前をこいつらもろともぶつ殺すのも悪くねえ。だが、同盟ファミリーとやり合ったとなると、上がうるせえからなあ。今日のところは大人しく……。帰るわきやねえぞお!!」

ツナは腕を掴まれスクアーロに持ち上げられる。

「いったいなー……。」

「うゝおゝ おい!! てめエ等、何しようとしてんだあ!？」

「んな事、知らねーよ。ただ、一つ言える事があるぜ」

「あゝ あ？」

「お前の負けが確定したって事がね」

スクアーロが消えた。周りの人間はそうとしか見えなかった。もしこの場で誰かがビデオを撮っていたら、何が起こったか分かっただろう。

ツナは片手と両足をフルに使って、居合い払い『奈惰嶺』を繰り出していた。

「……。なーんだ。足でも払える程度か」

「ツナ！ 大丈夫か？」

「ディーノさん。俺は大丈夫です。指輪はとられちゃいましたけど」
盗られた、というのはウソだ。払った時にロン毛の服の内ポケットに突っ込んでおいたツナだった。

「そうか。とりあえず廃業になった病院がある。そこでバジルの治療をしながら話を進めよう」

「はいはい。まーた面倒事か・・・」

「その割には顔が笑ってるぞ」

「楽しいからね。一方的な戦いほどつまらないものはないから」

「大丈夫か、ツナ！」

「いったい何なんすか？ 奴は？」

「あ、二人とも」

「お前等の戦闘レベルじゃ足手まといになるだけだ。とつとと帰って
良いぞ」

「！」

「まあ、一撃でやられちゃったしねえ・・・」

「!？」

「行くぞ」

リボーンに引つ張られて二人から離されるツナ。

「お前がトドメさしてどーする」

「リボーンだって分かってるでしょ？ あれだけ一方的にコテンパンにされて、なおかつ俺に足手まとい呼ばわりされたんだよ？ それこそ『死ぬ気』で強くなってくれるんじゃない？」

「お前、性格悪くなってきたな」

「誰かさんのおかげでね」

「・・・」

——病院。

「バジルはどーだ？ ロマーリオ」

「命に別状はねエ。傷は浅いぜ、ボス。よく鍛えられてるみてーだ」

「で・・・。一体全体何が起こってるんですか？ 厄介事なのは確かな

んでしようけど……」

「リングが動き出したんだ」

「リング？ 貞子が何かしてくるの？」

「映画の話じゃねえ。お前が奪われたヤツだ」

「？」

「正式名をハーフボンゴレリンクというんだ。本当は三年後までしか
るべき場所で保管されるはずだったボンゴレの家宝だ」

「ハーフ？ 二つ併せて一つのリングって事？」

「そうだぞ。長いリングの歴史上、この指輪のためにどれだけの血が
流れたか分かんねーって言う、いわく付きの代物だ。値はつけられ
ねーぞ」

「何それ、恐つ。なくてよかった」

胸をなで下ろすツナだったが、デイーノが申し訳なさそうに声をか
けてくる。

「それがなあ……、ツナ……」

「まさか……」

「ここにあるんだ」

「……誰だよ。そんなサイテーなことさせたヤツ」

「あー……。親方様ってヤツだ」

「親方様あ？ デイーノさん。それ誰？ 一発殴らないと気が済まな
い」

「そ、それは教えられないなあ」

目をそらすデイーノにツナはため息をつく。

とりあえず、と箱を開けたツナは眼を開く。

「あれ？ 真ん中の青いリングだけ……？」

「他のはお前の守護者ファミリに配られてるんだ」

「え、ええ……？」

ツナは顎に手を当てて何かを考えるようなそぶりをした後、

「リポーンがファミリって言ったのは……。獄寺君、山本、了平
さん、雲雀さん……ランボとか？」

「あと一人、足りねーな」

「誰だろう……。無理矢理にでも吐かせようか」

「誰から？」

「親方様とやらだよ。目星はついた」

「ちなみに誰だと？」

「父さん」

「！…………外れてたらとばっちりだぞ」

「小学校に上がる前のおぼろげな記憶の中に、女の子と出会ったパーティがある。その時ザンザス……だったっけ……っていう人に会って。その人がボンゴレって言うてた気がするんだよ」

「へ、へえ……」

「なーんでうちの父さんがボンゴレと関係があるのかなあ……って今思った。全部アイツのせいな気がしてきた。お礼も込めて踏んづけてやろう」

「ツナ……手加減はしてやれよ……？」

「いやいや……。止めるよ、リボン」

「嫌だぞ。俺だつて自分の身が一番カワイイからな」

世界最強の殺し屋にそんな事を言わせるなんて自分の弟子はどれだけなんだ。と、ディーノは尊敬と恐怖を同時に抱いた。

第二十五話 沢田家光

家に帰ったツナが見たのは、大量に干されたつなぎ。泥だらけの長靴、ツルハシとヘルメット。酔っ払った子ども達と・・・リビングで寝転がるダメ親父の姿だった。

「・・・・・・・・」

「ツナ？」

リボーンの心配そうな顔に、ニコリと微笑むツナ。良かった。とりボーンが安堵したのもつかの間。

ツナの姿がかき消え、無防備な家光の腹部に掌底を叩き込んだ。

「ぐぼおっ!!」

「やおおはよう父さん。俺としては今からつもり積もった鬱憤晴らしという名のH A ☆ N A ☆ S H I ☆ A ☆ I をしたいんだけど」

突如愛息子に叩き起こされ、なおかつそんな事を言われた家光は目を白黒させた。

「・・・・・・・・ツナ？」

「ああ、安心して。母さんは父さんが食べ尽くした料理の追加を買いにいってるから。うん、今なら全部話せるからゲロツちやおうよ。父さんの仕事とか、俺がどんなことに巻き込まれるのかとか、二年間イタリアで何してたのか。とかをね？ スツキリすると思うよ？ 母さんには内緒だからねー」

「っ、っ、っ、っ、っ、っ、ツナ!？」

「しつかりしなよ父さん。俺の名前に、〃っ〃は十個も要らないし、小さい〃っ〃なんかもつと要らないから。で、結局アンタ、イタリアで二年間何してたの。やっぱり父さんの仕事ってボンゴレ^マ^フイ^ア関連？ ま、それが打倒だよ。バジル君のいう〃親方様〃ってのも父さん？ 囲役をさせるなんて上司として大丈夫？ しっかりしてよ？ 何か知らないけど聞いた限りじゃボンゴレピンチじゃん。ダメダメだなあ。俺よりダメなんじゃないの？ (笑)」

「——ッ?! リボオオオオオオオオオオオッ!!! お前、俺の愛する息子に要らんこと教え込みやがったなああああッ!!!」

「つるせえぞ家光！俺じゃねえ！元々だ！・・・つて聞こえてねえみたいだな」

怒りと悲しみと憎しみと、色んなものが混じり合った叫び声をあげた家光は、凄まじい勢いで繰り出されたリボーンの跳び蹴りによって、地に沈められた。

そんな家光の様子を見てツナはため息をついた。

「ちよつとりボーン。確かにO☆HA☆NA☆SHIには肉体言語もそういうやり方あるけど手加減してよ。守護者の情報とか、父さんのこととか、色々聞きたかったのに」

「俺がこうしてなくても、どちらにしろ家光は暫く再起不能だったぞ？・・・というか、自分で探せ。こんなのに頼らなくてもツナならできんだろ」

「・・・意図的な情報封鎖だよ、全く・・・。情報を集めるのも楽しやないんだよ?」

「できんじゃねエか」

「じゃあちよつと部屋に戻ってる・・・」

面倒だなあ。と言いながら階段を上っていくツナを見届けてから、リボーンは家の床に伏している家光を見る。

「・・・いつまでそうしてるつもりだ。家光」

「・・・友よ。・・・俺あ、暫く立ち直れない」

「慰めの言葉はかけてやんねーからな」

リボーンは床に伏したままそういう家光に冷たい言葉を言っており、ビングの奥に消えていった。

——次の日。

朝四時。

「ツナ——!!!」

「あ?」

「朝飯取りに行かねーか!？」

「父さんの証言なら取っても良いけど」

「失礼しましたッ!」

釣り竿と網を持って入ってきた家光は、ツナの言葉にそのままUターンして消えていった。

(・・・? 何だったの?)

ツナはとりあえず寝なおし、七時ぐらいに普通に起きる。が、起きてそうそう家光がランボに酒を飲ませようとしたため、慌てて止める羽目になる。

「うおっすツナ。で、どーなんだ、どーなんだ? 学校は」

「え?」

「さんすうだっけ? あれ笑っちゃうだろ!」

「そりや中学生だからね・・・。流石に小学生の問題で唸ってられないよ・・・」

「そつかそつか。父さん、今回の滞在中にさツナに父さんの色んな経験談を聞かせようと、色々メモってきたんだぞ」

「ん? ついに吐く気になったんだ。いいよ、聞いたげる」

「——っと思っただけど読めねえわ! 俺の字汚すぎっ!!」

ツナはころころ行動を変える家光に首を傾げる。と、そこで。

「おお? なんだ、ツナ。色気づいてんな。それ指輪だろ?」

「ん? ああ、ウラヌスリング?」

ツナは自分の左手の中指に填まるそのリングに目を落とす。

と、同時。自分の首にかけられたボンゴリングに気付いた。

(あつれー!! 机の上にとりあえずで放置してたんだけどなあー?)

ツナは何度か頭をひねった後、朝食を取り学校へと向かった。

その途中でバジルの様子を見に病院によった。

「失礼しまーす」

「おっす、ツナ」

「おはようございます! 10代目!」

「獄寺君に・・・山本・・・? 何してんの」

「いや、妙なことがあってよ」

「そーなんスよ」

「?」

「ポストにこんなもんが入っててよ」

「もしかしたら昨日の奴がらみかと思ひまして。跳ね馬に、こここの場所は聞いてたんで」

「あ、ハーフボンゴレリング」

「知ってるのか？」

「やっぱ十代目も持つてるんですね！」

「あー……。その指輪はさ。ハーフボンゴレリングって言つて……。詳しくは知らないけどボンゴレファミリーに配られるものらしい……」

「じゃあ詳しく説明してやるぞ！」

「リボン！……ディーノさんも！」

「ボンゴレリングは全部で七つある。そして、七人のファミリーが持つて始めて意味を持つ。ツナ以外の六つのリングは——

——次期ボンゴレボス沢田綱吉を、守護するに相応しい六名に届けられたぞ」

第二十六話 それぞれの家庭教師

「ボンゴレリングは初代ボンゴレファミリーの中核だった七人が、ボンゴレファミリーである証として後世に残したものだ。そしてファミリーは代々必ず七人の中心メンバーが七つのリングを受け継ぐ掟なんだ」

「へー」

「十代目!! ありがたき幸せっす!! 身の締まるおもいつす」

(めつき喜んでるし・・・)

「獄寺のリングは『嵐のリング』、山本のは『雨のリング』だな」

「何それ、なんかカンケーあるの?」

「あるぞ。初代ボンゴレメンバーは個性豊かなメンバーでな。その特徴がリングにも刻まれているんだ。」

初代ボスは全てに染まりつつ全てを飲み込み包容する。大空のようだったと言われている。ゆえにリングは「大空のリング」だ。

そして守護者となる部下達は、大空を染め上げる天候になぞらえられたんだ。

荒々しく吹き荒れる疾風

「嵐のリング」

すべてを洗い流す恵みの村雨

「雨のリング」

何ものにもとらわれず我が道を行く浮き雲

「雲のリング」

激しい一撃を秘めた雷電

「雷のリング」

実態のつかめぬ幻影

「霧のリング」

明るく大空を照らす日輪

「晴のリング」

つつつても、お前達の持つてるリングだけじゃまだ・・・

「本調子じゃないんだろ? ハーフボンゴレリングって紹介された時点で分かっているよ」

「・・・」

「いって! 蹴ることないだろ!?!」

「あの・・・、わりーんだけどさ……。オレは野球やるから指輪はつけねーなー。話しよくわかんねーし・・・」

「まあそれ持ってたら昨日のロン毛がまた狙ってくるしね・・・」

「!!」

「遅くて十日後に・・・」

「アイツ・・・来んのか・・・。十日・・・」

「ん？ どーしたの二人とも」

「これ、オレんだよな。やっぱもらってくわ。負けたまんまじゃいらねー質みてーだな。オレ」

「オレも十日でこのリングに恥じないよう生まれ変わって見せます!!」

次は奴をぶっ飛ばします!」

「あ、うん。ファイター・・・」

二人を見送ったツナはとりあえずバジルのお見舞いに行こうとした。が、

「ちなみにもうすぐ「晴のリング」を持つ奴が来るぞ」

「晴・・・?」

「よしっと」

(何だっけその恰好・・・ぱお「パオパオ老師!!」・・・ん?)

「オレを鍛え直してくれるというのはまことか!!?」

「あ、やっぱり了平さんか・・・。確かにこれ以上ない晴だけど。どっ

ピカーンだけどき・・・」

「おっ、沢田。おはよう!!」

「おはようございます了平さん。それで・・・そのリングのこと、分かっていますか?」

「敵を迎え撃つのだろ!? 相当緊迫しているらしいな!! 昨日の出来

事十日後のこと、指輪の話も聞いたぞ・・・」

「え」

「全部忘れたがな!!」

「たちまち意味ね——!! ...とりあえずオレからもう一度簡単に説明します」

「お、頼む!」

ツナは、これでもかというほどかみ砕いて現状の説明をした。

「では、このリングは沢田が跡を継ぐ、ボンゴレというマフィアの証なんだな?」

「はい。が、どうやら今着けているそれだけでは意味がないようにして。俺の前任のボンゴレ九代目と、門外顧問が別々の人間を推薦したため、それを奪い合う形になっています」

「モモンガ・・・顧問？」

「門外顧問です。モモンガ顧問ってどんな顧問ですか」

「むう・・・。極限に理解不能だが、これだけはわかるぞ！ 要するに俺達はこの戦いに勝って、このリングを守り抜いた上で、相手のリングを取り上げれば良いんだな!？」

「おーつと、極限に短縮、簡略化した説明をありがとうございます。要するに・・・でも、まあ。今はそれを理解して頂ければ充分です」

「・・・で、このリングだがそれぞれ種類が違うのか？・・・お前がつけているのは別物のようだが」

了平がツナが着けているリングを見つめ、訊ねてきたのでツナは頷く。

「そのハーフボンゴレリングは晴の守護者のリングです。確か晴は、*“明るく大空を照らす日輪”* ファミリーを襲う逆境を自らの肉体で砕き、明るく照らす日輪となること・・・それが役割です」

だよね。と小声でリボーンにツナが確認すると頷きが返ってきた。

「ふむ。それで先程俺を晴だといったのだな！」

「はい。了平さんの明るさは皆を太陽のように、明るく照らしてください。・・・だから、晴の守護者には貴方が相応しいと思うんですが・・・」

「・・・そのかけられた期待に、是非とも応えないといかん」

「お任せしても良いですか？」

「極限任せろ!!」

（あーっもう。ホントまぶしいよ！）

「そうだ。パオパオ老師、今日は俺のために幼馴染みを呼んでいただいたとか」

「幼馴染み・・・？」

「腐れ縁だぞ」

リボーンがそう言うと、おしやぶりが光り出す。

（あ、もしかして。コロネロ？）

「久しぶりだな。コラ!!」

「あ、やっぱり?」

「元気そうだな、コラ」

「その蹴りも相変わらずだね♪」

ツナは楽しそうにコロネロの蹴りを小手で防いでみせる。

「あ……。俺ちよつと学校に出向いてくるよ」

「ん? まあ行つてこい」

——学校。

応接室。

軽くノックをすると、中から単調な返事が返ってくる。

「誰?」

「沢田です」

「……。入って良いよ」

「失礼します」

「一人?」

「わざわざ雲雀さんの前で群れるとでも?」

「まあ、妥当な判断だろうね。……もしかして君が尋ねてきたのってこれが理由?」

そう言つて、雲雀が掌をツナに見せてくる。案の定というか、そこにはハーフボンゴレリングが載せてあつて、ツナは溜息をついた。

「その指輪はどこで?」

「この机の上に置いてあつたよ」

「なんつーテキトーな……。」

「誰の仕業か知ってるの?」

「不法侵入とかで咬み殺そうとか思ってるんなら、やめてください……お願いしますね。で、見せてもらつても?」

雲雀の許可をもらいツナはリングの刻印を確認する。

「これは……。雲? 雲雀さんの性格も考えたらこれが適当な役割だろうなあ……。」

「? 何の話だい?」

「えーつとですね・・・」

ツナは一通りボンゴリンググについて説明する。

「・・・それで、その雲のリングは『何ものにもとらわれず我が道をいく浮雲』。何ものにもとらわれることなく、独自の立場からファミリーを守護する孤高の浮雲となること。というのが役割なんですよ」「ふうん・・・つまり、君達とは群れなくて良いけど。その守護者にはなってもらっていうこと?」

「あ、イヤなら別にそう言ってくれていいんですよ。他の人を探しますから」

「何言ってるの? さっき君が言ったんじゃない。これは僕の役割だ。って」

「あれ、聞いてたんですか」

「強い相手と戦えるんですしよ? なら、やるよ。・・・弱い相手ばかりを噛み殺していてもつまらないだろ?」

「ええ。せめて自分と同列か、さらにその上と戦ってみたいですよね」

「・・・君」

「はい?」

「君となら、群れても楽しそうだね」

誰も見たことないであろう優しい微笑みでそう言われたツナは、一瞬でテンパリそして落ち着いた。

「え? 何ですかそれ。俺を『強いヤツをおびき寄せるホイホイ』みたいに思ってます!?!」

「思ってるわけじゃないじゃん」

「じゃあ何で群れても楽しそうとか、雲雀さんが言うんですか・・・」
「純粹にそう思ったからだけど」

「・・・まあ。嬉しいから良しとしましょう」

ツナは失礼しますと言って応接室をでる。家庭教師の旨も伝えて。(山本は恐らくお父さん。雲雀さんはディーノさんかな? 了平さんはコロネロ。獄寺君は・・・? ま、いいか!)

第二十七話 レッスン開始!

「さて、ツナ」

「ん? 何?」

「お前も俺が鍛えてやろうか?」

「うーん。じゃあ一週間ほどかけて体のエンジンかけていこうか!」

「・・・..は?」

「死ぬ気弾撃って良いよ。リミッター外してどんどん行かないと体が温まらないからね!」

「そんな気楽に死ぬ気弾撃たれるヤツ俺は初めて見たぞ」

そんな事を言いながらリボーンは躊躇無く銃を撃つ。

復活したツナはズボンとシャツはちやんと着ていた。

「ふっかーっ!! 死ぬ気で鍛える!!」

「死ぬ気でやれよ。もし後継者争いに敗れたら、お前だけじゃない。お前の仲間も皆殺しにされちまうんだからな」

「・・・その時は、ボンゴレ壊滅させてでも止めるさ」

「できそうで怖えーぞ」

*

「・・・ん? ど(ん)か(ん)!!」

気がつくのとツナは崖の上にあった。

「何ここたつか!」

「早くも第一段階突破か。しかしホント基礎体力だけはあるな」

「舐めんなよりボーン。俺はそんなじよそこの人間とは違うんだから。神ツナだぜ?」

「いつペン死んでこい」

「鉛球を撃つなし!!」

「死ね」

「ストレート?! そんなに神ツナが不満ですかあ!?!」

暫く、というか一日リボーンとお遊びで時間を費やした。

ちなみに、帰ってきてすぐに家光は布団で眠っていた。

——次の日。

「さて、ツナは基礎体力が十分って事は証明されたからな」

「確認のためだけに、四回もクライミングさせられたからね・・・」

「つーことで次は第二段階だ」

「ほぼワンツーステップで第一段階突破なんだけど・・・。実感わかないなあ」

「沢田殿!! 順調に第二段階とは、流石ですね!」

「バジル君・・・。体は大丈夫なの?」

「ええ。ロマーリオ殿と親方様の薬草のおかげでかなり良くなりました」

「で、なんでここに?」

「沢田殿の修行のお手伝いに来ました」

「てつ・・・だい?」

「第二段階はスパーリングだぞ。バジルをダウンさせたらクリアだからな」

「では始めましょう」

「なんか勝手に進んでいく・・・」

ツナは思わず頭を抱えた。その横でバジルは飴玉のようなものを飲み込み死ぬ気モードへと移行する。

「手合わせ願います」

「死ぬ気モードなの・・・?」

「バジルもガンガン攻撃して言いからな」

「はい」

「と、とりあえずルール作ろう! ルール!」

「じゃあ俺が作ってやる。」

一、回避可能な攻撃はしっかりと回避しろ。

二、ふざけずにマジメにやれ

三、バジルに気を遣うな

四、バジルが戦闘不能になるまで続けろ」

「・・・え。マジでそのルールでやるの？」

「つたりめーだ。俺はお前の本気がみてーんだぞ」

「沢田殿！ 行きますよ」

「いいよ。いつでもどうぞ」

ツナのその言葉を開始の合図に、バジルが突っ込む。勢い良く拳を振るうが、ツナは軽くかわしてしまう。それを見たバジルはさらに連続攻撃をと移行するが、ツナは防ぐことなくすべてをかわしてしまう。

続けて放たれた叩き付けの攻撃を、後ろに跳ぶことで回避するツナ。バジルも攻撃の度に死ぬ気になり、攻撃力と速度を上げているがツナには届かない。

地面をこするような足払いを繰り返す。が、少し後ろに下がりがわされる。

追撃で飛びかかるような拳を繰り返した。が、体をひねることかわされた。

勢いそのままに体をひねり裏拳を放つ。が、体を反らし避けられた。

そのまま一回転をし、もう片方の手で上から下へ叩き付けるような拳を打つ。が、後ろに高く跳んでかわされる。

空中では身動きが取れないと思い、地面に転がる石を大量に散弾銃の如く投げつける。が、空気を蹴り飛ばし避けられた。

「あぶねー。服がボロボロになる所だった・・・」

手合わせ、という名目だったのにバジルもだんだん本気になってきたのか、速度を上げて突っ込んでくる。それをかわし続けるツナ。崖を殴っていたバジルがツナがいらないことに気付き辺りを見渡すと、地面をタタタ・・・と走っていた。

勢い良く突きを放ったバジルだったが、彼の目の前にはツナはおらず。振り返ろうとすると、指で頬を突かれた。

「よし、俺の勝——」

その瞬間振るわれた拳をツナはかわす。

「沢田殿・・・。この戦いのルールを忘れたんですか？」

「でも気になるな。あのツナが、死ぬ気の状態であの拳を振るったらどうなるのか」

「世界が消えるんじゃないの・・・？」

「ありえねー話じゃねーから怖えな」

ツナは気付いていなかった。手合わせを楽しんでいたから。

第二十八話 邂逅

十日後まで来ないと言っていたヴァリアーが来ていた。ちなみに、ツナは死ぬ気の零地点突破はリボーンの満足する程度には習得出来ている。

「さーて。ランボはどこかなあ〜」

亜音速で並盛を駆けるツナ。これで死ぬ気の炎を使ってもいなければ、死ぬ気ですらないという。

「お、良かった」

ツナがランボ達を見つけて近づくと、丁度了平、山本、獄寺の順に敵を倒して登場した。

「あつはっはー」（チツ。愛気の技を久しぶりに使いたかったのに。多人数技とか使ってないんだよなあ久しく）

「十代目！」

「しかし思ったより骨のない連中だな」

「部下の部下みたいなもんだからね」

「！ 来るぞ」

闇から男が現われる。

「…………… お前達がやったのか」

「！！！！」

「雷のリングを持つ俺の相手は、パーマのガキだな」

「！」

「邪魔立てすれば皆消す」

「！！！！」

「待てエ、レヴィ」

止めに入ったのはヴァリアー仲間。彼らはレヴィにこう言った。

「一人で狩っちゃダメよ」

「他のリングの守護者もそこにいるみたいなんだ」

「うゝお、おい!!! よくもだましてくれたなあ、カスども」

「あ、よく無事だったね」

「！」

「あんにやろう」

「雨のリングを持つのはどいつだあ？」

「オレだ」

「なんだあテメーか。三秒だ三秒でおろしてやる」

ピリピリした空気の中、ツナは眠そうに目をこすっていた。

「のけ」

「でたな……。まさかまたヤツを見る日が来るとはなXANXUS」

「!!!!」

XANXUSは殺気を霧散させ、全員の行動を封じる。

「沢田綱吉……」

「なあに？」

「まさかボス……アレを!？」

「オレ達まで巻き込む気か!？」

「ヤベーぞ！（ツナ以外）逃げろ！」

「死ね」

「お前が死ね♪」

変声期が来てない声で放たれたその声は、XANXUSの殺気を一回りも二回りも上回り、その場を支配する。敵味方含めて誰一人動けなくなった。

ツナの子どもらしい笑顔では想像出来ない圧力の殺気に、その場の全員は重力すら感じていた。

そのまま。笑顔のままツナは拳を握る。死ぬ気の炎も何も纏っていないただの拳。だが。

この場にいたりボーンそして駆けつけた二人はその威力を、恐ろしさを知っている。

飛び出して拳を振るおうとしたツナの目の前にツルハシが刺さった。それでも拳の勢いを完璧には殺せず、人が生涯聞くことのない空間が割れるような異質な音が響き、空気の塊が可視化して天に昇っていった。

「なんだありや……」

「アイツ、大空だろ……。なんだよこの威力……」

「……ツナ。そこまでにしておけ」

「あ、アイツは……」

「ここからはオレが取り仕切らせてもらう」

「なーに格好つけてんの？ 邪魔しないでよ父さん」

「なっ、十代目のお父様!!」

「家光……!」

「て……てめー、何しに」

「XANXUS、お前の部下は門外顧問であるこの俺に剣を向けるのか。……それと、命の恩人に礼くらいは言っておけな」

「ハア？ 命の恩人だあ？」

「お前はツナの拳を受けて生きていられたのか？ 言っておくが、ツナは拳圧だけで山一つ吹き飛ばしたからな」

「何それ……。晴の守護者より強いんじゃないの……?」

「流星です十代目!」

「獄寺君。いつもの調子に戻るのが早いよ」

「今更、門外顧問の出番でもねーだろうがよお!! 家光ツ!!」

「いいや、ここからは俺達門外顧問が仕切らせて貰うぜ」

「ねえねえ。面倒だから全員ぶっ飛ばしていい？ それか暇つぶしにヴァリアーの下っ端数十人貸して」

「ツナ。落ち着け、黙ってる」

リボーンの忠告を無視してツナは突っ走る。

「あ、じゃあこうしよう! 同じリングを持つ守護者同士二対一のがチバトル!」

「はっ、良いだろう。一対一で敵うのか?」

「全部取られても取り返せる自信はあるよ?」

「なら、同じリングを持つ者同士で、正々堂々ガチンコバトルだ!」

「お待ちください!」

現れたのは、顔の上部分を覆面で隠した同じような容姿をした女性二人。

「ここからは、我々チエルベツ口機関が仕切らせて頂きます」

「ここに、九代目の死炎印もあります。．．．異存はありませんね?」
「．．．待て、俺はお前達の組織のことは知らないぞ」

「我々は九代目直属の機関です。沢田家光氏、貴方の力の及ぶところではありません」

チエルベツロ達はXANXUSに視線を向け、XANXUSが何も言わないことを確認すると、無表情ながら満足そうに頷いた。

「ご納得頂きありがとうございます。．．．それでは、明日の夜並盛中にてリング争奪戦の第1戦目を行います。対戦カードはその際に発表致します」

チエルベツロ達がそう宣言するのと同時に、ヴァリアーの幹部達は光に包まれ、その場を去った。

「．．．．．おやすみ」

「寝るな! 獄寺、山本、了平、お前らは修行を続けろ。まだ、完璧じゃねー奴もいるだろ。ギリギリまでやれ。じゃねーと．．．死ぬぞ」

それは脅しではない。あちらは『ヴァリアー・クオリティー』なんて呼び方がつく程一流の暗殺者だ。

「争奪戦となりや奴らも本気でくる。．．．覚悟してかかれよ」

「寝て良い?」

「お前はもちっと緊張感を持ちやがれ!」

第二十九話 守護者対決 晴と雷

そして、リング争奪戦が始まった

第1戦目は、ボクシングVSMエタイと格闘家対決となった晴の守護者戦。

ヴァリアーの先鋒として現れたルツスーリアに有利かと思われた戦いだっただが、京子達の乱入により力を得た了平の伝導率100%の「マキシマムキヤノン極限太陽」により、左足に埋め込まれた「メタルニー」を砕かれてしまった。

「私はまだ闘えるわ!! . . . さあ! 早くやるわよ!!」

余裕なく叫ぶルツスーリアをゴーラ・モスカの指から放たれた弾が容赦なく打ち抜き、ルツスーリアはその場に倒れた。

「. . . なっ!」

驚愕する獄寺達だが、それがヴァリアーの最強たる所以であるとりボーンに言われ、沈黙した。

そして、晴の守護者戦はルツスーリアの戦闘不能により了平の勝利となり、一時はコロネロによって校外に連れていかれた京子達が戻ってくる。

と、言っても気付いたのはツナだけだったが。

「どうしたの京子ちゃん?」

「っ、ツナ君。ホントのこと教えて? お兄ちゃん何をしてるの?」

「. . . 本当に、危ないことじゃないの?」

「えーっと。見ての通り異種格闘技戦で. . .」

「異種格闘技戦?」

「そうそう。了平さんはボクシングがとても強いよね。それを生かした試合をしてたんだよ。ただちよつと向こうの人が厳しいって言うか容赦がない人だったみたいだけど. . . アハハ」

何とかそれでごまかせたツナだった。

——翌日の夜。

ランボは善戦していた。ツナが内緒で鍛え上げたその実力はまだ

まだ未熟なものの、翻弄し鋭い一撃を入れることは可能となっていた。

「おい、アレってツナの技じゃねーか」

「うん、そうだね。教えたのは俺だけだ」

「ランボの家庭教師はツナだったんだな」

「ランボの技にレヴィはやられていく。」

「くっ……。こんなガキに！」

「ランボさんサイキョー！」

「あつはっはー。やれーランボー」

ツナは間の抜けた声で応援する。鍛えたのは自分だが、まさかここまで行くとは思ってもよらず、できれば自分が介入して失格するような状況になってほしいというのがツナの本音だったりする。

そして、結果はランボの圧勝。と思われた所で、雷がランボの体にスタジアムを通して浴びせられた。

「あー」

「電撃皮膚のおかげでダメージは少ないとは言え、ヤバいな……」

リボーンのその言葉通り、ランボは十年バズーカを使って未来のランボと入れ替わる。だが、愛気の技を使えると言っても、準備の時間を与えてしまっていた。レヴィの電撃で再度十年バズーカを使ったランボは二十年ごと入れ替わるが、時間切れで元の子牛に戻ってしまった。

「……あ、アイツ」

「……ツナ？」

リボーンはツナのただならぬ気配をただ一人感じ取った。

「ランボを蹴りやがった。あんな幼い子を……。足蹴にしやがった……。」

「おい、ツナ」

「ぶち殺す」

「待てっ！」

ツナは一瞬で死ぬ気モードになるとサーキットの一番外側の鉄線を「焼きゴテ」と称されたXグローブで掴んで熱伝導でステージを

壊して見せた。

「目の前で大事な仲間を失ったら、死んでも死にきれねえ」

周りでツナの変化に驚くものが大多数だったが、ツナはそんな事は気にせず言葉紡ぐ。

「いくら大事だつて言われても、ボンゴレリングとか、次期ボスの座とか、そんな道ばたに吐き捨てられたガムと同じくらいくだらないもののために俺は戦わない」

「！」

「だが、俺の友人が・・・仲間が傷つくのだけは許さねえ！」

「ほざくな」

ツナのほぼ背後から攻撃が飛んでくるが、ツナは死ぬ気でもないまま軽く左手を降るつて攻撃をかき消した。

「・・・やあXANNXUS。重役出勤かな？ 遅刻はよくないと思うなあ？」

軽口を叩きながらもツナの目は鋭くXANNXUSを射貫いている。

「なんだ、その目は・・・まさかお前、本気でオレを倒して後継者になれると思ってるのか？」

「後継者になんかなるもんかつ！ オレは、テストで赤点取って、犬に追っかけ回されて、母さんに怒られて、ダメダメなダメライフを送りたいだけだっ！」

「・・・あの馬鹿ツナ・・・」

「だから・・・この戦いで、仲間を誰一人失うわけにはいかないんだ！」

「そうか・・・てめえ!!」

「・・・やるよ。XANNXUS」

XANNXUSの攻撃の斜線上にツナはハーフボンゴレリングを放る。それだけでXANNXUSは攻撃をやめてしまった。

「はっ。良い判断だ」

XANNXUSは自分の指に完成したボンゴレリングを着ける。だが、一方でツナも指にリングをはめていた。

「これがここにあるのは当然のことだ。オレ以外にボンゴレのボスが

考えられるか」

「それはそれはご自由に、いつかお前と戦うのを楽しみにしてるよXANXUS」

ツナはそう言って笑った。

XANXUSはそのツナの表情に何かクするものがあつたのか、顔をしかめた。

「他のリングなんてどーでも良い。これで、オレの命でボンゴレの名のもとお前等をいつでも殺せる」

「!!」

「その時は、身体中から体液という体液が流れ出るくらいに痛めつけてあげる」

「・・・ツナならやりかねないぞ・・・」

「今気付いたけど肩にコートかけるって・・・あれ？ 厨二病？ 痛いコなの？」

「カツ消す！」

「できるものならやってみろ！ XANXUS!!」

意気込んだツナだったが、リボンと家光に必死になって止められ、屋上の隅でいじけていた。

(・・・ワリーなツナ。まだあいつ等に、ウラヌスリングの事を知られるわけにはいかねーんだ)

「・・・どうせオレなんかお飾りボスだよ・・・」
(ボンゴレリングと似たような機能を持つ、死ぬ気の炎専用増幅装置。

ツナが言う通りならボンゴレリングよりも高い出力をたたき出せる。それが本当なら、無知なアイツが持つ低出力ボンゴレリングと、知識のあるツナの持つ高出力のウラヌスリング。これが今の戦い一番の勝負のつきどころだ！)

二戦目はツナとランボの敗北で終わった。

第三十話 守護者対決 嵐・雨

三戦目は嵐の守護者対決。

ツナ達からは獄寺隼人が、相手からはプリンス・ザ・リッパーの異名を持つベルフェゴールだった。

獄寺は時間ギリギリ到着という少々遅刻敗退が危ぶまれたが何とかなった。

その後、ステージの説明を受け円陣を組んだ。

「それでは嵐のリング。ベルフェゴールVS。獄寺隼人。勝負開始!!」

バトルが始まってすぐ、ツナが異変に気付いた。

「ねえ、リボン。助言って失格かな?」

「良いんじゃないね。もうお前は盗られるものは何もない」

「・・・だね」

ツナは観客席の声が届くことに思わず笑った。

「獄寺君。良いこと教えてあげる。そんな糸くず早く払っちゃいな」

ツナのその言葉に、大半の人間が首を傾げた。

(糸くずを払う? 十代目・・・!)

その言葉で気付いたのか、獄寺は先程ベルフェゴールに触られた肩を払う。するとワイヤーが地面に落ちた。

「・・・流石です。十代目」

「——もしかして今のつて反則?」

「いえ。ヒントですから、良しとしましょう・・・」

「ういうい」

だが、キレたプリンス・ザ・リッパーの實力に獄寺はだんだん追い詰められていく。ツナはもしかしたら勝つかない? と希望的観測を持っていたのだが、結果は原作通り。ツナの一言で帰ってきてくれた。

「それでは嵐の守護者戦の結果を発表します。嵐の守護者戦はリングを奪取したベルフェゴール氏の勝利とします」

チエルベツロが改めてそう言えば、獄寺達が落胆する。ツナは何故

か頷いていた。

「そして第4戦目は、雨の守護者戦とします」

その言葉に山本は表情を引き締め、己の相手となるスクアアロに視線を向けた。

「俺の相手はてめえだな。この時を待ってたぜえ刀の小僧!! やつとかつさばけるぜえ!! 前回の圧倒的力の差を思い出して逃げんなよ」
そう言ったスクアアロに、山本は不敵な笑みをうかべた。

「その心配は要らねーぜ。楽しみで眠れねーんだからな」

「失礼します! レヴィ隊長! ただ今、何者かが学校内に侵入し、雷撃隊と交戦。ほぼ、全滅です!!」

「! 何!？」

レヴィが眉を顰める。

「そんな事ができるのって」

「アイツしかいねーぞ」

「アイツ?」

山本が不思議そうに首を傾げると、ツナはオモチャを前にした子どもみたいに笑って。

「並盛の秩序であり並中の支配者、雲雀恭弥さんですよ」

「ねえ。君達、ボクの学校で何してるの?」

「たった今、嵐の守護者戦が終わったんです」

ツナは雲雀の怒気に臆することなく話を続ける。

「ふうん。校内への不法侵入及び校舎の破損。連帯責任でここにいる全員咬み殺す」

「あっちゃー。そうだった。この人校舎大好きっ子だった!」

ツナはあちゃーと額に手を当てるが、特に気にした様子はなく、暫くは雲雀の好きないようにさせた。

そして、山本と対峙しようとしたその時。ツナの払いが雲雀を止める。

「……………なんだい草食恐竜」

「これ以上暴れられるのはちよつと……、と思いましたがね。等価交換と行きましよう。……で暴れるのを我慢して、守護者戦で見事勝った

ら。一つだけ、オレが言うことを聞いてあげます」

「・・・へえ。どんなことでも?」

「流石に死ねとかは無理ですけど。本気で戦えというのであれば、雲雀さんと全力で戦いますよ」

「・・・分かった。校舎は完全に直るの?」

「はい。我々チエルベツロが責任を持って」

「綱吉」

「・・・あ、はい」

「僕の言うことを聞く前に、猿山の大将に負けないでね」

「オレが負けるんでも?」

「・・・じゃあね」

「ええ。では」

「うゝお、おい! 刀小僧!」

ホツとしたその現場にスクアア口の大声が響く。

山本は緩んでいた表情を再び引き締めて振り返る。ツナはいつも通りヘラヘラとしていた。

「貴様その動きどこで身につけたあ!! 気に入ったあ! だが、お前が勝つ可能性は方に一つ。いや、億に一つか!!」

「・・・やってみなきや、わからねーさ」

「例えソレが那由多の彼方でも、山本には十分だよ」

「おう!」

ツナの言葉に頷いた山本を見てスクアア口は笑い、ヴァリアーを連れて去って行った。

「・・・ところでツナ」

「んー?」

「那由多ってなんだ?」

「ツ!? や、山本・・・知らないで頷いたのか!」

つつつ・・・と呻きながら獄寺が驚く。

「おう。で、なんなんだ?」

「一、十、百、千、万。この後は?」

「億、兆・・・?」

「京、塚、杼、穰、溝、澗、正、載、極。恒河沙、阿僧祇、那由他、不可思議。ツスよね十代目」

「そ。アイツは万に一つか億に一つか。つまり、万分の一、億分の一の確立しかオレ達は勝てないんじゃないか。って言った。だから那由多分の一より小さくても山本は勝ってみせるよ。って言ったんだ」

「ちなみに那由多分の一って言ったたら、零が六十個あるんだぞ」

「ははっ。そんな低確率でも勝ってツナは言うのか」

「諦めが人を殺す。諦めなければ人はどこまでも強くなれるんだよ。山本」

「……なんか頑張れそーだわ」

——次の日。

第四戦。雨の守護者戦が始まる。

『型にはまった剣・流派。それらを超えられなければスクアア口には勝てない』……か」

「ツナ……」

「深く考える必要ないと思う。で、俺から言えるのは一つ。山本にしか振れない剣があるはず」

「俺にしか……振れない剣」

「そ。頑張つてね」

戦いはスクアア口の優勢だった。時雨蒼燕流は昔潰した流派だと、スクアア口は自慢げに言っていた。お前のやっていることは無駄だ、と。だが、山本は時雨蒼燕流の完全無欠最強の理由を知る。そして——

「時雨蒼燕流……攻式九の型」

「う。お。おい！ 野球でもするつもりか?！」

「……あいにく、これしかとりえが無いんでね」

——うっし雨。

山本の放ったその攻撃は、ツナ達の勝利を意味する一撃だった。

その後、スクアア口は放たれた鮫に、助けようとした山本の厚意を

振り払って、食べられた。

「スクアーロ!!!」

□

□

□

□

「ぶは——つははは!!! 最後がエサとはあの——ドカスが!!
過去を一つ精算できた」

「アハハ。アハハハハ！ まさに死闘。だね！」

お互いの大空のボスはどこか微妙にずれている。

「明晩の対戦は、霧の守護者同士の対決です」

対戦のカードは今日も切られる。

(いよいよ・・・か。獄寺君とかすぐく反対しそー・・・)

第三十一話 守護者対決 霧

ツナはいつもの修行場所から少し歩いてジュースを買いに行く。

(どーせついてきてんだろーなー…) 「ん? こんな所に黒曜生…」

「つひやく。このガムうまそーく!!」

「さつき買っただろ?」

「らってガムってフルーティーだから、みんなのつくんじやうんらん」

「…じゃあ一箱買ってこ」

「当たり前つきのイチゴ!!」

「レシートいい。めんどい…」

「…ちなみにもあまりガムは飲み込まない方が良いで。病気になるとかじゃないけど、ガムが原因で全く違う病気になったりする可能性があるあるんだからな?」

「…ああん? ……って綱吉さん!?!」

「よつす。何してんの? お前等。風は?」

「今は…雲雀恭弥を…見に行ってます…」

「アイツが…? 雲雀さんに見つかったら大騒ぎになるぞ!?!」

まあ、そんな状況も楽しんでるだろうけどさあ…あの馬鹿は…」

ツナは自分の霧の守護者に思いをはせる。自分を敬愛するナツポーと自分に強い好意を持っている少女。あれほど霧の守護者に相応しい二人はいないだろう。

——その日の夜。

体育館。

なかなか姿を現さない。と、他の仲間がイライラする中ツナは一人笑顔だった。

(なーぎにあっえる♪ なーぎにあえるっ♪)

リボーンが来てから心安まる日がなかったという彼にとって、彼女は癒やしに近いものなのだろう。

「こっちの霧の守護者のお出ましたぞ」

「ホント!?!」

ツナの期待の声に、守護者のみんなも笑顔になる。が、現われた城島犬、柿本千種の二人を見て、顔色を変える。

「あいつらって・・・!」

「バカな!!」

「落ち着けお前達。こいつらは霧の守護者を連れてきたんだ」

「何いつてるんスカリボーンさん! だってこいつら・・・! ま、まさか。霧の守護者というのは・・・」

「六道・・・骸!?!」

「クフフフフ。クフフフフフ。Lo^否neg^否o
I^我l^がm^名i^はo^はn^はo^はm^はe^は⊠^クCh^ロro^ムm^ムe^ムCh^クro^ロm^ムe^ム 髑

髑

「六道骸・・・」

「じゃない・・・?」

「なつぎちやああああんっ!!」

「!!?!」

シリアスな空気の中、ツナだけが興奮した様子でクローム髑髏と名乗った少女に抱きついた。

「会いたかったよおー! ああ、俺の癒やし・・・」

「きめえぞツナ」

「へブツ!!」

リボーンの蹴りを（ワザと）食らいツナは床に転がる。

「・・・ボス、大丈夫?」

「うん。大丈夫だよお。ちよく大丈夫」

「・・・ツナが『ママンを前にした家光』みたいになってるぞ」

「・・・た、確かに」

「そう見えるっす」

「さ、風。あのチッコイのサクツとヒネっっちゃって。無理だったらアイツに全部投げれば良いから」

「うん。頑張る。見てて」

「よし、では。円陣行くぞ!!」

「え、あ。そういやそんな制度あったね・・・」
「よっしゃ」

「いい。いらないよ、そんなの」

「カックイイイ！ 任せたよ」

「いつてきます」

「いつてらっしゃい！ 終わって戻ってきたらただいまを所望します
！」

「うん。分かった」

終始緊張感に欠けるツナのしゃべり方にリボーンがイライラし始める。

「それでは、霧の対戦。マーモン対クローム髑髏。勝負開始!!」

「・・・へえ。君が霧の守護者？」

「うん。あの方のため・・・そして、ボスに良い所を見せるため・・・
クローム髑髏、行きますっ」

クロームが三叉槍を床にトンと軽く打ち付ける。と、そこからヒビが入って床が崩れていく。

「うわー！」

「ひゃっぽいー！」

「ぬお!!!」

「やはり、僕と同じ術士か。でもこんな子供だましじゃ、僕から金は、とれないよー！」

マーモンのフードの中から触手のようなものが伸びてきてクロームを拘束する。そのまま持ち上げられたクロームは苦しそうに表情を歪める。

「な、なんだありゃあ！」

「触手つてさ、卑猥だよね」

「はっ..」

「・・・特に女の子をああやって触手であんな事やこんな事をして辱め
へブツ!!」

中学生の教育によくないことを言い出したツナをリボーンの蹴りが黙らせる。

「弱すぎるね。見せ物にもなりやしない」

「誰に話してるの。私はこっち……」

「え!？」

「お……女がバスケットボールになったぞ!!」

「なあ!？」

「いえーい 凧さんマジかッけえ!!」

「復活が早いぞ。馬鹿ツナ」

リボーンがツナの再起速度にツツコミを入れる。周りはそんな事に構ってはいられないみたいだが。

「一体何が……」

「幻覚だぞ。互いに譲ることなく幻をつくりだす。息もつかせぬ騙し合い。こんなすげー戦いはめつたに見られるもんじゃねーぞ」

「……? つまり?」

「クロームさんマジクローム!!」

「訳が分かんねーぞ!」

ツナの酔っ払ったディスク・ジョッキーのような調子を何とか止めようとリボーンは奮闘する。だが、回復エリアが目に見える範囲にいるこの状況でツナの調子はすぐに回復する。

そんな二人の前では、いつの間にかマーモンがアルコバレーノバイパーとしてそこにいた。

「ツナのせいで見逃したぞ!」

「しらねーよそんなこと!」

「誰だろうと……負けない」

クロームが連続で攻撃をし、火柱を上げてマーモンを飲み込んだ所まではよかったが、その火柱が幻術で凍らされてしまった。

「火柱が……凍った」

「なんだ、この寒さは……!？」

「不覚にも幻術にかかっちゃまったぜ。コラ」

「オレもだぞ。流石バイパーだな。もっとも、規格外の相手には効いてねえみてエだけだな」

「な!？」

「うん？　どーしたの二人とも」

「ツナ。お前は・・・最初から何を見ている？」

「全部見てるよ？　何いつてるのさ。体育館の床は割れたし、風はボールに。火柱は氷に変わった」

「・・・それでもお前は、幻術を見るだけなんだな」

「まーね」

と、そこで痛めつけられたクロームに気付いたツナは

「上出来です（もういいよ。可愛いクローム。お疲れ君は少し休みなさい風。バトンタッチだ）」

「・・・・・・・・・・は・・・・・・・・・・い・・・・・・・・・・」

その瞬間。クロームから煙が吹き出してクロームの身を包む。

「なに、死を覚悟した女術師によくあるパターンだ。・・・自分の醜い死体を隠そうとする」

余裕の態度でそう解釈を述べていたマーモンが、ピクリ、と反応する。

「――クフフフ」

第三十二話 守護者戦 霧 二

「クフフ。クフフフ」

「!!?」

「ムム？ 男の声・・・?」

その声の後、床が割れ、マーモンに攻撃が襲いかかる。

「ムギヤ!!」

「クフフフ。随分いきがってるじゃありませんか。僕のマスターに逆らう、愚かなマフィア風情が」

「だ・・・」

「誰だ・・・?」

「んー?」

「娘が・・・」

「六道骸・・・!! 間違いない」

「や。骸」

「お久しぶりです。舞い戻ってきましたよ。輪廻の果てより」

そして、マーモンと骸の幻術での戦いが始まった。

激しい幻覚の応酬に、汚染の症状を訴える守護者達に苦笑し、ツナは骸へと視線を向けた。

（しかし・・・本気で戦ってるよなーどう見ても。クロームとの戦いで本気で挑まないといけない相手だとふんだったところかな）

（そう。僕がこちらにいられる時間は限られています。ただし、マスター。全力でなければ勝てないわけではありませんよ。時間の短縮、ただそれだけの理由です。勘違いなさらないでください）

「ふふっ。知ってるさ。全く、俺の部下は負けず嫌いが多いね」

そう呟いた言葉に反応したりボーンが、ツナに視線を向ける。

「ツナ?」

「ん? あー。骸がとても負けず嫌いな発言してるからさ。あいつにもそういう面があるんだな。って」（知ってたけど）

「骸との精神感応だったか?」

「心の読み合いともいうね。ただ、戦闘中にこっちに意識を向けるっ

て事は意外と余裕なのかなあ」

彼ほど人生を楽しんでいる人間もいないだろうというほどの笑顔で、先程からツナは笑っている。

一方で、XANXUSはどこか不機嫌そうだった。

実のところXANXUSは幼少期の頃のツナの暴挙に憧れと尊敬の念を抱いていた。そんな彼と、同じような事ができる、そんな骸に嫉妬の炎が燃え上がる。

「・・・お前のせいでボスの機嫌が最悪だ」

徐々に圧されつつあったマーモンが骸を睨む。

「そんな事は知りません。クフフ。マスターと僕はただただ上司と部下の関係。余計な感情を抱いているのはおたくのボスだけですよ」

「そうだよ。だから早く終わらせろよ骸。俺は風のただいまが聞きたいんだから」

「ヤー、マイマスター」

骸の最大出力と言っても過言ではない幻術がマーモンを襲う。

「堕ちろ。——そして巡れ」

大きな音を立てて破裂したマーモンの身体を見て、ヴァリアー側も獄寺達も同様に表情を強張らせた。

「霧のリング。これで・・・いいですか？」

チエルベッコに向かい骸は完成させた霧のボンゴリングを見せる。

それに対して、彼女達はクロームの勝利を告げた。

「ハイむっくん」

「マスター、もちろん殺してはいませんよ。流石アルコバレーノ、逃げただけの余力は残っていたようですから」

「流石だぜー」

その言葉にXANXUSは振り返らずにゴーラ・モスカを呼ぶ。

「戦線離脱とみなす。争奪戦後、マーモンを消せ・・・方法は任せました承の意なのか、目の部分が光った。

そんなXANXUSを見て、骸はフ、と笑みをうかべた。

「まったく君は、マフィアの闇そのものですね。XANXUS。君の

考えているおぞましい企てはこの僕ですら畏怖の念をいただきますよ」
「・・・」

骸は何も返さないXANXUSに肩をすくめ、

「いえ、別にその話に首を突っ込むつもりはありません。僕は良い人間ではありませんので。ただ一つ・・・、僕達の大空が君の計画の排除を決めたなら、僕は全力で君の企てを潰します。そして彼を舐めない方が良い。彼はその身一つで、宇宙中を敵に回しても笑っていられる男だ」

「・・・あんまり無責任な事言わないでくれないかな。骸」

「貴女が言ったことですよ?」

「その『あなた』、女って字を使ってない? 俺は男! 確かに昔お前達に言った記憶はあるけどさ・・・」

「クフフ」

そこで、骸は何か気付いたようで。

「ではマスター。この娘を、頼みます」

「オツケー」

ツナは倒れてきた風をキャッチすると、そのまま胸の前で抱え上げる。所謂お姫様だったのだ。

「じ、十代目・・・」

「ん?」

「それ、できるんですか・・・?」

「当たり前だろ!? まったく、女の子一人支えられなくて男が務まるわけないだろうに」

「その意見は賛成だな」

「・・・これで三勝三敗。次の守護者戦で決まる・・・のか?」

「はい。引き続き守護者戦は行われます」

「明日はいよいよ争奪戦最後のカード。雲の守護者の対決です」

「・・・おい、XANXUS。次、雲の守護者戦でそちらが負ければ否応なしにツナの勝ちだ。・・・大人しく負けを認め、ボンゴレ10代目の座を諦めるんだろーな」

「あたりめーだ。ボンゴレの精神を尊重し、決闘の約束は守る。雲の

対決でモスカが負けるようなことがあれば、全てをためーらにくれてやる」

「・・・そして全てを奪い返す・・・」

「ん？ ツナ、何か言ったか？」

「いや、何も。行こう、リボーン」

第三十三話 ツナの決意

雲の守護者戦

結果から言って、それは一瞬で終わった。

が、もちろん雲雀がモスカだけで満足するわけもなく、原作通り、モスカは暴走を始めていた。

（あーあーあー。面倒だなー。どうしようか。まあいいや、全力全開でぶっ壊す！）

覚悟を決めてツナは突っ込んだ。

ピンチに現われたヒーローを演出して。

「よう。お前等、これいったいどういう状況？」

「じ、十代目!!」

ツナは憎つたらしいほどの子どもっぽい笑みを浮かべて。

「来いよ木偶の坊。銃なんか捨ててかかってこい」

ツナはどんな相手でも一撃で倒せる力を持っている。逆に言えば、加減を間違えば例え人間でも一撃で肉片に変えることができる。

（ま、いつも通りこれでもかと言うほど手を抜いてやれば良いんだよ）
ツナはニヤリと笑って本当にいつも通り拳を繰り出した。その拳圧は、何度も何度も放ってきた。原理は放つ自分自身でも分からない。ただ、幾度となく放つて。その放ち方で、寸止めをすると何が起きるか、ツナはよく知っている。

その一撃は、神を宿した拳で振るわれた。

肉体以外の全てを破壊するその物理法則もへったくれもない神の鉄槌が、非人道的な機械の化け物に叩き込まれた。

ゴーラ・モスカの外側を吹き飛ばし、中に入っていた。動力源とされていた九代目が地面に落ちる。

「・・・えーっと。このおじいさん誰だっけ」

「九代目!」

「ああ。そうだ九代目だ。・・・ってことはこのおじいさんが俺が十代目を継ぐよう仕向けたの? なんか許せねえ」

「くだらねー事言ってる場合か」

「ロマーリオ！ 九代目を診てくれ！」

「わかった、ボス！」

「九代目っ！」

更にディーノ達やバジルも合流し、九代目の介抱に加わる。

慌ただしい大人達を光のない目で見つめていたツナは、不意にXANXUSに視線を向けた。

「ねえ。お前はこんな事してナニがしたいの？」

「沢田綱吉。てめエはじじいに手をかけた」

「まあ、俺は助けたつもりだけど」

「・・・」

「瀕死の状態まで追い込んだのはお前達だし、まあもし俺が、俺じゃなかったら。望み通りの結果になったかもしれないね。でもあえて言わせてもらうよ『だから、僕は悪くない』」

「・・・そう・・・だ・・・。悪いのは・・・、私だ・・・」

「ノーノ・・・」

「やつと会えたね・・・、綱吉君・・・」

「できれば違う形で会いたかったです」

「すまない・・・。こんな事になったのは全て私の弱さ故のこと・・・私の弱さが・・・。XANXUSを長い眠りから目覚めさせてしまった・・・」

「!!」

「え。なに、アイツ吸血鬼とか？」

「ツナ・・・オメーな・・・」

「綱吉君・・・。いつも・・・、いつも君のことは・・・、リボンから聞いていたよ・・・。好きな女の子のことや・・・学校のこと・・・。友達のこと・・・。君は、マフィアのボスとしては・・・あまりにも不釣り合いな心を持つた子だ・・・。君が、今まで一度だって喜んで戦っていないことも知っているよ・・・。いつも、眉間にシワを寄せ・・・。祈るように、拳をふるう・・・。だからこそ私は君を・・・、ボンゴレ十代目を選んだ・・・」

「ノーノ……?」

「すまない……。だが、君で……。よかつた……」

「ノーノ。ちよつ……。ノーノ!!」

ツナはなんか自分の評価が大変なことになってるなーとか思いながら、リボーン本当に余計なことも伝えてるなーとか。様々などうでもいい思惑の中、ただ一つ。浮かんでくる思いがあった。

「よくも九代目を!!!」

「は?」

「9代目へのこの卑劣な仕打ちは、『実子』であるこの俺と崇高なるボンゴレ精神への挑戦と受け取った。……お前が^{ボス}した^殺ことの前ではリング争奪戦など無意味。俺はボスである我が父のため、そしてボンゴレの未来のために、沢田綱吉、貴様を倒し仇を討つ!!」

「な!?! ……何言ってやがる! お前が9代目を!!」

「これが目的だったのか!」

獄寺達が叫ぶ中、ツナはXANXUSをじっと見つめる。沸々と、何かがわき上がってくる。

「憶測での発言は慎んでください」

「全ての発言は我々が公式に記録しています」

今まで黙っていたチエルベツロ機関の二人が口を開いた。

「あいつら……!」

「やはりチエルベツロはXANXUS側についていたんだ!」

山本と獄寺が怒りの形相で叫ぶ。

「……好きにしゃがれ。俺はもうキレてんだ」

「!!」

リボーンの怒気を含んだ言葉に、チエルベツロ達が怯む。

「九代目との誓いだ。俺は手をださねエ……生徒の勝負にはな。俺がそう言っても、戦いが嫌いな? 俺の生徒がどーするのかは知らねーけどな」

「XANXUS。大空のボンゴレリングは……。返してもらう……。お前に、九代目の後は継がせない!! ——こんな事をしてまで、お前がボンゴレボスになろうって言うんなら……ま

ずはそのふざけた幻想をぶち殺すっ!!」

「ツナ。よく言ったぞ。最後のは余計かもしれねーけど」

「ボンゴレの歴史に刻んでやる。XANXUSに楯突いた愚かなチビが一人いたとな」

「誰が豆粒ドチビかア——ッ!!」

「?! どうしたツナ!」

「言ってみたかった」

「自由だな。相変わらず」

「・・・一人じゃあないぜ! 十代目の意思是」

「俺達の意味だ!!」

「・・・個人的に」

「素直じゃないなあ雲雀さん」

「うるさいよ草食恐竜」

「あはは・・・じゃあボンゴレの歴史にこう刻んどいて。XANXUSに楯突いて、見事に打ち破った愚かだった少年がいたってね!」

「・・・」

「来るかガキ共!!」

「いいねえ」

「反逆者どもを根絶やしにしろ」

低く呟いたXANXUSの言葉に、ヴァリアーの面々が殺気を膨らませた。

その時、チエルベツロから制止の声があがった。

「お待ちください! 9代目の弔い合戦は」

「我々を取り仕切ります」

「なあ!？」

「我々はボンゴレリングの行方を見届ける義務があります」

「何言ってやがる! XANXUSの犬が!!」

獄寺が叫び、チエルベツロを睨みつける。が、

「口を慎んでください。我々は9代目の勅命を受けています。我々の認証無くしてはリングの移動は認められません」

そう言ってチエルベツロが見せた死炎印が押された証書を憎々し

げに見やり、バジルが叫ぶ。

「よくもぬけぬけと！ その死炎印は9代目に無理やり押させたものだな！」

「我々は勝利者が次期ボンゴレボスとなるこの戦いを」

「大空のリング戦と位置づけけます」

「すなわち、今まで行ってきたリング戦の七戦目ということになります」

「いかがでしょうか、XANXUS様」

「・・・悪くねえ」

「なんで毎回毎回誰も俺に確認を取らずに事を進めるのかなー。ま、良いけどね」

「それでは明晩、並中に守護者全員でお集まりください」

「あーらら、モドキに執行猶予を与えちゃったよ」

「なにー！」

「テメー・・・!!」

「フツ。明日が喜劇の最終章だ。せいぜい足掻け」

指で弾いた大空のハーフボンゴレリングが、ツナの手に収まった。

それを確認したXANXUSは、憤怒の炎が放つ眩い光と共に姿を消した。

「・・・遅かったか!!」

「デイーノさん！」

「跳ね馬！」

「お前等!! 九代目とケガ人を!!」

キャツバローネの手により九代目は運ばれていく。

バオン。と、空間が歪む音がした。ツナが守護者戦を提案したあの日放った拳が空間を引き裂いたのと似たような音が。その音の発生源はツナの右手。強く握られたそれが、音を生み出した。

(掌に高速で握り潰された空気が音を出した・・・。ツナ、お前は・・・強すぎる)

「——ねえりポーン。今、俺が強すぎる。って考えたでしょ」

「!・・・なんで分かった」

「その考えだけは、簡単に読み取れるよ。何度も何度も聞いてきた。『お前は強い』って言われてきた。だから、その考えだけは誰が考えてても分かる」

「・・・そうか」

「知ってる？ 最強と無敵は違うって」

「ああ。最強はもつとも強いだけ、無敵は敵がないそれだけの強さ」
「俺はこう思う。無敵になったひとの周りには・・・さ。『味方』しかできないんじゃないかな」

「・・・なるほどな。ツナにしちやまともな考えじゃねーか。とにかく、今日は学校に行けよ」

「あ、うん」

「自分が帰ってくるべき場所をしつかりと目に焼き付けてこい」
「・・・うん」

第三十四話 大空のリング戦

「いつてらっしやーいー！」

「いつてきまーす」

ツナは一週間ぶりに並盛中学に登校していた。といつても毎晩来ていたのだが、昼間来ていなかったたので何となく違和感はある。

「………」

「おはようツナ君！」

ツナが屋上で黄昏れていると、後ろから声をかけられた。

「京子ちゃん。おはよう」

「！………。あ……、リボン君がここにいるって」

「リボンヌが？」

「……ツナ君。みんな、何してるの？」

「知りたい？」

ツナの問いに京子はこくりと頷いた。

「じゃあ、誰にも内緒にするって約束して。絶対に言わないって。もちろん了平さんにも」

「うん。分かった」

ツナは話した。ダメダメな自分のところに家庭教師として、マフィアのボスが殺し屋を送ってきたこと。そして、色んな事に巻き込まれたこと。今回の戦いも、その延長線上だということ。

「……と、こんな感じ。でも安心して、了平さんにもう怪我はさせないから。危ない目には遭わせないから。例え、この命に代えてでも」

「……ツナ君もだよ」

「へ？」

「ツナ君も。ちゃんと笑顔で帰ってくるんだよ！ いい!？」

「……分かった。山本も獄寺君も、雲雀さんも了平さんも、ランボもクロームも。みんな笑って帰る、この日常に。俺は帰ってくるよ、京子ちゃんに笑顔を見せに。ね」

「………。あ、えと。そ、そうだ！ これ、ツナ君に」

「お守り……もしかして」

「そ、そう。ツナ君達の戦いでケガ人が多いでしょ？ だから安全祈願！ と必勝祈願も！」

「ありがとう！ オレ、次の戦い。負けるわけにはいかないから」「うん。絶対、勝って帰ってきてね」

「了解しました。ご主人様」

ポン。と、ツナの手が京子の頭に乗る。天然な京子は自分が抱く気持ちに気付いていないが、顔が熱くなるのを感じ、その場の撤退を試みたが、屋上にハルが入ってきてきて逃亡は叶わなかった。

「ツナさん！」

「ハル。どうしてここに？」

「今日学校がお昼からなんで、お守りを配るために潜入しちゃいました！」

「潜入って・・・並中の制服着てるし・・・」

「ビアンキさんが用意してくれましたよー」

「殺しに比べればチョロいもんよ」

「ツナ兄」

「無駄なものに無駄な技術を注いでるんじゃないやねーよ・・・。見つかったらどうする気だ・・・」

「そんな時はそんな時よ」

「ポイズンクッキングはダメだからな！ 一般人に向けたら絶対ダメだからな!!」

「分かってるわよ」

「絶対分かってないな！ その顔は！」

——そして、最終決戦の夜は来た。

獄寺達は並中への道を歩いていた。

「・・・あの。ディーノ殿から聞いた話なのですが・・・。ゆりかご以前・・・ボンゴレボス候補は沢田殿も含め六人いたらしいです。そしてその中でも年長の三人は誰もが十分な才能に恵まれていましたが、九代目と門外顧問を除く上層部の全員が支持したのはXANXUSだったそうです・・・。。。。。。。それほどXANXUSのボスとしての資質は圧倒的だと・・・。。。。。」

「おい・・・その恵まれた三人に十代目は・・・？」
「入っていません」

「うむ」

「なるほどな」

「ま、なかあねえ話だろーな」

「・・・ところで極限に疑問なのだが」

「はい？」

「その『最後の一人』はどんな奴なんだ？」

「最後の一人・・・？」

「・・・恵まれた三人・十代目・XANXUS。確かにもう一人候補が
余るな」

「どんな人間か。それは誰にも分からないそうです。その力を強く継
いでいた少年の父親が、彼を連れて遠くに逃げたそうなので」

「・・・臆病者。って事か？」

「ただ、ボンゴレが調べた所。少年の祖父がこう言ったそうです。ヤ
ツは天災だ。死ぬ気の炎も重力も操って見せた。」と」

「『重力？』」

「詳しいことは分かりませんが、小学校に上がる前の子どもが大人を
簡単に投げ飛ばして見せたそうです」

「化け物かよ・・・」

そして。守護者全員が集められた。

大まかなルールが説明され、リングが回収された。

「それでは大空戦のルールを説明いたします」

「大空戦は他の守護者同様、リングを完成させることが勝利条件の一
つとなります。今回のフィールドは学校全体」

「・・・広えな」

「広大なフィールドでの戦いを観戦できるよう、各所に小型カメラを
設置し、観覧席以外にも大型ディスプレイを」

「そして守護者の皆様にはカメラ搭載型モニター付きリストバンドを
用意しました」

「・・・なるほど、小型テレビか」

了平が感心したようにリストバンドを見つめる。

「ハハッ。ツナがドアップだぜ」

「え？」

山本も与えられたリストバンドの機能を楽しむ様子を見せる。

「・・・では守護者の皆様は、リストバンドを装着し次第、以前各守護者戦が行われたフィールドに移動してください」

「フィールドだと？・・・今更、どうということだ？」

「質問は受け付けません。従わなければ失格となります」

「つたく、ムカつく女だぜ」

「観てるだけじゃなさそうじゃん、楽しみ」

「では、やるなら今しかないか・・・」

「え？」

「円陣だな」

「気合い入れましょう！」

「そうか。そうだね」

「あ。お前達はそこにいればよいからな。十メートルルールに改訂したからよいんだ！」

「なにそれ」

「十メートル以内に入ったものは円陣を組んだと見なす極限ルールだ」

「すっげー！」

「よーし。行くぜ!!」

「二沢田ファイツ!!」

「二「オ——!!!」」

「では、後で」

「ボス、気をつけて」

「頑張れよ！」

「・・・Zzz」

「無茶すんな」

「・・・(怒)」

(じ、十メートルルールに怒ってる・・・?)

「いよいよだな！」

「！・・・シヤマル！　コロネロ!?」

「骨拾いに来てやったぞ」

「野次飛ばしに来たぞ」

「感じ悪!!　っていうかオレが負けるの前提？」

「守護者全員、各フィールドへ到着したようです。

「各フィールドに設けられたポールの上には、フィールドと同じ種類のリングがそれぞれ置いてあります」

「まさか、また奪いあえつて言うんじゃないやねえだろうな」

己のフィールドで呟いた獄寺に向かい、ヤル気満々のベルがナイフを取り出す。

「つてことはさ——俺達も闘えちゃうわけ？」

「どうぞ、ご自由に」

「・・・ただし、できればの話ですが」

その言葉と共にリストバンドが“作動”した。途端に苦しみ出した守護者達の様子に、ツナは気付く。

「・・・リストバンドに、何を仕込んだ!？」

「毒です」

「なんだって!？」

「毒!？」

「デスヒーターと呼ばれるこの毒は瞬時に神経を麻痺させ、立つことすら困難にします。そして全身を貫く燃えるような痛みは徐々に増していき、30分で絶命します」

「なんだってこんな事するんだ!？　これは大空戦だろ!？」

「大空であるボスの使命だからです」

「全てに染まりつつ全てを飲み込み包容する。つまり、ボス同士で守護者の命を賭けて闘えつてこと？　うわっまどろっこしい」

「毒の進行を止める方法はただ一つ。守護者のしているリストバンドに同種類のリングを差し込めば、内蔵されたデスヒーターの解毒薬が投与される仕組みになっています」

「ナルホドな。この戦いでは大空のリングだけじゃなく、他の守護者

のリングも奪い合わなきやなんねーのか」

「大空戦の勝利条件はただ一つ全てのボンゴレリングを手に入れることです」

「このチェーンに全てのボンゴレリングをセットできます」

「分かった。急ごう。そうこうしてる内にみんなが！」

「では、最後に一つだけ。勝負開始後は一切の部外者の外部からの干渉を禁止します特殊弾もしっかりです」

「了解したぞ」

リボーンがそう言った後、ツナの用意が完全にできる前にXANXUSが攻撃を加えた。

吹き飛ばされたツナは、校舎の壁を破壊してとまる。

「沢田殿！」

「ぎ、XANXUS様！ まだ・・・！」

「早く始めたいと言ったのは向こうだぜ」

「は・・・、それでは・・・！」

「しかし今の攻撃で沢田氏が・・・」

「卑怯だぞ、XANXUS!!」

「ああ？ 特殊弾を撃つ前はマズかったか？」

「舐めんなよ。俺を誰だと思ってる」

瓦礫の中から炎が吹き出し、ツナが姿を見せる。

「沢田殿!!」

「ツナ、XANXUSは片手間に戦える相手じゃねーと思え。六人の守護者を救出しながらの交戦はいくらお前でも命取りとなる。ま
ず・・・」

「分かってる・・・。先にこいつを片付ける」

第三十五話 沢田綱吉VS・XANXUS

「片付けるだ？ 昨晚の、あの程度の力か？」

「昨日・・・？ ああ、寝ぼけ眼で使ってたあの力か」

「・・・！」

「！！」

「観覧される方はこちらへ！ 急いでください！」

「それでは大空のリングXANXUSVS・沢田綱吉。勝負開始」

「とりあえず大空戦・・・リング一つゲット」

「？」

そう言ったツナの右手中指には大空のボンゴレリングが着けられていた。

「！ いつの間に」

「さっきお前が俺を飛ばした時、奪っておいた」

「はっ。まるでスリだな！」

「勝てば良いんだよ。勝てば」

そこからは原作通りに事が運ぶ。

ツナがXANXUSの憤怒の炎を避け、鉄筋コンクリートの校舎が風化した。その炎の特性についてリボンが説明し、ツナとXANXUSは炎のガチンコ勝負をした。結果はツナが勝ち、XANXUSが武器を取った。

「カスゴときに武器を取るとはな・・・」

「オレがカスじゃなかったただけの話だ」

そこからも概ね一緒だ。リボンが観覧席でその場の全員にボンゴレボスの炎の特性と武器の話をする。そして、XANXUSが銃により高速移動を可能とした。

体育館の方に向けて撃たれるはずの銃をツナは避けながら蹴り飛ばすことで打ち出される方向を変えた。

XANXUSの施しで嵐と雷のポールが壊れた。

そして戦況は原作通りに移り変わっていく・・・。

ツナが死ぬ気の零地点突破をしようとした所でXANXUSはキ

レ気味に怒涛の攻撃を仕掛けてきた。

そして、XANXUSの一撃がツナに直撃した。
爆炎が上がる。

煙が晴れるとそこには、ボロボロのツナが横たわっていた。

XANXUSは勝利の余韻に浸りながらぶつぶつと呟くが、その彼の目の前で、ツナは大きな炎を出して起き上がった。

リボーンは満足そうにその技、死ぬ気の零地点突破。について説明するが、XANXUSは死ぬ気の零地点突破がどんな技か知っていないらしく、豪快に笑い飛ばす。

そしてツナは死ぬ気の零地点突破 改を編み出した。

XANXUSはツナに連続で攻撃を撃ち込みタイミングをずらし
ていく。

そして死ぬ気の零地点突破 改は完成した。相手の力を自分の力
に変換する大空の使命そのままの技が。

その力の差にXANXUSはマジギレした。

と、言ってもキレたのはツナにはない。自分自身にだ。初めて
会った時、幼子であったにもかかわらず殺気を自在に操り、年上の自
分でも敵わないと思わせた沢田綱吉に追い付きたいと覚悟を決めて
いた。だが、どこまで行っても遠かった。久しぶりに見たツナは殺気
で重力を作り出すほどに成長し、力も段違いだった。情けなくて自分
が情けなくて、超える目標を前にして。XANXUSは本気を出し
た。

だが、死ぬ気の零地点突破はツナが元々自在に使っていた技だっ
た。

炎の逆の状態、つまり冷気を放つ初代死ぬ気の零地点突破。

原作通りにツナはXANXUSを氷付けにした。

そこでツナが気力の限界を迎え膝をつく。

「おいー」

「ツナの奴・・・、珍しく気力の限界らしいな」

ルッスーリアとレヴィの幻覚を見破ったツナ。そこにはやはり

マーモンがいた。

「よく見破ったね。でも、もう。戦う力すら残っていないようだ」

「ムダだ……。XANXUSは眠りについた……………」

「それはどうかな？」

「？」

「むしろボスが次期ボンゴレの後継者になるための儀式の準備が整ったのさ」

「？」

「ボスは再び復活する」

マーモンの手には全ての守護者のリングがあつた。彼の説明によると、リングには力があるという。九代目の零地点突破が溶かされた床には七つの小さな焦げ跡が残っていたそうだ。

「誰がやったかは定かではないが、その経過は一つの仮説を立てるのには充分だ」

マーモンの掌の上でボンゴレリングが徐々にその力に目覚め出し、それぞれの属性の色の炎を発し始める。

「思った通りだ。見るがいい」

マーモンはそう言って氷漬けになっているXANXUSに向き直る。

勢い良く燃え上がったリングの炎が、零地点突破の氷を溶かし始めた。

が、全ての炎が溶けきつた時、ボンゴレリングは全て碎けて消えてしまった。

「「?!」」

「ど、どー言うことだ！　なんでリングが碎けるんだ!!」

「い、いったい……………」

マーモンとベルフェゴールはもちろん。起きたXANXUSも、駆けつけたツナの守護者達も、見ていた部外者のみんなも、全員が全員驚いていた

「へえ…………、大いなる力を後継者にねえ。面倒なことが大好きなの

かな？ ボンゴレフアミリーのご先祖様は」

「「!!」」

「・・・フツ」

どこからともなく聞こえた沢田綱吉の声に、全員がツナの方を見る。だが、彼は軽く笑っているだけだった。

慌てて当たりを見渡すと、校舎の縁に腰を掛け足をプラプラさせながら、ツナは腰に着けたチェーンを守護者のリングで全て埋め、手の中で大空のリングをもてあそんでいた。

「沢田・・・綱吉ツ!!」

「十代目!」

「ヤッホーみんな」

気力が尽きていたと思われるツナが、大きな一つの死ぬ気の炎と なって屋上に座る「ツナ」の元へ飛んでいく。それをツナは死ぬ気 の零地点突破 改で吸収し、残った一枚の人型をした紙を持つ。

「なん・・・なんだテメー・・・!」

「なんだ手前と聞かれたら、答えてあげるが世の情け！ 世界の平和を守るため、宇宙の平和を守るため、愛と真実の悪を貫く！ ラブリーチャーミーな敵役！・・・なーんてね。ネタばらしをすると、今までXANXUSが戦ってたのは俺のコピー。それも失敗作で俺の百分の一ぐらいしか力が出ないんだよね・・・。だからさ、適当なピッチの場面に入れ替わるつもりだったんだけどまさかまさかの勝ちちゃったからさー。思ったよりXANXUS弱いね」

「・・・ツー」

オメーが強すぎるんだバカ。と、観覧席で呟いたりボーンの声はツナには届かない。あ、でも。とツナは付け足す。

「XANXUSは弱くない。とつても強いよ。だってヴァリアーのボスになれたぐらいだからね」

「!」

XANXUSがツナに認められたという事実にし嬉しそうな顔をした。そして、ツナは飛び降りながら右手の指に大空のリングをはめた。

「そう、決してXANXUSは弱くない。ただ、俺が強すぎただけだ」
ツナはそう言つて、ボンゴレリングから大いなる力を受け取った。
「へえ…大いなる力つてそーゆー？ 俺にパワーは十分とふんで…
こーいう物を渡してきたかー…」

ツナの眩きに全員が首を傾げる。と、ツナの次の言葉は想像だにしないものだった。

「もう、さ。邪魔する奴は片っ端から肉片に変えていいんじゃないかな？」

「…性格面での力を与えやがった!？」

リボーンが愛する生徒の急激な変化に対応できず悲鳴に似た叫びを上げる。

「ハツ…おい沢田綱吉」

「なに？」

「楽しかった。敵わなかったが、これだけは言える…。てめエは裏の社会の頂点に立つような人間じゃねえ」

「そう？」

「裏の世界も表の世界もひっくりかえしてぶっ壊し、自分の都合の良いように作り替えるような人間だ」

「そこまで非道じゃない気がするんだけどなあ」

「…いざれ分かる」

「オツケー。考えとく」

「だが。このまま俺が終わると思うか？」

「思わねーな。まだなんかあるの？」

「お前の言う通り、全部ぶっ壊すだけだ」

「？」

「今回の件に関係した者、全ての抹殺のため…総勢五十名の生え抜きのヴァリアー隊が間もなく到着する」

「？」

それぞれの守護者が殺気立つ中、チェルベツロがヴァリアーの失格を宣言する。さらに、リングに適正のあるツナが全てを揃え大いなる力を受け取ったことも踏まえてツナの勝利だ。

だがXANXUSの計画は止まらない。そうなることも計画の内だったのだろう。

共に闘おうとする観覧席の面々だが、細工された観覧席から出ることが叶わず、ただ見ていることしかできなかつた。

そして到着したのは、ヴァリアーの隊服を着た男達。

挟まれた形となった獄寺達が警戒を強めたその時だった。バタバタとその男達が倒れ、一番大柄な男が呻くように報告する。

「報告します。．．我々以外のヴァリアー隊全滅！ 奴は強すぎます！ 鬼神のごとき男が、まもなく．．．」

その報告の途中に巨大な鉄球が飛来して、男達をなぎ倒した。

「ぼ、暴蛇烈覇！」

「!!?」

「あの人．．．ずっと骸様の話しかけてた」

「奴は．．．!」

クロームが呟き、獄寺が目を丸く見開いてその姿を見つめる。

「取り違えるなよ、ボンゴレ。俺はお前を助けに来たのではない。」

礼を言いに来た」

「．．．ランチアさん」

愕然とツナが呼んだ名を聞いたマーモンとスクアアロが顔を青ざめさせた。

「．．．アイツ、何者？」

ベルフェゴールが首を傾げ、スクアアロがモニターを凝視しながら呟く。

「北イタリア最強と恐れられたファミリア惨殺のランチア．．．」

「あ、アイツ、あんなに強えんらっけ？」

「強いよ」

犬が以前とは比べ物にならない力を見せるランチアに驚愕していると、千種はそう答えて俯く。

「他人に操られるのではなく、自分の意志で闘うアイツには迷いが無いからな」

そしてツナは炎を拳に灯して言い放った。

「俺、ボンゴレ十代目になるつもりないからね？」

「……………一つだけ言っとくぜ。綱吉」

「あんだよ」

「誰にも、負けんじやねえぞ」

「様子見のコピーが負けることはあるかもしれないけどねん」

こうして大空戦の勝者はツナに決定した。

守護者同士のリング格闘戦もこれにて終了。

第三十六話 パーティ

(昨日は・・・色々あったなあ・・・・・・・・)

しみじみそんな事を考えながらツナは起床した。いつも通り階段を降りてリビングに向かうと、目的地から笑い声が聞こえてきた。

「世話になってるぞ」

「ランチアさん。その、昨日はどうもありがとうございます。というか、どうして・・・？」

「その話は後だ」

「ツナも着替えなさいよ」

「出かけるからな」

「出かけるつてどこへ？」

「ぱーちーだ」

「・・・・・・・・ツ！」

「笑うんじゃねえ」

「昨日何があったかもう忘れちゃったの？ おめでたい事あったでしょ？」

「え？ 昨日・・・？」(ヤバい。リング争奪戦ぐらいしか分かんねえ！)

「ランボ君が退院したでしょ？」

「あー。そっち」

「山本ん家集合だからな」

「山本の家つて・・・寿司屋？」

「言われた通りツナは準備をして山本の家に向かう。

「・・・こんばんは」

「へいらっしやい。ツナ君御一行！」

「ツナ君！」

「ツナさん！」

「十代目!!」

「みんなそろってるんだ・・・」

呆れたように言うツナに、獄寺が駆け寄ってくる。

「十代目っ。表向きはアホ牛の退院祝いスけど、間違いなく今日は祝勝会スから!!」リング争奪戦の!!」

「あ、うん」

「やりましたね!!」

「あ」

「だな!」

「うむ」

獄寺や山本達はそう言っ指に着けたり、ネックレスとして首からかけたボンゴレリングを見せてくる。

「もうみんなに行き渡ってるんだ・・・」

「ヒバリとクロームにも行ってるはずだ。ほれ、これがお前のだ」

「俺にはウラヌスリングがあるんだけどな・・・」

ツナは渋々ボンゴレリングを受け取ると右手の中指にはめる。ウラヌスリングは左手の中指にはめる事にした。

「しかし最後までボンゴレ十代目にはならねえなんて言いやがって」

「当たり前だろ。俺はマフィアになんてならないの」

「ハハハ。往生際の悪い奴だな」

ツナとリボーンがそう言っていると、ディーノが笑いながら会話に入ってきた。

「それに九代目は無事だったんだ。今すぐツナが十代目になるわけじゃないぜ?」

「そーゆー問題じゃないんですよ・・・」

「あんなチビもやる気なのか?」

「は?」

「この指輪ねえ。ツナからもらったの」

(うそつけー!!)

ディーノの視線の先には、京子とハルに雷のリングを見せながらそんな事を言うランボがいた。

「アホ牛の奴。シメてやろーか!!」

「まーまー。ランボも頑張ったじゃねえーか」

「つたく・・・。まあいいっス! 十代目!! んじゃあ今日は未来の

ファミリアについて熱く語り、盛り上がりましょう！」

「え」（それは盛り下がるな……。っていうか、将来マフィアやるつもりないし……）」

「聞いたよツナ君！ 相撲大会、勝ったんでしょ？」

「う、うん……」

「そのお祝いもしよーね」

「ありがとう。お守りも、ありがとね」

ツナはお礼を言っつて、少し前が出る。すると、耳元で京子の声が聞こえてきた。

「お帰り、ツナ君」

「ただいま、京子ちゃん」

「イチヤイチャしてる暇があったら食べなさい」

「え!? い、イチヤイチャしてるわけじゃ……」

「じゃあいただきますーす」

慌てる京子に対し、ツナは何も気にせずビアンキのポイズンクッキングを口に運ぶ。獄寺はしっかりと心構えを持っていればビアンキの顔を見ても平気になっていた。

「うん。毒だから仕方ないのかもしれないけど、もう少し味と見た目を何とかしてほしいな。食べるこっちの身にもなってほしいよ」

「そ。考えておくわ」

「ありがと。……どしたの京子ちゃん」

ツナが振りかえると、何故かふくれっ面になった京子がいた。ツナは何をしたのかよく分からなかったため、そのような質問をしたのだが、返ってきた答えは

「……なんでもない」

っん。と顔をそらした上でのそんな一言だった。

「……?」

と、そこでツナの携帯電話が着信を知らせる。ツナはその場の全員に謝って一度店の外に出る。

「……はい。沢田です」

『……ボス?』

「やっぱり風か。どうしたの?」

『・・・おめでどう。やったね・・・! つて言いたかった』

「・・・ツ」(何この可愛い生き物ツ!)

『・・・ボス? あ。もしかして電話の向こう綱吉さんれすか? ・・・

そうだけど。 変わるびよん! ・・・うん。 ・・・あ、もしもし

綱吉さん?』

「犬? どしたの?」

『特にないんれすけど・・・。 その、お疲れ様でした』

「ん? ありがとう」

『綱吉様。 おめでどう』

「千種・・・、ありがとね」

と、そこでツナのケータイにキャッチフォンが入る。

「ご、ごめん。 キャッチフォンが入った。 用事も済んだみたいだから切るよ!」

ツナは一度黒曜組の通話を切り、新しく入った方の電話に出る。

「はい。 こちら沢田——」

『お兄ちゃんっ! おめでとー!!』

「ま、真美ちゃん!? どうしたの!?!」

『聞いたよ、聞いたよ! 私はいろいろ聞いたんだよお兄ちゃん』

「な、何を聞いたのかな・・・?」

『ふふん。 聞いて驚いてね? お兄ちゃんがシモンと因縁の深いボンゴレの子孫だという事をね!』

ふっふーん。 という得意げな鼻息と共に聞こえてきた衝撃発言に、ツナは思わず笑ってしまう。

『お兄ちゃん?』

「・・・ごめん。 どこで知ったのか知らないけど、 まだみんなには秘密にしておきたいな」

『お兄ちゃんと私の秘密?』

「そ、秘密。 もちろん炎真にも」

『炎兄にも・・・。 うん、分かった。 指切りしよっ!』

「こんなに離れてるのに?」

『大丈夫！　じゃあ行くよ！』

『指切りげんまんウソついたら「大空の冷気で氷漬け♪」指切った
!!』

「……………」

『……………』

「…………何言ってるの？　真美ちゃん？　大地の炎は洒落にならないよ？」

『お兄ちゃんこそ。大空の冷気は冗談じゃないよ？』

『約束を守ればいいんだよ。……………だね』

——この時ツナは、寿司屋から聞こえてくる喧噪に耳を傾け、こんな日々が続くと考えていた。

まさか。

「リボーン!!　どこだ!!　…………どこに行きやがったんだよ!!　リボーン!!」

リボーンがこの世からいなくなる日が来るなんてまったく考えもせずに。

未来編

第三十七話 消えたりリボーン

全てはあの日に始まった。

「待って！」

ツナは制服を着て朝から走っていた。

「待ってよ。二人とも！」

「沢田殿！ リボーンさん！」

「ボンゴレか」

「な、何も言わずにイタリアに帰るなんて……」

「すみません。急な招集がかかったんです。みなさん、お忙しいと思
いまして……」

「オレは、湿っぽいのが苦手だな」

「ランチア。クロームに聞いたんだが、お前が骸に呼ばれてきたって
のは本当か？」

リボーンのその言葉にランチアは何か思う所があったようだが、す
ぐに取り繕う。

「……。いや。骸とはあれ以来一切接触がない。ただ、大空戦の前
日に妙な虫の知らせがあったのは確かだ。奴に長時間操られていた
ために、他の人間よりも奴の考えを感じ取りやすくなっていたとした
ら、皮肉だな」

「……ランチアさん」

「気にするな。骸を許す気はないが、これでお前の役に立てたのなら
ば本望だ」

「また……亡くなられたファミリーの家を回る旅ですか？」

「ああ。一生をかけて償う事しか、オレにはできんのでな」

「……」

「そうだ。こいつをお前にやろう」

「へ？」

ツナはランチアから黒い指輪を受け取った。

「オレのボスの形見だ……ボンゴレリング程立派なもんじゃねーけどな」

「は!? そんな大事なもの……!」

「遠慮はするな。これはオレの意志だ……」

「これは拙者からです。沢田殿に合うか分かりませんが、もしもの時使ってください」

「へ?」

「見送りはここまで結構です」

「ああ」

「で、でも」

「あ」

ツナが引き留めようとした所で、彼の足元を黒いアフロが通り抜ける。

「ランボさんもピクニック行く!!」

「あ! こら! ランボツ!!」

「では」

「……気を付けて!」

「バイプウ〜!」

「ったくランボは……」

「本当ウゼーな。……ところでバジルに何もらったんだ?」

「ん? ……そう言えば……。! これは……、死ぬ気丸!」

「アメ玉っ」

ランボの反応を無視してツナは落ち込む。

「これ……もらっても使い道ないよ……」

「そんな事は……あるかもな。オメーは自分の意志で死ぬ気になれる。だが、とっさの時にそれを飲めばいいだろ」

「なるほど……」

「ちようだい」

「アメ玉じゃないんだぞ!? 食べたなら死ぬ気になるからダメだ!」

「それに死ぬ程ウザくなる」

「あら。リボン! 今のコチンときた」

「・・・それを言うならカチンだろ？」

「チンコ？」

「どんな耳してんだよ」

「やっぱウゼーな。・・・」

リボーンの手の中でレオンが何かに形を変えていた。

「暴蛇烈覇!!」

「ぐびや」

「蛇鋼球!？」

「が・・・ま・・・、うああああ!!」

「何やってんだよりボーン・・・」

「堪忍袋の緒が切れた」

「キレやすいなあ・・・。ランボはまだ退院して日が浅いんだぞ・・・？」

「リボーンのバカ者がー!! タレマユのくせに!!」

「十年バズーカ!? ちよつ待てランボー!」

ツナが慌てて止める横で、リボーンは地面から手頃な石をとった。

「星になれ」

「ぐびやっ!!!」

リボーンが投げた石で十年バズーカはあらぬ方向に撃たれ、弾が方向転換してツナ達の方に飛んでくる。

「と、飛んできた・・・」

「ん・・・・・・? やべーな。動けねえ」

「は?・・・じゃあ未来を楽しんでおいでよ。未来のオレがどんな人か教えてね」

「ふぎけてねーで助け——」

リボーンがそう言うが、時既に遅し。ミサイルはリボーンに直撃し、煙を上げて消滅した。

しかし。

煙が晴れたその場所には10年後どころか、現在のリボーンすらも存在していなかった。

「あれ。リボーン・・・? 消えた・・・? 十年後つてリボーンいな

いの・・・？ ま、五分後には帰ってくんだろ！ なーんだ期待したのに損した気分だぜ。かーえろ」

——翌日。

ツナは私服で街中を駆け回っていた。音速の域で。

「なーんでリボンヌは帰ってこないかなー？」

そんな風に飛び回っていると、ツナは遠くに獄寺達を見つけた。

「なんで獄寺さんもツナさん家行くんですか!？」

「通販で買った土産の生八つ橋をお渡しするんだ!!」

「通販はお土産じゃないです！」

「ちよつといい。二人とも」

「ツナさん！」

「十代目!!」

「あのさ。リボン見なかった？」

「はひ？」

「リボンさんが、どーかしたんスか？」

「実はさ、帰ってこないんだよ」

「帰ってこない？」

「十年バズーカに撃たれたのは昨日だよ？ ・・・まだ帰ってこない」

「昨日!?! ・・・っていうか十年バズーカって何ですか？」

「知らないなら知らないでいいよ・・・」

ハルは知らないんだったなー・・・。なんて遠い目をしながらツナは言う。

「・・・ツ。とにかくリボンさんを探しましょう！」

「あ、そうだね」

「はひ・・・」

「オレは学校に行きます！」

「ハルは山本さん家に！」

「じゃあ・・・、俺は公園の方でも」

ツナはそう言いながら跳んだ瞬間。名案が出てきた。
(大人ランボに聞けば一発じゃん！)

靴を履いたまま窓から帰宅し、ランボに話しかける。

「ランボ！ 十年バズーカで入れ替わってくれないか!？」

「何言ってるんのツナ。ランボさんは十年バズーカなんてシ・リ・マ・セ・ン」

「ランボが知らなくてもこっちは知ってるんだ！ 急いでるんだ。貸してくれ！」

頭から出ている十年バズーカを引っこ抜いて、ランボと奪い合うツナ。その拍子に十年バズーカは発射された。

（あ。．．．これもしかして未来行くヤツ？ 十年後かー。どんな風なんだろ？）

そして、ツナは十年後に転移した。

「ソロモンよ！ 私は帰ってき痛アツ!？」

勢い良く身を起こしたツナは天井に頭をぶつけた。

「．．．いやいや。棺桶じゃん。俺は確かに吸血鬼だけどさあ．．．」
ツナはぶつぶつ文句を言いながら狭い箱の蓋を外す。

「もしかしなくても十年後．．．。これはあれだ、俺氏死亡www」

「あ．．．．．、あなたは．．．!」

第三十八話 十年後の平行世界

「あ、獄寺君?」

「十代目!」

「はいはい。綱吉さんです」

「・・・おちついて、いらっしやいますね?」

その言葉にツナは確信を一つ持つ、そもそも沢田綱吉が神上の統魔簡単に死んでいる時点でおかしいのだ。

「まあね。・・・もしかして。ひとつ聞いてもいい?」

「は、はい。なんでも」

「六道骸ってどんな奴?」

「・・・守護者ですけど。マフィアを恨んでる。そんな男です・・・?」

「あ、なるほど。これは平行世界だわ」

「へいこ・・・?」

(そもそも。『マーレの大空と甘味を仲良く食べた過去』がある時点でこの事件ないと思ってたんだけど、そうか・・・平行世界に飛ばしてきたか・・・)

どうも自分の暮らしていた時間軸とはかなり違う歴史を刻んでいると知り、ツナは余計なことを口にしない方が良いと判断する。

「いいですか、十代目。過去に帰ったら、この男を探してください」

「へ?」(正一君大人っぽくなったなー・・・)

「こいつさえいなければ・・・ミルフィオーレも・・・白蘭もこれほどまでには・・・」

「白蘭・・・」(マーレの大空ってそんな名前だったよね。ビャクラン)

「次に念のためですが・・・」

「獄寺君」

「な、何でしょう」

「ありがとう。そんなになるまで俺の事心配してくれてたんでしょ?」

大丈夫。俺が何とかするから」

「十、代目っ!」

と、そこで目の前の獄寺が煙に包まれる。

「十代目え・・・?」

「獄寺君・・・」

「あ。十代目も十年後に来てたんですか・・・」

「同じ時間軸かな?」

「?」

「獄寺君。俺の拳は?」

「空気も潰しますっ!」

「うん。同じ時間軸だ」

ツナは納得したように頷くが、どうも獄寺は理解できていないよう
で、

「何が起ってるんですか?」

「えーつとね。ここは違う過去から派生した未来・・・所謂平行世界つ
てヤツなんだよ」

「はあ・・・なるほど」

「この状況。一言で言うとなカオスだね・・・」

「カオス・・・ですね」

ツナはお腹が減ったのか、影の中からパンを出して食べ始める。

「しかし、ここ・・・どこなんスカね」

「並盛じゃない? ってか並盛希望」

「日本じゃないってことも考えられますね」

「外国かあ・・・」

「・・・やはり」

「! 誰だ!」

(誰だ! 誰だく♪ なんて言ったら怒られるよね)

「初めまして、さようなら」

「ん?」

「敵!! 十代目!! 下がってください。ここは俺に!」

「じゃ、未来での力量試しと行こうよ!」

ツナは軽くそう言って、バックステップでその場を離脱する。獄寺
はダイナマイトで攻撃をするが、攻撃を返され。さらに拘束された。
「おーい。獄寺君大丈夫?」

「すみません……」

「やはりリングを使いこなせないのか……。宝の持ち腐れだな」

「リングを使いこなす……?」

「何それ」

「オレを恨むな。死ね」

「お前が死ねよ。もう」

ツナはそう言つて、相手と一気に距離を詰める。そして力を最大限に抜いた手刀を叩き込んだ。

「うっつ」

「よつと」

「ぐうっ」

「……どしたの?」

「なる……、ほどな……」

「女!」

「なかなかどうして。見所はあるようだな沢田綱吉。オレが全力を出してもお前の戦闘能力には及ばないだろうぜ……。最も……、旧時代的においてな」

「?」

「それだけではこの時代。生きてはいけないぜ!」

撃ち出された弾丸に混じつてツナの前に姿を現したのは、

「む、ムカデ……!」

うごうごと動く多足の虫、大きさをのぞけばそれはムカデと称するものだ。

だが、大きさは最大種の数倍あり、頭部に何やら紫色の炎のようなものまでまといつていた。

「10代目!」

「はあ……。ムカデだけは苦手なんだよなあ……」

そう言つたツナは、自らの周りを囲むムカデを初代零地点突破の両手でつかみ、凍らせた。

「——ッ。なるほど、どうやら聞いていた情報よりできるようだな」
「……あんた誰? こっちはまだ死ぬ気にすらなっていないんだけど?」

「!? ……オレの名はラル・ミルチ」

獄寺を拘束していた罫が解除され、ツナの方に駆け寄ってくる。

「十代目、お怪我は!?」

「してないよん」

「派手に暴れすぎた。このままでは奴らに見つかるのも時間の問題だ」

「奴ら……?」

「敵でしょう」

「これをボンゴレリングに巻き付けろ。マモンチェーンといって指輪の力を封印する鎖だ」

その鎖を拾ったツナはポツリと呟く。

「これさ。マーモンがおしやぶりに巻いてたのと似てない?」

「マーモン、チェーンですから、働きは似たようなものなんでしょう」
「帰れたら聞いてみようか。これの仕組み」

「今から対策を練っておくのもいいですもんね!」

「……?」(こいつらヴァリアーと仲良しなのか……?)

その後暫く、歩いて夜が深くなってきたので野宿をすることにした。

「えー? マジで?」

「文句を言うな」

「どこにあるかさえ分かれば走って行けるんだけどなー……。一人で」

「置いていかないでくださいよ、十代目!」

「大丈夫大丈夫」

何が大丈夫なのか小一時間程問いただしたくなった獄寺だが、ツナ相手にそれもできないため断念する。

「……お前達のごとは、写真でしか見たことがない」

「?」

「だが、十年バズーカの存在と面影で、何者か識別できた」

「……?」

「時間ができたんだ。知ってることを話してやる」

「あ、ありがとうございます」

「オレは、ボンゴレ門外顧問の組織に所属している」

「父さ……沢田家光の？」

「じゃあ、お前は……味方なのか」

「ああ……。ボンゴレ全体に緊急事態が発生したため、十代目ファミリーの状況を調べる命を受けやってきた」

「緊急事態？」

「そうだ。ボンゴレ本部は二日前に壊滅状態に陥った」

その言葉に驚いた二人だが、状況が聞きたかったツナが獄寺を黙らせ続きを促す。

大体の状況を聞いたツナが質問を口にした。

「つまり、そのミルフィオーレとかいうファミリーがボンゴレを潰しに来てるってことですか？」

「ああ、そうだ。……アルコバレーノはリボーンも含め皆死んだ。その他のにも何名か関係者が死んでいる」

「そう……。ですか……。何か音が聞こえない？」

「音？」

「——!!」

「？」

「敵だ！ 感傷に浸ってる場合ではなくなった。奴らは強い！ 見つかったら終わりと思え！」

「マジ？」

「喜ばないでくださいよ十代目……」

岩の影に隠れたツナ達は、視線の先について最近見た機械兵を見つけた。

「ゴーラ・モスカ！」

「ゴーラの二世代後の機体だ。ストウラオ・モスカ」

彼らが息を潜めながら話していると、突如モスカがこちらを向く。

「気付かれた？」

「見つかるか。ストウラオはリングの力を感知するシステムを搭載しているが、マモンチェーンでリングの力は封じているだろ？」

「こっちは来てるけど……」

「? バカな……。お前達、ボンゴレリング以外のリングは持っていないな!？」

「あー! あー……。昨日ランチアさんにもらったリング……。」(あとウラヌスリング……。)

「そのリングは……。! 何故話さなかった!？」

「これも力あるリングだとは思わなかった……。としか……。!」

ツナはカラ笑いしながら目線をそらす。

「三人でも倒せる相手じゃない! 全滅だ……。!」

「へっ弱気じゃねーか。自慢のリングの力とやらは役に立たねーのかよ」

「戦いは力だけではない! 相性が重要なんだ!!」

「——確かに相性は大事かもしれないね。でもさ」

一瞬の間を置いて、爆発音がその場に響く。獄寺達がその方を見ると、腰すら入ってない腑抜けた体勢で拳を振り抜き、燃えるモスカの残骸の前に立ったツナがいた。

第三十九話 アジト

「じ、十代目！」

「や」

「つと……助っ人は要らなかつたみたいだな」

「あ、山本……は、まだ入れ替わってない、と」

「……？ ああ、十年バズーカ！」

「それそれ」

「まあ、行こうぜ。アジトまで」

「おい……。走らないのか？ 歩いていては朝までかかるぞ」

「そっか。言つてなかつたな。お前の知ってるアジトの在処の情報はガセなんだ」

「……？？」

「もし敵に捕まつて情報を抜き出されてもウソの情報が渡るように、だね」

「ん。オレを見失わないように着いてきてくれ」

スーツから小箱を取り出しす山本。そこから何かが飛び出すと、ポツポツと雨が降り始めた。

「防犯対策のカモフラだ。よそ見はするなよ？」

山本の言葉と同時に、雨がシャワーのように強く激しく降り始めた。

「いって！ イテテッ！」

「こつちだ」

山本の言葉に導かれて、そこに向かえば草むらに隠れて地下通路の入り口があった。

「え」

「マジか……」

「アジトって地下にあるの？」

「ああ、そうだけ」

ツナは物珍しそうにキョロキョロ見回す。

「ここはボンゴレの重要な拠点として、急ピッチで建造中だったん

だ……。今んとこ六割方できてるってトコだな」

「ボンゴレスゲー……」

「ハハハ。いいこと教えてやるっか？ この時代のツナがゼーンぶ決めて、作らせたんだぜ」

「え？ つ、つまり……。予想してたけどこの時間軸の俺、ボンゴレ継いでんのーっ!？」

うわーっ。とかあんまりだーっ。とか叫びながらゴロゴロ転がるツナ。リボーンがいたら突っ込んでいただろうが、守護者達はツナの突然の行動に慌てるばかりだった。

「……ま、俺がボンゴレを継がなきゃいいだけの話か」

「ハハハ」

「おい、あの装置はなんだ？」

ラルが指さす方を見れば、ゲートのようなモノに光の柵が張ってある。

「ああ、あれはメカニックのジャンニーニの作った、なんとかって物質をさえぎるバリアだそうだ」

「……うっ。うぐっ……」

突然倒れたラルを見て、山本がその傍にしゃがみこんだ。

「おまえもだったのか……!」

「えーと？ もしかしなくてもこのバリアのせい？」

「ああ……、環境の急激な変化のせいでショックを受けたんだ。……ここは彼女達にとって外界とは違う作りになっているからな」

「ふーん」

山本の案内でさらに基地内を進み、ツナと獄寺は応接室のような部屋に通される。

「おせーぞ」

「!」

「ちやおっス」

「り、リボーン!」

「だきしめて♡……こっちよ!!」

背後から攻撃する気満々でリボーンが飛び蹴りをしているのに気

づいてから、ツナは行動を開始した。流れるような動作で彼の攻撃を避けたツナは、その頭を鷲掴みにして宙ぶらりんにする。

「こっちが心配になって探していれば、そっちはコスプレして楽しんでたつてののか？ いったいどういいう見だ。あゝあゝ!？」

「あ、いや。その・・・ちよつとした出来心で・・・」

殺気よりも怒気を強く放出するツナに、思わずリボーンも敬語になる。

「へえー。何だかとっても危険な状況だつていうのに、随分と余裕だね。流石最強の殺し屋といった所かなあ？ センセイ？」

「いや、ホント。スイマセン」

「うん。別にそんなに怒ってないし。いいよ」

家光が怪我を理由にイタリアから帰ってこなかったため、ツナに作文の練習として家光宛の手紙を書かせたりリボーンは、原稿用紙数百枚分（二百からは数えていない）にぎっしりと書かれたツナの日頃やりとり争奪戦の件の不満、文句を綴ったお手紙をイタリアにいる家光に送る羽目になった。（途中書きながらツナがクフフとか笑っていたがリボーンは無視した）

後でリボーンは知ることになるのだが、ツナが書いた手紙の最後には送られた相手を読み終わると同時、用紙全てが発火するという術式が書かれていて、その事でまた一悶着あるのだが。（この事を知ったリボーンはこれまで以上にツナに対して節度を守って接しようと思えるのだった）

「悪かったな」

「ま、いいよ」

ツナはリボーンの体を比較的柔らかくようなソファアに向かって軽く投げる。

「よつと。・・・危ねえ」

綺麗に着地したりリボーンだったが、その時足元が少しふらついた。

「調子・・・悪いのか？」

「まあな。このスーツを着てないと体調最悪だったんだ。外のバリアもオレのために作らせたんだぞ」

「そのスーツ意味があつたんだ・・・」

「そうだぞ。まあ、期待してたらワリイがオレにも分からない事だらけだな」

「ここは？ 並盛？ 並盛だよな？」

「・・・そうだぞ。ここは並盛。だから、お前達の問題だ」

「何が起きてるのさ」

「現在、全世界のボンゴレ側の重要拠点が同時に攻撃を受けている。もちろん並盛でもボンゴレ狩りは進行中だ」

「ボンゴレ・・・」

「狩り・・・？」

「お前達も見たはずだぞ。ボンゴレマークのついた棺桶を」

「あ、俺が出てきたヤツか」

「平行世界の十代目は軟弱なんですかね」

「多分ね。殺されてはないと思うけど。黙って殺されるような人間じゃないからね。沢田綱吉って人間は」

「・・・なんかツナがチゲーのな。昔だつてのに今のツナを相手にしてる気分だ」

「平行世界だからね。違う部分も多々あるさ」

「ツナはあつけらんかんとそう言った。そして、急に真剣な顔になるとこう言った。」

「向こうの人間の目的はボンゴレ陣営の人間を全員消すことでしょ？
だつたらまず・・・こっちの世界にもいるであろう、守護者を集めないよね」

「他の奴らは？」

「ランボ&イーピンは、俺がラル・ミルチを迎えに出て行くのと同時に、笹川とハルを迎えに行った。ビアンキとフウ太は情報収集に出ている」

「ふーん。何か情報はないの？ 特に雲雀さんとか」

「あるぜ。といってもこれだけだけだな」

「・・・これってバードの鳥・・・？」

「今はヒバリが飼っていて、ヒバードって言うらしいぞ」

「それ誰の命名だよ・・・」

「ま、並盛大好きのアイツのことだ、この辺りにいるに違いねえぞ」

「うん、そだね。とりあえず外に出る前に・・・、山本、匣兵器とリングを見せてもらえる？」

「ん？ 良いぜ」

山本から手渡された物を見るツナと獄寺。

二人してあーでもないこーでもないと言いながら仕組みを理解しようとするその姿は、どこか子どもらしさを感じた。

と、そこで山本は獄寺の持つアタツシユケースに目を向けた。

第四十話 再会

「おい、獄寺。それ……」

「ん？ ああ、未来こっちのオレの所持品だったみたいだから勝手に持ってきた」

獄寺はそう言いつつ、テーブルの上でケースを開ける。ツナも気になるのかのぞき込むように近づいてきた。

「メモ帳、筆記用具に、タバコ、ハンカチ：髑髏のアクセサリー：なんだ……？ これ」

コケむした箱と、封筒を発見する獄寺。

「手紙？」

「はい。十年経っても紙の手紙かよ……。!?」

「何が書いてあるの……？ 絵？ これなら紙の手紙で納得だね」

「これはG文字だ!!」

「G文字？」

「ゴクデラ文字といって、中一の時授業中にオレが考え出した暗号です」

「何やってんの、授業中に……」

ツナは授業をマジメに受けるよと続けたかったが、自分のことを棚に上げるわけにも行かず、口を閉じた。

「えーと……。シユ……ゴ……シャ……ハ……シユウ……」

ゴウ……。ダメだ、途中で読めなくなってます」

「守護者は集合？ ……まあ、そのまま捉えて召集命令でも出すんだろうね」

「かもしれませんがね……」

「それで、こっちは……ボロっちいけど、匣兵器？」

ツナが獄寺の手の上に乗るコケむした箱を指して言う。

「あ、そういや……アイツ、スゲーのを見つけたって言ってたような」

「スゲーの、か……コレは死ぬ気の炎で開くんだろ？」

獄寺がそう訊けば、山本は獄寺やツナの前にリングをはめた手を差し出す。

「人間の体には、血液だけじゃなく見えない生命エネルギーも波動となって駆け巡っている。リングにはそれを死ぬ気の炎に変換して生成する力があるんだ。・・・こんなふうにな」

山本が填めたリングに青い炎がボツと燃え上がり、彼はそれを匣兵器の穴にはめた。すると、青い炎をまとった燕が山本の肩に乗る。

「それ、ラル・ミルチのムカデは紫の炎だったぞ」

「そう言えばバジル君の死ぬ気の炎と同じ色・・・」

「あ。言い忘れてた。この波動には七つの種類があつて、自分の素質に合致した波動が出るようになってる・・・。守護者の役割と同じと思ってもらえれば」

ツナと獄寺の疑問に答え、山本は燕を匣兵器の中に戻した。

「獄寺君。鬼が出るか蛇が出るか分からないけど、その匣兵器開けてみない？」

「これをつスカ？」

「そうそう。どうやら俺達はミルフィーユって言うマフィアを倒さないと過去に戻れそうにもないからね。この時代の戦い方を知っておかなきゃ。俺には必要なさそうだけど」

「ハハ。十代目は無敵っスから」

「あと、ミルフィーユじゃなくてミルフィオーレな」

「え。そうなの？ あつぶね。向こうの人に失礼になる所だった」

「えっと・・・リングに炎を・・・」

獄寺はぐつと拳を握りしめてリングに集中するが、リングには何の反応もない。

「獄寺、イメージだ。覚悟を炎に変える、そうイメージしろ」

山本が口を開く。

「覚悟・・・か。なるほどな」

山本のアドバイスを聞いて、笑った獄寺は、肩の荷が下りたようにリングに視線を向けた。

獄寺はとうの昔に覚悟ができていた。沢田綱吉の守護者として、自らの命を無駄にせず、ボスをファミリーごと守り抜く。それが獄寺の覚悟だった。

その瞬間。赤く荒々しい炎が獄寺のボンゴリングに灯される。

山本の静かな青い炎とは全く違うその形状に、獄寺は守護者の役割を思い出した。

「常に攻撃の核となり休むことのない怒濤の嵐……か。だったスよね？」

「合ってるよ？」

「属性を持つ死ぬ気の炎にはそれぞれ特徴的な力があって、大空は調和、嵐は分解、雨は沈静、晴は活性、雷は硬化、雲は増殖、霧は構築だ。匣兵器もそれに合わせた力を持つ場合が多いんだ」

「ってコトは、俺は……、分解の力を持つってわけだ。物質の『分解』っていうんなら、攻撃力は結構ある方なのか？」

「そうだな。嵐は攻撃力で言うなら六属性随一だ。……大空は絶対数が少ないから、比較対象には出来ねえし」

「大空は貴重なんだねー」

「十代目、開けてみてもいいですか？」

「うん。いいよ」

ツナに何故か確認をとった獄寺は見よう見まねで匣兵器に炎を注入する。そして、匣兵器が開くと、獄寺の腕にドクロ型のガントレットのようなものが装着された。

「イ……イカスぜ」

「そういうデザイン好きなんだね……流石獄寺君というか何というか……」

「ハハッ、こういうトコは俺の知ってる獄寺のまんまなのなー」

「で？ 結局どう使うんだ？ コレ……」

獄寺が使用方法に首を傾げた時、ガントレットの上部に文字が浮かび出る。

「……あ？ 弾を食わせる？」

「弾になりそうなものなんてあったかな？」

「うーん……ダイナマイトとか食わせてみます？」

「いいね！」

「……おい、オメエら。分かっているとと思うがここで試すなよ？」

今にも何かやっちゃまいそんな雰囲気のままツナと獄寺にリボンが注意をすれば、二人して心底残念そうな表情をうかべた。

「そうっすね・・・、ここじゃ危ねエでしょうし。やるなら思いっきり撃てるトコがイイっす」

「ハア。いい的さえあればなあ・・・。獄寺君にぶっ放させるのに」

ツナはため息をついてぶつぶつと文句を言ったあと、空気を変えるためにも一度手を叩いて明言する。

「じゃ、とりあえず守護者を集めよう」

「はい！」

「そうだな」

「ま、ツナもいることだし特に心配してねーが、死ぬなよ」

「なーに。お前達はこの時代の俺達が失ったすんげー力を持ってんじゃねーか」

「失った？ 力・・・？」

「・・・お前達は希望と共に来てくれたんだ。ボンゴレリングっていうな」

——外。

ツナ達が次にでた地上は先程の森ではなく、五丁目にある工場跡だった。

「で、山本。結局ボンゴレリングはどうなったの？」

「あー。大分前にリングを砕いて捨てちまったんだ」

「捨てた？ また誰が・・・」

「うちのボスさ」

「あ、俺がしたんだ。まあいいや」

「軽いつすね」

「必要ないって思ってたんだらうよ。今じゃ必要不可欠になってるみたいだけど」

「そのとーり」

と、その時。視線の先で爆発が起きる。

「！！！！」

「ごつちです！」

「急いで！」

「？」

噴煙の中から飛び出してきた声にツナが「目を凝らす」。

「あ。ランボ、イーピン!!」

「誰かを連れてるな」

「それって……」

「京子さん、ハルさん。逃げて!! ここは私が!!」

「でも!!」

そこに嵐の炎が叩き込まれ、再度爆発を起こす。

「きやあ!!」

「上か!!」

「あれって下手な兵器より強いんじゃないの……？ 嚴重な取り締まりが必要だね……」

「とどめを刺してこい」

「まかしてよ。兄弟^{ブロー}」

そこには炎をまとったブーツで空を飛ぶ、隊服なのだろう揃いの黒の服を着た男達がいた。

第四十一話 覚悟とリングの力

「ミルファイオーレのブラックスペル」

「ブラック・・・スペル・・・？」

「京子ちゃん達もあそこにいるんだよね？」

「いくぜ！ ボンゴレリングからマモンチェーンをはずせ！」
「!!」

ツナと獄寺はとりあえず言われた通り行動する。

「じゃあオイラがもらう！ 手エ出すなよ、太猿兄貴」

「しつかりやれよ野猿」

「くっ」

「うわああん!!」

「うろたえないでランボ!! 京子さんとハルさんをお願い!!」

「その体じゃ無茶だよイーピン!!」

「へっへー」

野猿は匣兵器から死神の持つ鎌を取り出した。

「じゃあ行くぜ！ オイラの得物達!! ショアツ」

野猿が鎌を振るい、死ぬ気の炎を飛ばす。が、その攻撃が拡散されたエネルギーに吹き飛ばされる。

「十代目。どーっスか？ この赤炎フレイムアローの矢の威力」

「うん。純粹にすごいと思うよ」

「兄貴。誰だこいつら」

「抹殺者リストに載ってたかも知んねーが、消えていく人間をいちいち覚えちゃいねーな」

「だよなっ！」

山本が獄寺に変わり戦う。経験の差か、ツナ達の知る山本とは似ても似つかないその洗練された腕に、ツナは安心して任せられると思いい、みんなの方へ駆けていく。

「みんな大丈夫？」

「しつかりしろよ」

「ボンゴレ！ 獄寺氏も！」

「だから言ったじゃないですか。絶対ツナさん達が助けに来てくれるって」

「おお・・・十年後ハル・・・」

「はひ？ 何だかハル・・・。急に背が伸びたみたいですよ！」

（中身は成長してないようで・・・）

「・・・！！ あれ？ た、大変！ 京子さんがいない！」

「え！！」

「もしかしたら・・・、さっきの爆風で・・・！」

「探してくるよ」

ツナは京子を探しにその場から消える。最も消えたように速く動いただけなのだが。

「前言撤回だ野猿。くだらん雑用任務に転がり込んだ久々の大物。見逃す手はねえ。手を貸すぜ」

再度攻撃が始まった。

「京子ちゃん？ 笹川京子さん？」

ツナは倉庫の中をキョロキョロと探す。

「京子さん・・・？」

「あ」

「お」

「ありがとう。来てくれたんだね、つつ君」

（つつ君？ どれだけ仲良くなってるのこの時間軸・・・）

「ごめん・・・。私足くじいちゃった」

「え？ そりや大変だ」

「・・・あれ？ なんだろう。何か幼くて懐かしい感じがする」

「とりこぼしは無しだぜ」

京子天然がいたことでのぼのぼのした空間だった場所に、野太い男の声がする。

「なあに、すぐに済むさ。雨メインディッシュの守護者を待たせらんねーからな」

「・・・！！」

「下がってて」

「ツツ君……」

「やらせはせん。やらせはせんぞっ！」

ツナが格好付けた時、後ろで音がする。

「へ？」

「ツナ君……？」

「あ、え!？」

「ツナ君だ！ よかったー。みんなで探してたんだよ。リボン君と獄寺君も。あれ？ ここ、どこだろ……？」

と、そこに炎の刃が飛んでくる。

「少し後ろに！」

「う、うん！」

その一瞬で立ち位置が変わり、ツナが身を挺してその炎の刃から京子を守った。

「ツナ……君」

「はっ！ 痛くも痒くもねーな……」

「ほう。その炎の色は大空の属性……、なかなかのレアだぞ小僧。だがタラタラと相手してやるつもりはない。向こうに雨の守護者つてだけー得物を、待たせてるんでなあ」

「ああ、こつちも長く戦うわけにはいかないさ」

「まさか勝つつもりか？」

「当たり前だ」

「格好つきたいお年頃か、小僧！」

そう言つて、太猿は炎の刃を放つ。それをツナは死ぬ気の零地点突破 改で受け止める。

「好きな女の子を守るって言う状況でぐらい、格好つけたっていいだろっ？」

ツナはそう言つて大空のリングに死ぬ気の炎を灯した。

(炎が変わりやがった……。ただデカくなったんじゃねえ……。純度の高い大空の炎になっている……。経験で分かる。あーゆーのはやべえ……)

「怖じ気づいたか？」

「ぬっ!! ふざけるな!! 女と炎は使いようだ!! テメーのようなら
るせーハエには、殺虫剤をまくだけだ!」

匣兵器から高速回転する飛来物が飛んでくる。それをツナは飛んでかわすが、ホーミングのようでツナを執拗に追い回す。

「逃げ切れるものか!! 黒手裏剣はお前だけを貫くぞ!!」
ダークスライサー

逃げるようにして、その場に残した炎に反応するそれを見て、ツナは答えに辿り着く。

「炎に反応する……。まさに追尾ミサイルだな」

「その通り!! お前の発するようなデカイ炎のみを追尾し、炎を吸収する度に加速する!! そしてしまいには目標物の1.5倍の速度に達する!! 回避は不可能だ!!」

「——ねえ。誰に説明してるの?」

「なっ!!」

太猿が慌てて振り向くと、簡略化された鬮體が描かれた紋章の上立つつながいた。

「バカなっ!」

「思った通り、炎を消したら追ってこなくなつたよ。流石に光速までは着いてこられないみたいだし」

そして、ツナはその手を太猿に向けてのばす。その手からは冷気が漂っていた。

「——ッ! バカな!! ほ……。炎を……。凍らせるなど!!」

こ……。これではまるで噂に聞いたボンゴレ十代目……。!!

貴様何者だ!!」

死ぬ気状態じゃないにしろ、零地点突破は元から使っていたツナは、振り下ろされた鎌を凍らせる。

「のわっ!!」

「並盛中学校二年A組、沢田綱吉。ボンゴレ十代目(仮)だ」

「ぬおお!!」

「連続 普通のパンチ」

そして、ツナ達は。気絶した彼らを捕虜として捕まえた。

「……。なんで捕虜として捕まえるんすか? 十代目」

「敵から有益な情報を得るっていうのは、いつの日も常套手段なんだよ？ 獄寺君」

「ですが」

「拷問なら任せて！ 口答えする度に下半身からゆっくり、ゆっくりと凍らせていって・・・くふふ」

「十代目、楽しそうですね！」

「でしょ!? 何かこつちが悪者みたいだけどな！」

「よっしゃ。そうと決まりや抵抗出来ないように、リングや匣兵器も根こそぎ取り上げときましよう！」

二人がワイワイやっている後ろで、山本達は何が何だか分からないといった様子だった。

第四十二話 ツナの独白

Date

沢田綱吉

並盛中学 二年A組

ボンゴレファミリー(仮)

十代目ボス(仮)

大空のボンゴレリング(精製度A以上)

ランチアのリング(精製度?)

大宇宙のウラヌスリング(精製度S+以上)

——そんな男は今現在、意外と素直にリボーンの前で正座をして
いた。

「なアツナ。オレが何を言いたいかわかるな？」

「捕虜として彼らを捕まえたこと？」

「身体検査もきっちりしてから連れてきたのは褒めてやる。だがな」

「うん」

「情報を引き出すために氷漬けにするのはどうなんだ。って話だ」

「一番確実な拷問方法だったんだよ？ 視覚化した恐怖が体を蝕んで

くるんだから」

「・・・もういい」

ツナの言い分にリボーンは呆れ、説教を取りやめた。

「しかしなあ・・・リボーン。ハル達にどんな説明したんだよ」

「ん？」

「デストロイとか、平和な並盛とかいつてたよ？ 俺としてはこっち

の世界の方が殺伐として、過ハルごしやすいけど」

「そりやお前の感性だ。一般人はそんな事考ハルえもしないとと思うゾ」

「こんな状況下だからこそなんだろうけど、現在カレー作りしてるか
らね」

「・・・ツナ。闘えそうか？」

「余裕だよ。死ぬ気の炎に頼ってる戦闘なんて、現代兵器の足元にも
及ばないよ」

「何言ってやがる?」

「鉛玉の方が、炎よりも生身には恐ろしいって意味だよ。じゃ、ちよつと京子ちゃん達の方みてくる」

「ああ」

ツナが出ていったドアの方をみてリボーンはため息をつく。

(・・・何か、この時代の奴らが可哀想になってきたぞ。散々同情は甘いとかなんてきたが、こればかりは言わずにはいられないな。違う時間軸とは言え、ツナは理不尽に未来に拘束された上、自分が殺されてるんだ。かなり頭にきてるんだろな)

——キツチン。

ツナがそこについた時、ちょうど悲鳴が上がった。

「どうしたの?」

「な、流しの下に・・・」

「何かいるの・・・」

「え?」

黒い塊が流しの下で動いていた。そして、ツナ達の方に飛び出してくると、人の声が聞こえてくる。

「いや——、抜けました。あ、私。ボンゴレファミリー御用達、武器チユナーにして発明家のジャンニーニでございます」

「あ、武器をおかしくする」

「お久しぶりですボンゴレ十代目。私もすっかり立派になりました、今や超一流のメカアーティストに成長いたしました」

「相変わらず太ってるみたいだけどね」

ツナの辛らつな言葉にジャンニーニは乾いた笑いを漏らした。

「えーつと、料理大丈夫?」

「あつ! ごめんなさい! 火、消し忘れてた!」

「はひ! ギリギリセーフです!」

「よかった」

「火・事!! 火・事!!」

「うるさいよ、ランボ。本当の火の恐怖教えてあげようか?」

「え、遠慮するもんね！」

片方の手に炎を灯してツナがそう脅せば、ランボは慌てて部屋の隅に退避する。

「・・・ツナ君・・・」

「ん？　どうかしたの？　京子ちゃん」

「・・・また、教えてほしいなーって・・・」

「・・・分かった。今晚俺の部屋に」

「・・・うん」

ツナはそう言うのと廊下に出る。そこには獄寺達がいた。

「何かあったんすか！　十代目！」

「遅いよ。何かあったって・・・、ジャンニーニが流し台の下で点検してたのを見つけた京子ちゃん達が驚いたただけだよ？」

「そ、そうだったんすか。てつきり敵襲かと」

「センサーも何も反応してないのに、何かあるわけないじゃないか」

「で、ですよね」

「でも、そんな風にして忍び込んできた相手は中々殺りがいがありそうだけど」

ツナがそう言って笑っていると、リポーンが話しかけてくる。

「ジャンニーニがトレーニングルームに案内してくれるらしい。ほら、行くぞツナ、獄寺、山本」

「はい！」

「えー？」

「わかったのな！」

そしてトレーニングルームがある下の階に行くためにエレベーターに乗り込む。

「このアジトは公共の地下施設を避けているため、いびつな形状をしています。総面積は、イタリア・サンシーロ・スタジアムの約1.5倍。電力は地熱を利用した自家発電で供給しています」

「へえー。法律とかどうなんだろうね。科学的にもよく分かんないし。本当に足りてるの？」

「大丈夫です。おや、つきましたよ。ここです」

ジャンニーニの案内でツナ達が着いたのは広さには十分余裕がある場所だった。

「俺が暴れるための広さは十二分にあるね」

「まあ、それを考慮して設計されてますから・・・」

「ふーん」

「ツナ」

キョロキョロと周りを見ながら何かを考えるツナに、リボーンの言葉がかけられる。

「何？」

「お前の戦闘能力はハッキリ言っただけ物だ。何も心配はしてねえ。だから、ある程度下地ができたなら、ヒバリを探しに行っただけでいい。」

「・・・。ま、俺一人の方が機動力もあるしね。分かった」

「おい、リボーン。本当にこんなガキで大丈夫なのか？」

「お前はみたことないのか？ ツナの原理の分からねえ攻撃力を」

「・・・！！」

「あるみてーだな。あれがあるから俺はツナの心配なんてしてねえ。ついでだ、ツナ」

「ん？ つと。匣？」

「その箱を開匣しろ」

「ん、分かった」

「おい、リングに炎を灯すことができなければ開くことさえ・・・」

が。ツナは既に右手に填めたボンゴレリングに火を灯し、匣の穴に突っ込んでいた。

「お？ 崩れる？」

そして、出てきたのはマモンチェーンが巻かれたおしゃぶりだった。

「これって・・・アルコバレーノの・・・？」

「ふっ。リングと匣の使い方は分かったか？」

「え？ まあね」

「じゃあ行っただけいい」

「・・・分かった」

「つと、その前にメシにするぞ」

「あれま」

「ハラへったな」

そしてメンバーはカレーを食べてその日を終える。

——夜。

ツナは自分の部屋に取り付けられたカメラや盗聴器、センサーの類いを全て破壊し彼女を待っていた。

「・・・ツナ君」

「こんばんは、京子ちゃん」

「ごめんね。ワガママ言つて、でも」

「俺なら教えてくれる。そう思ったんだよね」

「うん」

「じゃあ、掻い摘まんでだけど説明するよ。今、俺達の身に起つてるところを」

そしてツナは、十年バズーカの仕組みから始まり、未来がどんな状況か、そしてこれから何が起きるのかはまだ未知数であることを教えた。

「そう・・・なんだ」

「うん。これから何が起るか俺にもよく分かんないんだけど、これだけは言える。みんな無事で過去に帰る。その為に全員守ってみせるってね」

「ふふっ。ありがとう。・・・私ね、不安だったんだ」

「？」

「ツナ君達がいなくなつて、突然ツナ君に会つて、よく分からない内に巻き込まれちゃつて・・・この時代じゃお兄ちゃん・・・行方不明なんだって・・・」

「うーん。極限な了平さんが妹さんに何の情報も渡さずにいなくなつたりするかなあ・・・」

「？」

「分かった、何かヒントがないか探してみるよ。明日、俺外に行くから。京子ちゃんはアジトにいて、絶対。俺の手が届く範囲から出ないでね」

「うん……。？ どういう意味？」

「気にしない気にしない。言葉のあやだから」

その後、京子の部屋まで彼女を送り、自分の部屋に戻らずに出口に向かったツナだった。

第四十三話 待ち受けるもの

(確か原作ではD出入口……。あつた！)

ツナはハッチの中に飛び込んで外の世界へ繰り出した。

すっかり日が昇った並盛町。

(うつわー……。黒服のお兄さんがいっぱいいるぜえ……。！)

ツナはまったく隠れようともせず、堂々と街中を歩いていた。

「おい、そのボウズ」

「ハゲてないけど何ですか？」

「この家の娘、知らねえか？」

「笹川京子っていうんだが」

「残念ながら知りませんです。俺基本的に引きこもり何で」

「時間とらせたな」

「いえいえ」

ツナはボサボサの黒髪頭をかきながら、道を進む。

(こりゃ、京子ちゃんちで情報収集は無理そうだな……。仕方ない、事情を話しても大丈夫そうな……。黒川の家にも行ってみるか)

黒髪黒目のどこからどう見ても純日本人容姿の少年は、並盛町内を歩いていく。

黙って出てきたアジト内で凄まじい混乱が起きていることも知らずに。

(つと、ここが黒川の家かな?)

ツナは礼儀として一度インターフォンを鳴らす。

『はい? どちら様?』

そしてツナは、声だけ沢田綱吉に戻して。

「あ、黒川? ちょっとお願いがあるんだけど……」

『……。? まあ、いいけど』

玄関先に招かれたツナは変装を解く。

「ねえ、沢田。あんた何しに来たの?」

「えつと一から情報を話してたらキリが無いんだけど・・・」

言いながらツナは夜のリングを介して炎を発生させる。そして、半ば強制的に京子をその場に呼び出した。

「！ ツナ君!? みんな探してるんだよ?」

「ちよつと野暮用だね。黒川、一応京子ちゃんも俺達の事情を知ってる。協力してほしい。男達じゃできないことも多いんだ」

「・・・分かったわ。その代わり、ちゃんとあなたの口からも説明しなさいよ」

「もちろんさ。モード、上条当麻」

二人の目の前でツナの姿が変わる。

「それじゃあ、俺は色々と用事があるので。黒川のことだから、了平さんのことも知ってるだろう?」

そう言つてツナは家から出て行った。

「・・・沢田は、あんな頃からあだったかな・・・」

「え・・・?」

「まあ、いいや。沢田が頭を下げたんだ。私が教え上げる。あなたの兄貴の情報」

「ええ・・・!?」

(それにしても・・・四面楚歌つてこういうことを言うんだろーな。燃えてくるぜツ!)

ツナは楽しそうにそう笑う。本来敵に囲まれることは普通に考えて危険な状態なのだが、ツナ・・・いや、上条当麻の思考はそんな事は思わない。「敵に囲まれたのなら、どこに攻撃しても敵にしか当たらないじゃん♪」が、彼の考え方である。

「さて・・・、まずは敵のおびき出しかな・・・?」

そう考えたツナは、その姿のまま大空のボンゴレリングのマモンチェーンを外し、炎を灯す。

「さて、町外れまで着いてきてもらうぜ、強面のおにーさん達♪」

——どこかの廃工場地帯。

「やあ、あんたらは・・・ブラックスペルとか言う人達かな？」

「・・・何者だ？ お前」

「おやおや、俺が何者か分かってきたわけじゃないんだね」

そう言っつて、周りの屋根や地面。空中までも四方八方をブラックスペルに囲まれた状況で、黒髪の少年は笑っていた。

「ボンゴレの関係者か。わざわざリング反応まで出して・・・」

「あんたが電光のγさん？」

「・・・俺を知っているのか。バカな奴だ。見たところ高校生のようだが、ボンゴレとどう繋がっている」

「不本意ながら、ボンゴレには世話になってるよ。色んな意味でね！」

ツナはそう言っつと、五十二枚のカードを取り出す。

「トランプ・・・？」

「さてさて、それじゃあ。マジックショーにご案内」

ツナはそう言っつて、手に持ったトランプを空中にばらまく。すると、意思を持ったようにトランプが飛び出し、ツナを囲っていたブラックスペルの内の十何人かに深手を負わせた。

「やっぱり」

「あ？ 何してんだお前」

「四方を敵に囲まれた時っつてさ。とりあえずどこかしらに攻撃しておけばいいと思わない？」

「・・・は？」

「だって、周りには敵しかいないんだから・・・。自分以外の誰が怪我しようが関係ないでしょ？」

ツナはそう言っつて全身から冷気を噴出させる。その一撃で、空中に浮いていなかった人間は工場跡の敷地と一緒に氷漬けにされた。

「こっ・・・この技は・・・！！」

「死ぬ気の零地点突破 First Edition」

「・・・さて、気になることがいくつか出てきた。ボンゴレの十代目はいつ生き返ったのかな？ そこんとこ口を裂いても教えてもらわなきゃな」

「あれ？ 生きてるとは思わないんだ」

「ああ、奴が射殺されるところは多くの同士が目撃してるしな」

「それはそれは、大勢でもって人の処刑現場を目撃するなんて、性格悪いよあんたら」

「お喋りはここまでだ。召されな！」

「ビリヤード!？」

空中で弾き合い、ツナの周りに着弾したビリヤード球は、ツナに向かって電気を浴びせてきた。

「どうだ？ ショットプラズマの味は・・・、天国の扉は見えたか？」

「そうだなあ・・・。発想は十分、威力も申し分ないんだけどなあ・・・。残念、弾が見えてる時点で沢田綱吉には届かねえよ」

「大空の死ぬ気の炎・・・そうか、やはり貴様がボンゴレ十代目」

「さて、情報を持ち帰られるわけにも行かないから、ここで凍らせておかなきゃね」

「そう簡単に当たるかよー！」

「遅い」

「ッ?!」

γが次の攻撃に移ろうとしたその瞬間には、既にツナの掌が肩に触れていた。

「ガアッ!!」

「おやすみ。楽しかったよ・・・。あ！ いいこと思いついた！」

「なん・・・だと・・・」

首から下が氷漬けの状態で、γは問う。もちろん返答があるとは思っていないかった。が、

「ねえ、ここで俺達の捕虜になると、ここに全身氷漬けで放置されるの、どつちがいい？」

「・・・」

「そつか。全身氷漬けにされた挙げ句それを砕かれないっていうんだね？ 特殊性癖かな？」

「捕虜になるさ。つたく、ガキがどこで覚えた。そんな脅し方」

「人生の先輩に教わったんだ♪」

と、そんな訳で捕虜として連れ帰ったγ達を使って、獄寺達がト

レーニングすることになるのだが、それはまた別のお話で。

「どーいうことだツナ！」

「かつ、過去の話だよもちろん！」

「だから俺達がここに呼ばれたのか・・・？」

「カンケーないと思うけど？」

「ツナ、とりあえず何があったのか話せ」

「あーえつと。これは俺が小学生の時なんだけど、白蘭って俺と同じ年ぐらいの子と一緒に甘味を食べた思い出が・・・、今でもメールとか電話とかするし・・・」

（（友達かつ!!））

ツナはそれだけの情報を喋ると、トレーニングルームに赴き自主練習を始めた。

（さつてとおく。さつてとお・・・。どーやって強くなる？ とりあえず数日後の試練まで待った方がいいのかな？）

ラル・ミルチの指導でツナはその後何日も修行を続けた。

——十三日後。

本日から新しい修行 “強襲用個別強化プログラム” が開始されることになった。

山本を鍛えるのはリボーン。

獄寺を鍛えるのはビアンキ。

そしてツナを鍛えるのは——

「気をぬけば死ぬよ。君の才能をこじ開ける」

雲のハリネズミで突然襲いかかってきた雲雀恭弥だった。

ツナは雲ハリネズミに対抗するように死ぬ気の炎を出す、押し返すこともできずに壁際で停滞している。

「赤ん坊から聞いた通りだ。僕の知るこの時代の君にはほど遠いね」

「・・・じゃつこれでっ！」

死ぬ気の零地点突破Fast Edition!

「すげえ!!」

「さすが十代目!!」

凍らされていく匣兵器に、山本と獄寺の歓声があがる。

「いや、まだだ！」

匣兵器が凍りつくよりも先にさらに増殖を始めるのを見て取ったラルが声をあげる。

ツナを雲雀の匣兵器が包み込もうとしていた。

「紫色の雲……増殖しているのか!？」

「増殖スピードまで化け物ですか!？」

全て凍らせるつもりだったが、増殖速度に追いつかず、ツナはすっぽりと匣兵器に包み込まれてしまう。

「ツナ!!」

「十代目っ」

「何あれ……?」

「ボールになっちゃった!!」

「球針態。絶対的遮断力を持った雲の炎を混合した密閉球体。これを破壊することは彼の腕力でも炎でも不可能だ。密閉され内部の酸素量は限られている。速く脱出しないと、死ぬよ」

中に閉じ込められたツナにも、その声は聞こえていた。

（そんな事言われたら腕力で破壊したくなっちゃうじゃないですか……。まあ炎で壊させるための処置なんだろうけど……。ウラヌスリングは外だし……。ボンゴレリングじゃそこまで出力は出ない。恐らく、大空のリングでXグロブVer. 化ができないのは恐らくこれで何かを得ないといけないんだと思うんだけど……）

あえてハリネズミの炎切れを待ったために全身凍らせるのもありか？　なんて考え出した自分を戒めながらツナはとりあえず酸素切れを狙ってみる。死ぬ気の炎を全開にして、雄叫びを上げて球針態を殴りつけた。

「ダメかー。びくともしないんだからもう。ってかこれ、俺が閉所恐怖症とかだったらどうするのさ。まあ、そんな事ないんだけどね」

「ってか、酸素薄っ!」と、ツナは余裕そうに言うが、肉体は自然と空気を求め、死に近づいていた。

と。そこでツナの頭の中に映像が流れてきた。

【殺れ】「どうか命だけは助けてくれ!! 俺が死んだら、子どもが……妻が……!! ぐあ!」

(何これ。リアルな夢……。走馬燈？ いや、俺こんなおっさん知らない)

【報復せよ】【ギャアア!!】【嵌めろ】【根絶やせ】

(あ、これもしかしてボンゴレリングから？ ってか何これ)

「ボンゴレの・・・業」

「GO?」

ツナの周りにたくさんの人々の気配がする。

「抹殺、復讐、裏切り、飽くなき権力の追求……………、マフィアの血塗られた歴史だ」

「あ、業カルマのこと……………」

「大空のボンゴレリングを持つ者よ。貴様に覚悟はあろうな」「ん?」

「この業を、引き継ぐ覚悟が」

【「助けてください!!」】【「ギャアアア!!」】【「むぐすぎる」】【「息子を返せ」】【「ぐわあ!! 目があ!!」】

「目があ!!」

そしてツナは自分のポケがツボに入ったのか、少ない酸素を使つて笑い始めた。

「げほっげほっ…………酸素少ないの忘れてた…………」

「目をそらすな。これはボンゴレを継ぐ者の宿命。貴様が生を授かったことの意味そのものだ」

「生まれた時から就く職が決まってるとか、昔の日本かつつーの。そもそもこんな酷い事するわけないだろ?」

「代価を払わずして、力を手に入れることなど叶わぬ。偉大なる力が欲しければ、偉大なる歴史を継承する覚悟が必要なのだ」

「自分で自分達のことを偉大とか言うんじゃねーよ。偉大なる歴史? 自分の私利私欲のために人を殺すことか!? 偉大なる力?」

自分より立場の低いものを苛めるための力がか!? こんな歴史を継承する気なんてさらさらないね!」

「!!」

「何だど!」

「こんな、人として落ちぶれた間違いを、子ども達に背負わせようとするなら………。俺が、

——そのボンゴレ^{幻想}をぶっ壊^ちしてやる^{殺す}!!!」

「………」

そして、ツナが気付くとそこには。

ボンゴレの歴代ボス達がいた。おそらく、生死が危うい状態になったツナの魂がリングの中に引き込まれたのだろう。

「貴様の覚悟、しかと受け取った」

「へ? ……あ、はあ」

「リングに刻まれし我らの時間」

「時間……【時】?」

「栄えるも滅びるも好きにせよ、ボンゴレX世」
「どうも」

「………お前を待っていた。ボンゴレの証を、ここに継承する」
「……身勝手だとは今まで思わなかったの? 自分達の犯した罪をさ、自分で尻拭いせずに子どもにまで押しつけた。その罪は重いぜっ!」

球針態に大きなヒビが入り、そこから徐々に広がっていく。一度も弱音を吐くことなく、その状態に達したことに、ヒバリは眉を顰める。違う時間軸の沢田綱吉。果たしてそれだけで説明していいのだろうか。

「恭さん。これは!?!」

雲雀は、球針態のヒビから爆発的に光が漏れるのを目にする。

「球針態が………、壊れる」

その眩きとほぼ同時に、球針態が爆発を起こした。

煙の中から出てきたツナは笑っていた。例えるなら、新しいオモチャを買って貰った子どものように、それはもう無邪気な笑顔だった。

第四十五話 Ver. V. R.

「XグロブVer. V. R.」って言った所かな」

「この時代の沢田は指に装着したリングを手の甲に宿し、力を引き出していたという…。それが、まさか試練の末の形態だったとはな」
「俺もあまり自信はなかったけどな。飛躍的なパワーアップと言われて、この伝説の試練くらいしか思いつかなかった、というのが正直なところだ。もつとも、ボンゴレをぶつ壊すなんて答えで試練を乗り越えたのは歴代ボンゴレでツナだけだろうがな」

ツナがグロブに力を込めると、澄んだオレンジ色をした綺麗な炎が燃え上がる。

「ワオ。少しだけ、僕の知ってる君に似てきたかな。赤ん坊と同じで僕をワクワクさせる君にね」

「一緒にしないでくれるかな。そのダメツナとさ」

「…ここから先は好きにして良いんだろ？ 赤ん坊」

「ああ…。そういう約束だからな」

「じゃあ。始めようか」

雲雀は懐から匣兵器を取り出し、そこに雲の炎を注ぎ込む。そうして開いた匣兵器から出てきたのは、紫の炎をまとったトンファア。そのトンファアを構えた雲雀から、凄まじい殺気が放たれる。

「ふーん」

「ひっ」

「なっ」(なんて炎!! ……いや殺気!! 今まで抑えていたと
いうのか…!! これが、雲雀恭弥!!)

「この闘いにルールはない。君に選べるのは、僕に勝つか…。死ぬかだけだ」

「じゃあ雲雀さんも死ぬ覚悟はあるんですよね？」

そう言ったツナから重力が放たれた。巨大な手で上から押さえつけられるような感覚。だがそれは、

(ツナの…殺気!)

「へえ。やっぱり時間軸が違うとそこまで違うものなんだ」

「当たり前です。しかし雲雀さんも成長したんですね。十年前は何度かこの殺気だけで沈んだというのに」

「ワオ。誰それ」

「ま、これ以上強くすると慣れてない雲雀さんが倒れてしまうかもしれないので、マジメにやるとしましょうか」

ちなみに、Ver. ボンゴレリングよりずっとピーキーな特性のVer. ウラヌスリングに慣れているツナからしてみれば、この程度はじゃじゃ馬の内にも入らない。

そして、そんな会話の最中にもツナは動いていた。

「よし。特性は掴んだので、さ。瞬殺ですよ！」

「やれるものならね」

その場に炎の形跡を残してツナの姿がかき消える。そして、視認できなくなった。

「……ツナの奴、所々で自分の足で加速してるな」

「……? どういう事だ?」

「よく耳をすませてみな」

「……」

ほとんど音がしないトレーニングルームの中に、小さな足音が所々で混じる。

「!?」

「アイツは死ぬ気の炎も使わず、肉体一つで音速を叩き出す。この勝負、俺達の世界の雲雀ならどうなったかしらねーが。こっちのヒバリにツナが負けるわけがねー」

「それを分かってて、好きにさせたのか!」

その言葉のすぐ後には、トレーニングルームの床をへこませる一撃をモロにくらい雲雀は床に倒れていた。

「ほらな」

「……」

「リポーン。ちよつと提案があるんだけど!」

「何だ?」

「ちよつと一人で練習してもいい? 久しぶりに全力で暴れたい」

「……………(汗) ちよつと待て、ジャンニーニに一番硬いトレーニングルームを聞いてみる……………」

「あ、うん……………」

と、数分後にツナが連れられてきたのは、先程までいたのとは二回り程小さいトレーニングルーム。

「ここは匣兵器などの試運転も兼ねてますので、死ぬ気の炎のコーティングもしてあります。十分暴れられるかと」

「うん。それだけ分かれれば十分だよ」

そう言ったツナは、魔術を使い部屋を囲う金属をとある少女達と合同で作り上げた演算型・衝撃拡散性複合素材カリキュレイトII フォートレスに変える。これは、例えば沢田綱吉が全力で拳を振るっても、その衝撃を零にしてしまうとと言ううなれば彼等専用の建材だ。

「さて、じゃあ視てることだろうし正真正銘俺の本気でやるかな……………付き合ってくれるよね? 扇ちゃん」

「……………もちろん。私が先輩の頼みを断るわけがないじゃないですか」

「一応僕も出ておくよ。万が一もあるしね」

「ん。頼む」

そしてツナはその姿を上条当麻に戻すと、忍野扇と向かい合う。

「さあ、扇ちゃん。やろうか」

「ええ。言っておきますが、私も強くなりましたよ?」

「はいはい」

そして、二人の人外がぶつかった。

「うっはー。相変わらず二人の戦闘は激しいね……………カリキュレイトII フォートレスにしていなかったら位置バレしてたかもね」

「連続普通のパンチ」

「これカメラ捉え切れてないだろうな……………何が起っているのか分かるのは間近にいる僕と、当の本人達だけだろうね」

二人の人外の攻撃は空気を叩き潰し衝撃波を生む。その衝撃波単体でも地球を割ることができる威力だというのに、演算型・衝撃拡散性複合素材はその衝撃までも零にしてみました。

凄まじい速度と力の拳と蹴り。死ぬ気の炎や現代兵器。様々なも

のがぶつかり混沌とした空間を作り出す。

「・・・フツ。CHAOSだな」

上条と扇は口を揃えてそう言った。科学と魔術、炎と冷気、拳と蹴り。様々な力がぶつかり立ったカオス空間で三人の人外は笑っていた。

「いや、僕は確かに人外だけど。彼等を視てると認識を改めざるおえなくなる。僕は人外・・・彼等は人の身に甘んじてる神様だと思うよ」
「クハハ」

「はっはー」

「必殺マジシリーズ」

「お、こりやマズいかも。対象を防御するスキルオールリフレクター「全力警護」・・・あ」
(ま、反射しても彼等なら大丈夫だろ・・・)「対象はこの部屋の内壁と外壁。外に振動を漏らさないように」

人外の二人の両拳に力が溜まっていく。

「両手連続マジ殴り！」

「うおっ！ 僕を守り忘れた。まあ、いいか。僕は死なないよ」
「腑罪証明」彼の影の中に避難

そして、部屋の中のカメラは壊れ、壊れる直前に拾った音だけがアジト内に響いた。

「・・・」

「・・・」

「ふうっ。何とかなつたみたいでよかったぜ」

「・・・っ」

「・・・疲れましたね・・・」

「はあ・・・、久しぶりに全力で体動かしたぜっ」

上条と扇は隣り合って寝転がる。

「記憶が飛んでるみたいだから報告しとくけど、一時間程戦っていたからね。君達は」

「Wow」

二人の少女が影の中に戻ると、体を沢田綱吉に戻してから少年はトレーニングルームから出て行った。

第四十六話 ゲスな男と悪魔

始まりはツナのこの一言だった。

「黒曜ランドの方に行ってきたても良い？ クロームがやってきてる気がする！」

リボーンの見解では恐らく超直感が働いたのだろう。だからリボーンは許可を出す。

「……………行ってこい。お前の超直感がそういうならな」

「ありがと！ 行ってくるね」

そう言ったツナは亜音速で飛びだして、アジトから消えた。

旧黒曜ヘルシーランド。

途中、商店街で食材を買い占めたツナは黒曜に足を踏み入れる。そしてズイズイと奥へ歩いていく。

突然現われた津波に、押し流されそうになりながらも彼女はしつかりとその足で大地を踏みしめていた。

（これは……………幻覚？ 違う……………）

「これは現実だぞ」

「？」

「雨の属性の匣の特徴は沈静。雨グーフオ・デイ・ピオツジャフクロウの大波は、炎を消し攻撃を鎮め、人体の活動を停止に近づけ……………意識を闇に沈める」

そんな状況でも、彼女はしつかりとその足で立ち続ける。彼女のボスは彼女なのだ。そう簡単に倒れるようには鍛えられていない。

「いよいよいただく時間だな。リングと……………お前をな！」

「私……………を……………？……………」

その言葉を聞いた彼女は何かを考えるような仕草をしたあと、思い出したように手を打って。

「……………変態ロリコン野郎、だ」

「なツ……………へんた……………?!」

呆れたような、蔑むようなジト目でそう言われた男は、顔を怒りで

赤く染めたり、予想外の反応に顔を青くしたりする。

彼の知る彼女とは違い、どうやら彼女は存外図太い神経をしているようだ。

「・・・変態は、撃退する・・・んだよね」

どこかに確認をとるようにそう言った彼女は、何故か自分で納得した。

その様子に、思わず彼も笑いがかぼれる。

「クフフ・・・」

「!? む、骸様?! ..どこ、ですか?」

かくれんぼ? と、首を傾げる彼女に、骸は溜め息を吐きたくなる。いったい彼女は どうしてこうなってしまったのか。

「二つ、アドバイスをあげましょう。クローム。幻術のリアルさは術士のそれと同じこと。お前が一番信じるもの。それが最も強い幻覚となる」

「・・・ムク・・・・・・ロウ?」

「ムクロウ? ..まさか!」

「クフフフフ・・・。そうです、グロ・キシニア。あなたの匣兵器に少し細工をさせてもらいました」

そう言っ言葉を話すのは、雨の炎ではなく、霧の炎をまとった匣兵器のフクロウだった。

(信じる・・・もの・・・。私は、私は・・・)「助けて・・・ボスッ!」(あの時、みたいに!)

ボンゴレリングに炎が灯り、霧の幻術が行使される。

だが、

その幻術はガラスが割れるような音と共に消し飛ばされる。

「——んなこと言われなくても手を貸すぜ」

そんな風に、霧の幻術を消し飛ばして現われたのは、クロームの心の拠り所。変装した沢田綱吉、もう一人の^野人外、^{安心院}平平等だけの^な人外。過去において影組と呼ばれる暗躍型特殊任務実行部隊のボスとその側近がそろっていた。

「な、何なんだお前等は!」

「何なんだお前等は！」と聞かれたら」

「答えてあげるが世の情け」

「影よ！」

「大地よ！」

「大空よ！」

「世界に届けよデンジャラス」

「宇宙に伝えよクライシス」

「天使か悪魔かその名を呼べば」

「誰もが震える魅惑の響き」

「トウマ！」

「オウギ！」

「ナジミ！」

「時代の主役はわたしたち！」

「我ら無敵の！」

「影組よ！」

ビシイ！ と、決めポーズをとる三人。

「……………」

「ボス、カツコイイ…………！」

グロ・キニシアと骸は呆れ、クロームは目を輝かせていた。

「さて、そこのおかつぱメガネ。まだ何か匣持つてるだろ。使つて来いよ。俺は全力を持って突っ込んできた相手を正面から叩き潰すのが好きだからさ」

「ふっ。なら後悔するが良い。その六道骸が憑依しているのは私のサブ匣、私の真の力はこのメイン匣。クラークン・デイ・ピオツジャ雨巨大イカにある!!」

床下から巨大なイカの足が生えてきた。

「うわっデッカ…………」

「エロいね」

「考え方が思春期男子のそれですよ、なじみ先輩」

「触手はエロいだろ？」

「否定はしません」

「幻覚どもが…………、植え付けてやる。お前を完膚なきまでに叩きのめ

すグロ・キニシアの恐怖を!!」

イカの足を水が覆う。それはどうも死ぬ気の炎のようだった。

「消えて静まれ、まやかしが!!」

「——誰がまやかしだ、まったく」

上条の放った拳は、迫ってきたイカの足を跡形もなく吹き飛ばす。

扇の方も同様に。なじみはそのイカの足を輪切りにしていた。

「あ……」

「は?」

「粉々にしてしまった……。味を確かめたかったのにッ!」

「平常運転だね。それでこそ当麻君達だ」

「幻覚……」

「じゃねーよ。おかつぱメガネ。俺達は。今ここに百パーセント実体でここにいる」

その証拠を見せてやろうか? といって、上条はウラヌスリングのマモンチェーンを外す。それはS+というトウリニセツテを遥かに凌ぐ精度と力を持つ世界に同じものは一つとして存在しないリング。もし、それに炎が灯されるとどうなる?

結果。全世界のリング感知レーダーが前代未聞のリング反応にエラーを起こし、ショートし、爆発をおこした。

そして、ツナは淡く炎を纏った両手のまま構え、特徴的な呼吸を始めた。

「震えるぞハート。燃え尽きるほどヒート。うおおお! 刻むぞ!

血液のビート!!

——山吹色の波紋疾走!!」

連続普通のパンチと同等の速度で放たれた “死ぬ気の炎” と “波紋” を纏うその拳は、グロ・キニシアの身体中の骨を砕き顔を崩壊させ、人としてあつてはいけない体にした上で、死ぬ気の炎が爆発した。

第四十七話 委ねられた決断

「極限に無事か!？」

「・・・ん?」

「お、笹川・・・」

「了平、だね。ボンゴレ晴の守護者。まだ入れ替わってないみたいだけど」

「こんにちは、了平さん」

「おお。無事だったか!　しかし沢田・・・。お前達は一体、何をしているんだ?」

「見て分かりませんか?」

ツナ達は黒曜ランドで勝利品の兩巨大イカの足を死ぬ気の炎で焼き、囲んで食べていた。

「・・・極限に食事か?!」

「まあ、そうですね。放って置かれた風がまともになにか食べるわけがなさそうですし、こうして俺の監視下の元食事中です。ホントに放っておいたら“麦チヨコonly”とかコンビニ弁当以下の食生活を送っちゃうので、この子」

「む、そうか」

「ボス、言いがかり」

「事実だよ。・・・さて、じゃあ食べ終わったことですし、アジトに帰りましょうか」

「そうだな!」

買っていた食材とイカの足を食べ終えたツナ達はアジトへと、向かうことにした。

ツナを先頭にボンゴレアジトまで帰ってきた彼等の耳を、ある男の声が叩く。

『うゝお、おい!!!　首の皮はつながってるかあ!?　クソミソカスどもお!!!』

「こ、この声・・・スクアーロ・・・」

「・・・鮫の人」

『いいかあ？ クソガキどもお!! 今はそこを動くんじやねえ!! 外に新しいリングの反応があったとしてもだあ!!』

「ミーティングルームが近いせいなんだろうけど、よく聞こえてくるね……。ポリウム下げろよ……」

「ボスは動いた……。命令無視。あと、あの人の声は下げても大きい」「うっ……。リング反応がある前だったから、良いじゃん、良いじゃん」

ツナは指令無視を軽く流す。それをクロームがジト目で見つめる。
『シシシ……。じつとしてりや、そのうちわっかりやすい指示があるから、それまで大人しくいいこで待つてろってことな！ お子様達』

「この声……。ベルフェゴール？」

『うゝおゝ。おい。てめ——。何しに来た!」「王子ヒマだし。ちやちやいれ」「口出すとぶっ殺すぞお!!」「やってみ」「うゝおゝ。おい……」
『しししっいてっ』

(相変わらず荒くれ集団なんだな……。平行世界でも……。)
『またこの世で会えるといいなあ!! それまで生きてみるお!!』

と、その言葉を最後にディスプレイが切れる音がする。みんなが集まっている部屋が見えてきたので、ツナ達はそこへ普通に入っていた。

「やっほ、みんな。ただいま」

「笹川了平、推参!!!」

「クローム髑髏、帰還……。!」

「十代目!」

「ただいま。あ、リボーン……。ジャンニーニは?」

「リングリーダーがエラーを叩き出した後、ぶっ壊れたから修復に行ってるぞ」

「……。そう」

ツナはもしかしてウラヌスリングのせいかな? と。当を得た考えに辿り着く。そこに、スクアア口の声聞きつけた女子組が駆けつけた。

「はひっ！ スゴイ音でしたけど、何かあったんですか!？」

「皆、大丈夫!? . . . って、お、お兄ちゃん！」

「おお、京子。十年前はこんなに小さかったか」

「よかった無事で！」

「な 泣くな 見ての通り俺はピンピンしている!!
なっ」

「うん」

「京子ちゃん、ハル。悪いけど俺、ちよつとお腹すいちゃった」

「あ、じゃあなにか軽いものつくりますね！」

「私も手伝ってくる」

あくまで自然を装って、ツナは非戦闘員を作戦室から遠ざけた。

「 っで？ 何でお前がここに来るってヴァリアーが知ってたんだよ」

「もちろん。オレもそこにいたからだ！ そして伝言を持ち帰った！」

「ベルフエゴールの言ってた指示のことだな」

「一体何すか？」

「それが極限に忘れた!! . . . だが心配は要らん！ ちゃんとメモしてある！」

そういつてメモを取り出した了平に感心したような声を出す一同。

「十年で一つ覚えたな」

「 . . . ぶむぶむ！ そーかそーか！ ここにいる十代目フアミリー^オへの指示は、五日後にミルフィオーレ日本支部の主要施設を破壊するこ
とだ」

「五日後」

「そうだ。それがボンゴレ同盟の首脳が立てた作戦だ。オレはある案件についてボンゴレ十代目の使者としてヴァリアーに向いていた。そこでボンゴレ狩りが始まったのだ。ボンゴレ本部の方にも十年前から来たお前達の存在は知らされている。そして、お前達がいると仮定しこの作戦が立てられた。この戦いはボンゴレの存亡を駆けた重要な戦いとなる。だが、決行する、しないかはお前が決める」

「・・・はい」

「だが現在、ボンゴレ上層部は混乱し、十年前のお前達を信用しきつたわけではない。ヴァリアーも九代目の部隊という姿勢だ。お前の一存で作戦全てが中止になるようなことはない。だが、日本のことは主であるボンゴレ十代目が決めるべきだと極限に説得してきた！」

「デカくなったな、了平」

「期限は本日中だ。中止の場合は首脳に俺が伝えに行く。しつかり頼んだぞ、沢田」

その言葉にツナは首を横に振る。

「その必要はありませんよ了平さん。獄寺君・・・って今更だけど仲間内で余所余所しいね。『隼人』って呼ぶことにするよ？」

「は、はいっ！」

「じゃあ山本は『武』か」

「構わねーのな」

「じゃあ、隼人、武、凧。それぞれ四日・・・いや、三日で今の倍強くなって見せて。ランボは今のままでもいいや。俺の全てを一応伝えてるわけだし。全員五日後のミルフィオーレ襲撃で、勝って生きて帰れるように、一時も無駄にするな」

「はい!!!」

「だな」

「わかった」

「そーと決まればオレは極限にメシ食って寝るっ!!!」

ツナの言葉に守護者が強く頷く。それを見た了平はうむ。と、納得納得した様子を見せた後、両手を振り上げ太陽のように光り輝いた。

「相変わらず熱いな・・・」

「奴が帰ってくるだけで日本の気温が上がりますよね・・・」

「それどこのテニスプレイヤー？」

第四十八話 武器

本日、ツナはまた雲雀と戦っていた。身体能力・攻撃方法に制限をつけ、純粋な死ぬ気の力のみのコントロールを上げるために。

「はぁ．．．はぁ．．．」

床に何とか着地したツナだったが、息も切れ切れで膝をついていた。

（くっそ。このまま機動力上げても勝てる相手じゃないとか、どんだけ化け物なんだよこの人は！）

「．．．いつまで草食動物の戦い方をするつもり？ 君はまだ、武器を

使っていないよ。沢田綱吉」

（？ 武器？）

「眠くなってきた。そろそろ帰る」

「あ、はい」

「お前三日ほど寝てないだろ。休め、沢田」

「あ、はい．．．」

クロームを迎えに行った日の前日からツナは睡眠をとっていない。常人ならそれで限界が来るが、ツナは雲雀と善戦ができるほどには元気だった。

自室まで戻ってきたツナは、ベッドの上に寝転んで目を瞑って思考状態に入る。

（武器．．．か）

（「武器って一体どうしたら良いんだろうね」）

（「攻撃方法を変えてみるとかはどうでしょうか」）

（「愛気を使ったら意味ないぞ？」）

（「ですから、炎の使い方を変えるんです」）

（「「炎の使い方？」」）

（「先輩の炎は推進力や焼きゴテとしてしか使えないんですか？」）

（「いや、そんな事はないと思うけど」）

（「．．．なるほど。つまり扇子ちゃん。君はこう言いたいわけだね。当

麻君の炎をXANXUSのように撃ち出せば良いと」）

「Exactly! 同じの炎を使う者として、参考にするべき相手です」

（「うーん……。一度やってみるべきかな」）

（「……悩んでおっても仕方なからう。さっさと実行して沈んでこい。あるじ様」）

（「……そう、だな。やってみなくちゃ分からねーよな」）

ツナはベッドから転げ落ちるように飛び起きると、時間を確認する。

（あれから四十分弱）

手袋と二個のリングを装備し、服を着替えてツナはトレーニングルームへと駆け出した。

——トレーニングルーム。

「さて。じゃあまあ右手から大出力の炎でも撃ち出してみるか」

ツナは水平に持ち上げた右手から剛の炎を撃ち出した。が、

「ッ!?!」

勢いが強すぎて後ろへ吹き飛ばされる。何とか両足を地面に着けて踏ん張った彼の元へ声が届く。

（One More Time♪）

「?」

ツナは首を傾げながらも声の通り、再度炎を撃ち出した。

「ギャンッー」

踏ん張った後だったので力が入らず後ろに強く吹き飛び、反対側の壁に激突した。

（One More Time♪）

「はっ..」

（〔One More Time♪〕）

「おっ..」

（「……何となく分かりました?」）

「……ああ、剛の炎をただ前方に撃ち出すだけじゃ、後方に強く吹っ飛ばすまじやう」

「(ならば、壁を背にしてみるかい?)」

「壁を支えにして、か……。いや、戦闘場所が平野だったら意味がない……。ん? 支え……。それだ!」

「(なにか思いついたのかい?)」

「バツチリな」

ツナはウラヌスリングを嵌めた左手を後ろに、ボンゴレリングを嵌めた右手を前に出す。

(強力な炎を、前方に撃ち出すには。それを受け止める、支えが必要つてワケだ)

(なるほど)

(柔の炎で支え、剛の炎を——放つ!!!)

そのすぐ後、トレーニングルームを中心に振動が広がった。

「いってー……。あーいってて……。柔と剛の炎のバランスがこんなに難しいとは、ね」

「ツナ! 大丈夫かよ!」

「武、リボン。ハハツ……。新技を試してみたんだけど……」

「新技!? ど、どーやったらこうなるんだ?」

「おい、ツナ。ものにできそーなのか? その技は」

「難しいと思うよ。でも、できないものじゃあないよ……。た……。ぶん……。ん……」

「おいツナ!」

「バテて寝ちまっただけだろ」

ツナはそのままおやすみモードへと突入した。

(袖が焦げてやがる。Ver. V. R.の本気の炎を使つたんだな……。こりゃあツナの新技、ひよつとしたら、ひよつとするぞ……。できればあまり酷い技じゃないと良いが……。ま、死ぬ気の炎で出来る範囲内のことなんだと思うけどな……。)

「ここ……、は？」

ツナは暗い場所で目を覚ました。まだその暗闇に目が慣れていない。

（んー……。頭の下が柔らかい。……ここどこだ……。？）

「ボス、起きた？」

「……………？ ……え!？」

ツナは慌てて上半身を起こす。どうやらクロームに膝枕されていたようだ。

「なっ……。こっ……。!？」（なんでこんな事を!？）

「ボスが倒れてたから……。膝枕。男喜ぶ……。！」

「誰情報よ、それ」

「骸様」

「……。平行世界の未来だから、殴れねえ……。！」

ツナは己の拳を見つめてプルプルと震えた。基本的にツナと凧はボケたり突っ込んだりするどっち付かずなのだが、骸や犬を主とするボケ担当に対しては容赦ないツツコミをしていた。だがここは平行世界で罪のない骸には手出しが出来ないので、ツナは両手膝について項垂れる。

「……。ボス。これ」

「骸の槍の先端じゃん。じゃあここは残留思念というか、なにかを伝えるための場所ってことか」

「うん。そうだと思う」

「……………。凧、その服似合ってるよ」

「……。?! ……ボス、話す話題がなくなっちゃったからってそれは卑怯」

「そう?。」

「うん」

と、そこで三叉槍の残骸が砂のように崩れ、クロームの掌からこぼれ落ちていった。

「……。なるほど、これを伝えたかったのか」

「骸様、素直じゃない」

「俺達の世界の骸は素直なだけだなあ……」

真つ暗だった空間に、白くて丸い何らかの装置のようなものが出現した。

どうやら起動したらしいその中身を二人は目撃した。

「へえ……」

「ボス、悪い顔してる」

「当たり前じゃん。何のためか知らないけど、ボンゴレの情報網かくぐってこれの情報を隠してるんでしょ？ 信じてる情報がウソつてことになる」

ツナは情報を解析しようと、神々の義眼を開いて近づこうとして、とっさに後ろに体を反らした。

「近づくな!!」

「危ないなあ……」

「大丈夫？ ボス」

「入江、正一？ そう、か。これはお前の夢か」

「……」

少年のような風貌だったのが、大人の。現在の入江正一の姿に変わる。

「この装置はお前の元にあるのかな？ って言うことは俺達を未来に閉じ込めたのもキミ？」

ツナの問いかけに、入江正一は息が詰まったような声を出す。

「そう、理不尽に俺を殺しあまつさえこんな所に閉じ込めたお礼をしてあげなきゃね」

「大丈夫。ボスは酷いことはしない」

「食べたりしないから。怯えるなよ」

胃の痛みを訴えるように入江正一が蹲ると同時、その世界が崩壊していく。

「タイムアップか……。次会う時はもっと楽しませてくれよ？ 入江

正一クン♪」

ツナの別れ際のその一言に、入江正一は全力で否定の意を表したのであった。

第四十九話 突入

獄寺・山本・クローム、突撃隊メンバー一応の修行は完了し、いつでも突撃は可能という状態になっていた。

ちなみに、数日前にγ達は解放している。ツナが約束をしたのだ。向こうの「姫」を絶対に助けると。ただ向こうの戦力として戦っても良いし、何もしなくてもいい。本当の意味での解放だった。

「さて、みんな大丈夫？」

「ええ」

「おう」

「うん」

「じゃあ説明するわよ。敵のアジトは並盛の地下ショッピングモールにある。そのショッピングモールにあるダクトのいくつかが不自然だったのよ。それが雲雀のところに流れ込んだミルフィオーレアジトのダクトの位置と一致。二つの図面を重ね合わせる事で、敵アジトの正確な位置を把握済み。そして、地下駐車場の発電室ダクトから潜るのがベストよ」

「分かった」

「では、次に私の方から装備の説明をします。まずは「オートマモンチェーンリングカバー」。長い名前ですが、要は使わない時に自動的にリングの力を封じ、敵から探知されにくくなる機能を搭載しています。そして特別製の無線機、一斉に送信両方の周波数が変化するので盗聴の心配もありませんし、機器同士の周波数は寸分変わらずに同調変化しますから音質もクリアなのです!!」

「レオンからもプレゼントがあるぞ。レオンの体内で生成された死ぬ気の炎に強い糸で縫ったシャツだ。・・・ツナは要らねーだろ？」

「まあ、そうだけどさ・・・」

ツナは自らの先生の自分に対する信頼がどこか別の方向へ飛んで言ってるような気がして、思わずため息をついた。

「じゃあとりあえず、俺達が本隊と思わせて風と雲雀さん達がああ白くて丸い装置のところへ迅速に向かう。そういう手順で良い・・・ん

「だよな?」

「ああ。暴れてこい」

「リボーン! 良いのか!」

「ツナが静かにジツとしていられるわけねーだろ。特にこういう場合はな」

「やっぱり酷い事言ってるよね。リボーン・・・」

「ボス、この地図の通りに行けば良いの?」

「ん? そうそう、いざとなったら床や壁を無視して進めば良いし。それに、風なら大丈夫」

「うん・・・!」

その作戦会議の日の夜、ボンゴレアジトの倉庫予定地にミルフィオーレが攻めてきたのでツナ達はミルフィオーレアジトの方へ突撃することになった。

ショツピングモールまで見送りに来てくれたビアンキに子ども達を任せ、囚役のツナ、獄寺、山本、了平、ラルの五名はダクトの中へ消えていった。

「地下三階のC5ポイント、第二格納庫の上だ。よし、凶面通りだな。

このまま中央の施設を目指すぞ」

「面倒臭くなってきたな・・・」

「おい、バカを言うな」

「だって、風に暴れるから堂々と侵入しろって言ってきたんだよ?

じゃあ暴れなきや」

「・・・ハア」

「武く。一発やっちゃって」

「おう」

その場に斬撃音が響き、ダクトが細切れになった。綺麗に着地したツナはみんなの無事を目線で確認していた。

「ハア~~~~。モグラでなく人間のガキだく」

「でけっ!」

「デカいねえ・・・」

「筋肉モリモリっすね」

「マツチヨマンの変態って奴な」

「方法は？」

「瞬殺でいいんじゃないっすか？」

「見てらんねーのな」

「んじやそれで」

その言葉のすぐ後、ツナは容赦なく剛の炎を撃ち込んだのだった。

「よしっ。^{地下}B八F階に着いたぞ」

「施設破壊に入る前に、この奥にある警備システムサーバを破壊するんだっただな」

「そうだ。警備システムをダウンさせれば、基地内の索敵能力をマヒさせることが出来る。その機に乗じて主要施設の破壊と、入江正一への奇襲をする」

「奇襲・・・ねえ」

「十代目、まさか。『真っ正面から叩き潰した方が早くない？』とか考えてませんか？」

「お、良く分かったね」

「やめておけ沢田。いくら想定より基地内の敵の数が少ないとは言え、それは洒落にならん」

「まあ、確かに。俺達五人がそろって移動できるならまだしも、もし分断とかされちゃったら意味ないしね・・・」

「分断？ どうやって」

「そりゃこのパズルでに決まってるじゃんっ！」

「「「パズル？」」」

「この地図を見て。どこで区切っても綺麗な正方形になってる。恐らくこれはパズルの匣。基地全体がゴゴゴと動いて——」

「よし、行くぞー」

「はいっす」

「あ、ちよっ！ 待ってよ！」

慌ててツナはみんなを追いかけた。

と、次の一本道で魔導師の人形、ジンジャー・ブレットと交戦することになった。

が、もちろんツナが正直に戦うはずもなく、亜音速で残像すら残さず一本道を通り抜け警備システムのある部屋まで辿り着いていた。

「さてさて、頼んだよラル・ミルチ。原作通りになつてくれ。俺がないのに気付いてもどうしようもないだろうし。さて、このメローネ基地を通して、ミルフィオーレの全世界のアジトに俺の相棒を送り込んでやる・・・っと」

ツナは鼻歌を歌いながら警備システムのコンピュータに影から取り出した一つのタブレットPCを繋ぐ。

「・・・さて、起きてるか？ 仕事だ “ENE”」

『突然の仕事ですねえ。以前は何でしたっけ？ 古里真とその家族の回復でしたっけ？ で？ 今回の任務は？』

『警備システムを通してこの基地の全コンピュータの掌握、それが終わったら全世界のミルフィオーレの基地をよろしく』

『え？ 何ですかそれ、寝てても出来るんじゃないですか？』

「まあ、得意分野だろ？」

『ええ。任せてください。私に電腦世界のことです勝てる奴なんかいませんからね』

「じゃあ、頼んだぜ」

『お任せください。ご主人様♪』

電腦世界。それは0と1で構成された宇宙のような空間。そこに存在するCPUはセキュリティであれウイルスであれ、彼女にとってみれば序盤の敵と同然の攻略難易度。・・・らしい。ならば、安心して任せられる。例え強敵が現われても、スペルカードがあれば何とか出来るだろう。対プログラム戦闘はクラッキング攻略よりフルダイブゲーム攻略のほうが優れている。

——— 電腦世界。

「さーて。私の主人からのオーダーですから、派手に行きますよ」

メローネ基地内の警備システムのコンピュータのとあるデータ

ベースから彼女の侵攻は始まる。

青い少女、エネはその両手に454カスールカスタムオートマテイツクと、ジャツカルを握って駆け出した。

第五十話 仮想と現実の同時侵攻

ジンジャーを倒した仲間と合流したツナは、敵の警備システムを爆破し先へと進む。

(心配しなくてもアイツのことだ。とつくの昔にメインコンピュータぐらいまでは進んでるんだろうな・・・)

そんな事を考えながら、現在ツナはB十F^{地下階}の用水路で浮かんでいた。

(ストウラオ・モスカが四機・・・ま、大丈夫かな)

ツナは炎の加速で一機のモスカを掴むと、そのまま膝蹴りを頭部に叩き込んだ。

(人型の兵器っていうのは総じて、頭部に重要なセンサーを集めてしまう。だからそこを破壊すれば、行動不能って訳さ。・・・悪かったね。俺、この時空の沢田綱吉じゃないの)

そう、全体的に見て「沢田綱吉」用に造られているであろうこの時空の兵器達が、別時空の「沢田綱吉」^{上条当麻}に通用するはずがない。

追撃をスルスルとかわし、催涙ガスを食らってなおものともしていなかった。

(催涙ガスとはまたこしやくな手を・・・)「ズズツ・・・」

訂正。涙は出ているようだ。

「・・・」。あの男は本物のボンゴレ十代目だ。パンチの炎圧9300FV。推定戦闘力はストウラオ二機より高い。・・・でも、四機合わせた戦闘力ならウチのモスカの方がずっと上だな」

(さて、原作通りだと。どれかにスパナが載ってるからな・・・キング・モスカはX BURNERで倒さないとダメな気がするから・・・どこかであのナノコンポジットアーマー相手に素の拳を叩き込みみたいな・・・)

と、そこで水中にツナは引きずり込まれた。

「ゴボツ!」(何でだっ!? 何でこいつ、頭がないのに動いている!?)

上から三機、追撃を仕掛けにやってきている。ツナは脱出するために、拳を握った。

(用水路ごと破壊する！ いたって普通のパンチ！)

振るった拳はいとも容易くモスカの腕をヒジから千切る。その後、切断機を優に超す水圧まで圧縮された用水が、用水路の壁を抉る。

が、ツナはそんな事は気にせず、一気に浮上すると初代零地点突破で水路をモスカごと凍らせた。

そのすぐ後、撃ち出された死ぬ気の炎を零地点突破 改でツナは吸収する。

『何でモスカのレーザーが死ぬ気の炎だと分かった？』

「・・・初代零地点突破を溶かすことが出来るのは、死ぬ気の炎以外に考えられない」

『やっぱり、そうだよな。零地点突破改で吸収したエネルギーをどれぐらい戦闘力に変換してる？』

「闘る気は、ないのか？」
『ある』

氷が割れ、モスカが襲いかかってくる。ツナはそれに対して容赦なく、拳の連撃を浴びせることにした。

「連続 普通のパンチ」

ウラヌスリングを介して炎を灯した、純度100%ツナの覚悟の拳を。

『データ・・・とれた・・・』

「・・・。。。。。。まだ、壊されたいのか」

『731%だ』

「？」

『零地点突破改で吸収した炎を自分のエネルギーに変換することで、あなたの戦闘力は約7.3倍に跳ね上がった。・・・一つ聞かせて欲しい。あんた人か？』

「何が言いたい」

『まあ、それでもウチのモスカの方が強い』

そして、キング・モスカが生まれた。

何とか善戦するツナだったが、スピードに翻弄される振りをしてながら(人間アピール)そのタイミングを計っていた。

背中に受けた打撃で空中をゆつくりと飛ぶその間に、ポツリと眩く。

「………X BURNERさえ………」

『「ジジ」……「ザー」……「ガガー」……撃ちやあいじやねえか』
「!!」

『あるのは剛と柔の炎だけだ。地上も、空中も関係ねえはずだぞ』

(この声……)

『神ツナと言ひ張るんならやって見せろ。オメーにはそれが出来るはずだぞ』

(……そうだな。そうだよな、リボーン。………決めてやるぜ)

ツナは空中で上下反転したままその構えをとる。

「……X ^{イクス}BURNER ^{バーナー}AIR……!!!」

しつかり決め、キング・モスカを倒したツナだったが、その反動で以前と同じように後方へ吹き飛び、気絶してしまっていた。

——十数分前。

ツナとモスカ達が交戦を開始したちょうどその頃。

「オラオラオラア！ 邪魔だ見た目だけのスライムセキュリティ！」

エネは電腦世界でメローネ基地のセキュリティを簡単に捻っていた。

「弱っ……。え、弱っ……。良くこんなので今までセキュリティ機能させてましたね……。ま、サクツと仕事を済ませてしまえますか」

エネはその言葉通り、数分後には順調にメインコンピュータのハッキングを完了させ、メローネ基地の面々に違和感を気取られずにコピー体を海外のメインコンピュータにさえ侵入させて終わっていた。

「ハア……。楽勝でしたね……。どれだけ派手に暴れても奴さんは何の対抗もしてきませんでしたし……。少し派手に動いてみますか！」

エネが動こうと重い腰を上げたのと、ツナのX BURNER AIRが炸裂したのはほぼ同時だった。

結果。第一通信指令室では大きな混乱が起きていた。

「入江様！ 全てのコンピューター、応答しません！」

「なに!?!」

「この通り、先程からこの画面を映すだけで、メインコンピューターにすらアクセスできません！」

「まさか・・・ハッキングか!?!」

「!?!」

映し出される画面にはデフォルメされたような青髪少女の顔が描かれていた。

「そうだ！ 通信は!?!」

「辛うじて、生きています。・・・というよりこれは、意図的に生かされていると言った方がいいぐらい、完全に向こうの掌の上です・・・！」

「何だって・・・!?!」(まさかこれも綱吉君達の・・・!?! イタタ・・・胃が・・・。って、どうやってハッキングを!?! いったいどんな技術者が!?)

入江正一はその疑問に答えるとしたら、この短時間でそんな事ができる技術者はボンゴレにはもちろんいない。ただ、電腦少女と呼ばれるCP相手には最強の相棒が、その時空の沢田綱吉にはいただけだ。と、その時。

『レッティ——ス・ウア——ン・ジェントルメンツ！』

並びに紳士でもなければ淑女でもない愚劣凡庸たる一般兵士どもコンバンワ！ 突然の侵入者策をお楽しみのところ大変申し訳ございませんお邪魔しまーす!』

メローネ基地内の全てのスピーカーから活発な少女の声が響き渡った。

『私めが誰か——はハズカシーのでカット除外省略ツ！ 乙女の秘密だこの野郎！ もっと好感度を稼いでから出直して！ ぶつちやけわたくしもうとつくにオネムの時間でございますれば、とつとおよびやすみココアを飲んで布団にダイブしたい所存！ でも駄目チエケラツ!』

声はメローネ基地隊員を置いてけぼりにして酔ったディスク・ジョッキーのような調子でひたすら一方通行のトークをまくし立てていく。

『アーアー、ご存じの通り？ 今現在我々がいるミルファイオーレ基地の全コンピュータシステムが何者かの手によりダウンしているのが状況でございますが——さアてさて？ 皆様のオツムに詰まっていらっしゃるのが人間の脳味噌であればもう答えには辿り着いていると思うのですがア——どうなのそこんトコ!?!』

——まさか。

混乱に混乱を重ねた少女の声を、正しく理解できた者、事態を把握していたわずかな者達は、そろって小さくつばを飲み込んだ。

『イエ——アッ！ まさかと思つた賢いアナタ！ ピンポンピンポンちよー正解！ まさしくそのまさかでファイナルアンサーでッす!』

一斉に停止した通信機構。少女の声を配信し続けるスピーカー。稼働はしているが管理者の制御を外れているメインコンピュータ。それらが導くのは、ある一つの結論。

声の主が尊大かつ愉快に肯定する。

『本日！ 只今！ この時をもって！ わたくしはこのメローネ基地を中心に全世界のミルファイオーレのコンピュータを掌握いたしましたッ！ いえー!』

それは死刑宣告にも等しい敗北へのカウントダウンだった。

第五十一話 囚われたツナ

(・・・夢?)

いい夢だったのになー。と若干現実逃避気味にツナは目を覚ます。と目の前に紙が差し出され文字が書かれていた。

【酔花。】と。

「す・・・はな・・・?」

「・・・はな・・・?」

「ハハッ。本当だ・・・○がついてる・・・。ゴメン、寝ぼけてた・・・」

「気にするな」

「?・・・って、漢字に半濁点は要らねーよ!?!」

キレ気味で飛び起きたツナはとりあえず周りを見渡す。

「その恰好では風邪をひく」

「・・・? なにゆえ俺はパンイチなのさ」

「これを貸してやる。茶を飲め」

「あ・・・どうも」

お茶を受け取ったツナは飲みながらも一度ゆっくり周りを見る。

「あ、俺の服・・・」

「ビショビショだ」

「用水路に落ちたからか・・・。あ、俺の装備一式だ」

左手にお茶を持っているため、右手を伸ばそうとして手錠に気付いた。

「俺、もしかして拘束されてます?」

「うん。あんた今、行方不明ってことになってる」

「マジかあ・・・」

その後ツナは壁につけられた手錠から、手首同士を繋ぐ一般的な手錠をしてツナギを着ていた。

「・・・Sサイズでもでかいな・・・」

「え?! これSサイズ!? うっそー・・・」(俺どんだけチビなんだ

よ・・・。いや、そもそもそんな丈に作られていないこのツナギが悪い。うん)

「………未完成なんだろう？」

「へ？」

「最後のアレ………。見た感じバランスが悪くてフルパワーで撃ててないように見えた」

「ん……？ 撃つ、つてことはもしかしてX BURNERのこと？」

「X……BURNER……。そう、X BURNERだ！ X BURNERが安定しないのは右手の炎と左手の炎の力のベクトルにズレが生じているからだ。左右を完全なシンメトリーになるように工夫を施せばいい」

「あの、突然どうして……？」

「………ウチは日本ジャップポネーゼ人も日ジャップポーネ本も好きだ。ロボット工学が進んでるから。カタカナや漢字もクールだし、緑茶の香りも神秘的」

「はあ……」（ロボット工学の最終目的は恐らくガン〇ムとかを造るためだと思えます）

「でも一番興味があるのはボンゴレ十代目の技だ」

「え？」

「あなたの完璧なX BURNER見たくなった。ウチが完成させてやる」

「あ、ありがとうございます……？」

暫くして、ツナはお茶を飲みながら目の前でなにかの作業を続ける。スパナを見つめていた。

「……あの、作業が一段落してからでいいんですが質問してもいいですか？」

小さく頷いたのを確認してツナは行動を開始する。といってもお茶と一緒に貰ったアメを啜えただけなのだが。

（慌てたっつてしようがない。完璧なX BURNERが撃てるなら何だっつていいや）

「……何？」

「あ、えと。外の様子がどうなってるか、知ってます？」

「外って基地の他の様子のこと？」

「そうです！」

「知らないな。正一はバタバタしてるみたいだけど」

「正一……って入江正一のことですか？」

「そう。でも、正一を攻めに来たんだったらやめた方がいい。高校の国際ロボット大会の頃から知ってるけど、正一は相当キレる。いつも全体を見てるスゴイ奴だ」

「へ、へえ……」

「でも、何かメインコンピューターが乗っ取られたみたいだけど」

「へ？ ……さっきの夢、案外的を射てたのか……」

楽しそうな青い少女が出てくる夢。いい夢かどうかは置いておいて、あの夢で聞こえた声は現実の声の可能性もある。

「あ、あと。何で俺の技を完成させてくれるんでしょうか。ミルフィオーレの人でしょうか？」

「技を完成させるのは見てみたいからって言ったろ？ あの時あんたを殺さなかったのは気持ち悪くなったんだよね」

「は？」

「モニター越しの殺しは平気だけど、生身はいやだってアレだよ」

「ゲームと現実ゴツちゃ混ぜにしないでもらえます!? そもそも殺しは全面的に駄目でしょ！」

「……」

「あ、すみません」

と、その瞬間部屋全体が大きく揺れた。

「わっ!？」

その後も続いて断続的に揺れ続ける室内で、ツナは揺れに規則性を見つけ耐えていた。

ある程度揺れが収まった後、ツナは一応周りを見渡す。そこから中散らかっていた。

(っっていうかエネの奴、遊んでたな……? じゃなきゃこんな事奴さんが出来るわけねーだろ)

と、自分の相棒に心の中で文句を垂れたツナはスパナがなにかを探しているのを見つけた。

「? どうしたんですか?」

「・・・・・・・・大事な部品失くした」

「え・・・・・・・・」

呆れたように下に視線を動かしたツナは、手元に手袋等が転がっていることに気付く。

(お、じゃあ服でも乾かすか)

ツナは手っ取り早くボンゴレリング&ウラヌスリング。そして手袋を着けると、その拳に炎を灯して干してある服に近づけていった。

「あつた」

「あ、ありました?」

「・・・・・・・・・・じゃあハイパーモードになってよ。実際やって試すから」

「あ、はあ・・・・。つて言うか逃げるとかは考えないんですね・・・・」
「逃げてどうすんの?」

「スパナの言う通りだ。それに俺が見てみてーぞ。完璧なX BUR
NERつて奴をな」

「いや、そんな事は分かって・・・・・・・・ん?」

ツナは突然聞こえてきたその声に慌てて声の方を見る。するとそこには黒いスーツを着た彼のよく知る赤ん坊がいた。

「ただし時間はねーぞ」

「リボーン!」

「ちやおっス」

「お前・・・・いつの間に? つて言うか、ちよつと色が薄い・・・・?」
「ホログラム立体映像だな」

「当たり前だぞ、スパナ。俺は本物じゃなくて3Dの映像なんだ・・・・」
「もしかしてその為に俺のヘッドフォンだけ大きいのか?」

「そうだ。俺はボンゴレのアジトで撮影されて、その映像がヘッド
フォンを通してここに映し出されてんだ」

「また無駄な機能を、どうせ俺を驚かそうとか思ったんだろ・・・・」

「ああ、本当はもつとは約驚かせようと思ったんだがな。さつき急に
電波が良くなった。何かあったのか?」

「パズルが動いたんだと思うよ」

「は？ パズル？」

ツナの解答にリボーンは目を丸くする。

「マップに所々黒い部分があったら？ アレは多分空間があるんだと思うよ。全ての部屋が正方形にわけられるこの基地の部屋がスツポリハマる空間がね」

「それがズラされて、分断されちゃったのか。あいつ等は」

「やっぱり？ ほら、俺の言った通りじゃん！ まったく、俺の話が聞かないからこういうことになるんだよ……」

ツナの偉そうな態度にリボーンはため息をついたという。

第五十二話 侵攻、メローネ基地

コンタクトレンズを何故か目に入れることになったツナは数秒迷った後、綺麗に入れていた。

「よし、始めて」

「あい」

手錠を壊し、視界を確認するツナ。その視界はコンタクトの透過性が弱く、霞んでいた。

「どうだツナ」

「視界が霞んでる」

「やはり調整に時間が必要だな」

「じゃあ頼む」

一方で。

幻騎士と対峙した山本は、相手から漏れ出した殺気に少々気圧される。だが、

(ツナの物理的暴力の殺気に比べたら全然甘いッ！)

上から押さえつけるものだったり、横から殴りつけるようなものだったり、様々なバリエーションの殺気を笑顔で飛ばしてくる人間が彼等のボスだ。そうそう生半可なことで疎んだりするように鍛えられてはいない。

そしてこれが一番重要だが、山本はリボンとの修行の後完成度を確かめるためにツナと模擬戦をし、数十回にわたって負けている。数百本の刀を地に刺した状態で戦う、ツナの無限一刀流とは名ばかりの刀による払いの連撃で。

だからこそ、山本は幻騎士程度の剣速なら余裕で見切れる(体がバラバラになって避けているのか切れているのか分からない。なんて事が無いから)し、幻騎士の使う霧の幻覚もクロームとの戦闘で見抜き方を心得ている。

それ故、彼が負けることはなかった。ツナのアドバイスもあつたら。

「あの燕スコントロー・デイ・ローン・デイネ 特 攻だっけ？ 突進技って気を付けた方がいいよ。

突然の障害物には対応できないから。あ、俺みたいに愛気覚える？
もしかしたら避けられるかもよー？」

そう、だからこそ。こんなちやちな幻覚を見抜けないわけがなかった。

「なぜ、幻覚だと分かった・・・！」

「こちとらあんたより一億倍・・・いや、それ以上の強さの相手と戦ったことがあるんだ。こんな所で負けてらんねーよ」

だが、山本の体力も限界に近かった。

「ハハッ・・・剣の腕では負けなかったけど・・・何か負けた気分だ・・・」
「いや、お前は勝った。剣士としては、な」

「僕の名前はヤ○坊♪ 僕の名前はマ○坊♪ 二人合わせて○ン○ーだ♪ 君と僕とでヤ○マ○だ♪ 大きなものから小さなもので・・・」

ツナはそう歌いながら服を乾かしていた。その後ろでリボーンがスパナに質問をしていた。

「確か時空間移動がらみの・・・所謂タイムトラベル」

「タイムトラベル!？」

(デロリアン乗ってみたいな・・・)

「あ・・・」

「やっと点と点が繋がったぞ」

リボーンがなにか言っているが、ツナには聞こえてこなかった。何故なら、

『申し訳ごぎいませんでしたア——ツ!!』

「うるせっ」

元気いっぱいの電腦少女が全力で謝罪してきたからだ。耳元で。

『いやはや失敗ですよ失敗。見逃してました。死ぬ気の炎による強制回路構築で向こうに主導権とられちゃいました』

「取り返してこいよ。馬鹿音」

『あ、もちろんもうコピー体が向かってますよ？ 簡単に突破してく

れています。コンピューター側が手に落ちるのも時間の問題つすよ
ゲツヘツへ』

「何という悪い笑みだろうか。果たして女の子がこんな笑い方をして
良いものだろうか。いや、駄目だ（反語）」

ツナは一度軽く地面を蹴ると、ハイパーモードになった。

「見つけたよ。何にしても時既に遅しき。あんた達はここで永遠にお
ねんねするんだからさ」

「……………アイリスと死莖隊……………」

「スパナ、下がってろ」

「…………やめとけボンゴレ。死莖隊は今のあんたが敵う相手じゃない」
「そうか？ 知ってるだろ、ツナはお前のキング・モスカと相打ち（笑）
するほどの強さだぞ」

「だからだ。前に死莖隊の戦闘データを拝借してキング・モスカとの
戦闘シミュレーションをやったことがあるが…………、ボロ負けだった」
「へえ……………」

「ふーん。死の忠告をしてやるなんてお利口じゃないかスパナ。ま、
どっちみち裏切り者のあんたもここで死ぬけどね」

「え……………」

「さあ、行くよ。下僕ども。燃えてきな!!」

アイリスと呼ばれた女性が振るったムチで叩かれた死莖隊は、その
肉体を数倍にも膨らませた。

「キモっ。何それ」

「増強つてさ」

「……………出た……………。死莖隊、雲の肉体増殖」

（雲属性の炎による増殖で肉体の強化つてどこ？ 何にせよ、気持ち
悪いのには変わらないけど。涎垂らすな汚いなあ）

「何だありや……………。人間なのか？」

「……………元々はね」

「さあ、ひねつといで。下僕ども」

「プルア!!」

「かけ声までキモい!!」

次々と繰り出されるその奇妙なかけ声に、悪寒が走っていたツナはあっけなく壁を突き抜ける勢いで吹き飛ばされる。

「……………だから、ムリだって……………」

「本当にあいつ等人間なのか？」

「死荖隊。ミルフィオーレ人体覚醒部の被験体だ……。改造された肉体が全身を覆う特殊なスーツとアイリスのムチの雲の炎によって異常な体質変化を起こし、人体に眠る攻撃能力が覚醒しあーなってる」

「人体実験か……。ひでーことしやがるな」

「……………それは少し違う。あいつ等は自ら進んで肉体の改造をしたんだ。」

あの被験体達は元々人体覚醒部の博士だった。四人の共通点は一
人の助手に惚れていたこと……。アイリスだ。彼等は、一番アイリスを喜ばせるのは自分だと、競うようにそれぞれ自分の体にメスを入れ肉体を改造していった……。

アレはそのなれの果ての姿……。生きがいは殺戮と……。妖花
アイリス」

「よくやったよ下僕ども」

その言葉に死荖隊はアイリスに群がるようにうめきを上げる。

「歪な関係だな」

「さあ、ボンゴレは壁の向こうだよ。開けてやるから腕ごとかつき
らっついで!!」

その言葉の通り、部屋を仕切っていた壁が開いていく。開いた先には、ツナギから乗り込む時着てきた服に着替えたツナが立っていた。

「へえ。中々しぶといじゃないか」

「スパナ、何をしている。早くコンタクトを完成させてくれ」

「え……………」

(アイツ…………)

「完成時間が変わらねえのがポリシーなんだろう？ 早くつくれ、スパナ」

「……………でも、死荖隊はキング・モスカより強いつて言っただろ？
ムダなあがきだ」

「ツナが遊びだした」

「？」

「ツナが遊びだしたら誰も勝てねえぞ」

「いいや、ムダさね。やっちまいな」

大空の炎の推進力を使わずに駆けだしたツナは、襲いかかる死茎隊の腕をワンパンで吹き飛ばすと、肉体に近づいてその拳を叩き込む。

(硬くて柔らかい・・・ツ!? 手加減しすぎたな・・・)

その後も攻撃をかわしながら、一体また一体と確実に攻撃を当てていくツナ。

「何だい? どーなってんだい!？」

「ウチの知るボンゴレとは・・・まるで動きが違う・・・」

「キング・モス力戦とでは、違う所が二つあるからな。一つはツナが遊んでるってことだ。あの時のツナは足止め役で時間稼ぎなどが目的だった」

「でもあれは、本気とかのレベルじゃない」

「ああ。アイツは今も本気じゃねーぞ。それでも戦えるのはもう一つの理由。相手が機械じゃなく生きた人間だってことだ。生身の人間だからこそ見せる動きや考えの予兆というものがある。ツナはそれを感じ取ってんだ。これがボンゴレ^{ブラッド・オブ・ボンゴレ}の血に継承される、見透かす力

“ またの名を——

——超直感!!!”

第五十三話 完璧なX BURNER

「見透かす」力・・・、超直感。またボンゴレはウチの想像を上回ってきた・・・。ますますそんな男の編み出した——X BURNERの完成形を見てみたい！ 待ってるボンゴレ」

作業を進めるスパナ。その横でツナはつまらなさそうに戦っていた。

（弱い。つまらん。X BURNERが綺麗に撃てたら、楽に吹き飛ばせるんだろうなあ・・・）

「ええい、何してんだいアンタ達!! あんなガキ一人に手間取って!! そーかい、燃えたりないんだね!! アンタ達の研究の成果を見せつけといで!!」

「プルー!!」

「フオオッオッ!!」

死莖隊の姿がさらに変わる。

（もう、良くない?）

（あ、ツナが面倒になってやがる）

「行きな!!」

死莖隊がさらに襲いかかってくるが、ツナは軽いかげ声と共にもの凄いい速さで拳の連撃を繰り出す。そう、ネーミングセンスがなかった誰かにつけられたその名を「連続普通のパンチ」

そこから、死ぬ気の炎で加速し、凄まじい遠心力を起こす新技「X ストリーム」を繰り出した。

「すごい・・・新技・・・」

「遠心力で帰還が全部片寄っちゃまったな。あれじゃ肉の塊同然だぞ」「ええい、何やってんだい!! カス男が!! あんたらこれしか能がないんだよ!! あたいはゴミは要らないよ!!」

三度ムチで叩かれた死莖隊の内一体は、その肉体を元に戻していた。

「甘いねえボンゴレ!! こいつらは死なない限り戦い続けるよ!!」

（なんて奴だよまったくもう）

えなかった。

「ハハハハ。これが裏切り者の末路だよ。ざまーみろってんだ!!」

「……………」

(受け取れ……ボンゴレ……)

所々焦げている。そんなボロボロの姿でスパナはコンタクトレンズが入ったケースを放る。

「させないよ♪」

「ボンゴレをつかまえな!!」

攻撃を加える二人だったが、死ぬ気なしで亜音速行動を可能とする少年の速度を捉えきれぬわけもなく、ツナは無事にコンタクトレンズを手に入れた。

「眠るのはまだ早いぞ、スパナ」

「……………」

「おまえが見たがっていた完璧なX BURNERを、見せてやる」

「…………X BURNER?」

「何だい!?!」

「ツナ、コンタクトの使い方は分かってるな」

「ああ」

「フフッ♪ たいそうもったいつけるけど、要は……ハツタリだね♪」

ジンジャーの攻撃を避けながら、ツナはスパナの説明を思い出す。

「説明するぞボンゴレ。まずコンタクトはヘッドフォンと音声で連動させてある。コンタクトの情報は耳からも入るはずだ」

「耳からも……………?」

「次にディスプレイの見方だが、上のスロットルバーが右手の炎。ライトバーナー下のスロットルバーが左手の炎の出力を表している。剛の炎は赤く、柔の炎は緑色に。バーに表示されるはずだ」

ツナは実際に飛び回りコンタクトに表示される情報と、自分の感覚を照らし合わせていく。

(……………よし。正常に作動してる)

「そして、X BURNERだが、「オペレーションX」のかけ声で自動的にコンタクトが発射誘導プログラムを開始する。画面がX B

URNER用に切り替わり、両手の位置で動くターゲットが出現し、上下のショットルバーから中心に向けて出力のバランスラインが伸びる。安定したX BURNERを撃つには、ターゲットを中心に合わせて左右の出力を全く同じにすること。つまり両メーターから伸びるラインを一直線にすることだ」

ある程度確認した所で、ツナは空中で停止する。そして右手を後ろに向けた。

「オペレーション………、X」イクス

『了解しましたご主人。ボスX BURNER、発射シークエンスを開始します』

「………、いきなり空中で……？」

「!?」

「!! 炎を逆方向に噴射!」

『ジンジャー!! アイリス!! 聞こえますか!? モスカの戦闘記録を解析した所、ボンゴレが起こすその攻撃は、高エネルギーを前方に放つ技だと考えられます』「真つ向から受けては危険だ!! 回避だ!」

回避しろ!!』

その様子を冷ややかな目で見ながらツナはウラヌスリングを介して左手に炎を集めていく。

『ライトバーナー柔の炎。十五万 F フイアンマボルテージ Vで固定。レフトバーナー柔から剛に変換しつつ、炎エネルギーをグローブクリスタル内に充填』

「アイリス……？」

「強力な飛び道具って訳かい。面白いじゃないか。マツスルスクラムだよ!!」

「………受けて立つ気か……」(バカだな)

『ターゲットロック。ライトバーナー炎圧再上昇。十八万……十九万……二十万FV!!』

ツナは剛の炎によって輝く左手を、標準を合わせるようにゆっくりと彼女らの方に向けて伸ばす。

『レフトバーナー炎圧上昇……十九万……二十万FV!! ゲージシ

ンメトリー!! 発射スタンバイ!!』

「おおっ! X BURNER!!!」

放たれた炎の柱は全てを呑み込み、吹き飛ばした。

「安定・・・してる・・・。うわっ・・・」

「カメラ破損!!」

「なっ・・・」

「大変です入江様!! 第四ドックから三区画が・・・、消滅しました!!!」

「しょ・・・消滅!!!?」

第五十四話 最終防衛区画

X BURNERによって様々なものが無くなった空間で、入江正一の声が通信機から響いていた。

『ジンジャー!! アイリス!! ……あまり期待は出来ないが……、もし無事なら応答してくれ』

「やあ、入江正一くん♪」

『!!』(この声……!!)

「何か色々策を巡らせてるみたいだけど、もう全部終わりにしようよ。じゃあね♪」

ツナはそう言うのと通信機を握り潰した。

一方で、匣実験場に入れ替わった雲雀恭弥が予想以上の善戦をしていた。まあ、当たり前だろう。雲雀は幻騎士の剣技を超える速度と動きのツナの愛気を何度か捌いている。大抵雲雀が仕掛けてツナが反撃するのが一連の流れだが、その反撃を見切ることが出来るほどに彼は成長していた。

だが、匣の起こす幻術には対抗する術がなく匣兵器の暴走が起きてしまった。

「…ツナ、草壁から緊急通信が入ったぞ」

「なんて？」

「十年前の雲雀が研究所近くで戦っているらしい」

「あ、じゃあ心配ないね」

「そーか？」

「うん。だってあの人ついこの間には俺の愛気、居合い払いに対抗して見せたからね」

「…化け物か」

「かもね。でも、まだ負けるつもりはないよ。俺も更に上があるしね」

「まだあんなのか」

「あるよ。奥の手は最後の最後までとっとなかないと。じゃ、研究所に向かおうか」

「ウチも連れてけ。ボンゴレ」

「え？」

「X BURNER用コンタクトはデリケートなんだ。ウチにしかメンテナンスは出来ない。それに、足手まといにはならない」

準備が出来た彼等は、ツナの機動力で出発した。

「大丈夫か？ スパナ」

「問題ない」

第四ドックから大分進んで。

「リポーン。研究所はまだ？」

「ああ。直線ルートならすぐなんだが入り組んでな」

「X BURNERで道を作るか？」

「それは最終手段だ」

と、目の前で仕掛けが作動し、行き止まりとなってしまう。

「・・・すごいさすが正一らしい仕掛けだ」

「邪魔」

かなり厚い壁なのだが、ツナの拳は簡単に粉碎した。

「相変わらず規格外なヤツだな。ツナ」

「そもそも俺規格の奴なんているの？」

「いねーな」

と、さらに上からブロック状のなにかが大量に落ちてきた。

「はあ。連続普通のパンチ」

左手で撃ち出された連撃は、そのブロックを上方に吹き飛ばし、次の仕掛けのハエトリソウを殺した。

「あ、これまた落ちてくるな・・・」

再度今度は右手で繰り出された連撃は、ブロックを粉々に粉碎する。

その後、ミサイルに追い回されたりしたが、ツナはたいして気にしていなかった。と、気も抜けないまま前方からロケットが飛んできた。

それに対してツナは拳を握ったが、そのロケットは直前で何分割にも分かされると、最後にはトビウオになって襲いかかってきた。

「え。何それ面倒くさい」

トビウオを回避するためにスパナを切り離したツナは、剣を持った男に襲われた。

「ここは通行止めだ。研究所には指一本触れることも敵わぬ」

「幻覚を使うみてーだな」

「・・・あ・・・。ボンゴレ!! そいつが六甲花の幻騎士だ!」

「何でここに? みんなと戦ってるんじゃない・・・」

「・・・みんな? 貴様の守護者のことか。中々手こずったが奴らは今頃、藻屑と化しているだろう」

「あ、そう」

ツナはそう言うと、ハイパーモードを解除して地面に降り立った。

「諦めたか」

「ああ。ハイパーモードで戦うのを諦めた」

言いながらツナは、ウラヌスリングとボンゴレリング手袋も外してポケットにしまう。

「だってこうなったら、どっちが勝つかなんて始めから分かりきってるじゃないか」

「そうだな」

次の瞬間、ツナの体が消えた。幻騎士が驚き気付くと、宙に浮いていたはずの彼の体にツナが接近しており、超強力な拳を叩き込まれた。

「来いよド三流。俺とお前の、格の違いってのを見せてやる」

「な、めるなア!!」

一体どうやっているのか。恐らく円形状のこの部屋の壁を蹴って移動しているのだろうが、それを差し引いてもツナの動きは異常だった。空中で停止したり、加速したりまるで空中に地面があるかのよう

に動いていた。

「本来の俺の戦い方は死ぬ気の炎とか、匣兵器とかじゃない。純粋な拳の肉弾戦だ」

質量を持った残像の拳 //連続普通のパンチ//

その両手版 //両手連続普通のパンチ//

ツナが出す前に「必殺マジシリーズ」と言う、恐らくそれなりの全

力技。

リボーンが知るだけでも技のレパートリーがあるとは言えないツナの技術。だが、

「神宿る拳を掲げ、突き進め。いつか敗北に辛酸を嘗めるまで、闘え。孤独な英雄HERO……」

「……何。それ」

「ツナが言ってた言葉だ。何でも昔、知り合いから聞いたらしい。まさにツナにうってつけの言葉だって言われてな」

「神宿る拳……」

幻騎士相手に全力すら出さず、ツナは戦っていた。

「ねえどんな気持ちNDK? ねえねえどんな気持ちNNDK? 弱いと思ってた相手に為す術なく一方的にやられるのってどんな気持ち? 俺は暫く味わってないからさあ。教えてよ、ねえねえねえ!」

「ツ……!」

ツナは楽しそうな言葉とは裏腹に、ツナの眉間には皺が寄っていた。

「もう、終わりにしよう……」

「まだだ!」

「終わりだよ」

いつの間にかツナはボンゴレリングもウラヌスリングもはめ直し、手袋を着けてハイパーモードになっていた。そして、煌々と輝くその両手を水平に持ってくる。

「時間を稼ぎやがった」

『ライトバーナー炎圧再上昇』

「!! あの炎の逆噴射!!」

『二十三万……二十四万……更に上昇!! レッドゾーン突入です!! もっと出せるように設定しておけよコラア!!』

「……エネ」

「に……二十万オーバー? ……ウソだろ? 想定した最大出力を超えてる!!」

『レフトバーナー炎圧再上昇。二十三万……二十四万……、レッド

ゾーン突入!!』

「コンタクトは大丈夫なのか!!」

「それよりボンゴレの体が……、あの炎圧に持つのか……」

「ツナだし、大丈夫じゃね」

『ゲージシンメトリー!! 発射スタンバイ!!』

「ういー」

軽い調子でツナはその手から剛炎を撃ち出した。

第五十五話 真相

幻騎士を倒したツナはスパナにコンタクトを任せ、その彼を牽引しながらX BURNERで破壊した先にあつた白くて丸い装置に向かう。

「つと。これが・・・?」

「うん・・・。正一の装置だ」

「まさかあの幻騎士を倒すとは、計算外だったよ。沢田綱吉」

「やあ、正一くん。おひさ〜」

「まずは武装解除して貰おうか、話はそれからだ」

平静を装って入江正一は話しているが、ツナの笑顔で大分胃がやられている。

ツナは話が進まないと思い、ハイパーモードを解除した。

「みんなは? もしかしてもう逝つてる?」

「いや。一応君が抵抗したそぶりを見せた時のために、睡眠ガスで眠らせてある」

「あ、そう」

透明なガラスの中に充満していた睡眠ガスがなくなったのだろう。中にいた彼等が目を覚ましてくる。

「・・・うう。ハッ。十代目!!」

「!」

「捕まっている!?!」

「あれは・・・」

「チエルベツロ女!!」

「何で奴らが!?!」

「お前達の命は我々が握っている。話をしたいんだ。大人しくしてくれないか?」

「!! 入江正一!!」

「やろう」

「抵抗しようとしてもムダさ。お前達のリングと匣兵器は・・・全て没収した」

そういう入江正一の掌にはボンゴレリングを含めた様々なリングが転がっていた。

「な!! 何!!」

(まあだろうね……。というか、そこに捕まっつてて良く没収されてないと思っつてたね)

「なんてことだ……。これでは……。!!」

「……。ぐつ……。沢田……。かまわん!! 貴様の手で装置を破壊しろ!!」

「え? やだ」

「十代目!? そいつをぶっ壊せば過去に帰れるかもしれないのに!!」

「……。ダメなの」

「そう、ダメ。俺もさ平行世界だからって理由つけたくないけど、自分達を殺すのはどうかと思うしね」

「「は?」」

ツナは守護者達の意見に首を横に振る。やれやれだぜ。とでも言わんばかりに。

「全く、お前達の無知ぶりには呆れるばかりだ。この装置を破壊すれば困るのはお前達だぞ。この装置に入っているのは、十年バズーカでお前達と入れ替わりで消えた……。この時代のお前達だ」

「え、俺背が伸びてる。やったね」

「ボス、一度見てる」

「ゆっくり見る機会なんてなかったじゃん。ゆっくり見れる……。この機械どんな仕組みなんだろ」

「見えている彼等は立体映像のイメージで、実際には分解された分子の状態で保存されているがな」

「え。それ生きてるの……。?」

「と言うか何でお前が知つてんだよ!!」

「それは……。十中八九入江正一が、俺達をこの未来に閉じ込めたからだろうね」

「……。何故だ。何故お前がそんな事を!」

「そうまでして俺達を連れてきてどうするんだ!」

「入江様これ以上は・・・」

「いや・・・、答えよう」

激昂する守護者達と冷静なツナ。そんな中入江正一は落ち着いて状況の説明を始めた。

「簡単な話だ・・・。白蘭サンがこの世界を手中に収め、もう一つの世界を創るために、ボンゴレリングが必要だからだ」

「「・・・?」」

「この世には力を秘めたリングが数多く存在するが、中でも「マーレリング」「ボンゴレリング」「アルコバレーノのおしゃぶり」各七つ、計二十一個のリングを7・^{トゥリニセツテ}という。そしてこの7・の原石こそがこの世界を創造した礎だ」

「いや、いやいやいや。どんだけ中二病なの白蘭!?! アータ俺と出会ってなかったらスゴイイタイ子になってるんですけどーっ!?!」

「話は以上だ。あとは任せた」

「ハッ」

入江正一の前に、チエルベツロの二人が出てくる。

「沢田綱吉、大空のボンゴレリングを渡しなさい」

「さもなければ守護者を毒殺します」

「あ、うーん・・・それもいいんだけど・・・こういう場合ってみんなが助からない場合が多いじゃん?」

「これは交渉ではない。命令だ」

「じゃあもう一度砕く!」

「「?!」」

「そんな器具がないからムリ。とでも言うつもり? 俺のパワーは知ってるよね。いざとなればこんなちゃんけなリングくらい。簡単に破壊できる・・・!」

指輪を握った拳に力を込めるツナに、守護者達が慌てる。一方主犯の彼は、仲間になろうとしてる赤髪の青年がパニックになっているのを見て笑いをこらえるのに必死だった。

「三秒以内に渡しなさい。全滅は免れません」

「こつちだつて砕く準備は出来てんだぞ・・・!」

「3」

「・・・ッ」

「2」

「いいの・・・？ マジで砕くよ？」

「1」

次の瞬間には銃声が響いた。ツナはもう我慢できないといった様子で軽く吹き出す。

「悪く思わないでくれ。少し眠って貰うだけだ・・・」

「ツツ・・・！」

「はあく、・・・暑い。・・・もうクタクタだ・・・。一時は、本当にどうなることかと思ったよ・・・。沢田綱吉君と、仲間の皆さん。あ・・・、キンチョーがとけて・・・ヒザが笑ってる・・・。ふう〜」

「ついでにツナも笑ってるぞ」

「・・・ツ。・・・ツ！」

「よくここまで来たね。君達を待ってたんだ・・・。僕は君達の味方だよ」

「「!!」」

「オレ達の・・・味方だと!？」

「う・・・うん、そうなんだ・・・。普段、僕の行動は部下と監視カメラによって二十四時間白蘭サンに筒抜けになってたけど、君達が全てをメチャクチャにしてくれたおかげで、やっとこうしてミルフィオーレの立場を気にせずに話せるよ・・・。はあくずっとこの時を待ってたんだよ。この基地でのこの状況での出会い方こそが、僕らの設定したゴールだったんだから」

ミルフィオーレの隊服を脱ぎ捨て、地面に腰をぬかしたように座り込んだ入江正一はそう語り出す。

「な・・・何言ってるやがる」

「ミルフィオーレがボンゴレリングを奪うために俺達をこの時代に連れてきたのは恐らく事実。その時世界に何らかの干渉をして、平行世界の中でも弱い俺達を連れて来ようとしたんでしょ。結果最強^最弱^強が来ちやっただけだね」

「うん。綱吉君、君の強さは僕らの予想外のことだ。でも、君達を鍛えて強くなつて貰うつて目標は達成できた」

「要するに君は、沢田綱吉オレを送り込んだスパイつてことだよね」

「まあ、そういう事になるね」

「信じられるか！」

「そうだ、沢田！ 何故お前は信じている!!」

「だってこの人、ウソついてないから」

「あ、そう言つて貰えると・・・嬉しいよ」

正一のその言葉に、ツナは笑いながらさきほど正一が持っていた銃を手に取ると、懐にしまう。

「で。あの甘味バカを止めるためにどうするのか」

「協力してくれるの？」

「当たり前前じゃん？ 俺の行動理念はいつの日も最高の結末面白を見るためだよ」

「はあ・・・。どうやら『扱いにくいけど味方にいたらとても頼もしい』綱吉君が来たみたいだね」

「なにそれh」

「褒めてないよ」

第五十六話 真六弔花

怪我をした仲間の治療をしたりしていたところで、リボーンが声を出す。

「たった今、ジャンニーニからイタリアの主力戦の情報が入ったぞ。XANXUSが敵の大將を倒したらしい」

「二「オオツ!!」」

「マジっすか!」

「せっかくのニュースに水を差すようだが、喜ぶのはまだ早いな。大將を討つても兵力に圧倒的な差がある。ミルフィオーレが新しい大將を立て長期戦になれば・・・」

「その心配もねーぞ。敵は撤退をし始めたそうだ」

「おおっ」

「え!? ってことは! 勝利じゃないか!」

「まーな」

「これならいける!! ボンゴレの戦力は想像以上だ!! 主力部隊を追い込むなんて!」

「急に興奮しやがって・・・」

メローネ基地のみんなが興奮に満ちあふれた時、その声は響いてきた。

『いいや。ただの小休止だよ。イタリアの主力戦も、日本のメローネ基地も、すんごい楽しかった』

(ホログラム立体映像・・・)

「白蘭サン!!」

『ボンゴレの誇る最強部隊の本気が見れちゃったりして、前哨戦としては相当有意義だったよね♪』

(・・・前哨戦。ああ、まだやる気か)

ツナは冷ややかな目で出現したホログラムを見ていた。

『メローネ基地で僕を欺こうと必死に演技する正チャンも面白かったなあ』

「!! じゃあ僕が騙してたのを・・・」

『うん。バレバレだよ。確かにこの戦いを逆に利用して、敵に寝返る計画はよく出来ていたし、正直ボンゴレと手を組むなんて思ってもなかったけど、正チャンがいつか敵になるのは想定範囲内だったからね。だって昔からずーっと正チャン、僕のことなすこといつも否定的な目で見てたもん。まさかミルフィオーレのメインコンピューターにウイルスを流し込むなんて思わなかったけどね』

「ウイルス・・・？ 何ですか、それ・・・」

『あれ、知らないの？ 一度本部の全システムが乗っ取られたんだけどね、もう取り戻してウイルスも駆除したよ』

「くっ・・・クククッ」

ツナは堪えきれなかった笑いが漏れ出した。いぶかしげな表情で全員から見られるが、ツナは笑うことをやめない。

「www・・・なあ、本当にウイルスは駆除できたのか？」

『沢田綱吉くん。それはどういう事か——。「はいはいはい！』

水面下での工作終了でーっす！ 電腦少女ことエネちゃん復活!!』

白蘭のホログラムがぶれたと思ったら、彼の傍にフヨフヨと浮かぶ青い少女が現われた。

「この声・・・アジトのメインコンピューターをハッキングした！」

『正解、正解。その通り！ ずーっと水面下で情報抜き取ってたのにミルフィオーレの皆さん気付かないんですもん。私としてはつまらなかつたんで、一度暴れたらもの凄い抵抗してくれましてね？ 面白もんだから気取られないように気配を消して行動を再開したらあら不思議。喜びの舞いを踊って平常運転に戻っちゃいました！ 傑作でしたよwww』

「ミルフィオーレのメインコンピューターと技術者をそんな簡単に欺くなんて・・・」

『へえ・・・生きてたんだ。というか、人間味のあるウイルスだね。見た目もまるで本当の女の子みたいだ』

『当たり前です！ なんて言っちゃって私は、超絶プリティ電腦ガールなんですから！』

「あの少女、何者・・・!?!」

「恐らくツナが知ってたんだろ」

「え？ あ、うん。知ってるよ」

「「「?!」」」

「彼女はエネ。彼女の本当の肉体はちゃんと現実にあって、そこからパソコンを通して全世界のありとあらゆる電脳世界を飛び回れるのが特徴。彼女にとってコンピューターのセキュリティはゲーム感覚で倒せるスライムだって」

『ご主人のためですからね！ まあ、最も張り切るまもなくあつさり突破できたので不完全燃焼だったんですよ！ で、なんか敵の大將がちよー格好つけてるじゃないですか！ 思いつきり邪魔してやろうと登場した次第ですっ！ っていうかいい加減ゴキブリのように湧いてでてくるのやめてくれませんか？ いちいち潰すのも面倒なんですよ』

『ホント、君厄介だね。何で君ボンゴレにいるの？ ウチに来ない？』
『断ります。ご主人がいる所に私ありますから！』

『ふーん。じゃあ、そのご主人とやらを消せばいいの？』

『ご主人を相手に？ 無謀すぎですよwww。それこそ無謀です』

エネは空中を泳ぐように飛び回ると、光の粒子になって消えた。

『アハハ。とつても愉快な子だったね。誰がご主人かハッキリさせて、僕に従順して貰わなきゃ。さ、とと。そろそろちゃんとやろーよ。沢田綱吉くん率いるボンゴレファミリート、僕のミルフィオーレファミリートとの正式な力比べをね』

(正式な力比べ・・・？・・・ん？ メール？)

『もちろん7・をにかけて、时期的にもピッタリなんだ。正ちゃんやこの古い世界とのお別れ会と、新世界を祝うセレモニーにさ♪』

「何お前、もしかして「僕は新世界の神になる」とでも言うつもり？ やめときなつて、各地にマーレリングが散らばってる状況でどうやって戦うと？」

『うーん。ま、それが本物ならね』

「分かってたけど偽物か・・・」

ツナはかすかに笑っていた。

『もちろんそれもランクAのスゴイ石なんだよ？ 7・はもつと特別なの』

「つて事は他に在るわけだ」

『そ。紹介するね。彼等が本物のミルファイオーレ六人の守護者。真^{リアル}六弔花♪』

「二リ・・・真六弔花!?!」

(まーた中二病くさい名前が・・・)

『んん。彼等こそが僕が新世界を創るために選んだ真のマーレリング保持者にして僕の本当の守護者達だよ』

「知らないぞ!! 僕が知らない人間がミルファイオーレにいたなんて!!」

『正チャンに心配事増やすとメンドくさいからね。僕はこう考えたんだ。ただ腕っ節の強い人間を選んでもたかがしれてる。なぜならリングの力の要はより強い覚悟だからね。そこで、強い上に常人離れした“覚悟”を持った人間を世界中から捜し回ったんだ。しかもその「覚悟」が僕への「忠誠」になり得る人間をね。世界は広いよねー。おかげで彼等と出会えたよ。例えば彼は・・・ご覧のように大自然に恵まれた大変美しい故郷の出身なんだけど、「覚悟を見せてくれないか?」つて言つた途端。故郷を捨ててくれたよ』

そう言つた直後にモニターに映つたのは火山が噴火し森が焼け付くとても同一の場所とは思えない光景だった。

「まるで地獄絵図だな」

「こんなことが・・・」

『怖いよねー。ここまでアツという間だよ。まさか僕への忠誠を示すために、生まれ育つた木も山も村も村人も全部消してくるとは思わな
いじゃん』

(思つとけよ・・・)

「・・・ツナの方が良心的だな・・・」

「・・・ええ、一撃で地殻ごと吹き飛ばしてくれる方が、精神衛生的に
いいっす」

「吹き出したマグマの中になにかいるよ」

ツナのその言葉に白蘭は笑顔になると、映像をズームしてくれた。

「何だ？」

「動物・・・？」

「!!」

「奴だ！」

「口笛を吹いてる！」

「マグマの風呂にでも入ってるつもりか！」

「ありえない・・・。のに、何故獄寺氏達はそんなに落ち着いて・・・？」

「いやあ・・・だってさ・・・」

「宇宙空間の零気圧の中余裕の表情で手を振るのがウチのボスだからだぞ」

「!!」

「いやいやいや。それは流石に」

「え?!?・・・みんな、出来ないの・・・？」

「出来ねーって前もいっただろうが馬鹿ツナ！」

「イテッ！」

ツナとリボンがいつものを繰り広げている隣で、話はどんどん進んでいった。

第五十七話 帰還

『ということ、僕らを倒したら今度こそ君達の勝利だ。ミルフイオーレはボンゴレに全面降伏するよ』

「白蘭サン!! 力比べって・・・。一体、何を企んでるんですか!!」

『昔正チャンとよくやった。"チョイス" って遊び覚えてるかい?』

「!」

「?」

『あれを現実にするつもりだよ。細かいことは十日後に発表するから楽しみにしててね♪ それまで一切手は出さないからのんびり休むといい』

「じゃあそうさせて貰うよ。絶対襲ってこないんだな?」

『うん。保証するよ。でも、君達はもう逃げないとね。君達のいるメローネ基地はもうすぐ消えるからさ』

「!?!」

「消える?」

『正しくは基地に仕込まれた超炎リング転送システムによって移動するんだけどね』

「! それって、リングの炎を使ったテレポーターションシステム・・・? 完成してたのか?」

『まだ、この規模の物体じゃなきゃムリなんだけどね。凄まじいエネルギーと時間がかかるから、一生に一度見られるかどうかだよ。じゃあ、楽しみだね十日後♪』

そして輝きと共にメローネ基地は消滅した。ツナ達がいた研究所を残して。

「うひゃー。基地が消えたよ・・・」

「テレポーターションってのはスゲーな」

「極限にここはどこだー!!?」

「あ、了平さん。十年前の!」

「彼が来たことで七つのリングがそろい、結界が出来たことで我々は移動しなかった!」

「ボンゴレリングってすごいんだね・・・」

「何言ってやがる。お前の力に合わせてグレードアップを続けるウラヌスリングの方がスゲーに決まってんだろ」

リボーンという言葉にツナは手を打ち、正一は勢い良く振り返った。

「う、ウラヌスリングって何だい？」

「え、あ。このリングです」

「こ、これは・・・底知れないパワー・・・まさか！ 綱吉君、君もしかして黒曜でこれに炎を！」

「灯したけど・・・」

「それでリング探知機が爆発したんだ！ あー・・・そのせいで色々予定が崩れるし・・・」

「なんかごめんなさい」

「沢田、生きていたか・・・」

拳を握りしめ、感動に震える様子の了平にツナはタジタジになりながら、

「いえ、まあ・・・。というか俺は死にませんけどね！」

「うむ！そこは心配していない。しかし、これは一体どういう事だ・・・？」

「掻い摘まんで説明しますと、オレ達は今大体十年後の未来にいます」

「むっ!? その時点でよく分らんのだが・・・」

「ええとですね・・・」

ツナがもう少しわかりやすくしないとなーと頭をフル回転させていた時だった。

それが飛んできたのは。

「でッー！」

ツナの頭に勢い良く当たり、手元に落ちてきたそれは、ボンゴレの紋章がついた匣だった。

「この時代のボンゴレ十代目より君達に託された、『ボンゴレ匣』だ」

「おーイテテ・・・」

「あ！ 大丈夫かい!？」

「いえ、気にしないでください……。ただ側頭部に匣が当たっただけなので……」

「結構痛いよね、それ……」

『うゝおゝおい!!』

「んなっ!?!」

ツナの耳をスクアアローの声が叩く。周りのみんなは必死に耳の痛みを我慢するツナに首を傾げた

『ヴァリアーから通信を繋げとの要請です……。ミルファイオーレに盗聴される恐れがありますが……。』

『いいから繋げエ!!』

『怖いから繋がりますよ!。ヘッドフォンの音量に気を付けてください』

『てめーらあ、生きてんだろーなあ!!!』

「スクアアロー!」

「つるせーぞー!」

『いいかあ!!。こうなつちまつた以上、ボンゴレは一蓮托生だ。てめーらがガキだろーと……。』

無線の向こうで何やら鈍い音がする。

『てめっ』

『沢田綱吉』

「!」

「この声……」

『乳臭さは抜けたか。十日後にボンゴレが最強だと、証明して見せろ』
「分かった。大人しく座って待つてなよ。XANXUS」

『ツ!。うゝおゝおい!!。そこら辺にまだミルファイオーレがいるんじゃないねーだろうなあ!!』

『シシシ。いねーよ』

『いませんよー』

『ああ?。じゃあ今の殺気は!』

「俺だよ俺。沢田綱吉が放ちましたー。よし、八厘でミルファイオーレのボスクラスか。行ける」

ツナはよしつとガッツポーズをして小躍りする。その間にも話は進んでいた。どうやらこの場の全員、ツナの行動は無視する方向で話がまとまっているようだ。

「ツナ、正一に大事なこと聞いてねーぞ。だから踊るのやめろ」

「あ、うん。何？」

「入江正一。お前、オレ達のファミリーになるのか？」

「あ」

「へ？ ダメかい？」

「がつ、あつさり・・・つつーかヌケヌケとー!!」

「ウチも行く所がない。雇ってくれ、ボンゴレ」

「あ、そっか。スパナ・・・」

「どうするんだ？ ツナ」

「俺かよ!!」

ツナはリボーンの流れるような責任移動にため息をつく。

「心のままに言っつてやっつてください。イヤならイヤと、十代目!」

「え。隼人、もしかして俺の身上忘れた？」

「へ？」

「俺は面白いことをするために生きてる。入江さんには色々されたけど、楽しかったし」

「(楽しかったのか!?)」

「このまま入江さんと手を組んでたら、白蘭と戦えそうだからね。俺はいいよ。これからもよろしく」

「ああ、こちらこそヨロシク!!」

「スパナも頼むよ」

「んん」

「そうと決まれば僕にはやらなきや行けないことが山ほどある!」

「正一、技術的な話なら手伝う」

「ありがとうスパナ! さあ、忙しい十日間になるぞ!」

「じゃあ俺達は白蘭の言葉通りのんびりさせて貰おうかな・・・」

「いいっスね!」

「いいな!」

「お前達は修行だ。ツナは足りすぎてから休憩できるんだぞ」

「ええ!?!」

「アハハ……。でもすごかったね。あんな身体能力一体どこで?」

「禁則事項です」

「なっ、なんだよそれ! 綱吉君!?!」

「通り正」をからかったツナは、そのまま出口に向かって歩き始める。

「さあみんな。帰ろうよ!」

「はい!」

ツナ達は一応無事にアジトに帰ることが出来たのだった。

第五十八話 休息

話をしよう。あれは今から三十六万いや、一万四千年前だったか。まあいい、私にとってはつい昨日の出来事だが、君達にとっては多分

——明日の出来事だ」

『何やってんですかご主人』

「いや、ちよつと地の文から始めようと思ったが始め方がつかめなかったから、それっぽいセリフで誤魔化してただけだ」

『ハア・・・、相変わらず変わりませんね』

「人間そう簡単に変わらんよ」

軽快そうに笑うツナは自室のベッドに転がり、机の上に置いてあるタブレットPCから聞こえる少女の声に返答していた。

『つて言うかご主人。この休暇どうするんですか？　そもそも始めの目的忘れてませんか？』

「忘れるわけねーだろ。世界を巡って霊夢を助けることが出来る『何か』を探す」

『覚えててよかったです』

「正直死ぬ気の炎だけでも何とかなりそうだけど・・・ついでにもっと色んな世界巡って色んな力手に入れて、絶対確実に救えるようになってから帰ってやる」

『（・・・なんかあれですね。ご主人が枷なしでもチートになりそうな勢いです・・・。いや、別に強いに越したことはないですけど・・・ご主人の精神が持つんでしょようか・・・）』

「（その為に私がいるんじゃないですか）」

『（こいつ、直接脳内にツ！）』

　　楽しそうなことを繰り返しているエネと扇を放って、ツナは立ち上がる。

「さて・・・と」

『どこかへ行くんですか？』

「あー、うん。ちよつと準備に」

『なんの？』

「バケモン専用のあれ」

『・・・は？』

ツナはそう言うと、自室を出て外へ向かう。Aゲートが確か森に通じていたはずだ。と、彼はAゲートから外へ出た。

「・・・よし、この森の中なら・・・つてえ。バジル君。何してるの・・・？」

「！ 沢田殿！ 助太刀に参りました！」

「あ、それは純粹に嬉しいや」

「それで・・・恐縮なんですけど・・・」

「ご飯・・・食べてく？」

「はいっ！」

数分後、食堂に場所を移したツナの前でバジルは人一倍多くの量のご飯を食べていた。

「ごちそうさまでした。とてもおいしかったと、京子殿とハル殿にお伝えください」

「あ、うん。きつと喜ぶんじやないかな・・・」

「それにしても驚きました。本当に並盛の地下にこんな立派なアジトが出来ていたなんて！」

「あれ？ 知ってるんだ」

「はい！ 全てはボンゴレの勅命である死炎印のついたこの、「助太刀の書」に記してありましたから」

「助太刀の・・・書？」

「はい。このアジトへのルートとこの時代での戦い方が記されており、いざというときは燃えてなくなる極秘文書です。拙者がこの時代に来たのは十日前で、場所はスペインだったのですが・・・。その時、パスポートと匣兵器と共に置いてありました・・・」

「CEDEF・・・父さんのいる門外顧問印の匣兵器か・・・」

ツナはバジルの匣を眺めながら彼の話の続きを聞く。

「残念ながらここに来るまで仲間には誰にも会うことは出来ませんで

したが、この書と匣兵器のおかげで途中で出くわしたミルフィオーレ
ファミリーを何とか撃退できたんです」

「あ、もう既に戦ってるんだ」

「ええ！ 六回ほど戦闘を」

「へえ〜」

「つまり、何者かの指示でバジルはツナ達とは別のルートで鍛えられ、
ここに合流したと考えられるわね」

「ビアンキ！ 急に・・・というか鍛えるって・・・つまり仲間？」

「その通りです！ 「助太刀の書」はこう締めくくられていました。若
きボンゴレ達と共に、白蘭を砕けと！」

ツナはその言葉に満足そうに微笑むと、何故ここにビアンキがいる
のかを尋ねた。

「そんなの決まってるじゃない。私は女の味方よ」

「・・・何となく分かった。京子ちゃん達が外に出た行って行ったんだ
ね。恐らく、自分の家に行くために」

「ホント、ツナは話しやすいわ。説明の手間が省けるぐらいだもの」

「茶化さないで」

「じゃあ行きましょ。二人ともお待ちよ」

「え。俺も行くの？」

「隼人達が反対してね。護衛がてら着いてくることになったのよ」

「ミルフィオーレはもういないじゃん・・・。分かった分かったから睨
まない！ 着いていくからー」

というわけでツナはポイズンクツキングで脅されて地上探索に連
れ出されることになった。

『ご主人ご主人ちよつといいですか？』

「・・・なんだよエネ。わざわざバイブレーション鳴らして知ら
せてきて」

『いえ。最強の体が欲しくなりまして・・・』

「コンピューター制御的な体か？」

『そうですね。ただの肉体でも強いのは自負しているんですが、何か
しら強さが欲しいもので』

「ふむん……。お前、リングは？」

『持ってません』

「威張って言うことじゃねーだろ……。じゃあ無属性で出場は出来そうだな……」

『え。マジで出るんですか？』

「スパナに頼んでみようか」

『何を頼むんですか……？』

「イカロス」

『……は？』

ということで、ツナは正一とスパナにあるものの技術を伝え、制作をお願いしたのだった。

——その日の夜。

「何？ リボーン。こんな所に連れてきて……」

「一体何の部屋っスかね……」

「思ったより早く、機動力対策は出来そうだな」

「スパナなんかには負けられませんからね。ここはこの時代の十代目のコレクシヨナルームの一つですよ」

「コレクシヨン？」

「ちよつと失礼しますよ十代目」

ジャンニーニはツナの股下にメジャーを当て、短いすね足という。ツナはそれに短くて悪かったね。と返した。

「なんなのさ、一体」

「やはりサイズ的にもヴィンテージのあれがいいでしょうね。待つててください、すぐ用意しますんで」

「……これは察せないんだけど、何するの？」

「一日早い課外授業って奴だ」

「は？」

そして甲高い轟音が響いてきた。

「これって……」

「素晴らしい。ガソリンエンジンと全く同じレスポンス、これなら行

けそうです！」

「バイク！」

「このマシンは私も敬愛するレーサーレプリカですが、最新技術で弄ってあります。死ぬ気の炎を燃料に最高速度のアップ、更に対炎レーダーの対策もバッチリなんです！」

「いいかお前等、匣兵器だけじゃなくてこいつも白蘭との戦いの前に乗れるようにするからな」

「いや、白蘭とか関係なしにのりたくなるよ……これ……」
「関係あるんだぞ。チョイスの戦場となるフィールドは直径十キロ。機動力が要るんだ」

リボーンという言葉に守護者はそれぞれ驚く。と、そこで獄寺が気付いて。

「ですがリボーンさん。オレ達ならともかく、すでに十代目は恐ろしい機動力をお持ちですよ」

「お前はこの状態の奴からバイクを取り上げるのか？」

「……」

言われて獄寺が見ると、ツナはバイクの周りをグルグルと回ったり、エンジン付近に耳を近づけて音を聞いたり、随分気に入っていた。

「いえ、何も言いません」

「あ、でも……オレ達中学生……」

「リボーンさんっ！」

「安心しろ。この時代はお前達はプラス十歳。ちゃんといいつが発行されてる」

「ヒヤッホオウ!!」

「ほら、またがってみろ」

言われて早速、ツナはバイクにまたがった。

「えーつと確か……左手のクラッチを握って……左足のギアを蹴って……アクセルを回して……クラッチを離す……」

ツナは何とかバイクを乗りこなすことができ、それなりに楽しんでいた。

第五十九話 修行開始

午前中をバイクの練習、午後を了平・バジルの歓迎会に費やした次の日。ツナ達はトレーニングループに集まっていた。

「よしっ、そろったな。今日から本格的な匣兵器の修行だが、リボーンが一番の教え子であるオレが、全体を仕切る家庭教師をすることになった。よろしくな」

「・・・ヘナチヨコのあいつなんかを務まるんスカね」

「デイーノさん部下の前だとすごいじゃん」

「ちなみに今回オレはその上の役職『家庭教師の精』だからな」

「妖精なんだ・・・」

「デイーノがへボい時はオレが制裁を下すから安心しろ」

「いでで。やめろってリボツブツ!!」

別にへボくないのにリボーンに蹴られているデイーノに、ツナはある種の同情を感じていた。

「って事で始めるが・・・、その前にクローム。意思確認だ。お前はボングレ守護者であると同時に、骸の一味でもある。ミルフィオーレとの戦いには味方として数えていいのか？」

「もちろん。ボスと一緒に戦う」

「よし、なら頼んだぜ。それとランボにも本格的な修行をして貰う。

白蘭を倒すには守護者全員の力が必要だ」

「まあ、いいんじゃない？」

「俺はこの時代のツナに聞いて、お前達のボングレ匣のことを多少は知ってる。そこから考えてそれぞれに違う修行をして貰うつもりだ。ちなみに雲雀恭弥はオレとの修行をもう開始している」

「あれ、どこかへ消えたと思ったらそんな事してたの？」

「相変わらず可愛くねーじゃじゃ馬だけだな」

ツナは雲雀さん結構素直だよ? と、疑問を口にする。

「じゃあ沢田綱吉! お前から修行内容を言っていくぞ」

「はーい」

「お前は正しく開匣できるまで一人だ」

「へ？ 正しく？」

「大空の匣兵器つてのはデリケートなんだ。頑張れ」

「あ、はあ……」

ツナは一人かあ……ボツチか……。慣れてたけど……。辛いなあ……といじけ始めた。

「次に獄寺隼人。お前は匣兵器初心者である笹川了平と、ランボの面倒を見てやってくれ」

「なにっ!？」

「おお……、隼人はもう教える立場なんだ……。すごいね……」
「えっ!?! ……、いえいえいえ。勿体ないお言葉！ 自分なんてまだピヨツ子です!! ですが、お役に立てるのなら力の限りやらせていただきます！」

「あ……、うん。……ピヨ？」

「次にクローム髑髏。お前は匣兵器強化のためえに半分の時間をマーモンの幻覚プログラムで修行。残りを格闘能力アップに使う。あそこの二人に手伝って貰ってな」

その二人とは、ビアンキとイーピンのことだ。クロームがそちらを見ると、二人が手を振る。

「そして山本武」

「うす！」

「お前はパス。待機だ」

「へっ?？」

「パス……」

「つーか、お前には手ー出せねーんだ。お前に下手なこと教えればあいつにぶっ殺される」

「あいつ……?？」

「お前の才能を一番理解してる奴が本気だぜ。今回の修行、山本武お前スゲーことになるかもな」

ツナ達は訳も分からず首を傾げるだけだった。

「修行の説明は以上!! 各自修行場所は自分で選べ。バジルは自分の修行と平行してみんなのサポートをしてくれるからな」

「よろしくお願いします!」

「了平!! ランボ!! ノートと鉛筆を持って図書室へ集合!! まずは理論を頭に叩き込む!」

(隼人は相変わらず理論指導なんだね・・・)

「ありやあ大変そーだな」

「だね・・・。というか武は修行どうするの?」

「まっ、よく分かんねーから修行が始まるまで自主練だな」

「クローム来なさい。鍛えてあげるわ」

「はい」

雑談をしながら一度みんなトレーニングルームから出て行く。出ていく前に一度振り返ったツナは、首を傾げて踵を返して歩き出した。

——ツナ side

ツナは以前扇と本気でぶつかったトレーニングルームで、ボンゴレ匣と向き合っていた。

「これ、普通に開けていいんだろうか・・・」

十数分ほど唸っていたツナだったが、悩んでいても仕方ないと思いつけることにする。リングに炎を灯し、匣に炎を注入。その時、ツナの頭の中ではサイコロが回るBGMが流れていた。

炎の塊が飛び出したあと、そこにいたのは大きなライオンだった。

「で、でかあ・・・!」

GURURURU・・・

「あ、ちよつと待とうよ。ね? ね?」

GAOO!!

「ストープ! NONNONNO!」

その後、数時間にわたって天空ライオンと鬼ごっこをしたツナだった。

「・・・ハア」

「お疲れ様です十代目!!」

シャワー室から出てきたツナに、獄寺が声をかける。

「隼人と了平さ……ゑ!? 何でそんなボロボロなの!？」

「ランボが匣兵器を開けまして……、気付いたら全員気を失ってました……」

「今日はもう続行不能だ」

「大丈夫……なの?」

「なんとかな……。沢田はどうなのだ? 開けたか? ボンゴレ匣!」

「一応……。でもこつちの言うこと全く聞いてくれないので……」

遠い目をするツナ。獄寺は開けたことをベタ褒めしてきていた。

「お前等ボンゴレ匣で修行できるだけいいじゃねーか。俺なんかおあずけだぜ……」

「武……。もしかしたらスクアアロがくるかもね」

「ははっ。そりやいいや」

山本がツナの言葉に期待の笑いを漏らした。

「あの……。お話があるんですが」

「え?」

「よっ。お疲れ」

「ハル、どうしたんだ? 京子ちゃんも一緒に……」

「誤魔化しても仕方ないので、単刀直入に言います。ハル達にもミルフィオーレやビヤ克蘭やボックスのこと……。今起きてることをもつと詳しく教えてください!!」

「!」

「あ、やっぱり朝のあの場にいたの二人だったんだ。でもどうして……」

納得したように手を打ったツナは、とりあえず事情を聞こうと口を開く。

「もう誤魔化されるのはたくさんです!! 私達だけが知らない事情を隠しているのは分かってるんです!! ハル達も皆さんと一緒に生活をしている以上、真実を知る権利があります!!」

「ツナ君、私達も一緒に戦いたいのに!」

「権利はあっても義務はない……。って言ったら怒るよね。ああ!」

気持ちの整理がつくまで待つてくれないかな……。流石にすぐどう

のこうのというわけには・・・、っていうか！ もうすぐ全部終わって無事に元の世界に戻れるんだけど・・・」

「わかりました。では私達もそれなりの措置をとらせていただきます」

「んへ？」

「ツナさん達が真実を話してくれるまで、ハル達は家事をしませんし」

「共同生活をボイコットします!!」

第六十話 ボイコット

京子とハルは、デモを起こした人民が如く看板を持っていた。

「悪いわねツナ。私はこの子達につくわ」

「・・・私も・・・、・・・ボスごめん」

「イーピンも!」

「え・・・。ええ・・・?」

「私達も京子達につくわ。修行しっかりね!」

女装したりボーン、ジャンニーニ、フウ太が女性陣についた。それを確認したツナは溜め息を吐かざるおえなかった。

「ハア・・・。久しぶりに家事しないと行けないのか・・・」

「久しぶり・・・?」

——台所。

「一応聞くぜ。どうするんだ? ツナ」

「・・・うん・・・。俺的には別に話してもいいと思うんだ」

「そう、なんスか?」

「うん。というか、大空のリング戦の前と十年後に来た日に京子ちゃんには何が起つてるか話したことがあるんだよ・・・」

「京子に・・・話したのか!」

「流石に相撲大会じゃ納得できなかったみたいで、俺が誤魔化そうと思つて異種格闘技戦って言ったんだけど、やっぱり気になったみたいでさ。全部話したことがあるんだ。だから今回も話していいと思う。彼女達はああ見えて強い子だから」

「十代目がそうおっしやるなら・・・」

「むむう・・・京子が自分から聞きたいと言つたのか・・・」

「とりあえず、今日は自分達のこととは自分達で見ましよう。俺こ
う見えて家事は得意です」

「俺はしたことないっす」

「俺もねーな」

「極限に皆無だ!」

ツナは仕方ない。とため息をついた後。家事を始めた。洗濯を完璧にすませ、料理を作る。

「あ、の。十代目……。これは……。？」

「え？ 本格イタリアンフルコース」

「いや、大丈夫なんすか？」

「あつはっはー。舐めないで。そこらのイタリアンよりうまい自信があるよ」

そう言いながら笑うツナは、背中に手を回しズボンに挟んでいた銃を抜き去って撃った。撃たれた銃弾は今まさに料理に手を伸ばしていたリボーンの頬をかすめた。

「出て行けリボーン。これをお腹でいいのは俺達だけだ」

「いいじゃねえか！ 俺も食いてえぞ！」

「女性陣についたのが間違いだと覚えておきな……。？」

「チツ」

「とうるか十代目、その銃どこで……。？」

「正一君が持ってた銃」

「チエルベツロを撃ったあの銃ですか!？」

「うん。そーだよー」

ツナは言いながら料理の続きを作っていく。リボーンはツナに怒られるのが怖いのか、台所の入り口でさっきの自分の行動を呪っていた。

———次の日。

「じ、十代目!?! 右腕!!どうなされたんですか!?!」

「え？ 食われた」

「何に!!」

「ボンゴレ匣」

いやー。怖いねーと笑うツナは服の袖が二の腕から千切れて無くなり、腕には包帯がグルグルと巻いてあった。

「匣兵器が!?!」

「前日もそうだったんだけど、開匣した途端に襲ってきたんだよ。上

に覆い被さって顔を執拗に舐めてくるから退かそうと手を伸ばしたら食われた」

「は、ハハ・・・」

「振り解こうとしたら腕中に歯が食い込んで血だらけになったんだよ」

から笑いをしながらツナは料理を作る。今日のメニューは日本食のようだった。

「「いただきます」」

「・・・みんな、ちよつといいかな」

「なんですか？ 十代目」

「明日二人に全部話してみようと思うんだけど・・・」

「十代目が決めたのなら異存はありません！」

「まあ、いいんじゃないの」

「何かある前に極限に俺達が守ればいいのだ!!」

「その通り。じゃあ、話すことにするよ？」

全員から了承の返事を貰ったツナは、どのように話すべきか食器を洗いながら考えるのであった。

——翌日。

「あ、ビアンキ。京子ちゃんは？」

「え、あ。外よ。買い物に行ってるわ」

「ありがとね」

ビアンキに京子の居場所を聞いたツナは、その場から音もなく消えた。

「消え・・・た・・・」

「あれがツナの亜音速行動だ。簡単に目で追うことはできねーぞ。ハイスピードカメラでも捉え切れねーんだからな」

京子を探して町中を飛び回ったツナは、京子を見つけた後。全てを話した。

「という感じなんだ」

「うん・・・。また、ワガママ言っちゃってごめんなさい・・・」

「いや、いいよ。どうせハルが言い出したことだろうし・・・。話して

おいた方が守りやすいって知ってるからね」

「そっか」

「そうさ」

「腰に付けてるのがツナ君の匣兵器？」

「あ、そうだよ。これが俺の匣兵器。今のところでつかいライオンなんだけど、じやれ方がキツくてこんな風に……」

包帯が巻かれた腕を見せるツナ。京子は息を呑んでいたが、彼はあまり気にしていなかった。

「大丈夫なの……？」

「ああ。みんなが無事に過去へ帰る。この思いは変わってないから安心して欲しい」

「……うん」

アジトに帰ったツナはハルにも同じように今の状況と、そしてこれまでのことを話した。

「えーと、ハル？　大丈夫か？」

「は、はい！　大丈夫ですよ！　話してくれてありがとうございます！」

（あー……ウソ、だな）

「スゴイ話ですね！　びっくりしましたー！　あつ。ツナさん今修行中なんですよね。わざわざハルのためにスイマセン！　もう行つてOKですよ」

「ん？」

「修行の時間が勿体ないです！」

「あ、分かった……」（一人にしてやらないと、か）

台所を出たツナはミーティングルームに移動する。そこには全員がそろっていた。

「あ、デイーノさん」

「よ、ツナ。修行の進み具合をチェックしに来たぜ。家事ばかりにうつつをぬかしてねーだろーな」

「え、あ。はい。もちろん。こんな事になっちゃってますけど」

ツナはつい昨日、右腕の後に噛まれた左脚も合わせて見せる。それ

を見たデイーノはツナの匣はそんな物だったか？　と思案する。

と、そこでボンゴレのスクリーンとスピーカーにエマーゼンシーのマークが現われた。

「!?」

「何だこいつは!」

『緊急事態!　緊急事態です!　ボンゴレの回線をジャックするものあり!　現在対抗中ですご主人!』

「それもしかして白蘭か?　エネ」

『ええ。その通りです』

「流していいよ。流さないと向こうが文句を言ってきたらさうだ」

『イエッサー!』

少女の声が響くと同時、モニターの映像が割れて白蘭が顔を出す。

『ハハハハッ!　また邪魔されちゃったね』

「やあ白蘭」

『退屈だったから遊びに来ちゃった。食べるかい?』

「わあーい。いただきまあーす!　じゃなくて!　何しに来た」

『“チョイス”についての業務連絡さ。ほら、日時については言ったけど場所については言っていないよね。六日後お昼の十二時に、並盛神社に集合』

「!!」

「分かった。並盛神社だね」

『とりあえず必要な準備して、仲間は全員連れてきてね。少なくとも過去から連れてきたお友達は全員だよ』

「なに!!」

「全員って」

「なんだと!!?」

「まあ、妥当だよね」

『みんなで来ないと君達は失格だからね』

そう言うのと白蘭はモニターの電源を落とした。

「全員か・・・予想はしてたけど、色々マズいな・・・」

「にしても白蘭はどーやって回線に割り込んだんだ?」

「セキユリテイがザルなんだあ、アマチユア共があ」
スクアーロの登場によって修行の齒車は華麗に回り出した。

第六十一話 チョイス開始!!

正装に着替えたツナ達は、並盛神社にて白蘭達を待っていた。そこに現われたのは黒い雲と、巨大な白蘭の顔だった。

『やあ諸君』

瞬間。轟音が響いた。見ると剛炎がツナの手から放たれていた。

「X BURNER・・・!」

(早い!)

「あまりにも気持ち悪かったから撃っちゃった・・・」

『ハハッ。元気そうじゃん綱吉くん』

「あ、ごめんね。いきなり撃って・・・」

『うん、別にいいよー。それにしても君のX BURNERだっけ？』

「すごいね。一人で百万FVを超えてるよ』

「!?!」

白蘭の顔の前に現われたモニターには1000000FVと表示されていた。

「何で計測してる・・・？ 分かった。それが超炎リング転送システムだな?」

『正解。五百万FV。それが君達をチョイスの舞台へ転送するために必要な炎圧さ。ちなみに綱吉くんのおかげで後四百万FVだよ』

「もう四回X BURNERを撃てばいいってこと?」

『そうじゃない。まだ全員そろってないだろ? 待ってあげるから全員で来なよ』

「それじゃあ・・・行こうか」

『? いいのかい?』

「いいや」

ツナは匣を構える。それぞれ全員が同様に匣を手を持つ。

と、そこで両サイドの林から匣兵器が飛び出してきた。

「早くしなよ綱吉」

「待たせたな」

「うっし。ボンゴレ匣!」

「「開匣!!」」

出た結果は一千万FVオーバー。そしてそれを起こしたのは、若き十代目ボンゴレフアミリーだ。

「てめーらおせーぞ」

「わりわりー」

「別に、綱吉は気にしてなさそうだけど」

「チツ」

「まあ、来てくれると信じてたからね」

『じゃあ早速チョイスを始めよう。まずはフィールドの“チョイス”から、君達にチョイス権をあげるよ』

天から大量のトランプが振ってくる。まるでマジシャンの曲芸のように、目の前をグルグル回るトランプの一枚をツナは引いた。

「これでいいのか？」

『お。フィールドのカードは、雷。じゃあ行こう』

その場が光で満ち転送装置が起動する。移動した先は超高層ビル群のど真ん中だった。

「やつ。ようこそチョイス会場へ」

「やあ白蘭」

「何度も会っているような気がするけど、僕と会うのは初めましてかい？ 綱吉君」

「いや、別に。初めましてじゃあないよ」

「何か質問はあるかい？」

「……………無いみたいだ」

「じゃあ次のチョイスを始めよう」

そう言って白蘭が取り出したのは死ぬ気の炎が灯ったジャイロルーレット。

「まるでカジノの機械だな」

「アハハ。チョイスってのはそういうものさ。博打と一緒。さあ、回そう」

「「チョイス」」

二人で回して出た人数はこうだ。

	無	嵐	雷	雨	雲	霧	晴	大空	ボンゴレ	ミルファイオーレ
	3	1	0	1	0	0	0	1	1	0
(炎)	0	0	0	0	1	2	1	0	0	0
	0						(炎)			

「これで決まったからね。バトル参加者♪」

「これはいい引きが出たって事か」

「そうさ。まあリング保持者は少ないみたいだけどね」

「大丈夫だ」

「さーて。それじゃあお互いの参加戦士^{メンバー}を発表しようか。あ、ここは唯一相談して決められるところだからね」

「白蘭サン……。リングを持たない僕は……。無属性でいいですよ
ねー!」

「……」

「……」

「んん。ま、特別にいいかな」

「だったら綱吉君。僕らのメンバーは決まりだよ」

「そう?」

「ボンゴレの参加戦士は――、

大空に綱吉君。嵐は獄寺君。雨は山本君。無属性は僕と、スパナが
適任だ」

「あと一人は?」

「綱吉君に頼まれた秘密兵器を使おうと思う」

「お、出来上がってますか!」

「いまいち仕組みも分かってないけど、頼まれた回路とプログラムは
組んで置いたぞ、ボンゴレ」

「さすがスパナ！」

まだ話は続いているというのに、ツナとスパナは基地ユニットの中から何かを引きずり出してきていた。

「さーて、いよいよ一番大事な勝敗のルールだけど。数あるチョイスのルールの中から、最もシンプル勝つ手っ取り早い——ターゲツトルールで行くよ」

「あー。それでルーレットボードに炎がついてるのか」

「流石綱吉君。読みが早いね。その通り、大将はもう決まってる。ミルフィオーレは晴！ ボンゴレは無属性に！」

もう話を聞いていないツナはスパナと意気揚々に引きずって出てきた箱を開いていた。

「バトルが終わるのは、ターゲツトマーカー“標的の炎”が消えたら。どんな理由でも消えたら負けだ」

「それで？ このチョイスでかけるものは？」

「もちろん。全てのマーレリングに、全てのボンゴレリング、そして全てのアルコバレーノのおしゃぶり……。すなわち新世界を創造する礎となる、僕が今一番欲しいもの7・だよ♪」

「俺勝つても要らないんだけど」

「その場合所有権を放棄すりゃ良い」

「なるほど！ じゃあついでにお姫様を貰っていいこう」

そして更に細かいルール説明が行われている中、それは起動した。

「おはようございますマスター主人」

「ん。おはよう。悪いけど今回のバトルに参加してもらえる？」

「もちろんです」

「天使……?!」

「アハハ。何それ綱吉君。面白いものを造って貰ったんだね」

「ああ。戦略用エンジェロイド、`typha` “イカロス” それがこの子の名前だ」

「よろしく……」

「ではメンバーもそろいましたので三分後に開始します。用意してください」

ボンゴレベースにて、ツナ達は用意をすませていた。

「あの、十代目。つかぬ事をお聞きしますが、その……イカロスというアンドロイドは役に立つんですか？」

「もちろん」

『三分たちました。……それでは、チョイスバトルスタート!!』
「……じゃあやっつく？」

「え！」

「ボンゴレファイツ!!」

「!!」
「!!」
「!!」

円陣を組んだボンゴレ組は気合いを入れて戦いを始める。

「やっぱ気合い入るな」

「久々に凹むぜ」

「これは日本独特ではないよな」

「え？」

「ところで作戦だが……」

「簡単だよ」

「え？」

「全員各自その場の判断に任せる！ 総員、適当にやっつけていこう!!」

ツナが言い放った一言に獄寺は目を輝かせ、山本は笑顔になり、観覧席の大人は呆れていた。

「さすがっス十代目！」

「無茶苦茶だけど良い指示のなのな！」

「わかった。最大限サポートするよ」

「あ、でも一応。攻守分けとこう。俺と武で攻めて、隼人はイカロスとここ守ってて」

「り、了解っす！」

「分かった」

「良いかいイカロス。ここにいるメンバー以外がこのベースに近づいたら遠慮しなくて良いからね？」

「了解」

第六十二話 ツナの暴走と最終兵器

ボンゴレベースから山本と獄寺がバイクで飛び出し、イカロスは大きく翼を広げてベース前に立っていた。

「すごい！ みんなバイクに乗ってる！」

「イメージしてたマフィアの戦いと違います！」

「・・・ツナがいねえな」

「え？ どこだ？ どこに行つたあいつ！」

（いつも通りの行動に出やがったか）

とあるビル角、ミルフィオーレの霧のリングトリカブトが飛んでいた。
と。

次の瞬間。彼の体が高速で地面に落ちていった。

「やあ、トリカブト。だっけ？ ヤッホー」

巨大な蠅王紋章の上に立つツナは、未だレーダーには移っていない。

「素朴の者よ」

「は？」

ツナが構えると、トリカブトは自分の体をウミヘビに変えるようにして襲いかかってきた。

「え、何これ」

「か弱き者よ」

「え。何こいつ超邪魔くさい。デイジーって奴じゃないなら別の場所に行きたいんだけど」

ウミヘビが雷属性の炎を纏っているのを確認したツナは、死ぬ気の炎を纏っていないただの拳を握る。

「連続普通のパンチ」

ウミヘビを物理的に砕いていくのは質量を持った拳の連撃。

「悲しき者よ」

「どつちが」

そして握った拳をツナは放つ。

その山を消し飛ばした拳圧を、空間を歪める拳をモロに食らったトリカブトは勢い良く吹き飛んで地面にめり込んだ。

『ボンゴレと交戦中の敵の炎反応消滅』

『よくやった綱吉君』

「んじや、ターゲツトぶつ殺してくる♪」

『……ん？ 今なんて言った？ ちよつと！ 綱吉君!?!』

ツナは再度亜音速で飛び出した。

数秒後。

「見いつけた」

「わ……きた……」

「いつくよー。連続普通のパンチ！」

空間を叩いたツナは張られていたバリアを一撃で吹き飛ばした。

「ぼぼっ」

「アハッ♪ そりゃー！」

その一撃で空間が歪んだ。ミルファイオーレの基地ユニットは見るも無惨な瓦礫の山となり、ツナはその中で余裕そうな表情で立っていた。

「ふう……。勝った？」

「お待ちください」

「うわっ！ ……心臓に悪いなあもう」

「デイジー氏の標的の炎、消滅と認めます」

「勝った？」

「うくん。やっぱり死ねないのか」

恐らくどこかで偉そうに誰かが解説していると思うが、ツナの目の前にいるデイジーは不死身の肉体を有していて、死ねないのが悩みだという。

さて、問題。全力が出せる相手が現われたらツナはどうすると思いますか？

正解は――

轟音が響き、起き上がっていたデイジーの体が壁を突き破って遠くに蹴り飛ばされた。

「マジで？ お前死なねーの!? どこまで壊したら死なないのか検証させなア！」

吹き飛ばしたデイジーに着いていくために地面を蹴り亜音速まで加速するツナ。連続攻撃の一撃一撃がツナの普通の威力。その為、デイジーは少しずつボロボロになっていく。

「あれ？ 何だこれ……」

『どうした綱吉君！』

「いやーこれトリカブトの仕業かなあ……幻術世界に閉じ込められたかも」

『何だって？』

「まあ、出るけどね」

『どうやって!!』

「こうやって——必殺マジシリーズ マジ殴り！」

その一撃で、幻術空間だけでなく、その拳の先全ての空間を塵一つ残さず消し飛ばした。

「よっし」

「よしっ。じゃねええゝ ええゝ!! 何だあその威力!!」

「おい、リボーン……。あれ、ツナか？」

「ああ、ウチのツナだ」

「そういうや平行世界って言うていたが……あんなに違うものなのか？」

「ああ、俺達の世界はどうやら7・1によって強力に秘匿されていたようだ。それにツナと白蘭の仲が良い世界。どっちにしろ情報開示はされてねえ」

「そりやあさぞ驚いてるだろうな……。死ぬ気の炎を使わずにこの惨状を生み出す化け物と、向こうは戦わなくちやいけないんだからな」

そして一方ボンゴレベースでは。

「ハハン。ついに捕らえましたよ」

「くそう！」

「まだ、私がいることを忘れないで……」

「そう言えばいましたね」

「可変ウィングシステム・・・安全装置解除・・・モード空の女王
起動。戦略用エンジエロイド、type a "Ikaros" 出撃しま
す！」

「ハハーン。何が来ようとムダですよ」

「永久追尾空対空弾発射」

翼から撃ち出されたそれは、キキョウの攻撃を意思を持ったかのよ
うにかわし、攻撃を叩き込む。

「追尾機能付きですか。ですが、効きませんよ」

「モード変更type Δ "Astra" クリユサオル」

粒子線で構築された剣をもったイカロスがキキョウに斬りかかる。

「ハハーン。こんなものが通用するとても？」

「効く」

キキョウが己が身を守るために張っていたバリアを、クリユサオル
が切り裂いた。

「!?・・・ハハーン。なるほど最終兵器と言われるだけではありませんね。
それに今ので逃げられそうです。なので先に行かせて貰いませ
う。・・・?!」

炎のレーダーを確認しようとしたキキョウはその表示がされてい
ないことに気付く。

「ムダtype nymphのAphroditeが展開してある。
電子機器は無効」

「ハハーン。やっつけてくれますね」

——その一方でツナは、何度も何度も標的の炎を消しては
生き返るデイズーを、何度も何度も何度も壊していた。

「はっはー。どこまで壊せる? どこまで持つ? お前はどこまで壊
せるんだ?」

「ひいー聞いてないよ! ボンゴレ十代目がこんな奴だなんて白蘭さ
んに聞いてないよ!!」

「当たり前じゃん♪ 何で俺の白蘭が友を売るようなことをするの

さ。また今度アイツと甘味を食べに行かなきゃなー……」

ツナはそう言うのと右手に力を込める。

「どんな形でも、ターゲットマーク標的の炎が消えたら終わりなんだよね？」

「その通りです」

「じゃあ勝てるよ」

ツナは言いながら右手に込める力のベクトルを変えた。すると、彼の右手の甲に蠅王紋ゼブルスベルが出現した。

「それじゃあ、俺達の勝ちだ」

ガラスの碎けるような音と同時に、ツナの開いた掌が触れたデイジーの胸にあつた標的の炎が、ターゲットマークごと跡形もなく消えてしまった。

「!!」

「お仕事完了♪」

「な、何これ……」

「デイジー氏の標的の炎、消滅を確認……。復活不能……」

「これによりチョイスバトルの勝者が決定しました」

「勝者は——、ボンゴレファミリーです!!」

「……イヤッホオオオオオオオオオオオオツ!!」

ツナはその場で小躍りを始めた。訳の分からない歌まで歌い出してノリノリである。

いつの間にか取り出した笛で曲まで吹き始めた。吹いているのは『みwnなwぎwつwてwきwたw w w』である。別に禁断症状は出ていない。

第六十三話 ファレノプシス・パラドックス

「チョイスバトルが終了いたしましたので、全通話回線を開放します」
そう言つてツナ達の勝利を祝おうと、観覧席のみんながボンゴレベースの方へ駆け込んだ。一方で………ん？ 流れ変わったな。
そう、「unicorn」が流れ始めた。

改めて、ツナもボンゴレベースの方に移動し、正一達と合流した。

「綱吉君！ 勝ったんだね！」

「うん」

「やりましたね、十代目！」

「うんっ」

「流石ツナなのな！」

「へへっ。でも、多分俺達じゃなかったら恐らく負けていたと思うよ」
「……確かにな。もしデイジーが標的になるのがチョイスの運命だとしたら、ツナの最後のあの技がねえと勝ちはなかったからな」
「ホントギリギリだったんだね……」

ツナはえへへと可愛らしく笑ってみる。その笑顔で何人かがツナを女性と見間違えたのは余談だろう。

「いや、負けちゃったね♪」

「そう、僕達の勝ちだ。白蘭サン」

「あーあ。……でもマーレリングを渡したくないな」

「別に欲しくないよ。これ以上奪わないようにして欲しいだけだし……」

「それが出来ると思ってるのかな？ 案外楽観的なんだね綱吉君つて」

「仕方ねーだろ。ツナはこんなだからな」

リボンがツナの方を見ると、右手を天高く突き上げ空を見上げるツナがいた。恐らく、BGMもクライマックスだろう。

「さて、と。じゃあ約束通り7・の所有権は別に要らない。その代わり……お姫様は攫っていくよ！」

「ん？」

ツナはバックステップでその場を駆けると、どこかへ消える。ビルの曲がり角の先で少女の悲鳴が聞こえた気がするが、理由は分からない。

『守護者総員に通達！ 全力を持って直ちに現地点を離脱！ 並盛に帰還するぞ！』

「はいっ！」

「おう！」

「分かったよ」

「了解」

「んじや、リング超炎システムを起動させなくちゃならねーな」

「何をするか分からないけど、逃がすと思ってる？」

「思ってる訳ねーじゃん。だから逃げるんだよ」

そう言つて笑うツナは、イカロスに抱きかかえられた上でユニをお姫様だっこしていた。

「ハハハッ。これは一本とられたよ。いやあびつくりした。ユニを攫うなんてどういうつもり？」

「言つただろ？ 俺はお姫様を貰うつて。チョイスに買った俺は約束通りこの子の所有権をミルフィオーレから奪取する。それが意味するのはブラックスペルの脱会。かな？」

「・・・あ、はい。その通りです」

「あれ？ ユニちゃんすっかり顔色もよくなっちゃって。元気を取り戻したみたいだね♪」

「みんなー、準備良い？」

会話中に撤退の準備をすませていた仲間から完了の返事が来たツナは、ユニを抱える手に力を入れ、イカロスに指示を出して飛び出す。

「匣、開匣!!」

超炎リング転移システムに、来た時同様炎をぶつけた彼等は、並盛町に無事転移した。

「よし、イカロス。あれ落とせ」

「了解。アルテミス発射」

翼から放たれたミサイルが超炎リングシステムを完全に破壊し、跡

形も残さずにボロボロにした。

「は……はは……。つくった本人が言うのも何だけど……何あの子」

「ツナのエンジェロイドだろ」

「「ああ」」

「ああって何だよ」

「ツナと同類って話だ」

「何それ納得しそう」

ツナ達は一度ボンゴレアジトに帰ってきていた。

「……さて、正一君。今更だけど聞いておくよ？　白蘭に何で勝たなきゃいけないかったのさ」

「あ、そうだね。話さないといけない。本当に簡潔に、一言で言うとう白蘭さんの能力によって世界が征服されてしまうからだ」

「能力、だと……？」

「どんな能力なのさ」

「普通の人間は平行世界の自分と関わったり交わったりすることはないよね？　だけど白蘭さんは同時刻のパラレルワールドにいる全ての自分の知識と思惟を共有できるんだ」

「横の時間軸……マールレ……海……」

「沢田さんは察しが良いですね。もう、分かってしまったんでしよう？」

「うん。マールレは海、幾重に広がる平行世界。ボンゴレは具、年を重ねる伝統の継承。アルコバレーノは分かんないんだけど……。ね。ボンゴレは分かった。プリーモが言っていた、リングには時間が刻まれているってね」

「……そう、そして今僕達がいるこの世界だけが白蘭に滅ぼされていなかった世界なんだ」

「……それはおかしい。俺達がいた世界も無事だったんだぞ？」

「それは多分、7・2によって嚴重に秘匿された上でただのもしもじや片付けられないほどの何か君達の世界にはあったんだと思うよ。リボーン君」

「そうか・・・」

(それって・・・)

(十中八九タルカスに殺されるぞ!)

(マジメに答えてあげなよ扇ちゃん。そう、当麻君が憑依していると
言うことがイレギュラーだ)

ツナが脳内で会話をしている中、正一の昔話が進んでいた。

(で、いつぐらいに決着がつくんですか?)

(明日つくよ明日)

(明日っていつの明日ですか・・・)

(さあ?)

「それでお前は、白蘭を倒すにはこの世界しかねえって言ってたんだ
な」

「ああ。他のどのパラレルワールドでも7・は奪われ、ボンゴレファ
ミリーも壊滅してるだろうからね」

「他だけじゃなくてこの時代の俺も死んでるじゃん」

ツナはため息をつきながらそう言った。そんなツナに反論する声
が上がる。

「それは違うよ綱吉君。ミルフィオーレで射殺された時に使われたの
は『特殊弾』だ。僕がすり替えた『死ぬ気弾』のような弾で、未来の
君は仮死状態だったんだ」

「じゃああの棺桶は、敵の目を欺くカモフラージュってこと?」

「十代目は・・・生きてた・・・」

「仮死状態ではあったけど、彼は棺桶の中で綱吉君が来るのを楽しみ
に待ってたはずだ。彼は処刑の前日に言ってたよ。」

「もうすぐ彼等がやってくる。この世界の俺じゃないけど、白蘭を確
実に倒せる実力を持ったオレが来る」

って」

「二「あー」三」

「あー。って何さー!」

「・・・それより、これからどうするんだい? 綱吉君」

「そう、だね。とりあえず各自の判断に任せて自由に修行かな。いつ

白蘭達がこっちに追い付いて襲ってくるか分からないから、こっちも出来るだけの準備をしとかないとね」

「そうっスね！」

「だな」

ということで残されたわずかな時間でのツナ達の最終修行が始まった。

第六十四話 修羅開匣

『敵襲！・ 敵襲！ 日本沿岸に白蘭の反応ありですっ!!』

爆音のアラームと共に告げられたエネのその言葉に、ツナ達は気持ちを引き締める。

「襲ってくると思いますか?」

「強引に襲ってくると思うよ。誰が一番に来るか分からないから、とりあえず位置バレしてるこのアジトからは早々に退避したいんだけど」

「あ、でしたらハルに良い考えがあります! ハルの知り合いに不動産屋のおばあちゃんがいるんです! 「隠れ家」にいい物件があるから家出する時は言つてね! つてよく言われてました!」

「不動産屋、ねえ・・・」

「案外盲点で、いいかもしんねーな」

「「やったー」」

「いいのかよ。じゃあみんなでその不動産屋へ行こうか・・・。と、イカロスイカロスは恐らくまとまって行動してるであろうあいつ等の無線とレーダーを破壊してきて。連携をうまく取れなくする」

「了解です。マスター」

ツナの指令に頷いて、イカロスは翼を広げてマツハ24の速度で飛び出した。

「・・・行かせて良いのかい!?!」

「ええ。ウラヌス・クイーン空の女王は簡単に堕ちませんからね」

『原作では落とし物でしたけど』

「それを言っちゃあお終いよ」

そして一同はその不動産屋へ移動する。

移動した彼等は、やたらと事情通な川平のおじさんのおかげで小学生探偵サを撒き、これからの方針を話し合おうとした所で、キキョウ・トリカブト・ブルーベルの三人が現われ、トリカブトの腕の中にユニが囚われた。

が、もちろんYが王子様の如く救出した。

それでも真六弔花の圧倒的な力にひれ伏してしまうと思われた所で、トリカブトがアツパーカットで飛ばされる。

「どこを見ている。お前達の相手はここにいないぜ」

「ツナ君！」

「十代目！」

「・・・いつも眉間にシワを寄せ・・・、祈るように拳をふるう・・・。

あれが・・・ボンゴレ・・・X世^{デーチモ}」

※ウチのツナの場合ただ不機嫌なだけ。

「しまった！」

「ボンゴレの奴いつの間にあんなところまで！」

「俺のスピードを甘く見るな」

「哀しき者よ」

トリカブトがその服の前をはだけさせ、胸を出す。そこには匣が埋まっていた。

「胸に匣が埋まってる！」

「デイーノから連絡のあった修羅開匣だな」

「いきますか、トリカブト・・・」

「息止めるから、まった!!」

そして修羅開匣が起った。空間を呑み込むような開匣の後、そこにいたのは蛾のような羽を持ったトリカブトだった。

「終焉の時」

「なっ!! 景色が回り始めた!!」

「この幻覚・・・チョイスの時より強いな・・・」

「修羅開匣とは、人間と匣兵器の能力を掛け合わせたもの。蛾の擬態を進化させたトリカブトの目玉模様を見たものは、一瞬にして五感を狂わされ真実を見失うのです」

「消えた！」

「何が何だか分かりません!!」

「目が回るよ!!」

「くっ。天地がつかめない」

「・・・仕方ないか」

ツナは一度目を瞑る。

「ムダです。一度模様を見たものは目をつぶろうとこの幻覚を破ることはできない。超直感でも——」

「——ばーか。誰が目を閉じたままだつつったよ」

今一度目を開いたツナの目は、青く光るつくられたような目が填まっていた。

そして辺りを一度見回したツナは一瞬でかき消えると、トリカブトの位置を正確に掴み攻撃を当てた。

「何?!」

「どーなってやがる」

『凧さんも知ってるでしょう?』

「うん。あれは」

『〃神々の義眼〃』です』

「〃〃神々の・・・義眼?!」〃〃」

『その特性は様々。超光速の挙動を捕らえる動体視力に、物体を透過する透視能力。他者の眼球を掌握する視覚操作。そして今回は因果律を操作して世界を書き換えるような幻術であろうと見破る解析能力の恩恵です!』

「もうアイツ一人でいいんじゃないかな」

『それは言ったらおしまいですよリボンさん? ご主人は、本当に一人で出来るんですけど・・・みんなで協力するってのが楽しいんじゃないですか!』

「必殺マジシリーズ マジ殴りX BURNER!!」

殴った拳を即座に開いてX BURNERを撃つツナ。その威力は計り知れず、真六吊花の面々は撤退を余儀なくされた。

「みんなー、大丈夫ー?」

間延びした声だが、攻撃が加えられていた仲間を心配するような声をツナは空高くからかけた。

「かなりダメージを負っちゃったな」

「γ! 皆さんの所へ!」

「ハッ」

こうしてまた、ボンゴレの面々は場所の移動をせざるおえない状況に追い込まれた。

第六十五話 激突

「原点にして頂点」

「リスポーン地点」

「実家のような安心感」

「親の顔より見た光景」

「何言ってるんだお前等」

ツナと風の悪ふざけにリスポーンが突っ込む。

「だつてさ、最初に未来に来た森に戻ってきたんだよ？　これは原点
回帰」

「これが神だ」

「見える奴には見える」

「何か書いとけ」

「死ぬがよい」

「やったぜ」

「いい加減にしろ」

「あ、沢田さん。お話しておきたいことがあります」

「・・・？　何？」

「私はもう、逃げません」

ユニのその言葉に、遠くで話を聞いていたブラックスペルも驚愕する。

「決着をつけて良いってこと？」

「はい。明日、夜明けと共に始まる戦いで全てが終わります」

「へえー・・・」

「白蘭も力の衰えと枯渇で焦っています。この戦いに全てをかけてくるでしょう」

「じゃあ真つ向勝負ってことだね」

「あの、戦いに勝ったら。私達はもとの世界に戻れるんでしょうか」

「白蘭は他のパラレルワールドの自分と考えや知識を共有できますが、裏を返せば全てが繋がっていて、実体は一つしかないと言うことなんです」

ツナはそれを聞いて、アイツもそうなのかなーと首を傾げながら別の言葉を口にする。

「つまり・・・一つを倒せば全部が消滅する?」

「はい。この世界で白蘭を倒せば、全パラレルワールドの白蘭は消え、もう恐ろしい未来の待つことのない、平和な過去へ帰れるはずです」
「そもそも俺は過去の時点で白蘭と仲良しなだけど・・・」

「もともと滅びる結末が見えない世界・・・? それはとても良い世界ですね! もしかしたら私の魂が避難していた世界もそこかも知れません」

「え、そう?」(虹の代理戦争どうなるだろ・・・。骸とか、白蘭とか、何気に俺に依存してる気がするんだよな)

「ツナ、くだらねーこと考えてんじやねーだろーな」

「お、最近俺の考えてることが何となく分かるようになってきたみたいだね、リボーン」

「・・・ツナ。勝てるのか?」

「勝てる勝てないじゃ、ないんだよ。勝つとき。この戦いに勝てばみんな過去に帰れるんだからね」

ツナは両手の中指にそれぞれ一つずつ填まるリングを眺めながらそう言った。

「ツナ一人なら余裕で勝てるかもしれねーが、全員で力を合わせて勝つてのがお前の目標なら厳しーぞ」

「だ、だよねー。時間も無いし・・・。作戦なんか一つも考えてないんだし、あーっ! もうっ不幸だなあ!」

「今更何言ってるんだバカ」

「ふむ・・・。こういう時の守りの作戦立ってるのは、入江正一。元メローネ基地隊長が向いてるんじやねーか?」

「え!?! ぼ・・・僕!?!」

「ふざけんな!! 作戦を立てるのは十代目だ!!」

「獄寺君の言う通りだ。僕はチョイスで失敗した。綱吉君や、イカロスさんがいたから何とかなったようなもの。僕にその資格はない。この戦いはボンゴレボスである綱吉君が決めるべきだ」

「いっつ!？」

マジかぁ……。と溜め息を吐きながらも、ツナは腕を組んで首を傾げる。

「んじやあとりあえず、イカロス。全員の治療よろしく」

「了解。モード変更。医療用エンジエロイド“Ore^オgan^ガo”起動」

「みんなに対する指示は……。とりあえず匣兵器で連係攻撃……。できる?」

「可能だ」

「じゃあそれも実行! 敵は白蘭と真六弔花、全力でこれを排除しユニを守れ!」

「「おう」」

「戦法は自由! 各自の判断に任せるよ? いい? 総員、適当にやっちゃって!!」

「「「適当!?!」」」

「またか……」

「適当好きだね……」

そして、夜が明けるまで最後の調整が始まった。

——翌朝。

各地で戦闘が行われる中、ツナは非戦闘員が要る拠点であくびをしていた。

「心配じゃねーのか?」

「んなバカな。全員生きて帰れるよ。それがこの戦いの戦法だから」

「スゴイですね、沢田さん」

「いやいや。あいつ等が強いんだよ。俺なんか必要ないくらい」

「いいえ。ボンゴレ守護者全員がボスであるアナタの元に集まってきている。それが一番スゴいんです」

暫くツナはダラダラしていた。が、通信が来て跳ね起きた。

「え……? ゴースト? 炎を吸い取る真六弔花?」

『そーだ! 奴にはリングの炎も匣兵器も通用しない!! 危険すぎる

敵だ！一刻も早くユニを連れて逃げろ!!』

「……………」

「行ってこい、ツナ。ここは俺が守ってやる」

「……………いいの？」

「そんな顔してる奴を留めておける分けねーだろ」

「それじゃ、行ってくる」

そう言うのと、地面を蹴って亜音速でツナは前線に移動した。

「……………笑ってましたね」

「強い敵つてのはツナにとって嬉しい相手だからな」

「……………でも、綱吉さんは」

「そう。アイツは強すぎるんだ」

前線に飛び出したツナは、一瞬でゴーストの懐に入ると死ぬ気の零地点突破 改を発動させる。

「あゝっ。あゝあゝあゝ!!!」

「ひゃっはあー！」

ツナの零地点突破は、彼の炎だけでなく肉体すらも吸収した。

「吸った……………」

「GHOST^{ゴースト}って炎の塊かよ」

「流石十代目！」

「沢田……………」

「すげっ」

「極限によくやったぞ!! 沢田!!」

「来るな」

「なぬ？」

「え!?!」

「おかしい……………」

「ええ」

零地点突破改は敵の炎を吸収して自分の炎に変換する技、なのにゴーストの炎を吸収したツナの炎はほとんど変化していない。真六吊花や守護者やヴァリアーの炎を奪ったゴーストを吸ったにもかか

わらずだ。

「いやあ。すごいすごい!!」

「!!」

「GHOSTを倒しちゃうなんてさ♪」

「あ」

「白蘭!!」

「白蘭様!!」

「来たか!!」

空を飛ぶ白蘭は相当楽しそうな笑顔をしていた。

「また元気な君に会えるとは嬉しいなあ。綱吉くん」

「やあ、白蘭」

「ボンゴレファミリーの主力メンバーも勢揃いでますます嬉しいよ!

それにしても綱吉くん。君は物好きだなあ」

「?」

「骸君にXANXUS君。かつて君の命を消そうとしたものを従えるなんて正気の沙汰じゃない」

「だって俺、こんな奴らに殺されるわけ無いし」

「!!!」

ツナはそう言うが、やはりこちらの世界の彼等には不満があるらしく攻撃を加えるが、白蘭には全く効いていなかった。

死ぬ気になったツナが高速で攻撃を加えるが、右の拳を白蘭に人差し指一本で止められた

「あれ。どーしたの? 君の精一杯はこんなもんかい?」

「え」

「じゃあ僕の番だ♪ 白指」

指から放たれた死ぬ気の炎がツナの体を地面に叩き付ける。

白蘭がいうには、ゴーストが吸収した炎は全て彼の体の中にあるらしい。

第六十六話 体化物戦闘用拳銃、対 “死炎” 専用弾

「綱吉クン。これぐらいで参って貰っちゃ困るよ?」

「……………くつそ。ドドン波みたいなき使いやがって…………」

ツナは凄絶に笑いながらゆつくりと立ち上がり、体につけたリミッターを外していく。魂に刻まれた上条当麻の死ぬ気の炎を体に灯す。

その色は薄く明るい茶だった。

「あれ? その炎の色は何だい?」

「行くぜ。これが俺の全力全開。スターライト————ブレイカー!!」

X BURNERの構えから放たれたのはベージュ色の剛の炎。その威力に白蘭も思わず眉をひそめた。

「ハハッ。その炎の色は何だい? 君の炎は上空だろう?」

「複数の属性を持つことは不思議じゃないだろ? 俺は今から全力を持ってお前を倒す! 扇ちゃん。明日って今さ!」

「ハハッ。良い炎だね!」

ツナと白蘭の上空の炎と、ツナの大宇宙の炎が爆発的にふくれあがった時、甲高い音が鳴り響く。まるで、鐘を鳴らすように断続的に。

そして結界が形成された。

「ユニ!?!」

「綱吉さん!」

「白蘭…………。お前、これ分かってたな!?!」

「もちろん! 上空の炎の共鳴による結界。簡単には崩れないからね」

♪ 「誰も居ない中での戦闘ねえ……………」

ツナはつまらなさそうに呟いた。だが、すぐに唇の端を釣り上げると、心底楽しそうに笑い出した。

「ごめん、ユニ。ちょっとだけ、遊ばせて」

「え? あ、はい」

言うが早いかツナなジャケットの中から巨大な銀色に輝く自動拳銃を取り出した。

「銃？」

「おう」

撃ち出された銃弾。炎の壁を張り、銃弾を防いだはずの白蘭の頬をかすめてそれは飛んでいった。

「……ハハッ。何だいその銃は」

「454カスールカスタムオートマティック。特殊弾と同じ素材の銃弾が入っている。十三mm爆裂徹鋼弾が」

「へえ。死ぬ気の炎をもともしない銃弾か……。やつかいだね！」
「だろ？ 俺もよく知ってる」

ツナは言いながら銃をしまい、一度手を叩く。

「よく。眼を見開いておけよ？ 大地の力を見せてやる」

そして地面に叩き付けられた手は、地面を大きく変動させると針山のように形を変えながら白蘭に向かって飛んでいった。

「おっと♪ 何の真似だいさつきから」

「いや、正攻法^炎で敵わないのは分かりきってるから使わないでやってんの」

「じゃあ行くよ。白指」

ツナは再度手を叩くと、また地面に着ける。今度は土の壁が炎を防いだ。

「以外と役に立つな……。この方法。炎だよりのバカが痛い目を見るな……。これは」

ツナはニヤリといたずらっ子のように笑った。

「ははっ。本当に面白いよ綱吉くん。君は僕の知る限り一番面白い个体だ！」

「人を実験動物みたいに……。言うなっ！」

大宇宙の炎のX BURNERが放たれるが、白蘭はかわす。

（……まともに受けたらマズいと悟って避ける事に専念する……。か。学習能力はあるんだな。あんなバカっぽいのに、まあそこは年上の余裕って奴か）

その後も善戦を続けていたツナだったが、何かに気付いたように距離を取る。

すると、森の中から飛び出した影が大空の結界の中にあっさりと入ってしまった。

「何だい？ 君は」

「何度か会っているでしょう？ エネと申します」

「ああ！ 君かあ！」

「エネ。お喋りは良い。例の物は？」

「もちろん。出来たら嬉しいです」

「………そおか」

ツナは笑う。ようやく、エネの手によって自らの元に届いた、それを見て笑う。アタツシケースに入っていたそれは、一度装填してしまえば百万発撃てるコスモガンとなるカスールカスタムオートマティックと同型の拳銃。

「待たせたな、白蘭。ここからが俺の戦い方パートツーだ」

「何をする気か知らないけど。もう君の銃弾は届かないよ♪」

ツナが引き金を引くと、轟音を鳴らし銃弾が撃ち出された。それは白蘭が生み出した莫大な炎圧と単純な圧さを併せ持った炎の壁を、吹き飛ばして彼の腹部を抉り取った。

「カハツ……。いくら特殊弾でも、これはおかしい、おかしいだろう！? 綱吉クーン！」

「純耐炎性マケドニウム加工水銀弾頭弾殻。マーベルス化学薬筒NN A9。十三mm炸裂徹鋼弾。ジャツカル専用弾……。完壁だ、スパナ」

「へえ……面白そうだね♪」

「なんなら撃ってみるか？」

「良いのかい？」

「ああ、いいぜ？」（結界の外で俺に対するバカとかアホとか十代目とか聞こえてくるけど無視無視）

ツナはジャツカルを羽で空を飛ぶ白蘭に向けて放り投げた。それを見事にキャッチした白蘭はオモチャを買って貰った子どものように構えて遊んだ後、ツナに向かって撃ってきた。
が。

「予想は簡単。そう来ると思ったから銃からは目を離さなかったぜ」

もちろん銃弾はツナにあたらなかった。それどころか地面にあたったのは銃弾だけでなく、ジャツカルも白蘭の手を離れ落ちてきていた。

「がっ・・・ああっ！」

「骨でも折れたか？ まあ妥当だろうな。ジャツカルの反動は普通の人間にや耐えられない。一発撃っただけで反動によって腕がイカレちまう」

「君のその化物みたいな身体能力が会って初めて使えるってワケ？」

「そーゆー事」

ツナは楽しそうに楽しそうに笑う。白蘭の回復を待つかのように動かさずとせずただそこで何かを待っていた。

第六十七話 遊戯の終わりと アルコバレーノの復活

「待たせたね。綱吉クン。完全復活さ。そこで提案なんだけど、もう遊びはやめないかい？」

「いいぜ？ こっちもそのつもりだったしな。お前にアルコバレーノのおしやぶりは渡さねえ」

「できるの？」

「エネー！」

「了解です！」

エネはツナの指示に従ってユニに近づくと、その首と手の中からおしやぶりを奪い取る。

「!? あのっ！」

「こういう仕事は命ある人間がすることではないですよ」

「さて、白蘭。俺が何を言おうとするか分かるか？」

「さあね♪」

「じゃあ教えてやるよ。俺が今から使うのはお前を倒すために、みんなが生み出した覚悟の炎だ。無闇矢鱈に人を傷付けたために倒されることを後悔しな！」

ハイパーモードになったツナは死ぬ気の炎を強く灯す。

「プツ。さつき君の炎が全く通用しなかったことを忘れてない？ 君がその炎を灯したってことは身体能力を死ぬ気の炎基準に落としたりしたこと。つまり、僕と君の力の差は何も変わっていない！」

「どうだろうな」

ボンゴレリングが輝き、ホログラムのように人が映し出された。

「あの子。色々とボスと似てる」

「血は争えないでござるな」

「究極に面白い奴ではないか」

「ボンゴレに彼が入るのは賛成しませんよ」

「興味ないな」

「……………。テメエの好きにすりゃあ良いさ。いつものようにな」
「そうだな……………G」

「!? なんだ?」

「X世よ……。お前の考えに俺も賛成だ。俺の真の後継者に力を貸してやりたいが、あいにくそれは出来ない、その代わり——枷を外してやろう」

ツナは思わずこのじいさんをぶん殴ってやりたくなった。未来で継承を行った後からこのじいさん、隔日でツナの夢の中に出てきて自警団時代の武勇伝を語るのだ。

今も、ツナに力を貸す俺カッコイイみたいなドヤ顔をしている。

「今のボンゴレリングは仮の姿だ。しかしもうその必要も無い。お前にならこのリングの本当の意味を分かってもらえそうだからな」

リングが輝き、原型に変わった。

「X世、マーレの小僧に一泡吹かせてこい」

そういつて、ジョットは消えた。

「……………」

ツナは何かを堪えるような仕草をした後、炎圧全開で空間を殴る。

「…………よし」

「いいかい?」

「ああ、やろうぜ! ナツツ! カンビオ・フォルマ 形態変化、モード・アタッコ 攻撃モード!!」

「アタッコ?」

「ビッグバンアクセラ!!」

「白拍手!」

何度かぶつかった後、白蘭が本気で決めに来た。そしてツナはボンゴレリングの剛の炎を後ろに撃ち出した。

「!!?!」

「大空の剛の炎……それだけ本気なんだね!! 消えろ!!!」

「くらえ!!」

白蘭の放ったどす黒い炎に対して、ツナはベージュ色の剛の炎を撃ち出した。

(右手のボンゴレリングの最大出力と、左手のウラムスリングの最大

出力を撃ち出したのか・・・)

炎が消え去った時、残ったものはマーレリングだけだった。

「・・・この世界の白蘭テメとも、目一杯遊んでみたかったな・・・」

ツナはゆっくりとその場にしゃがみ込む。

「私はどうも、この世界の白蘭とウチの世界のアイツが同一個体つてのが信じられないんですけどね」

「・・・大いに違うもんな。エネ、どうだ？ 命の炎を燃やした感想は」

「そうですね・・・。もの見事に命のストック持って行かれましたよ」

「マジかあ・・・」

「よくやったな、沢田!! コラ!!」

「お、コロネロじゃん。元気？」

「色々説明して欲しいことはあるが、とりあえず置いておくぜ。コラ」

そこには五人の赤ん坊と五色のおしやぶりがあつた。

「アルコバレーノが・・・」

「二復活したのか!」

「赤ちゃんがいっぱい!」

「どこのベイビーちゃんですか!」

「あれが7・の一角のおしやぶりを持ち、7・を監視する役目を持つ最強の赤ん坊、アルコバレーノ。リボーンリボーンの旧くからの知り合いでもあるわ」

「マーモンめっけ♪」

「コロネロ・・・」

「師匠!」

「ししよ!!」

「てめーらおせーぞ」

ツナとエネが談笑している間に、感動の再会は進んでいく。

「ん? もしかしてもう過去に帰れる?」

「ああ。もう、帰れるぞ。コラ」

こうしてひとまずツナ達の未来での戦いは幕を閉じた。

第六十八話 さようなら未来

並盛町の地下五百メートル、メローネ基地跡より一キロ地点。

「え。この装置で過去に帰れるの・・・？」

「ああ。五分で過去に戻るはずの十年バズーカの効力をこの装置で妨げているわけだから解いてやれば良いんだ。7・のパワーバランスが正常に戻った今なら、時空も安定していて安全に帰れるはずだ」
「オレ達が十年ピツタリにタイムワープ出来なかったのか、7・のパワーバランスが崩れ時空が歪んだからなんだな」

「今頃気付くとは愚かだなりボーン。もつとも帰りのタイムワープは心配するな。この天才が計算し、ベストな時と場所に帰らせてやる」
「信じて良いのか、ヴェルデ」

「カ리는返すさ、沢田にな」

(この二人の雰囲気なんか最悪じゃね・・・？ さーて、そろそろみんなこの時代の面々々のお別れはすんだかな？ お世話になりました。つてちゃんと言ってるかな・・・)

ツナは中学生相手になんとも失礼なことを考えながら、その場を立ち去った。

——ボンゴレ十代目の棺桶側。

「色々あったな・・・。未来で」

「別次元の未来って事で余計不思議な気分ですよね」

「確かに・・・な」

「さ、沢田さん」

「・・・ユニ？」

「あ、あの・・・その・・・」

「どうしたの？ もしかして、大空のアルコバレーノの箔が欲しい？」

「あ、いえ。そういう事では・・・」

「でも、まあ・・・」

エネは何かを呟きながらユニに近づくと、大空のおしゃぶりをその首にかける。

「これはアナタの首に収まっているのが一番正しい在り方ですよ」
「だな」

「……その、色々ご迷惑をおかけしました」
「何が？」

「その、私達アルコバレーノの宿命に巻き込んだりしてしまつて……」
「みんな無事で笑つていられるんだから何の問題も無いだろ？ 終わ
りよければ全て良しつてやつだ」

「……結局。今回ご主人は、何のために戦つたんですか？」
「自分のため、だろ」

ツナはそう言つてニヘラと笑う。そのまま踵を返してアジトの方
に歩き出した。その後ろをエネがチョコチョコと着いていく。

「さーて、オレは次に何をしようかなー」

「何をやる気ですか……」

「ボンゴレリングの強化かなあ……」

「へ？ 強化ですか？」

「おう、強化。その為にはあいつ等に協力要請を……しなくても良い
かもな……」

「どういう事ですか……？」

「さーて、どういう事でしょーか？」

「突然な仕事の舞い込みはやめてくださいね？」

「突然の仕事の後には定期的な仕事の予約が入つてるだろ？」

「〃その〃 突然な仕事はやめろつってんですよ！」

「お前、口調悪いクセに最後ですつてる？」

「んな分けねーです」

「ん。パクつてないね」

「いずなたんですか!? あの狐耳少女と私の口調を比べてましたね、
バカご主人！」

——白くて丸い装置の場所。

「よーし、みんなそろつたね!! そろそろ出発だが、ボンゴレボックス匣は
未来ここに置いていつてもらう。取りはずしてくれ!!」

「がお・・・」

「何その我関せずな態度」

「がう」

「は？ どうせ会えるだろうって？ 未来でだろ、何年かかると思ってる」

「・・・がお」

「おい。んだよ、その『分かってねえなあお前』みたいな態度！」

ナッツの態度にだんだんキレ始めたツナだった。さらにそんな態度のツナにナッツは冷ややかな目を向ける。

「・・・」

「だから何だよその態度！ テメエ人生舐めてんだろ！」

「・・・がお」

「だ・か・ら！ 急にどうしたんだよ、お前！」

（ナッツの行動には、ツナの深層心理が反映されるんだが・・・。お前、どんだけ自分を嫌ってやがる・・・）

それぞれの別れが（ツナが一番長かつたくせに別れを惜しんでいたわけではなかった）終わり、ツナ達はもう一度集まる。

「じゃあタイムワープを始めるよ!! 別れを惜しんでいたらキリが無いからね!! アルコバレーノは過去のマーレリングを封印してすぐここに戻ってくる予定だ」

「それじゃあ・・・」

「では・・・。本当に・・・、ありがとう！」

「・・・また。どこかの未来で！」

「タイムワープスタート!!」

装置が起動し、ツナ達は十年バズーカの効力が切れたので、その場から消える。

このタイムワープでアルコバレーノのみんなは様々な贈り物をツナ達にした。まず過去のマーレリングの封印、そして一緒に戦った仲間達の未来の記憶を、過去の彼等に伝えた。そして、特別価格の好待遇でナッツ達ボンゴレ匣を過去に連れて行った。ヴェルデの天才科学技術で、今までの匣型から更にコンパクトな指輪型になって、だ。

「まつ。みんなこんな所にいたの？ てつきりツナの部屋かと思ったわ」

「か……、母さん……」

「？」

「「ママーン!!」」

「んまあ、どーしたの。どこかイタクしたの？」

「先を越されたな、ツナ」

「え。すると思ってるの？」

ツナの視線に思わずリボーンの背筋が伸びる。

「そーだツつ君。今の地震で物が落ちてないか自分の部屋を見てきてちよーだい」

「え？ 地震があつたの……？」

「その後でケチャップ買ってきてくれない？ 今晚ハンバーグなんだけど切らしちゃったのよ」

「とことん息子を使うね!? まあ、良いけどさ……」

「ちよつと、なにツナ!? 顔にたくさんキズバンつけて……、また転んだの？」

(あ、ナッツの爪痕……)

「それにたくさん指輪つけて……、獄寺君のマネ？ 非行かしら……」

「え! いや、これには様々な形容しがたい理由があります! つ

まり、何でもないのであります!」

とにもかくにも、ツナ達中学二年生の未来での戦いはこうして幕を閉じました……。

シモン編

第六十九話 至門中学の転校生

ある日の朝。

「ツツ君、今日は楽しみね。集団転校生が来るんでしょ？」

「シューダンテンコーセイって何？ どんな味なの？」

「食べ物じゃねーよ、ランボ」

「ほら、ちよつと前に地震があつたでしょ？ また地震が起きるかもしれない場所に住んでいる子ども達は、安心して学校に通えなくて困ってるのよ。そこで、並盛町みたいな地震が起きにくい土地に、みんなで一緒に転校してくるの」

「ふーんっ。あ、そ——っ」

「説明求めといて途中から聞いてないな、ランボ！」

ツナはとりあえず支度をすませると、声をかけて家を出る。

その通学路の途中で、見慣れない制服を着た生徒を見かけた。

（至門中学……だったっけ？ なんでシモンなんだろうーな。アーデルいるし……）「君子危うきに近寄らず。また、触らぬ神に祟りなしともいう」

「自分から話しかける、ダメツナ」

「久しぶりに言われたなあ、それ。……で？ 学校にお前が来たって事は厄介なこと？」

「違え。こいつがボンゴレ九代目からこいつが届いた。ボンゴレファミリィ、継承式開催の通知だ」

「継承式？ 一応聞いておく……誰の？」

「決まってるんだろ。お前が正式に十代目ボンゴレボスの座を九代目から引き継ぐ式典だ。世界中のマフィアが盛大に集うぞ」

「やっぱりい？ 俺があ？」

——教室。

「任せてください！ もし転校生の中に十代目になめた口聞くよーな

大好き隼人……。何書いてんの……。)

ツナは自分の守護者と、友人の守護者にため息をついた。

「シット君……。ご、ご苦労さん。え、では次君の自己紹介だ……」

「……。古里……。炎真……」

「ん？ 聞こえないよ、もう一度」

「……。ござと……。えんま……」

「声が小さい!! もう一度!!」

「先生もう耳が遠いんじゃないですかあ?」

「何だとお!? 誰だ。今の言ったの! こらっ笑うな!!」

その場を誤魔化して、一人ほくそ笑むツナだった。

——帰り道。

「リボーンのやつ、学校に着いてきたくせに帰りは着いてこねーのかよ」

「金出せオラア!!」

「……。カツアゲ?」

曲がり角の向こうからそういった風な脅し文句が聞こえてきた。普段のツナなら面白そうだからという理由で絡んでいただろう。金を巻き上げる不良から逆に金を奪い去るという絡み方で。

だが、それはドスがきいてはいるが少女の声だったので、ツナは『スケバン?』などと考えながら曲がり角の向こうを覗く。

そこには——

明らかに不良といった風貌の並中生が、至門中の制服を着た少女に踏みつけられ、立ち上がることもままならない状態で、必死に抵抗していた。

そばには、どこか諦めたような目で遠くを見る古里炎真の姿もあった。

「……。何やってんの? 真美ちゃん……」

「え!? お兄ちゃん!!」

「グフッ!」

ツナが声をかけた途端、勢い良く振り返り目を輝かせて彼の腹部に

ダイビングヘッドした少女を、彼は許さないと決めた。

「ゲッ！ あれ2—Aのダメツナだ！」

「お兄ちゃんってどういう・・・グエツ!!」

真美が左手を不良生徒に向けただけで、彼等の体は再度地面に埋まる。

「ガッ・・・！」

「しに・・・たくない・・・」

「あなた達・・・私のお兄ちゃんに何だって・・・？ 炎兄をカツアゲするだけじゃ飽き足らず、お兄ちゃんをダメ呼ばわり!? ぶつ殺す!!」

「わー、俺殺すとか言っちゃう女の子は嫌いだなー（棒）」

「あれ？ 私何か言った？」

「あつはは・・・。俺から嫌われたくないから発言を揉み消したよこの子。どんだけ好かれてんの俺」

「・・・少なくとも、部屋中写真だらけになるぐらいには・・・」

真美から少し離れた所で、棒読みでぶつぶつ言っていたツナに、そんな言葉が炎真から投げかけられた。

「それってオタク系？ それとも・・・ストーリーカー？」

「少なくとも真美がいる間は部屋に入ることも出来ないよ」

「OH・・・ヤバイやつう」

「お兄ちゃん！ あの友達私にお金渡していった！」

（真美ちゃん君中学一年生だよね!? どうしてそんな怖いことになってるの!?! ちよつと前まで可愛い女の子だったのに!）

（多分、ツナ君に会えたから・・・）

（炎真?! お前、直接脳内!?!）

「と、とりあえず・・・うちくる？ 炎真君ボロボロだし・・・」

「あ・・・、う「うんっ！ 行く行く！」」

「あー・・・じゃあ案内するよ・・・」

——沢田家。

「ツツ君。よかったじゃない。新しい友達が出来て」

「あ、うん」

「不束者ですがよろしくお願いします」

「よろしくね〜」

「真美ちゃん！ 三つ指立てて挨拶しない！ 母さんも母さんで、ただの挨拶としてしか理解してないし!?!」

「なん・・・・・・だと・・・!?!」

「そこまで驚かなくてもいいんじゃない？ 真美」

「炎兄は黙ってて！ これは死活問題なの。まさか・・・お兄ちゃんのお母さんが天然だったとは・・・!」

頭を抱えて唸る真美に、ツナと炎真は顔を見合わせて思わず笑った。

第七十話 シモンファミリー

——至門が来たその日の夜。

炎真と真美の古里兄妹は、ツナの家に泊まっていた。

「ツナー。お風呂入っちゃいなさーい?」

「あ、はーい」

「お風呂?」

「そ、炎真君と真美ちゃんも後で入りなね」

ツナは遊んでいたゲームを一時停止してお風呂に向かった。

——風呂。

「ふう……。風呂は命の洗濯だな……。」

「お兄ちゃん一緒に入ろ!」

「突然、何言ってるの!? っつかもう脱いでるし!」

突然全裸の真美が突入してきた。と言っても胸の前でタオルを持ってるので、下の大事な部分は隠れている。胸も隠せと言いたい。

「いいじゃんいいじゃん! 兄妹のふれあい!」

「俺真美ちゃんと血も繋がってなければ、戸籍的にもそんな繋がりにいんだけど!」

「じゃあ裸の付き合い!」

「じゃあ?! じゃあって言ったよね!」

「一緒に入りたいの……。ダメ?」

「うっ……。」

（真美ちゃん……。やりますね）

（うむ。あるじ様の苦手な上目遣い＋半泣きのコンボを習得しておるとは）

（中学生の順調な膨らみかけだし）

（ロリコンの先輩にはキツイんじゃないですか?）

（ちよつと黙ろうか? お前等）

（でも、反応しますよね?）

(流石にこの体じゃ・・・当麻の体に戻ったらどうか分からんけど)

((反応するでしょ)) (じゃろ) だろ)

(満場一致かよ)

((だってロリコンじゃん)) ((

そうだけど揃ってんのムカつく)

脳内で怒涛の会話を繰り返しているが、この間ツナはマルチタスクで真美と会話もしていた。

「ダメじゃないから入りな。風邪引くよ」

「わあい！ お邪魔しまーす」

とりあえず一緒にお風呂に入って、真美の間違った入浴知識ツナ(ツナ専用)を正そうと奮闘したり、浴槽で執拗に肢体をすりつけてくる真美に溜め息を吐いたり、異様に疲れた入浴になった。

——次の日の朝。

「え、うわあああああああああ!?!」

「!? ど、どうしたのツナ君!」

ベッドで悲鳴を上げたツナに驚いて、隣に布団を惹いて寝ていた炎真が飛び起きる。ツナの方を見ると、彼に添い寝をするようにパンツとシャツだけ着た真美が寝ていた。

「・・・敵襲かと思ったよ」

「どんな勘違いだっ! 俺にとってはこっちの方が死活問題だよ!

昨日の記憶が曖昧でこの状況とかマジでマズい!」

「・・・ただ真美が潜り込んだだけだと思う」

「俺のベッドに?」

「うん」

「・・・不幸だ」

——通学路。

ツナ、炎真、真美の三人は並盛中に向けて歩を進めていた。

「ねえ、炎真君」

「真美は僕にも止められない」

「腕から剥がすだけで・・・」

「ムリ」

「・・・真美ちゃん。俺、素直な子が好きだなあ」

「うん」

「歩きにくいから、腕から離れてくれると嬉しいなあ」

「うんっ」

真美の扱い方が分かってきたツナだった。

そんなこんなで学校に着いたツナ達の前では、校舎に肅正の垂れ幕が着いているというなんともあれな光景だった。

「これ・・・は・・・」

「アーデルハイトの委員会活動だよ♪」

「学校の風紀を暴力によつて取り締まる肅清委員会の委員長なんだ」

「全校生徒の一割にも満たない人数の転入生で、その中でも一人だつてのによくやるよ・・・」

「お兄ちゃんなんか見方が違うね」

「見ろ、屋上！ 誰かいる！」

「あ・・・」

「アーデルハイト」

「雲雀さん・・・」

ツナは呆れながら校舎の方に歩いていく。

「お兄ちゃん、どこに？」

「止めなきや。雲雀さんは強い。炎ありでもなしでも、炎真君の大地と俺の大地以外は勝てないよ」

「・・・そんなに？」

「そんなに」

真美にはバレているが、ボンゴレ十代目であることを炎真達には隠しているツナ。うっかり口を滑らせないようにしなければ。

「——次は君を咬み殺す」

ツナが歩いて屋上に着た時には、雲雀はすでにトンファーを取り出していた。

「・・・ハア」

「お兄ちゃん、お願いしてもいい?」

「はいはい」

ツナは軽く走りながら金属製の小手を両手につける。そして、次の瞬間には二人の間に入り、攻撃を完全に無力化していた。

「何してんの? 君」

「朝っぱらから暴れないでくれますか? 雲雀さん」

「いつ・・・たいどうやって・・・!」

「どうせ見てんだろ、リボーン」

「流石だな、ツナ。無意味な抗争を防ぐのはボスとして当然だぞ」

「らら?」

「赤ん坊?」

「流暢にしゃべっている・・・」

「かわ・・・いい・・・?」

突然現われたリボーンに、至門の面々はそれぞれの反応を示す。

「何言ってるんだよりボーン。学校のケンカに抗争やボスは関係ないだろう?」

「関係大アリだぞ。奴らはお客様だからな」

「客・・・?」

「ああ。こいつらはシモンファミリーっていつてな。ボンゴレのボス継承式に招待されたマフィアなんだ」

「へ、へえー・・・。マフィアなんだー。それをどうして俺に言うのかなー? リボーン・・・」

「昨日の朝いったじゃねーか。ツナは「アアア聞こえなーい!」・・・どーした」

ツナの反応にリボーンは首を傾げる。

「残された文献によるとシモンファミリーはボンゴレファミリーと付き合いが相当古くてな、その交流はI世の時代にまでさかのぼるらしい。つつても、今や俺も知らないぐらい小さくて目立たない、超弱小ファミリーなんだけどな」

「くう〜! 結局ハツキリと言ってくれたな赤ん坊! 貴様、オブラートに包んで話すということを知らんでか!」

「ああ、知らね」

「結局〜!? 継承式に招待されたから来てやったんだぞ——!!」

ボンゴレ守護者達もなぜか驚きの表情をする。

「勘違いして欲しくないのは、我々が転校して理由はあくまで地震の危険を回避するためであり、並盛中を選んだのはちよūdと同じ時期にボンゴレ継承式の招待状を貰ったからだ。ゆえに我々はこれから誰にも干渉されることなく、自由に学校生活を送るつもりだ」

「・・・なあ、ちよūdと待ってくれよ。さつきから一つ気になってんだが」

「継承式って、どーいうことスか十代目!!」

（十代目って誰だろなー）

「何か言え」

「んぎやっ」

蹴り飛ばされたツナが屋上の床に転がる。

「七日後にこゝろ日本で開催されるボンゴレ継承式は、ツナが正式にボンゴレボスになる空前絶後の式典だ」

「二おお——!!」

「九代目はお前達の白蘭との戦いのことを全て知っていてな、今回の継承式を決めたんだ」

「ついにこの時がっ。感激っス十代目!!」

「オレ、チガウ。オレ、タダノ、ツナヨシ」

「だが、同じ十代目候補のヴァリアーのXANXUSを倒した時点で、沢田は十代目決定したのではないのか？ 今更何が変わるといふのだ？」

「極限に分かってねーな、了平は。ボス候補であることと、正式にボスになることでは天と地ほどの差があるぞ。ボンゴレのボスの座に着くということは、全世界の強大なボンゴレマフィアの指揮権を手に入れることだ。それはつまり、裏社会の支配者になることを意味する」

「誰がなるかっ!・・・あっ」

ツナがキリキリと壊れたロボットみたいな様子でシモン側を見ると、全員から冷たい視線というか、『え、ボンゴレボスってオマエが?』

みたいな目線を向けられていた。

第七十一話 継承式までの道のり

屋上という空間から全力逃走を図ったツナは、放課後。どこかの神社で、怒った炎真の大地の炎で押し潰されていた。

「痛い！ 痛いよ、炎真君!？」

「ツナ君、なんで君がボンゴレ十代目なの？」

「いや、知ったのはオレもつい最近で・・・」

「そういう事じゃなくて、何でツナ君が『あの』ボンゴレの子孫なの!？」

「知らない知らない知りません！ そんな、血の繋がりに文句言われてもー」

「・・・どうして？ 真美だけがその事を知ってたの!？」

「そっち!？ まさかの妹に嫉妬!？」

今もなお炎真の後ろで小さく舌を出してごめんね。と謝っている真美に、ツナはしゃべったね!？ と、思うが先にバラしたのはこちら側なのであの指切りは無効だ。

「僕達親友だよね!？ どうして相談してくれなかったの!!」

「だって・・・さあ・・・。炎真君達はさあ・・・ボンゴレ嫌ってたじゃん？ しかもそのボス候補が俺じゃん？ なんか、申し訳ないなあーって」

「・・・ツナ君。申し訳ないって気持ちがあるなら協力して」

「な、何に・・・?？」

「ボンゴレの壊滅と、シモンの宝の回収に」

「え?？」

「お兄ちゃんは普通に継承式を開いてくれれば良い。そこで、『罪』を引き出して欲しいの」

「ここでごうやって僕達が言ってるけど、みんなツナ君に怒ってたから、少しでも反省しているなら僕達に協力して欲しい」

「分かった。大地の炎でぶっ飛ばされるよりはマシだよ」

ツナは軽い調子でそう頷く。それが、どんなことを意味するかはよく分かった上で。

「あ、でも。俺の守護者を傷付けないでね？ リングを破壊するためなら仕方ないとは思うけど、なるべく軽傷で済ませてくれる？」

「ツナ君以外、僕達はいつでもいいんだけど？」

「霧の守護者は骸。それだけでも優しくしてくれる？」

「分かった。ツナ君にとってボンゴレの守護者も友達だっぴいいたいんでしょ？」

「正解。真美ちゃんも分かつた……た……？」

「ツナ君を無理矢理十代目にしようとするボンゴレに手加減しなくちやいけないの!?! どうして!?!」

「俺が大人しい方が好みだから……？」

「分かった!」

チヨロイン……。とツナは思ったが口にはしない。ツナは身体中の汚れを落とすと立ち上がる。

「じゃあ俺、風のところに行くってくる」

「え？」

「アイツ、放っておくと麦チョコしか食わねーから。犬とか千種とかに食事面の注意を促してるんだけど、上手く行ってるのかの確認にね」

「風って……？」

「黒曜の女の子だよ。俺の霧の守護者の片割れ。骸の本体が復讐者の牢獄にいるからね。風がいないとアイツは現界できない」

「へえ……」

（あれれ？ 真美ちゃんの目のハイライトが仕事をしてない気がするぞ〜？）

と、そこに雲属性の炎を纏ったペスカファミリーの殺し屋がやってきたが、不機嫌な真美の大地の炎で地平線の向こうにぶっ飛ばされた。

「あーあ。真美の機嫌を損ねるから……」

「俺？」

「違うよ。まあ三割はツナ君が原因だろうけど。三人だけのこのほんわかした空間を潰されたのがよほど気に入らなかつたんだと思う」

「へえ……」(敵に回したくねーッ！)

——暫くしたある日。

「ああ……うん。そういう事で……なんか知らないけどボンゴレIX世に会うことになって……。うん。また……」

ツナは豪華ホテルに来ていた。

「こちらです。綱吉様。九代目は最上階におりますので」

最上階を貸し切っているボンゴレ九代目に若干引きつつ、日本人に王宮のような広い部屋は似合わない。縮こまった小室で十分である。などと結論を出していた

「こつちじゃ、こつち。よく来たね。綱吉君」

「……家庭菜園!? 何故!?!」なにゆえ

「お茶にしよう」

「はあ……」

高級そうなソファに座り、ツナはお茶をいただいていた。

「えーつと、実はですね九代目……」

「好きにしなさい。綱吉君の人生だ」

「へっ? ……ああ、これがレジエント超直感……」

「君がいかにボンゴレボスになるのを嫌がっているかは、よく分かかってるつもりじゃ。リボンから聞いているだけではない。未来で起きたこと全て、大空のアルコバレーノに教えて貰ったからのう」
「ユニに?」

「うむ。各地で地震が起きた日にわしは夢を見た。白蘭と君達の長い戦いの夢をね」

「夢っすか」

見られてたのね。あの戦い。ツナはそう思って黄昏れた。

「それが真実で、納得するまで時間はかからなかったよ。そして、あの戦いで沢田綱吉というボンゴレの十代目候補は、マフィアのボスには向いていないと、改めて確信したよ」

「はあ」

「弱虫で、優柔不断で、優しくて、仲間を想い過ぎる」

(自分より強い人間を探す ↓ 一人はイヤだ。ですか)

(確かに優柔不断だね。マルチタスクを使つてどれだけ悩んでるか)

(お前等黙つてなさい)

ツナは意外と凶星な事と、ユニがそこまで自分のことを見透かしていたと言う事実で顔が少し赤くなる。

「しかし、だからこそ。綱吉くんなら今の肥大化してしまったボンゴレファミリーを、本来の在るべき姿に戻せるかもしれない」

「自警団に……ですか？」

「君がやってきたことによく似ているんじゃないよ。変わったのはそれ以降のボンゴレじゃ」

「……」

「おつ、そーじや。見せてくれんかの？ I世から授かった原型と言われるボンゴレリングを」

「あ、はい」

「ほう、これが……。II世以降どのボスでも手にできなかつたこのリングを君に託したということは、やはりI世もわしと同じ考えのようじゃな。今のボンゴレを壊して欲しいんじゃないよ」

「あの、お話ししたいことは……。実は継いだ後^{そのこと}、でして……」

そしてツナは口を開いた。

「I世に栄えるも滅びるも好きにしろ。つて言われた時、じゃあ俺が壊しちやええば継がなきゃいけないマフィアなんか無くなるんじゃないか。つて思つたんです」

「ツナ、お前……」

「でも、それをすると、ボンゴレっていう抑止力を失つた他のマフィアがどう動くか分からない。つて言うのが不安の一つなんです。マフィアがヤクザのように義理人情に溢れていたなら、良いんですけど……。ヤクザでは堅気の人間に手を出すのは御法度ですから」

「綱吉君。わしは、君なら出来ると信じておる。純粋なボンゴレの意志を継ぐことを」

「九代目。アナタが見たがっているボンゴレが見れるかどうか俺には分かりません。でも、ボンゴレの権力を俺にください。全世界を、制圧し裏から支配するだけの力を俺に」

「!?」

「ツナ！」

「見せてあげますよ。『無血支配』での世界征服を」

ツナは継承式を受ける旨を、そのように伝えてホテルを去った。

第七十二話 継承式

——継承式当日。

「すごいな……。城を一つ貸し切りか」

「マジでマフィアって感じだな」

「ったりめーだろ！ 十代目の継承式だぞ！」

「……ボス、大丈夫？」

「うん、人混みに当たった……」

「情けないよ綱吉」

「……もう少し多くを想像しておけば……。こんな事には……」

「どうやら暫くツナは使い物にならなさそうだ。」

「……ふう」

「大丈夫っスか？」

「無理……。帰る……」

「元気か、弟分！」

「ディーノ……さん……。うつぶ」

「大丈夫か!？」

「人に酔いまして……」

「あ……。でもまさか、こんなに早くこの日が来ちゃうとはな。兄

貴分としても鼻が高いぜ！」

「は……。はは……」

「ディーノの優しさでツナが少し回復していた。」

「うゝおゝおい!!」

「」

「久しぶりでもねえかあ!! カス共オ!!」

「久しぶりか？ 沢田綱吉」

「いや、聞かれても……。困るんだけど」

XANXUSに軽く殴られてツナの酔いは完全に冷める。

「ふう……」

「おいゴラ!! 舐めてんのか？ クソガキ!! シモンファミリーなんざ聞いたことがねえ!! ここは青っ白いガキの来る場所じゃねーぞ

！」

「我々もちゃんと招待状を貰っている！」

「だとお!？」

「そう、彼等もちゃんとした招待客。俺の友達に無礼を働かないでくれるかな? オッサン」

「ッ! ボンゴレ・・・十代目・・・」

「どっかに行け。それで見逃してやる」

「チッ!」

ツナの本気の目に、彼等は踵を返して去って行く。

「大丈夫?」

「うん」

「弱小だからって酷いよねえ・・・。というか、真美ちゃんよく耐えたね」

「まあね。ここで暴れておに・・・ツナ兄の晴れ舞台を邪魔するわけにはいかないから。ね、炎・・・お兄ちゃん」

「うん。ツナ君の邪魔は出来ないよ」

「そっか。ありがとう」(するくせに)

「ごめんね」

「気にしないよ」

そして、準備が整い、各国のマフィアが揃った式場の扉が開いて、ツナの守護者が入ってきた。

ある程度で一列に並ぶと、三人三人で分かれて立つ。その間を通り抜けて、額に死ぬ気の炎を灯したツナが、周りに立つマフィアに目も向けずまっすぐに、ゆっくりと九代目に向かって歩いていく。その堂々たる雰囲気は、I世フリーモの再来と言われるツナが、本当にボンゴレI世に見えるぐらいだ。

ツナに続いてそれぞれの守護者も歩き出す。初代守護者に似ていると、未来で言われた彼等の姿は、まるで初代ボンゴレファミリイがもう一度継承を行うようだった。

(・・・ツナ君)

(お兄ちゃんカツコイイ・・・!)

「これより、I世の時代より受け継がれしボンゴレボスの証である小瓶を、ボンゴレIX世(ノリ)より、ボンゴレX世(デーチモ)へ継承する」

座布団のような物に乗せられて、箱が黒服に運ばれてくる。

(あの中に罪が・・・? ……入ってないね。あの中にあるのは偽物の罪。か)

「では・・・継承を」

九代目の手に箱が渡り、その中に入った小瓶と、その血が観衆の前に現われる。

「受け継いで貰うよX世」

その瞬間、甲高い音が響く。ツナが身につけているヘッドフォンからは、ノイズキャンセラーが流れ始めた。

音波兵器のような物で、人の耳を使い物にならなくし、辺りの無機物を爆発する物。それが何か分からなかったが、とりあえずツナは行動に移る。神々の義眼で辺りを見渡したツナに映ったのは、

【ツナ君に『これ罪』は背負わせられない】

という、炎真の心の一文だけだった。

音がやんで、煙幕も晴れたところで、ツナは目を元に戻す。

「大丈夫ですか、九代目」

「なあに、この程度。かすり傷じやよ。建物を完全封鎖せよ！ 何人も逃がすな！」

「封鎖、完了しました。監視カメラの録画映像の分析を始めます」

「犯人の割り出しには五分とかからないでしょう」

「ボンゴレスゲー・・・」

「しかし綱吉君。君は本当にI世に似ているんだね」

「はい？」

「入ってきた時そう思っただけじゃ」

「はあ・・・」

九代目のほんわかした空気に、ツナも飲まれそうになる。

「九代目！ 大変です!! 金庫が・・・破られています!!」
「なに!?!」

(大地の七属性スゲーな。大空に打ち勝つとか。ま、俺の大宇宙は一属性で十四属性に勝つけど)

「ありえん!! 七属性のシールドはどうした!？」

「破られたようですよ!!」

その後、使用者の手から銃が逃げ出し空中分解したり、氷が跳んできて、雷のシールドを貫いたりしたが、ツナはとりあえず気にしてはいなかった。

「七属性の炎で守るなど、〃罪〃の場所を教えているようなもの」

「!!」

「奴らは・・・」

「シモン」

「炎真君・・・」

「〃罪〃は返してもらおうよ。この血は僕らシモンファミリーの物だから」

「え？」

「はあ？」

「なっ」

「どういう事だ？」

「わからん・・・」

「初代シモンの血なんじゃないの？ 〃罪〃っていうのは」

ツナの推測にボンゴレ側が驚いてツナの方を見る。

「どうしても必要な物だったんだ。力を取り戻して、ボンゴレに復讐をするために」

そこから怒涛の炎真達によるボンゴレイ世の糾弾が始まった。ツナの方をなるべく見ようとしない炎真だったが、最後の最後でツナの方を向いた。

「どうだいツナ君、君の体には裏切り者のボンゴレの血が流れているんだ」

「なっ。てめー、なんてことを!」

「ボンゴレの血が流れているのは否定しない」

「「!!」」

「過去にボンゴレファミリーとシモンファミリーの間起きたことは、タイムマシンでもない限り確かめる術はない。絶対無いとは言い切れない……だが、それでも俺の魂をかけて言えることが一つだけある。ボンゴレ一世はそんな事をする男じゃない!!」

「!!」

「兄弟ファミリーを囿に使うなんてことは愚か、助けに行かないなんてことは絶対にしない!!」

「ふざけたことを!! まるであつたことがあるかのような物言いだな!!」

「嫌というほど会ってるよ、どれだけ拒絶しても俺の夢の中で自分の武勇伝を聞かせてくるクソジジイにな!!」

ツナのその一言でその場が凍った。そうとしか言い表せなかった。

第七十三話 圧倒

「は・・・？」

「知らないなら教えてやるよ……。ボンゴレリングには歴代ボンゴレボスの魂が眠ってる。その中で、一番おちやめで一番ウザいボンゴレI世が、俺の夢にほぼ毎日出てきてるって言ってんだ！」

「ウソはいけないなあ。そんな幻、俺達が信じると思ってるわけ？」

「そんなことは考えてない。俺がそんな戯れ言を言うのはこのリングがあるからかもな」

(・・・あれは、ツナ君が僕にリングを壊せって言ってる?)

「だけどなあ・・・」

(あ、違った。ただ文句言いたいだけだ)

ツナは強く拳を握った後、見せつけるように拳を突き出して、

「このリングがあるからアイツは人の夢に出てくるし、人の眠りを妨げて武勇伝を聞かせてくるんだ！ 外して寝れば良いって思ったヤツ！ いるだろ！ 何度も試したさ。でもなあ、何故かやつは俺の夢の中に出てくるんだよ！」

「あ。それオレが嵌めてたぞ」

「リツツツボオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツツ!! お前か！

お前なのか！ 俺の安眠を邪魔してたのはああああああ!!」

「わ、悪い！ 悪いと思ってるから今はシモンに集中してくれ！」

ツナは一度気を落ち着けて、炎真に相對する。

「・・・何をするか、なんて言うことは無粋だから聞かない方が良いか？ 炎真」

「別に聞いても聞かなくてもどっちでも良い」

「だろうね。こういう時って、ケンカと一緒だと俺は思う」

「だよね」

「拳をぶつけ合って納得させる！」

炎真とツナの拳が激突する。それと同時に、援護に入ろうとした守護者達を真美の大地の重力が翻弄する。

「エンマああああ!!」

「ツナヨシいいいいいい!!」

(大空の死ぬ気の炎単体じゃ無理か!)

(行くよ!)

重力に吹き飛ばされたツナは、天井に背中を打ち付ける。

(ツ! お兄ちゃん!)

(ごめん、ツナ君!)

「ま・け・る・かああああ!!」

炎を強く強く灯し、何とか天井を蹴って立ち上がろうとするツナ。だが、重力に押し潰され、上手く立ち上がれない。

「帰ろう、アーデルハイト。簡単に殺しちゃいそうだよ」

「そうだな。息の根を止めることなどいつでも出来る。奴らに味わわせるべきは、生き地獄」

「クロームちゃんも連れて行くよ。デートする約束してるからねくん♪」

「ふざけんな!」

ツナは強く手を合わせる。そして合わせた手を天井に叩き付けた。すると、天井が輝き炎真に向かってツナを押し出した。

「!! 遅い!」

「ガッ!」

ツナのボンゴレリングも砕け、彼の体は床に倒れた。

「帰りましょう。聖地へ」

「.....くっ」

「おい、ツナ!! しっかりしろ!! ツナ——!!」

「おい、しっかりしろ!!」

「タンカを急げ!!」

「怪我人多数だ!!」

「恭弥! 大丈夫か!!」

「寄らないで。平気だよ、プライド以外はね」

「大丈夫ですか!?!」

「何の...これしき!!」

「動かないでください!!」

「俺なんかより、十代目!! 十代目!! 大丈夫スカ!?」
「ツナ」

「・・・うん。大丈夫」

——その頃。

シモン島に向かう船の中。

「ねえ、お兄ちゃん。わざわざ偽物で倒された意味は?」

「偽物なら炎真に負けても別に腹立たないし、それに。俺の強さを知ってる連中に、炎真に挑むのは無謀、と知らせられるから。かな」
「本当、焦ったんだからね? ツナ君がいきなり俺達を攻撃して、リングを壊せなんて言うから」

「そっちの方が、面白いんだよ」

「面白?」

「結局沢田はそういう考え方をするのだな!」

「俺は嫌いじゃない」

「・・・ん。じゃあ予定通り、みんな俺達に試練を与える感じで。俺がいなくなったらこの船のカモフラージュが消えるから、そこんトコよろしく!」

そう言つてツナは消えた。唯一ジュリーが不審そうな目を向けていたのにもきつちりと気付いていた。

——継承式会場。

「わしは何と言つたことをしてしまつたんじゃ……………。死んでも償いきれぬ…………」

「九代目!」

「九代目…………」

「九代目…………」

「……………」

「まだ光は消えとりやせんぞ」

「「「?」」」」

「モノ見えぬこの眼にもしつかりと届いておる」

「!! あなたは・・・!!」

「九代目の小僧よ。老いぼれたのお」

ツナ達の前に目に黒い布を巻き、マントを羽織ったしわがれたおじいさんが現われた。

「タルボじじ様!! おいでくださっていたのですか!？」

「羊の世話でちと遅れたがのお」

「なんだ? あのキツタネージジイは・・・」

「九代目の知り合いっぽいけど」

「奴はボンゴレに仕える最古の彫金師、タルボだ」

「ちよーきんしとは何だ?」

「金属を加工し、アクセサリーをつくる職人のことだぞ。めったに姿を見せない仙人みたいなじーさんでな、いつからボンゴレに仕えているのかも謎なんだ。I世の頃から仕えてるって事もあるぐらいだ」

「へえ〜」

ボンゴレリングに話しかけるタルボじじに、十代目ファミリーは怪訝な顔をするが、すぐにいつも通りに戻る。

「おい、九代目よ。どーするね? ボンゴレリングは生まれ変わったがっとするぞ」

「生まれ変わる?」

「・・・ということは、タルボじじ様。まだボンゴレリングは・・・」

「死んじゃおらん。ガワが壊れとるだけじゃ」

「なんと!」

「?」

「お〜?」

「?」

「お前が十代目のボンゴレかい」
「てっ」

タルボがツナを杖でつつく。

「ふおっほっほっ。リングの言う通りの男じゃ」

「いててっ。リングが? 着けてもない相手に向かってしゃべるんですか?」

「んな事も知らんで着けとったのか。優れたリングには魂が宿る、魂あれば感じるところもある。その声を聞いてやるのがわしの生業じゃ。ボンゴレリングは次の可能性を示しておるぞ」

「ハア。ボンゴレリングの強化でもするんですか？」

「そうじゃ。お前達は獣のリングを持つておるようじゃの。わしに見せてくれんか？」

「アニマルリングのことですか？」

「そうじゃ、それとお前さんは宙そらのリングも見せてみい」

言われてツナ達はナッツ達アニマルリングをタルボに渡す。

「なるほどのう……。こやつ等の魂も必要じゃ」

「必要？」

「もちろん奴のあれも必須じゃがな」

「マントを翼のように広げたタルボ、そこには無数の袋や瓶があった。

「ん。あつたあつた、これじゃ。ボンゴレI世の血『罰』じゃ」

「I世の血……？」

「『罰』!!？」

「よし。これで材料は全て揃ったわい。成功すればボンゴレリングは今までに無い力を手に入れるじやろう。だが、失敗すればボンゴレは魂を失い、もう二度と光り輝くことはないじやろう。確率は五分と五分じゃ。どうするんじや十代目よ」

「それ、悩むこと？ お願ひします。このままボンゴレリングがなかつたら困るんです」

第七十四話 Ver. アップ

継承式会場の一室。ツナはゆつたりと椅子に腰掛け紅茶を飲んで
いた。

「十代目。よく落ち着いていられますね・・・」

「慌ててもどうにもならないし、炎真君があんな事望んでは思
えない。誰かに操られてる気がするんだ・・・。あ、でも。操られて
るって言っても骸みたいなのは操りじゃなくて」

「裏から誰かに指示されてる。ってお前は言いたいんだな？」

「うん。その誰か、は分からないけどそんな気がするんだ」

「まあお前がどう思おうとこれからお前達はシモンと戦い、命の取り
合いをしなくちゃならねえ」

「そんなの関係ないよ。俺は友達とケンカしに行くんだ」

「十代目！」

「沢田!!」

「その通りっス!! ぶっ飛ばしましょう!!」

「まったくだ!! 極限に勝つ!!」

「負けるわけにはいかないのな!」

そのすぐ後、台車の上に岩をゴロゴロ乗せてタルボが現われた。

「もしや、そいつがボンゴレリングか？」

「さすがに、勘がええのおアルコバレーノ」

「お、おい。ツナ・・・?」

みんながボンゴレリングの強化失敗を悟るなか、ツナはその中の一
つを手を取った。

「炎を・・・求めてる」

「・・・?」

ツナは大きく巨大な炎を灯す。それはオレンジとベージュの混
ざった炎だった。

「これが・・・綱吉君の炎・・・!」

「なるほど! そうするんスね! 十代目!!」

「極限に理解したぞ!」

「えつと・・・こうか？」

そしてツナの指に形状が変わったリングが填まっていた。ほとんど大空のリングVer. Xと同じ形だが、所々パーツの形が変化していた。

「名付けるなら——

——だいくうちゅう大空宇宙のリング。かな」

「それはボンゴレリング自信が選んだ、お前達的能力に最も適した形なのじゃ。その姿こそがボンゴレ十代目と、その守護者のためだけの専用シリーズ。その名を、ボンゴレギョVG」

「九代目！ シモンアジトの場所の目星がつかまりました!!」

「そうか」

会議室に移動し、その場での首脳が集まって会談を進める。

「ボンゴレイタリア本部に連絡し、資料室にあるありとあらゆる蔵書や古文書を調べましたが、シモンファミリーに関する文献はある時代以降全て破棄されていました」

「・・・てことは・・・」

「やはりシモンの連中の言うように・・・、過去のボンゴレ内部にシモンファミリーの存在そのものを抹殺する動きがあったようじゃな」

「で、どうやって分かったんだ？ シモンのアジトは」

「初代シモンがボンゴレI世へプライベートで送った手紙が残っていたのです。ただし両ファミリーが結成される以前の手紙で、ボンゴレとは関わりのない遺品の一部として別室に保管されていました。その為破棄を免れたのでしよう。初代シモンはその手紙に海外へ旅に出た時の様子を、綴っていたのです。その中の一つで彼は船が難破し、漂流した末に辿り着いた無人島について記しているのです。初代シモンはその島を気に入り一族全員を住まわす聖地にしたいと言っています」

「聖地・・・」

「場所はどこじゃ？」

「太平洋、強い磁場がありコンパスが利かないとしながらも、初代シモ

ンは予測で出した緯度と経度を記しています。この辺りかと・・・」
「日本からそう遠くない」

「ここならば我々の戦力を集めるのにもそれほど手間取りません」
「そうと決まれば出発の準備じゃ!! シモンが完全覚醒するまで七日しかない!! ボンゴレの総力をあげてシモンと戦わねばならぬ!!
ありつたけの構成員と武器を集結させよ!!」

九代目がボンゴレボスとしての威厳で部下に指示を出そうとしたが、それに待ったをかける声があった。

「待つてくれないか、ボンゴレⅨ世。頼みがある」

「な、何だね?」

額に炎を灯したⅠ世に見えるツナ（彼自身に言ったら多分キレる）が九代目の指示を遮って結構偉そうな態度で進言した。

「戦うのは俺達、ボンゴレ十代目ファミリーだけにしてくれないか」
「なにい」

「何故だ!!」

「俺の言い分はただ一つ。この戦いはボンゴレとシモンの戦争なんかではないこと。俺が、友達のために戦いたいからだ」

「・・・!!」

「そういうことなら、俺達も存分に力を振るえますよ!!」

「極限に友人として戦うぞ!」

「友達のために戦うのは当たり前なのな!」

「それと、炎真はたくさんの人を殺したいわけじゃない。あいつは俺と違って心のそこから優しい炎を灯せる。絶対に、人殺しをさせたらいけない」

「君達でだけなど、いくら何でも無理だ!!」

「沢田あ!! 甘っちょろいこと言ってんじゃねえぞお!! こいつはマフィア間の大戦争だあ!!」

「違うな。待つているのは大切な友人だ」

「・・・沢田綱吉」

「?」

「お前の好きにしろ。ボンゴレⅩ世」

「！！！！」

「・・・静かにしたまえ!!」

I世のような貫禄を持っているツナ以外はその気迫に押し黙る。

「継承式が中断された以上、ボンゴレの全指揮権はいまだ九代目のわしにある。皆、わしの命令に従ってもらおうぞ!!」

「ハッ」

「シモンファミリーの討伐は、ボンゴレX世とその守護者デーチモに一任する」

「なっ!!」

「クソジジイ」

「しゃっ」

「ただしリボーンも同行すること」

「・・・また来るのか、この家庭教師様は」

「リボーンに命ずる。お前からシモンへの一切の攻撃を禁ずる!」

「わかった」

「以上じゃ。ガナツシュ! ただちに船の用意じゃ!!」

「はっ」

「解散!!」

並盛まで帰ってきたツナは、ケーキ屋で見かけた京子とハルに行つてきますの挨拶をしてとりあえず自分の家に帰る。

「ただいま」

「あらっ、そのキズ。また転んだの? さっき他の学校のメガネの男の子がツナ君へつてこの包みを置いていったわよ」

「メガネの・・・? 入江・・・あ。正一君か」

手紙には正一の近況と、包みの中身の話だった。

「X BURNER用、新型HPとCヘッドフォン コンタクトレンズ L・・・」

「準備万端だな」

「もちろんさ」

第七十五話 開戦

船で座標まで着いたツナ達の目の前で、空間が割れて島が現われた。

島の周りは遠浅のため、大型船から下りて小型ボートで向かうことになった。

「見た目より距離があったね」

「流されねーようにしつかりとボートを固定するぞ」

「あ、うん」

「思ったより早かったね」

「!!」

「やあ」

「待ってたよ。ツナ君」

「ヤッホー。お兄ちゃん!」

（隠せっ!）

（あっヤベツ）

（本当に君達は・・・）

「・・・君達だけで来たのは正解だと思うよ。大勢で来ればボンゴレ側の夥しい数の死体が積み上げられることになっただろうからね」

「俺達以外のな」

「くっあいつ等・・・。って言うか十代目今なんて言いました?」

「クロームは? 無事なのか?」

「そりやあもう天使のようなカワイイ顔をして、俺のベッドでオネンネ中♪」

「ぶっ殺す!!」

ツナの炎が額に灯る、死ぬ気とまでは行かないにしろ、体のリミッターを外した状態だ。

「ん!? おい・・・待て・・・。何故奴らまでいる。あの不吉な連中をこの島に呼び入れたのはお前達か」

「?」

「不吉な連中？」

「マフィア界の掟の番人」

ヴァインディチェ
「復讐者!!」

「何しに来た。イエーガー」

「!・・・何故、貴様がその名を・・・」

「これは俺の予想だが、ボンゴレイ世のと初代シモンの約束でも果たしに来たのか？」

「!・・・」

次の瞬間、ツナの首に復讐者の拘束具が取り付けられた。

「ガツ・・・」

「テメエ、復讐者! 何のつもりだ!」

「沢田綱吉は、何やら面白そうな情報を持っているようだから連れて来いと言うのがボスからの命令だ。よってお前を復讐者の牢獄に連れて行く」

「十代目!」

「ツナ!」

「沢田!」

「みんな、こいつらには逆らわないで!」

ツナはそう言うやいなやポケットから人型の紙を取り出して、投げる。

「頼むぞ、コピー体!」

そしてツナは夜の炎を潜って復讐者の牢獄へ移動させられた。

守護者対シモンの戦いは本物のツナがいなくて、原作通り進む。

——復讐者の牢獄。

気絶していたツナが目を覚まして一番に見たのは、復讐者達に囲まれる自分だった。

「我らをアルコバレーノにした奴の情報吐け」

「知らねーよっ!」

「ならば、あの少女をここに呼べ。彼女なら」

「知らねーよ。アイツも、俺も」

ツナがそう答えた途端。復讐者によって普通では考えられない量の拷問が行われた。

「ガハッ……」

「もう一度だけ問おう。我らをアルコバレーノにした奴の情報を吐け」

「……知らねー……つつつてんだろ……。俺は……いや、俺達は……おしやぶりのああいうのに触れれば……その仕組みが分かる……。分かれれば……後は簡単……だろ……?」

「……?」

「……おしやぶりの……所持者を……書き換えてやれば……良い。それ……だけで……所持者は変わる……。そう……だろ?」

「つまり、貴様は何も知らない……と」

「当たり前……前だ。なんつ……だったら……お前等が元アルコバレーノってことも、初めて知ったよ! 初耳しよみみだぞ……初耳しよみみ」

「初耳はつみみ……ではないのか……?」

「初耳とも読むだろうが」

ツナは身体中ボロボロの状態で拘束されていてしようと、軽口を叩く余裕はあった。

そこからツナは何日間かに渡って言葉の真偽を確かめるために拷問を受け続けた。

「イエーガー君。彼は本当に何も知らないのかい?」

「ああ、そのようだ……」

「うわっ。ミニマムサイズの復讐者……ってかアルコバレーノ?」

「そうさ。僕はバミューダ・フォン・ヴェツケンシュタイン。元アルコバレーノだ」

「……知りたいこと。分からなかったと思うから……俺、帰っていい?」

「帰れるとでも?」

「出来る、出来ない。じゃないんだよ……やるんだ」

「へえ・・・」

「緊急脱出用に持つててよかつた黒のリング！」

ツナが指に嵌めた黒いリングから夜の炎が燃え上がり、ツナの体はシモンの聖地に飛ばされた。

——シモン島。

「おい。嘘だろ!？」

「エンマ自身がブラックホールに!!」

「・・・これ、どういう状況？」

「ツナ・・・君!!」

「よう俺」

「やあ俺」

「帰ってこい」

「ういーっす。任せた」

「あいよー」

軽く二、三言かわして片方のツナが炎と人型の紙に戻る。

「さて、炎真君。いま、助けるよ」

「逃げて!」

「俺が今まで逃げたことがあつたか？」

「でもツナの奴、どーする気だ!!」

「考えられるとすれば一つ・・・、ブラックホールごとかき消すしかない。ビッグバン並の超パワーでな」

「超パワーつつつたらX BURNERっスね!!」

「いいや、それでも足りねえ」

「な」

「X BURNERより、遥かに強力なパワーが必要だ」

「X BURNERより!？」

ツナは胸の前で腕をクロスさせる。

「オペレーション——」

『了解しました、ご主人。^{ボス}XX発射シークエンスを開始します。NE Wパーツよりカウンターバーナー噴射』

「今までのX BURNERと構えが違う!!」

「両手を前に・・・」

「!!」

「ま・・・まさか・・・!!」

「両手撃ち!!」

「待ってろ炎真!!」

「X BURNERを両手で!」

「そんな事すれば炎圧で後ろに吹っ飛びます!!」

「その為のVGのニューパーツなんだ。ツナの腕を試してみる。発射方向と逆方向に反動を受け止める柔の炎が吹き出している」

『カウンターバーナー及びLRバーナー、炎圧上昇』

「・・・ん? 両手から剛の炎を出し、前方に放つ?」

「「そう、もしも・・・なんだけど、背中に何かしらの支えがあれば出来るかな?」

「「ウチの考えではそんな頑丈な壁はそうないと思う・・・。でも面白そうだ。つぎに作るコンタクトとヘッドフォンには両手撃ち用のプログラムを入れておく」

「「あ、え? もう過去に帰るんだけど?」

「「それでも作る」

「「え・・・」

(ありがとう、スパナ。完璧だ)

『ゲージシンメトリー!! 発射スタンバイ!!』

「はあっ!」^{ダブルイクス}X X^{バー}BURNER!!」

両手撃ちX BURNERを完璧にこなしたツナは、ゆっくりと地面におりた。ツナが地面に降りた瞬間、大地の重力とはまた違った形でツナに重みが加わった。

「ちよつ、真美ちゃん!? な、何用!」

「うへへ、本物のお兄ちゃんだあ。お兄ちゃん大好き」

「いや真美ちゃん？ ちよつ、どこ触って・・・！」

「お兄ちゃん怪我してる！ どうして!?! あ・・・あいつ等か・・・」

（復讐者が復讐されちゃうかな・・・？ この子怒るとマジで怖いからな・・・）

「お兄ちゃんあいつ等に何されたの!?! 大丈夫？」

「大丈夫大丈夫ー。それよりも真美ちゃんに手当てしてもらいたいなー（棒）」

「・・・うんっ！」

大地の炎で飛んでいった真美の背中を見てツナはため息をついた。

第七十六話 新生D（笑）

「ツナ君、真美の扱い方をよく分かってるね・・・」

「・・・まあね。真美ちゃん、炎真君より大地の炎使うの上手くない？」
「うぐっ・・・」

真美が救急箱を持ってくるまでの間に復讐者が現われ、ツナ達に記憶を見せて消えていった。

「お兄ちゃん!!」

「ま、真美ちゃん?」

「また記憶が見えた! あいつ等が来てたんでしょ!? 何もされてない? 大丈夫!」

「Don't worry」

「ほ、本当に?」

「大丈夫、大丈夫」

「怪我しないでよ?」

「任せなさい」

「私と結婚してよ」

「オツk・・・え?」

ツナは了承しかけて思わずとまる。慌ててツナが真美の方を見ると、顔を真っ赤にして照れていた。

「あの・・・さ。俺、了承してないけど・・・」

「何で!」

「ツナ君。真美をよろしく」

「炎真! 何で!」

「ツナ君が真美と結婚すれば、兄弟になれる」

「え?」

「わかるでしょ?」

「分からねーよ!」

ツナの受け売りなのか猫かぶりで首を傾げた炎真に、ツナは叫ぶ。血に染みついたツッコミ属性とはこの事だ。

「安心しろツナ、マフィアの中では愛人もありだ」

「安心できねーよ!! 愛人づくりには何を安心しろって!」

「さすがっス十代目! モテモテっス!」

「男としては羨ましいけど、部下としては誇らしいのな!」

「武が・・・」

「野球バカが・・・」

「「なんか、知的な事言ってる!!」」

「ツナ! 獄寺も! お前等失礼だろ!」

「だって・・・武・・・。補習組じゃん」

ツナのあからさまな『自分は違う』目線に、山本は仕返しを思いついた。

「ツナは小僧みてーに愛人はつくらないのか?」

「え、あ? どーなんだろ・・・」

「一人だけを選ぶんなら誰が本命なんだ?」

(野球バカっ・・・十代目を!)

(ツナ君・・・大丈夫かな)

(綱吉あの子に半殺しにされるんじや)

(脊髄反射的に答えねーといいがな)

ツナはその問いに暫く唸った後、一人の少女の笑顔思い浮かべて頬を赤く染める。

「や、やっぱり。京子ちゃん・・・かなあ・・・?」

「え?」

「「「あ」」」

「え?」

「お兄ちゃん・・・私じゃないの・・・?」

目のハイライトが消えたくせに、瞳の奥にハートが見える真美がツナを見つめる。

「え、いや。だって・・・」

「なんで!?!」

「ツナ、諦めて真美とも結婚しとけ」

「それが良いよツナ君。ハーレム」

「お兄ちゃんそうしょ! みんな幸せ! ね?」

「あ、いや」

「ね？」

「あ「ね？」……っ「ね？」……「ねえ？」……はい」

真美の有無を言わさない気迫に、ツナは将来のハーレム結婚を約束させられたのだった。

「じ、十代目」

「なに……？」

「あ、記憶は……」

「見てたよ。Dがみんなを騙してたんでしょ？」

「そ、そうっす。だから……つまり……」

「そっか。骸とDが戦ってるんだね」

「見に、行きますか……？」

「そう、だね。風にも会いたいし。行こうか」

ツナはゆっくりと立ち上がろうとするが、手当てされ中の彼は真美に押さえつけられて動けない。

「さ、先に行つてて？」

「僕は残るよツナ君。リボン君もいれば安心だよね？」

「俺もいれば真美も暴走しねーだろーからな」

「じゃあ十代目！ 見に行つてきます！」

「後からちゃんと来いよ？ ツナ」

「分かった」

ツナ達が走つて骸達がいる所に着いた時、復讐者がD・スペードの処理を獄寺達に頼んでいた。

「処理つて……!!」

「なっ。オレ達が後始末かよ!!」

「……いいさ。ボンゴレを継ぐ前に一仕事やっておこう」

「じ、十代目！」

「ジヨット……!?!」

「お兄ちゃんと老いぼれジジイを間違えないで！」

あまりにも似すぎたその風格に、復讐者までもがツナとジヨットを

間違えた。その事実には真美が怒りをあらわにするが、ツナが止める。
「その代わり、ボンゴレとシモンの戦いはなくなった。ボンゴレ晴の
守護者、シモンファミリーの全員を牢獄から解放しろ」

「二二二二二」

「二二二二二。古里炎真、お前の意見は」

「僕も同じだ!!」

「二二二二二。その眼差し二二二、あの時のジヨットとコザアートと
同じ二二二。十代の時を経て、ようやく二人の誓いが果たされたとい
うことか二二二。いいだろう、Dを倒せば牢獄にいるファミリーを解
放する」

「ありがとう」

「ですが十代目！こいつら信用できません!!」

「約束は守る」

「!!」

「あっ」

「あいつは!!」

「過去の記憶でI世とコザアートの誓いに立ち会っていた男!!」

「イエーガー二二二」

「バミューダの輝きと共に、復讐する者」

「くつ二二二」

「二二二二二。来たな」

次の瞬間、莫大な炎圧と共にそこになにかが落ちてきた。

「うおお二二二。あ、武、隼人」

「ふうっ」

「う二二二」

「なんて一撃だ。見た目以上に重い！」

「これだけで炎を使い切る勢いだぜ二二二」

「あれは?!」

「夜の炎二二二」

爆発の中心に黒い揺らめきができ、そこから奴は出てきた。

「ごきげんよう。さあ、終えましょう。君達の世代を」

「あの黒髪が・・・D・スピード・・・、なのか？」

「なんか茄子みたい」

「プツ。お兄ちゃんその例え最高」

「D・・・よくも、シモンのみんなを・・・、僕を・・・騙したな!!」

「ヌフフ」

「クフフの方がマシ！」

「GAO!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あの野郎」

「待ってボス!!」

武器を構えた守護者の前にクロームが両腕を広げて立つ。

「あれは骸様の体!! 攻撃しないで!!」

「そもも言っついていられないのですよ、クローム」

「あつ、骸様!!」

「マスター、うすうす感じているのでしょうか？」

「ああ。アイツは化物だ」

「今、持てる限りの全力をもって挑まなければならない相手なんです」

「全力、出して良いの？」

「二・・・・・・・・」

「やってやれ。ツナ」

「わかった！」

「よし」

「そうと決まりや」

「はじめましょうか？」

（速い!!）

一瞬で距離を詰められた。その言い方が今最も正しい表現だった。直後、ツナ達の目の前に現われたDが持っていたトランプのジョーカーが爆発し、ツナ・クローム・炎真を庇った獄寺と肩に乗っていたランボ・山本・ジュリーが消えてしまった。

「さしあたっての手品です」

「どこかに飛ばしたのか」

「その通りです。彼等はこの穴より、私の創った幻覚世界へ行つていただきます」

「そこで大人しくしてろって事か」

「彼等には語り部になつてもらわなくてはならない。今まきに行われる墮落したボンゴレの十代目候補討伐の物語を、新たな伝説として後生のボンゴレに残す私の目的を完遂するために、沢田綱吉の悲惨な最期を目撃し語り継ぐものにね」

そこでトンファアのチェーンが伸び、Dを攻撃するが、効果は今ひとつのようだった。

「語り継がれるのは、君の死の方だよ」

「ヒバリさん！」

「手を出さないで、草食恐竜」

「あ、いえ。そんな奴の死誰も語り継がないかなーって思いました……」

「お前……色々酷いな」

「……テヘツ」

「さすおに！」

相も変わらずツナを持ち上げる真美。そんな二人を見て、常識人枠であるリボンと炎真は諦めていた。

「……と言うかアイツ、どこまで幻術を使えるんだろう……」

「元々霧の守護者だ。それに加えて骸の身体。全盛期とさほど変らねーんじゃねーか？」

「それってちよー厄介ってこと？」

「幻術に関して言えば、な」

「……つまるところ？」

「ツナにとつちや雑魚って事だ」

「雑魚を馬鹿にするな！ ちりめんじゃこ美味しいだろ！」

「確かに美味しい」

「なんであんなにご飯に合うんだろうね」

「確かに」

「お前等見てやれ。ほら、雲雀が押されてるぞ」

「……やっぱり？ 舐めプするからだよ」

「雲雀がか？」

「あの人、俺と戦う時はもうちよつとマジな雰囲気出すからさ」

「そか」

「あーあー。トランプに吸い込まれちゃった」

「雲雀恭弥にもまた、愚かな十代目ボス候補の最期を伝える語り部としていき続けてもらいましょう。そして、私が作る新しいボンゴレの目撃者となるのだ」

「え？ 俺死ぬの？」

「殺しても死なねーよーな奴が死ぬとは思えねーな」

第七十七話 殻を脱いだ神上の統魔

「さあ、そろそろ登場してくれますか？ 愚かな真打ち」

「——なあ、さつきから誰に断り入れて俺の事愚かっつてんの？ 俺の事を愚かっつても良いのは後にも先にも忍野扇ただ一人しかいないんだけど」

「・・・誰だ？」

「影組最高幹部の一人ですよ。雰囲気我真つ黒な少女、マスターと似たような体術を使い彼よりも拳の威力は高い。まるでつけられるはずのリミッターがついていない。そんな風ですけど」

「たまにボスでも負けるぐらい強い」

「・・・マジか」

「ヌフフ・・・少しばかり雰囲気が変わったようですが。出来ればあなたと直接戦いたくはないんですがねえ・・・」

「知ってるさ。俺も直接拳をぶつけ合ったらつまらない戦いになるのは知ってる。だからいつも何かしら縛って戦ってるから安心しろ」

ツナはそう言うと、ゆっくりとその歩を進めて行く。右手の甲に出現した蠅王紋を基点にし、身体中にエネルギーが流れていく。それをハッキリと表すように刺青のような者が刻まれると同時、沢田綱吉が崩れていく、今まで沢田綱吉という殻で縛り付けていた化け物が姿を現した。

『OK。レッツパーリイイイイイイイ!!』

そこにいたのは上条当麻その人だった。四方八方に跳ねまくった寝癖だらけの黒髪に、楽しそうに歪められた目と口。一番慣れ親しんだ、手加減も本気も最も調整がしやすい肉体だった。

「さあ、お前の罪を数えろ」

「ヌフフ。数えるほどありませんね」

「数え切れないほどある。の間違いだろ。クソガキ」

「あなたの方がよっぽどガキじゃあないですか」

「Dのヤツ、嵐と雷のボンゴレギアを同時に！」

「行くぞ——連続・普通のパンチ」

上条が放った拳は拳圧で風を生み出し、投げられたダイナマイトを弾き返した。それだけでも驚くべき事だが、リボン達は慣れてしまっているため、特に何も言う事は無かった。

「さーてD。お前には色々と借りがあつたなあ？」

「おやおや。あんな幼少期の事まで覚えてるんですか。私の計画の邪魔をしてくれたあの日の事を」

「・・・まさか!」

「そう、そのまさかですよ。炎真、君の両親と妹を殺すはずだったあの日の事です」

「・・・キサマツ」

「真美ツ」

「は、ハイッ!」

「邪魔するな。オレはコイツを潰す」

「は、はいいい」

上条が放った威圧で、真美はその場にへたり込む。上条はそのまま鋭く細められた眼で、Dを睨んだ。

「おお、怖い。『潰す』言ってくれるじゃありませんか。わざわざ枷をつけて挑みにくる理由が君にはあると?」

「そっちの方が、俺が満足出来る可能性も上がるし、お前だって勝てる可能性が万が一にでも出来るかもしれないだろ? 俺はそう言うギリギリの闘いがしたいんだ」

「ヌフフ。強くなりすぎた故の悩みというやつですか。面白くない。全くもって面白くない。君という人間はとてつもなくつまらない人間です!」

「良いんだよ他人にどう思われようと! 俺は俺の道、『我道』を行くって決めてんだ!」

上条は息を軽く吸うとその眼の色を変える。文字通り変えたわけではないが、車のギアを変えたという言い方が適切だろうか。

「なあ、一つだけ聞かせろ」

「?」

「お前、本当にボンゴレが嫌いなのか? 違うよな。お前が嫌いな

は穏健派だ。何故だ。ボンゴレは元々自警団だろ!? どうして、街の皆を守る組織が、世界中の裏社会を牛耳るような首領に変わっちゃったんだよ! どうしてお前は、一世に弓引く必要があったんだ!」

『(ご主人の説教キタコレ——! ろ、録画機器録画機器・・・)』
「はい」

『おお、流石なじみさん』

「いやいや、ぼくも気になるからね。この世界で生きる人間とは異なる摂理で生きてきた、彼が放つ説教が」

「私とて、最初から一世に反旗を翻していたわけではない。私も、そしてエレナも。あの頃のボンゴレファミリーを何より愛していたのだから」

「それじゃあ、なんで!」

「・・・私は貴族だった。だが、墮落した貴族達に嫌気がさし、地位は泣くとも優秀な人間が社会の中心にあるべきだと考えていた。そんな私の考えに共感してくれたのが、公爵の娘エレナだ。彼女は太陽のように微笑み私を癒やした——」

——エレナの望み通り、ボンゴレは弱き者達に平和をもたらしたのだ」

「・・・そん」

「ふざけるんじゃないぞ!!」

「!!!!」

「弱き者達に平和? 力を振るって強者弱者関係なく弾圧する事がか?! 良いか、良く考えろ、今のボンゴレがなんなのかを!」

「・・・マフィアだ」

「そうだ。それも、裏社会のトップに立つ幾重の業を背負っている・・・な。そんなお前等はD・・・お前が嫌っていた貴族達と同じだよ」
「なッ!」

上条の言葉にDは眼を見開く。そして足を止めていた。

「弱者の事は微塵も考えず、自身の保身のためえに力を振るう。そうなるのが肥大化した組織の辿る未来だ。自分達が力を持っているも

のだから、力を持たないものを虐げる。弱者を踏みつけ豪遊する。D、アンタが嫌っていた貴族を、アンタがその手で作り上げたんだ！」
「そんなはずが無いッ！」

「今のボンゴレを見たらきつとエレナさんは哀しむぜ。弱者に平和なんかありやしない。リボンが言ったな。泣く子も黙るボンゴレだと。黙るんじゃない。黙らせるんだ。拳銃やナイフで脅して、黙らなければ殺す。それがマフィアだ。それが血に塗れた力というものだ」
「戯れ言を！」

「現実を見る！ アンタも、結局は墮落してるんだ。権力という力に溺れ、正しいものが見えなくなってるんだ」

「沢田・・・綱吉・・・。貴様・・・」

「エレナさんが言っていたボンゴレは、マフィアを目指せば絶対にとどり着けない道だ。やるなら皇帝陛下にでもならなきや無理な事。綺麗事さ」

「き、キサマア!!」

「それでも、出来る事はあつたはずだ。力で虐げるんじゃない、優しさで包み込む事ぐらいは出来たはずだ。それを怠ったD、お前は目的を間違えたんだよ」

「貴様にエレナの何が分かるッ」

「何も分かるわけがないだろっ！」

Dの攻撃を真正面から受け、右手を振り抜きかき消した上条は歩き出す。

「ただ、これだけは言える、アンタが覚えていてくれた事、自分のために生きていてくれた事には感謝してる。だけど、間違った方向に導いた事には怒ってると思うぜ。なにせ、望みを叶えてはくれなかったんだからな」

「え、エレ・・・ナ・・・。そんな・・・な。嘘だっ」

「信じたくないのは分かる。でも、それが現実だッ！」

「又オオ!!」

地面を蹴って跳びだしたDに、上条も走り出して接近する。

「いいぜ！ テメエが、自分の間違いに気付かないフリをし続け、これ以上間違いを犯し続けるって言うんなら——」

「殺すっ！」

「——まずはその幻想をぶち殺す！」

力を最大限抑えた上条の拳が、Dの顔面に叩き込まれた。甲高い破壊音を響かせ、Dと骸の身体の結びつきが剥がれ、Dの精神が地面に投げ出された。

「ガハッ！」

「………D」

「沢田綱吉。私は初めから、勝つ気は無かった……。ただ、不安だったのだ。エレナが、私の作ったボンゴレを見て、何と言うか……。怖かったんだと思います……。なるほど、怒っている。当を得ている」

「怒られてこい」

「そうします。お前のやり方を見せてもらいましょうか、沢田綱吉。ただし、名を汚すような事があれば許しませんよ。エレナの愛したボンゴレなのだから」

代理戦争編

第七十八話 代理戦争の始まり

Dを倒した一週間後。開き直ったツナは神上の統魔としてのオリヲを日常に放っていた。

「あー。これは遅刻だわ。まず間違いない遅刻だわ」

「いつもより早いじゃねーか」

「風紀委員が持ち物検査するらしくてね。30分前登校なのさ」

「だから言ったじゃねーか。ゲームして夜更かしなんかしてると寝坊するって」

「五時間かけてようやく百パーセントクリア出来るって時にお前が電源消したからな。データが消えたショックで絶望してたんだよ」

「うおおおおおおおにいいいいいいいやあああああああ
あああああんっ!!!」
「ブベラッ!!」

後ろからすっ飛んできた黒色の弾丸によって、前方に吹き飛ばされたツナは地面を滑って停止した。

「お。古里兄妹じゃねーか」

「ツナ君大丈夫？」

「大丈夫に見えるのか？」

「うん。いつもの事だし」

「お兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃあああん!! 好きだよお! 愛してるよお! お兄ちゃんの匂いに埋もれてるだけで私はもう、幸せだよお! 私を抱いて、愛して、濡らして、イかせて、昇天させてえええ!」

「やめろ、死ね」

「はうっ」

「ツナ君、真美の属性をこれ以上追加しないで」

とある業界では、ご褒美の眼差しで真美は、どこか別の世界への扉を開きかけたが、ツナが頭頂部に手刀を落としたため前後の記憶がど

こかへ飛んでしまっていた。

(・・・そろそろ別の世界へ飛ぶ事も考えた方が良さそうだな・・・。これ以上何かが入る事はないだろうし・・・。どっかで劇的に死亡して・・・いや、ダメだダメだ。普通に転移で・・・やっぱり転生した方が安全か・・・?)

「ツナ、おい。ツナ」

「ん？ なに、リボーン」

「お前、何を考えてやがる」

「自分の未来。かなあ」

「ボンゴレのボスだな」

「ならないけどねっ！」

ツナはリボーンにいつも通り言い返ししながら、代理戦争を機にこの世界を去る事を決めた。

——暫くして。

(予定通り、お前達の実力を計る。と言う名目で骸達にアルコバレーノの話に乗って全力で俺達とその他のチームと戦う事を指示したし、クロームはとりあえず骸離れするために並盛に転校させたけど・・・。もしかしてツナ離れ出来ない？・・・まあいいや。さて、遠目に見て家の前にキャツバローネもいることだし、代理戦争。マジメに取り組みますかあ)

「どーもっス」

「うい」

「待つてましたぜ。沢田さん！」

「こんにちは、ロマーリオさん。・・・ってことはディーノさんが？」

「よっ、ツナ」

「こんにちは。日本に何か用事ですか？・・・まあ、リボーンが言っていた頼み事。に関連したことなんでしようけど」

「まーな」

「元教え子だから当然なんだと」

「で？ 結局聞かせてもらってないけど、頼み事ってなんなんさ」

「お前達二人とも、オレのために戦ってくれ」

——リボーン説明中——

「こうして男は去り、俺達は目を覚ましたんだ」

「……………」

「……………」

「なんだかとてもねー話だな……。大まかには分かったが…………」

「話に何度も出てきた呪いって」

「つまり一言で言うると、オレの呪いを解くためにお前達に代わりに戦って欲しいってこと」

「いや、そいつは分かったが…………」

「その」

「どうなんだ!？」

有無を言わさないようなりボーンの殺気に、ツナ達の次の言葉は続かなかった。

「そりゃ、めったにないお前の頼みだし、力になるぜ!」

「面白くなりそうだからのってやるよ」

「そっか。サンキュ。よかったよかった。代理二人ゲット♪ よーしメシにすつぞ」

「ちよっと待て!!」

「ハイ?」

「ハイ? じゃない! こっちは一番肝心なこと聞いてねーぞ!」

「アルコバレーノ呪いってのは何なんだ? リボーン」

「まあ、何となく予想はつくけど」

ツナのその一言にリボーンは目を丸くし、デイーノは身を乗り出す。

「何だって!？」

「…………いや、デイーノさん。そもそもこんな赤ん坊が強いこと自体がおかしいんですよ。だったら、逆に考えれば良い。大人が技術と力を保持したまま姿を赤ん坊に変えられた。って」

「そうだ、これはオレの本当の姿じゃねえ。本当のオレは超カッコイイんだ」

「やっぱり?」

「お前・・・!?」

とある夜。ツナは屋根の上で月を眺めていた。

「——どうするつもりですか?」

「死に方の話か?」

「ええ」

「ラスボスと相打ちつてのが理想だな」

「アホですか」

「もう一個は恨まれまくったボンゴレボスとして討たれるっていうストリーなんてだけど」

「馬鹿ですか」

「だが、次に早く行かないと俺の妹がっ!」

「いつの間にシスコンに目覚めたんですか・・・」

エネは呆れたようにため息をついた。が、上条は全く気にした様子もなく、そのまま思案を続けていた。

「それで? 今回の代理戦争のチーム分けは?」

「知ってるだろ?」

沢田綱吉率いるリボンチーム

XANXUS率いるマーモンチーム

沢田家光率いるコロネロチーム

六道骸率いるヴェルデチーム

古里炎真率いるスカルチーム

雲雀恭弥の風チーム

白蘭率いるユニチーム

楽しくなってきたなあ・・・。さあて、今回はどうやって引っかけ回してやろうかな♪」

「もう引っかけ回すのは確定なんですね」

「当たり前だのクラッカー!」

ツナは夜空に響かせずに大きな声で高笑いをしていた。

「相変わらず、無駄に器用なんですから……。って言うかどーやってるんですかそれ……」

「ん？ 知りたい？ 知りたいかい？」

「全然」

「遠慮するなって。教えてやる。良いか？ まず声の出し方だが……」

「そんな所に無駄な肺活量を使わなくて良いですから。何なら波紋呼吸でもやっちゃってください」

「おっ、良いね。今度はそれを目指すか」

(……完全に失言でした)

「どうだっけ……」

第七十九話 ツナチームの挑む代理戦争

リボーン side

「ねえ、リボーン。最強のチーム作っていい？」

ツナがそう言ってきたのは今朝のことだった。

「んあ？ 勝手にしろ」

「うん。勝手にしろ」

俺も寝ぼけてたんだな。そんな回答しちまって、数分後にその危険性……というか、どんなチームが出来上がるか予想がある程度ついて、慌ててツナを探したが見つからず、その日の夜にツナが名簿を書いて戻ってきた。

「リボーン。一応、俺のチームに参加しても良いよって人外集めてきたよ」

その名簿は明らかにおかしかった。

沢田綱吉（ボス）・デイトーノ・獄寺隼人・山本武・榎本貴音・忍野扇・安心院なじみ

「ツナ？」

「ん〜？ あ、それはあくまで仮定だから。でも、やるからには勝たないとな。リボーン？」

「そ、そだな」

アイツの男のくせにママンに似た女顔で妖艶な笑みを浮かべられて、俺は思わず頷いちまった。ま、別に呪いを解こうとは思ってねーし。楽しめればそれでいいんだけどな。……ツナがうつってきてやる。

S i d e o u t

日曜の朝――

ランボの笑い声が響くそんな朝。ツナは不機嫌そうな顔で身体を起こす。窓の外に、ランボ・イーピン・家光の三人が見えた所で、ツナは合法的な方法を思いついた。

「次は屋根にタッチして帰ってくるぞー！」

「おう！」

「パパサンガンバル！」

「んー、んー、んー……………」

朝食もまだ食べてないしなあ。大体俺、あのぐうたらな父親、そもそもあんまり好きじゃないんだよなあ——いやもう、はつきり言うちやえば嫌いだし。もう大嫌い。帰ってきたからって声かけるような仲じや、そもそもないんだよ。たとえ正面から目が合っても無視するくらいの気持ちがあるだろう。

でもまあ、そうだな、血の繋がった息子として、父親相手にそんな態度を取るのも器がちっちゃいか。嫌いな相手ともコミュニケーションが取れてこそ、一人前の男だろう？

あくまでも親に接する際の当然の態度として、ちよつとだけ相手をしてやるさ。いやもう本当。全然会えて嬉しくなんかないけど、せめてその振りくらいはしてやるのが最低限の礼儀って奴かな？

ふっ、俺も甘い」

ツナは服を一瞬で脱ぎ捨て着替えると、クラウチングスタートの姿勢を取る。

そして。

一気にかけて出した。

「帰ってきたのか、クソ親父いいいいいいいいいい！！！！」

「ぐぼああああああ！！！！」

「遭いたかったぞ。このヤロオおおおおお！！！！」

ツナの全力の突っ込みと払いが炸裂し、家光の身体がクルクルと宙を舞う。

「うおっ?! おおっ?! はああああ!!」

「ああ、もう。全然帰ってこないからさあ、どつかでおっ死んでんじやねーのかって気が気じゃ無くてー。だからさあ、もっと殴らせろ、もっと投げられる目を回せ！」

「その辺にしといてやれ、ツナ」

「……………うん」

宙を舞っていた家光の身体が、庭に叩き付けられた。

「グハッ!？」

「ふう。スツキリした。さあ朝ご飯だ朝ご飯♪」

「父親の扱いが酷くないか息子よ・・・」

「・・・じゃあ、もつと父親らしいこととしてくれる?」

「グツ」

「父子で戯れるのも良いけど、今からお客様がいらっしやるんでしょ?」

「日曜の朝から? 非常識だなあ・・・」

「仕事の仲間だ! 船が夜中に着いたものでな。お前達、来なさい」

「はい! ご無沙汰しています」

「よお、コラ!!」

「うわっ。勢揃いしてる。CEDDEFとコロネロ・・・って、コロネロの代理が・・・へえー。ってラル・ミルチ小さい!？」

(呪いのことを理解していないのか・・・?)

いや、まあ知ってたけど。と言う言葉は飲み込んで、ツナはまさに今知りましただという演技をした。

「よろしくな、ツナ」

「うん。よろしく」

「歓迎するぞへボライバル」

「倒しに来たぜクソライバル」

「負けると分かって良く来たな」

「負け戦はしねーぜ、コラ!!」

「おーい。痛くないのかーい?」

「あなた・・・」

「ああ。他の仕事仲間も紹介するぞ。ガタイのいいのがターメリック」

「こんにちは」

「メガネの女性がオレガノだ」

「初めまして」

「仕事の現場では、バジルとオレガノが肉眼で石油を発見し、オレと

ターメリックがスコップで石油を掘り、コロネロとラルがバケツで運ぶってわけだ」

「シンプルね」

「母さんに間違った知識を与えるな!! …コホン。まず、石油を掘る仕事。と一言に言ってもそれぞれ別の役職が担当しています。」

まず、油田の存在の可能性が高いと思われるサイトを、最新科学的知見とデータ分析、電気検層、人工衛星による地質写真、人工地震探査、地上の目視探査、海上からの音響探査などで特定しなければいけません。この全ては地質学者の仕事で」

「もういいだろツナ。博識なのは伝わったから、重箱の隅をつついてやるな」

「俺がつついてんの、結構真ん中辺にあるおかずなんだけど」

「言つてやるな。あれで本気なんだ」

「もうね。了平さん並の誤魔化し方だと思うよ。だって、あの人流れ星にあたって怪我をしたとかいって誤魔化してるんだぜ?」

「言つてやるなつて」

「でな、奈々。しばらくバジルとコロネロを家に泊めてやって欲しいんだが・・・」

「はいはい。わかりました」

「え。嫌な予感しかない」

「家族が増えるよ」

「おい馬鹿やめろ」

「やったねツナ君」

「やめろつて言つてんだろ!?!」

「相変わらず賑やかで楽しそうだね♪」

「・・・白蘭」

「へえー。ここが綱吉クン家かー」

キョロキョロと家を見る白蘭に、ツナは親のような目線できつてかかる。

「来るなら来るで、連絡ぐらい入れろ! 何も用意してないじゃねーか!」

「だったらもうちよつと上手く話の流れを掴ませないようにすることだな」

「どうすりゃいいの？」

「先読みさせないコツは一つ。流れを乱せばいい」

「へえー」

「そういや、ブルーベルは元気か？」

「うん。元気さ。君に会いたがってたよ」

「俺、なんかしたっけ？」

「相変わらずの朴念仁だね」

「ふむ。まあ、受けるか否かの返答はまた後日。俺のチームのメンバーと話し合いをしてからにするよ」

「うん。そうして。僕は首を長くせずに待てるから」

「逆に首を長くして待つことを誰が出来るんだよ」

「骸君とか？」

「ああ。幻術組ね。とりあえず、今日はもうお開きと行こう」

「そうだね。それがいい」

白蘭は消えるような様子で、ツナは食器を片付けにそれぞれ解散した。